
悪の大臣

kuma383

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪の大臣

【Nコード】

N9426W

【作者名】

kuma383

【あらすじ】

魔術師オリバーと、その仲間たちがリバー王国の悪の大臣に立ち向かう物語です。

むかしむかし、リバー王国という国では悪い大臣が王様を殺し、女王様を塔の中に閉じ込めてしまいました。大臣の悪い政治のせいで、国民は苦しんでいました。

そんなある日、一人の魔術師が二人の弟子を連れてリバー王国にや
つてきました。彼は大臣の魔の手から何とか逃げ延びた王族の一人
に依頼され、大臣を倒すためにやってきたのです。彼は弟子や頼り
になる仲間たちとともに大臣に立ち向かいます。

く物語に際して（前書き）

リバー王国の王族、オットー様からの極秘の手紙をもらったオリバーは、悪の大臣、ギル大臣を倒すためリバー王国へ向かいました。行く手をさえぎる魔獣、禁じられた洞窟と王家の秘宝、闇の魔術師たちとの戦い、そして仲間との絆…。

果たしてオリバーたちはリバー王国の平和を取り戻すことができるのでしょうか？

く物語に際して

この物語は、リバー王国という架空の国を舞台に起こる、魔術師オリバーとその仲間たちの活躍を描いた物語です。

なにぶん作者が素人で、その上無字なので、お見苦しい文章になるかもしれませんが、どうぞお許しください。

なお、某VOCALOIDの楽曲とは一切関係ないので、題名で期待された方はがっかりされると思います。

無駄に長い物語ですが、マイペースに更新して行くのでよろしくお願います。

それでは物語の始まりです。

なお、この物語はフィクションです。実在の人物等にはまったく関係していません。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「1・冒険の序章」 (前書き)

これははるか昔、リバー王国で起こったお話。

リバー王国は賢い王様が良い政治を行っていたため、人々はみんな幸せでした。

しかし、悪い大臣が王様を殺し、まだ若い皇女様を塔に閉じ込めてしまいました。それから大臣は自分に反対する者は家来だろつと民衆だろつと容赦なく殺し、人々は恐怖におののいていました。

物語は事件の三年後から始まります。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「1・冒険の序章」

一人の真つ黒いマントを身にまとった男がまだ若い二人のお供をつれて、ある一軒の崩れそうな小屋の前に立っていました。

(?) 「オットー・フランツ様、魔術師オリバー・ローゼンハイン、ただ今参上いたしました。」

すると、中から一人の女性が慌てて出てきました。

(?) 「シーツ。お静かにな。」

(?) 「…これは失礼いたしました。」

黒マントの男は深々と頭を下げました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

三人は中に通されました。薄暗い部屋の中で、一人の男性がベッドに横たわっていました。やつれてはいますが、どこか気品のある男性です。

このお方は悪い大臣に殺されそうになりましたがそれを振り切って何とか逃げる事ができたりバー王国の諸侯であり、王族のオットー・フランツ様です。入ってきた男は床にひざまずくと、丁寧に挨拶しました。

(?)「オットー様、魔術師オリバー・ローゼンハイン、只今参上いたしました。」

(オットー)「おお…、あなたがオリバー・ローゼンハイン殿か…。顔を見せてくれ。」

(?)「はっ。」

促され顔を上げたのは魔術師のオリバー・ローゼンハイン、この物語の主人公です。

(オットー)「遠路はるばる御苦労であった。まずは椅子にかけていただきたい。…その二人は？」

(オリバー)「はっ。私の弟子でございます。まだまだ未熟ではございますが…。ほら、お前たち、名前くらい自分で名乗ったらどうだ。」



オリバーに促され、二人の弟子は慌てて自己紹介をしました。

(ハンス)「ハンス・アルノルトでございます。」

(ペーター)「ペーター・ヘルマンでございます。」

(オリバー)「私の一番弟子と二番弟子です。…とはいえ、弟子はこの二人しかおりません。」

(オットー)「ほう、意外だな。高名なローゼンハイン殿のこと、もっと大勢の弟子がおいでかと。」

(オリバー)「高名などとは…そんな、もったいない。」

(オットー)「謙遜するでない。でなければ余がわざわざ遠国からあなたに依頼したりなどはしない…。」

そこでオットー様は急に咳きこみました。

(オリバー)「オットー様、お体の具合が…。」

(オットー)「うむ…、気候が不安定で、少々体調を崩してしまっただのだ…。だがこんなものは何でもない。それよりも依頼の件だ…。しかし、依頼の内容をいっさい伝えていないのに、よく来てくれたな…。」

(オリバー)「リバー王国の窮状はかねがね耳にはさんでおりましたので。そこへ王族のあなたからの依頼が舞い込んでまいりました。行かぬわけにはゆかない、と…。」

(オットー)「かたじけない…。…余の依頼は、リバー王国王家の再興、だ。この国のどこかの洞窟に隠されているという初代王、リバー王の秘宝を探し出し、更に塔の牢獄に幽閉されているヘルガ王女を助け、圧政を続けるギル大臣を倒してほしいのだ。」

(ハンス)「そ、そんな!」

(ペーター)「そんなこと、自分の国の人でやれば、」

(オリバー)「ハンス!ペーター!黙れ!…申し訳ございません。この者たちがご無礼なことを…。」

文句を言う二人の弟子を、オリバーは叱り飛ばしました。

(オットー)「いや、お供の言うことが正論だ。…しかし、知ってる通りこの国はヨーゼフ王が殺されて以来、あのギル大臣の専制政治にある。国民はその怒りを恐れ、何も抵抗できないのだ…。」

(オリバー)「…それで外部の人間である我々に依頼した、と?」

(オットー)「そうだ。それに、ギル大臣の部下には魔獣を扱う者もいる。この国にはそのようなものと渡り合えるものがそういないのだ…。」

(オリバー)「なるほど…。状況は把握しました。」

(オットー)「依頼を…受けてくれるか?無論、あなたの意見は尊重するつもりだ。断るのならそれでも一向に構わない。」

オリバーは笑顔を見せると答えました。

(オリバー)「もちろんお請けさせていただきます。専制政治で苦しむ国民を見捨てるわけにはいきません。」

(オットー)「そうか…、ありがたい。」

オットー様はまた激しく咳きこみました。

(オリバー)「オットー様！」

(オットー)「…大丈夫だ。何も無いが、今日はここに泊まり、明日街へ旅立つといい。」

(オリバー)「いえ、我々も旅の生活には慣れております。少しでも先に進んで早めに街に入り、まずは情報を集めたいと思います。」

弟子の二人が今日は部屋の中で眠れると思ったのに…とブツブツ言っていたので、オリバーは弟子たちの足を思い切り踏みました。

(オットー)「そうか…。それならばオーベルクという街のこの宿屋に行くといい。拠点にするには調度いい。余の名前も使える。…それでは前金として、当面の資金を与えよう。クララ、持ってくるのだ。」

(クララ)「はい。」

オットー様に呼ばれて部屋に入ってきたのは、先ほどオリバーたち

を案内した女性です。

(オットー)「妻のクララだ。余が倒れた後もしっかりと看病してくれる。」

(クララ)「…これを。」

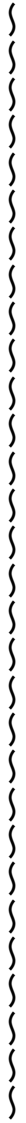
クララ様がオリバーに木箱を与えました。

(オットー)「これではらく宿代は困らないはずだ。足りなくなったらまた言ってくれ。…それと、これが推薦状だ。宿屋で見せるといい。」

(オリバー)「ありがとうございます。…では、私たちはこれにて失礼させていただきます。」

(オットー)「よろしく頼んだ。」

オットー様とオリバーはしっかりと握手をしました。そして、オリバーは一礼すると、小屋を後にしました。



歩きながら、ハンスとペーターが話しかけてしました。

（ハンス）「先生、これで資金には困らなくなりましたね。」

（オリバー）「…バカなことを言うな。いつものように、これ以降の資金は自分たちで稼ぐんだ。」

（ペーター）「ええっ！？だって、オットー様は足りなくなれば言えと…。」

（オリバー）「あんなに大変な生活をなさっておられるのだ。これ以上負担をかけるわけにはいかないだろう。」

（ハンス）「あーあ、本当に、先生は人が良すぎるんだから…。」

文句を言う弟子たちを見て、オリバーはやれやれとため息をつきました。

~~~~~  
~~~~~

街道を歩いていた三人はやがて峠に差し掛かりました。すると、前から一人の農夫がものすごい勢いで走ってきました。

(ペーター)「どうしたんだ…?」

「助けてくれーっ！魔獣に追われてるんだーっ！」

(ハンス)「魔獣に!?!」

(オリバー)「下がっててください！ハンス！ペーター！行くぞ！」

(ハンス・ペーター)「はいっ！」

ハンスは槍を、ペーターは剣を抱えて狼のような魔獣に向かって行きました。

(三匹…四匹…五匹だな)

オリバーは状況を確認すると、横からハンスに噛みつきこうとする魔

獣に向かって指を向け、叫びました。

（オリバー）「カースアタック！」

すると、オリバーに指を向けられた魔獣が急に苦しみ出しました。オリバーは次々に叫びます。

（オリバー）「カースアタック！」

苦しみ出した魔獣にハンスとペーターがとどめを刺して行きます。あっという間に魔獣たちはみんな倒されてしまいました。

（オリバー）「ふうっ……。大丈夫でしたか？」

「ありがとう。助かったよ。」

農夫は心からオリバーたちにお礼を言いました。

（ペーター）「この辺は魔獣がたくさんいるんですか？」

「ギル大臣が国を治めるようになってからだね。よくわからねえけ



ど、リバル王の秘宝を探すのに必死になって、間違っただけで禁じられた洞窟の封印を解いちゃったらしい。それ以来、魔獣がうろつろつろするようになっちゃってます…。」

(オリバー) 「禁じられた洞窟？それはいったいどこにあるんですか？」

「北の山脈のふもとの樹海の中らしいよ。まあ、洞窟というよりは縦穴って感じらしいけどな。」

(いずれ行ってみるか…。何か手掛かりがあるかもしれないしな)

(オリバー) 「ありがとう。じゃあ、お気をつけて。」

オリバーたちは農夫と別れました。

~~~~~

ハンスとペーターがオリバーに話しかけます。

(ハンス) 「いやあー、魔獣って言うっても、あの程度なんですな。」

(ペーター) 「何か拍子抜けだなあー。」

(オリバー) 「バカを言うな。あれは最下級の魔獣だ。…まだ魔術師として駆け出しの頃に最上級クラスの魔獣と戦ったときの話をしただろ？」

(ハンス) 「俺、詳しくは聞いてませんよ。何があっただんですか？」

(オリバー) 「何とか勝つことはできたんだがな、優秀な指揮官に率いられていたにも関わらず、百人ほどで向かって、生き残ったのは六人だ。そこでペーターの兄貴も死んだ。…生き残った中でも一人は片腕を失い、別のやつは未だにベッドから起き上がることができない。」

(ペーター) 「…先生、よく生き残れましたよね。」

(オリバー) 「悪運だけは強かったからな。…しかし、この魔獣退治はなかなかいい資金稼ぎの材料になりそうだ。お前たちも経験を積める。それと…もっと仲間も必要だな。」

(ハンス) 「俺たちだけじゃ不足ですか？」

(オリバー) 「ああ。」

(ハンス) 「即答って…。」

(オリバー) 「まあ、現地に詳しい仲間がいるとこちらもやりやすい。…もっとも、現状を聞いた段階ではなかなか難しいかもしれないがな。…どうやら天気が悪くなってきたようだな。少し急ぐぞ。」

オリバーたち三人は少し足を速めて峠道を歩いて行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

## 人物紹介

〈オリバー・ローゼンハイン〉

・「高名な魔術師」

・25歳。

・魔術のほか、突剣で戦うこともある。

・一人称は「俺」。

・若さを経験で補っている。オットーの依頼でリバー王国の王家を復興させるためにやってきた。呪いの魔術の専門家。人望が篤く、弟子や仲間たちの信頼を一身に受けている。実はある秘密がある。

くハンス・アルノルトく

・「一番弟子」。

・14歳。

・槍で戦う。剣も少しだけなら扱える。

・一人称は「俺」。

・ペーターより年下だが、弟子になったのはハンスが先。魔術師によって荒廃した村からオリバーが彼を保護し、弟子にした。初恋の相手はペーターの妹だが、口が裂けても言えない。まだまだ未熟なため、騙されやすい面もある。やさしい性格なので後々に登場する女性メンバーからもけっこう信頼されている。

くペーター・ヘルマンく

・「二番弟子」

・16歳。

・剣で戦う。やりも少しだけなら扱える。

・一人称は「俺」。

・オリバーの親友の弟。まだまだ経験不足だが、オリバーの期待にはいつもしっかりと応える。ただ、少し相手を見くびりやすい傾向もあり、仲間たちには子ども扱いされている。実際大人になるにはまだまだ時間がかかりそう。少し不真面目な性格なので後々に登場する女性メンバーからの信頼を得るにはまだまだ時間がかかりそう。

\*オットー・フランツ、クララ・フランツに関しては後々紹介いたします。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「1・冒険の序章」 (後書き)

さあ、ついに冒険が始まりました！！オリバーたちはギル大臣を倒すことができるでしょうか？

次話ではオリバーたちがリバー王国の商業都市・オーベルクに到着します。そこでは物語の間ずっとオリバーたちをサポートしてくれるある人物との出会いがあります。どうぞお楽しみに！

…ちなみに魔術の名称が安直なものになってしまっていますが…、もう少しよく考えればよかったですかねと後悔しています。

では次話をお楽しみに！！

ゝ悪の大臣ゝ 一章・仲間を探して 「2・宿の主人」 (前書き)

リバー王国諸侯のオットー様から悪の大臣ギルを倒すことを依頼されたオリバーたちは大きな街に到着しました。はたしてこの街ではどんなことが起こるのでしょうか？

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「2・宿の主人」

オットー様の隠れ家を出て二日目、オリバーたちは街道沿いの大きな街に着きました。

（オリバー）「うん……。ここは何本か大きな街道も集まっているから交通の便もいい。しばらく拠点とするにはちょうどいい場所だな」

（ペーター）「それにしても先輩……。何してるんですかね？宿を探しに行つてからかなり経つのに……。」

ペーターが心配そうに言うと、前からハンスが走ってきました。

（ハンス）「先生！先生！」

（ペーター）「遅いッスよ、先輩！」

（オリバー）「どうだ、オットー様に言われた宿屋は見つかったか？」

（ハンス）「ばっちりですよ！行きましょう。」

~~~~~  
~~~~~

ハンスは二人を小さな宿に案内しました。中では人のよさそうな主人がお皿を磨いています。

(?) 「いらつしゃい。ああ、さっきの人だね。部屋は二階だ。」

(オリバー) 「∴ハンスとペーターは部屋でゆっくり休んでろ。」

(ハンス・ペーター) 「はい、先生。」

ハンスとペーターが二階に上がっていくと、主人がオリバーに話しかけました。

(ヴォルフ) 「∴あんたが先生って呼ばれてた人かい？俺はこの宿の主人のヴォルフ・ザックスだ。ヴォルフって呼んでくれ。」

(オリバー) 「しばらく世話になるよ。俺はオリバー・ローゼンハイン。オリバーと呼んでくれ。まずはこの街について教えてほしいんだ。」



(ヴォルフ) 「あんだ、長旅の人かい？」

(オリバー) 「まあ、そんなところかな。しばらくはここに滞在するつもりだけど。」

(ヴォルフ) 「そうかい。…この街の名前はオーベルクだ。賑わってるだろ？」

(オリバー) 「ああ、そうだな。」

(ヴォルフ) 「…数年前まではもっとすごかったんだぜ？ここには四方から街道が集まってるからな、あちこちの品がここに集まって、毎日のように市が開かれてた。だが…、」

(オリバー) 「ギル大臣が政務をおこなうようになってからはおかしくなった、と…。」

(ヴォルフ) 「…ああ、そうだ。いろんな品物に高い税金をかけたからな。東西南北の交流も、衰退しちまったわけだ。」

少し声を小さくしたヴォルフは、それからオリバーをジロジロ見ま

した。

(ヴォルフ)「…それにしても、あんた普通の旅人じゃないね？弟子が持っている武器、護身にしちゃあやけに立派すぎる。それにあんたのその指輪…。」

ヴォルフはオリバーの指に光る黒い指輪を見て言いました。

(ヴォルフ)「…あんた、魔術師だね。しかも、相当経験を積んでいる。」

(オリバー)「ハハッ、なかなか鋭いね。…話に夢中になってこれを出すのをすっかりと忘れてた。」

オリバーは鞆からオットー様からもらった推薦状を出し、ヴォルフに渡しました。

(ヴォルフ)「オットー様！？これは…いや、確かにオットー様の文字だ。そうか…。あんた、オットー様に依頼されて…。…ここで話すよりもあんたの部屋で話そう。何かと物騒だからな。リリー、ここを代わってくれ。」

ヴォルフは床を掃除していた女性に声をかけました。



「（ヴォルフ）「もともと交通の要衝だからな、いろんな情報が集まってくる。ただ…最近は何所かの審査が厳しくなっちゃったからな…」

「（ペーター）「ああ、関所か…。」

彼らもここへ来るときに関所を通ってきていました。

「（ハンス）「通行するだけであんなに税金を取られるなんて…。」

「（ヴォルフ）「ギル大臣が民衆から巻き上げてるからな。人の流れも悪くなっちゃったよ。」

「（オリバー）「つまり、仲間を探すには自分たちで待つよりもこっちから行った方が安全なわけだ。」

「（ヴォルフ）「そうだな。…わざわざオットー様が依頼したやつだ、信用もおけるんだろう。旅に出るときは言ってくれ。関所の通行料くらいは出してやる。」

「（ペーター）「じゃあ、宿代も！」

(ヴォルフ)「おいおい、そこまで無料奉仕するつもりはないぜ？  
まあ、格安の値段にはしてやるがな。」

(オリバー)「ありがとう、助かるよ。…あと、この街にも仲間に出  
来そうなやつがいたら教えてくれないか？」

(ヴォルフ)「うーん…、剣士が一人はいるが、あいつは気まぐれ  
だからなあ…。いつどこにいるか全く見当がつかん。時々ひょっこ  
りここに来るんだが。」

(オリバー)「そうか。ここに来るならその時に声でもかけてみれ  
ばいいか。…それと、この辺で簡単に金を稼げるとしたら、やつぱ  
り魔獣狩りか？」

(ヴォルフ)「手っ取り早いのはそうだな。やつらは最近街の近く  
にも現れるようになった。俺のところにもそれくらいの情報は入っ  
てくる。もし情報が入ったら声をかけることにするか？」

(オリバー)「そうしてもらえると助かる。」

(ヴォルフ)「ま、出来る範囲でなら俺も協力はしてやるよ。そう  
いうことだ、俺は晩飯の仕込みをしてくるよ。」

ヴォルフはそいつごとく、部屋を出て行きました。

~~~~~

夜、彼らが一階に降りてくるとすでにテーブルの上に夕食が用意されていました。

(ヴォルフ) 「大したもんはないが、まあ食ってくれ。」

テーブルには豪華な食事が並んでいます。

(ハンス) 「へえっ、おいしいなあ。」

(ペーター) 「この豆スープ、美味しいですね。」

(オリバー) 「奥さんが作ったのかい？」

(ヴォルフ) 「いや？全部俺だが。」

(オリバー) 「へえーっ、すごいじゃないか。」

(ヴォルフ)「毎日作ってりゃあ、嫌でもつまくなるぞ。」

その時、奥からリリーがやってきました。

(リリー)「お客さん、これから長くここにいるんでしょう？お近づきの印に、これ食べてよ。私がつくったんだけどね。」

リリーがテーブルに置いたものを見て、オリバーたちは言葉を失いました。

(ペーター)「あー…、これは？」

(リリー)「見てわからない？クッキーだよ。」

それはクッキーというより、『焦げ付いた何か』でした。リリーは何故か延し棒を持ったまま笑っています。ヴォルフがオリバーの耳元で、

(ヴォルフ)「食えっ、食ってくれっ。じゃないと血の雨が…。」

と言っています。

(オリバー)「…ハンス、食べ。」

オリバーの言葉に、ハンスは顔を真っ青にしました。

(ハンス)「ええっ！？でも俺よりペーターの方が弟子…、」

(オリバー)「お前が一番年下だ。食べ。」

自分の先生の言うことには逆らえません。ハンスは意を決してそのクッキーを食べました。

(リリー)「どう？おいしい？」

ハンスは涙をこらえながら首を縦に振っています。

(リリー)「よかった！まだまだたくさんあるから、食べたかったらいつでも言ってるね。」

リリーは意気揚々と引き揚げて行きました。

(ハンス) 「せつ、先生！外に行ってきます！」

ハンスは顔を真っ青にして外へ飛び出して行きました。気の毒そうにハンスを見送るヴォルフに、オリバーが問いかけました。

(オリバー) 「…リリーは侍女長だったんだろ？」

(ヴォルフ) 「…料理だけは担当外だ。」

(オリバー) 「ああ…なるほど…。」

(ペーター) 「先輩、大丈夫かな…？」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ハンスは真っ青な顔で宿の壁にもたれかかりました。

(ハンス) 「ううっ…ひどい目に遭った…。…ん？」

ハンスがふと顔を上げると、宿の窓から中を覗いている人影が見えました。

(女の子…?)

(ハンス) 「…ねえ、何してるの?」

ハンスが声をかけると、その人影はピクツと体を震わせました。そしてハンスを見ると、慌てて走り去ってしまいました。

(ハンス) 「あ、ちょっと、ねえ!…一体なんだっただ?」

ハンスは首をかしげました。そして宿の中に戻ろうとしましたが、あまりの気持ちの悪さに座り込んでしまい、それからしばらく立ち上がることができませんでした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

人物紹介

くヴォルフ・ザックス

・「宿の主人」

・36歳。

・一人称は「俺」

・オリバーたちがオーベルクで滞在する宿の主人。もともとはオットー様直属の護衛兵だった。家来の中でも最もオットー様に忠義を尽くす男であり、オットー様も彼に全幅の信頼を置いている。とても強い男だったが、オットー様を逃がす時に怪我をしてからはあまり戦うことができない。料理が上手い。

くリリー・ザックス

・「ヴォルフの妻」

・38歳。

・一人称は「私」

・ヴォルフと共にオーベルクで宿をやっている。料理は下手。元はオットー様のお城の侍女長。料理は下手。世話好きでみんなに好かれている。料理は下手。傷ついて帰って来た仲間たちの手当てもしてくれる。料理は下手。ヴォルフはリリーの尻の下に敷かれているらしい。料理は下手。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「2・宿の主人」(後書き)

今回登場したヴォルフとリリーは、冒険の仲間にはなりません、物語の最後までオリバーたちをサポートしてくれます。

次話ではついにオリバーたちに最初の冒険の仲間が加わります。はたしてどんな仲間でしょうか…？どうぞお楽しみに！

それにしても、リリーの料理は一体どんな味がするのでしょうか…？

では次話をお楽しみに！

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「3・最初の仲間」 (前書き)

オリバーと二人の弟子は、オーベルクという街のヴォルフの宿を拠点とすることになりました。オリバーたちは旅の疲れからか、部屋でぐっすり眠っていましたが、誰かが彼らの部屋に向かって走ってきたようです。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「3・最初の仲間」

オーベルクに到着した翌朝、オリバーたちはいきなり部屋に飛び込んできたヴォルフに叩き起こされました。

（ヴォルフ）「起きろ！仕事だぞ！」

（オリバー）「な、何？」

オリバーは眠い目をこすりながら起き上がりました。

（ヴォルフ）「ここから少し南に行ったところにある村のそばに魔獣が出現したらしい。」

（オリバー）「わ、わかった。ハンス！ペーター！起きろ！」

（ヴォルフ）「弁当の用意は出来ているからな、下で待ってるぞ。」

（オリバー）「…念のため聞いておくが、」

（ヴォルフ）「ああ、安心しろ。俺が作った。」

(オリバー) 「いや…相手の出方を見よう。」

オリバーは何かが見え隠れした木の影をじつと睨みながら言いました。

~~~~~  
~~~~~

その後、オリバーたちは後ろに気を配りながら歩き続けましたが、結局何もありません。目的の村に到着しました。

(オリバー) 「気になるが…まあ、いい。この長老に会いに行こう。」

~~~~~  
~~~~~

長老は魔獣退治に来た彼らを大歓迎し、魔獣がよく出現する場所を教えました。そこは木のうっそうと生い茂る谷を通る道でした。

(オリバー) 「…いかにも魔獣がたくさんいるような場所だな。」

(ハンス) 「こんなにたくさんいるなんて…。」

(オリバー) 「俺がまず魔術であいつらを攻撃する。それが見えたら横から切りかかれ。」

(ハンス) 「はい。」

(ペーター) 「わかりました。」

オリバーは弟子たちが指示した位置に着いたのを確認すると、高らかに叫びました。

(オリバー) 「カーズアタック！」

固まって何かを食べていた手前の三匹の野獣が一気に吹き飛びました。オリバーは一気に空気に飛び出しました。オリバーは野獣が食べていたものを見て、思わず目を覆いたくなりました。

(旅人の格好：オーベルクに行く途中で襲われたのか…。くそっ！)

（オリバー）「カースアタ、うおっ！」

無惨な旅人の死体を見て一瞬気をそらしてしまったオリバーは、真横から襲ってきた魔獣に気がつきませんでした。辛うじてよけましたが、茂みの中に倒れこんでしまいました。

（ハンス・ペーター）「先生！」

（オリバー）「俺にかまうな！カースアタック！」

オリバーは呪文を唱えて魔獣を吹き飛ばし、立ち上がるつもりでした。

（くそっ、茂みに足が絡まってる！）

オリバーは倒れた体勢のまま応戦していましたが、素早い動きの魔獣にどんどん追い詰められてきました。ハンスとペーターも数の多さに苦戦しています。とうとう一匹の魔獣が助走をつけて飛びかかってきました。

（オリバー）「カース、」

オリバーが呪文を唱えようとした瞬間、突然後ろから何かが飛び出してきて、短剣で魔獣の喉を切り裂きました。そして驚くオリバーの足元の茂みを短剣で切り払いました。よろめきながら立ち上がると、オリバーは大きな声で唱えました。

（オリバー）「ハンス！ペーター！下がれ！…カーズレイン！」

オリバーの指先から真上に黒い閃光が上がったかと思うと、空き地にもものすごい勢いで降り注いできました。魔獣たちは次々と倒れましました。まだ息のある魔獣にはハンスとペーターがとどめを刺して行きました。

オリバーは荒い息でその様子を見ていました。

（この魔術は…体力のほとんどを使っちゃっからなあ…）

（ハンス）「先生！片付きました！」

（ペーター）「こっちもですー！」

（オリバー）「あ、ああ。御苦労さん…。」

(ハンス) 「それにしても珍しいですね、先生がわざわざあの危険な魔術を使うなんて…。」

(ペーター) 「苦戦してましたしね…。」

(オリバー) 「心配をかけて悪かった。あの旅人の食い荒らされた死体を見て動揺してしまった…。俺もまだまだだな。…実は、追いつめられたときにあの子が助けてくれたんだ。」

オリバーが一本の木を指さしました。ぼろぼろの服を着て、短剣を手にした一人の少女がそこにいたのですが、ピクツと震えると木の陰に隠れてしまいました。

(オリバー) 「いやあ、すまない。術を使うつもりはない。顔を見せてくれ。」

オリバーが呼びかけると、少女がほんの少し顔をのぞかせました。それを見てハンスがびっくりしました。

(ハンス) 「あれ？昨日宿の外にいた子じゃないか！」

ハンスの大声に、また少女はピクツと体を硬直させました。が、恐る恐るオリバーたちに近づいてきました。

(オリバー) 「すると…、今朝から俺たちの後をつけてたのは君だったのか？」

少女はコクンと頷きました。

(ペーター) 「何だよー、人騒がせだなー。でもどうして俺たちをつけてきたんだ？」

すると少女はうつむきながら消え入りそうな声で言いました。

(?) 「仲間…。」

(オリバー) 「…もしかして、仲間になりたいのか？」

少女はまたピクツと体を硬直させましたが、同じようにコクンと頷きました。

(ハンス) 「何だよー、それならそうだって、昨日の夜に言ってくればいいのに。」

(オリバー) 「俺たちも一人でも多くの仲間が必要だ。これからよろしくな。俺はオリバーだ。」

(ハンス) 「俺はハンス。」

(ペーター) 「俺はペーターだ。」

(ローズ) 「…ローズ。」

(オリバー) 「ローズ、か。いい名前じゃないか。」

ローズはオリバーの言葉にびっくりしたようでしたが、少し嬉しそうな表情を見せました。

(オリバー) 「…よし、ここでの仕事も終わったし、もう少し休憩したら長老から報酬をもらってオーベルクに帰るとしよう。あの技は本当に体力を使う…。」

(ハンス・ペーター) 「わかりました。」



そしてヴォルフの宿のカウンターで…、

(ヴォルフ) 「…なるほどね、じゃあ、宿代は一部屋分追加だね。」

(ハンス) 「ええーっ？」

(ヴォルフ) 「…お前たちは夜ローズと一緒に部屋の部屋で寝るのか？」

(ハンス) 「い、いや…。」

(ペーター) 「それは…。」

(ヴォルフ) 「同じ部屋に寝るんなら構わないが、二部屋使うんなら話は別だ。」

(ハンス) 「とほほ…。」

(ヴォルフ) 「報酬もたつぷりもらったんだろ？安くしてやっつてる分だけありがたいと思え。」

ヴォルフは苦笑いしながら言いましたが、そのあとで少し感慨深げな表情を見せました。

(ヴォルフ) 「…それにしても、ローズが人に懐くなんてねえ…。」

(ペーター) 「え？ヴォルフさん、ローズのこと知ってるの？」

(ヴォルフ) 「ああ、オーベルクじゃちょっと名の知れた存在だからな。」

(ハンス) 「ひ、人に懐くって…、もしかしてローズは人じゃない、とか？」

(ヴォルフ) 「バカ言え。あいつは真正銘の人間だよ。…孤児なんだ、あいつは。」

(ハンス・ペーター) 「…孤児？」

ヴォルフがローズの境遇を二人に話し始めました。

(ヴォルフ) 「もともとはオーベルクの領主だった古くから続く良

家、ミニエー家の末娘だったんだがな、その頃から対立していたギル大臣に一族を焼き討ちされたんだ。

何とか逃げ延びたローズは当時はまだ幼かったし、さる権力者の命乞いもあつて見逃されたんだが、一族が処刑されるときは連れていかれて最前列でその様子を見せられたんだ。ミニエー家の生き残りも何かしらの嫌疑をかけられて最近公開処刑された。

…あの事件があつたのももう十三年前の話だ。それ以来、道端で物売りをしながら暮らしていたってわけだ。…だが、街の連中が金や食い物を恵もうとしても、絶対に受け取るうとしないんだ。

人間不信にでもなってるのかと思っていたが…まさか外から来たオリバーに懐くとはな…。」

(ハンス)「ローズも大変なんだなあ…ん？ねえ、ヴォルフさん、その十三年前の事件の時、ローズは何歳だったの？」

(ヴォルフ)「確か…五歳か六歳だったかな？今は十八、九つてところか。」

(ハンス)「…俺たちより、」

(ペーター)「…年上だったんだ…。」

少しショックを受けたようなハンスとペーターを見て、ヴォルフはまた苦笑いしました。

(ヴォルフ)「まあ、あの外見はどう見ても十三、四歳だな。…とこゝろでオリバーとローズはどこへ行ったんだ？」

(ペーター)「ローズがボロボロの服着てるから、新しい服を買いに行ったんだよ。しかも先生の自費で。」

(ハンス)「まったく、俺らは『そのくらい自分で買え』って言うくせにさ…。」

(ヴォルフ)「何を言っているんだよ、もしお前らがオリバーの立場でも、同じことを言うたろ？」

(ペーター)「そりゃあ、たぶん、そうですね…。」

その時、宿の扉が開きました。

(オリバー)「おい、帰ったぞ。」

オリバーがローズを連れて帰ってきました。

(ハンス) 「何だ、女の子っぽい服を着るのかと思ったら、そうでもないね。」

(オリバー) 「俺たちと一緒に冒険するから、動きやすい服がいいんだってさ。あとヴォルフ、言われてたものも買ってきたぞ。」

(ヴォルフ) 「ああ、ありがたい。」

(ペーター) 「…先生、ローズが俺たちより年上だって知ってました?」

(オリバー) 「ああ、さっきローズから聞いたよ。俺よりは年下だな。」

(ハンス) 「やっぱり俺たち、『ローズさん』とかって呼んだほうがいいのかな?」

(ローズ) 「別に…いい。ハンスたちの方が先輩だから…。」

(オリバー) 「ヴォルフ、ローズの部屋は？」

(ヴォルフ) 「ああ、あんたらの部屋の隣だ。…うん、こいつを買ってきてくれたなら、ローズの部屋の代金は三日分タダでいいぞ。」

(ハンス) 「ええーっ？」

(ペーター) 「何を買ってきたんですか、先生。」

(オリバー) 「…解毒薬だ。あとは…察しろ。」

(ハンス・ペーター) 「…あ。」

ハンスとペーターはまるで毒のようなリリーの料理を思い出し、硬直しました。

(ヴォルフ) 「まあ、何はともあれ、仲間が増えてよかったな、オリバー。…ローズもしっかりとオリバーたちの力になれよ。」

ローズは相変わらずピクツと震えた後でコクンと頷きました。オリバーたちは思わず笑顔になりました。

~~~~~  
~~~~~

人物紹介

〈ローズ・ミニエー〉

- ・「貴族の末娘」
- ・19歳
- ・短剣で戦う。ちょっとした小型武器も扱え、物語の終盤では…
- ・一人称は「私」。
- ・記念すべき最初の仲間。とても素早い。内気で人と話すのが苦手。もともとオーベルクを治めていたミニエー家の末娘だったが、ギル大臣に一族を根絶やしにされてしまい、13年間オーベルクの路上で暮らしていた。オリバーのことが大好き。宿の中をのぞいていたのは、食事前に部屋でハンスとペーターが外に聞こえるような大声で「ギル大臣を倒す」とか言っていたため。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「3・最初の仲間」 (後書き)

記念すべき最初の仲間、ローズがオリバーたちと行動を共にすることになりました。ローズにはすぐにある感情があらわれるようすが…？

次話では心強い二人の人物がオリバーの仲間に加わります。そのうちの一人は、オリバーと過去に面識があったようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオーベルクはリバー王国のほぼ中心に位置しています。そのため、東西南北に延びる街道がだいたい集まってきたのです。ただ、後々に物語の中で出てきますが、首都ではありません。

では次話をお楽しみに！

オリバーの仲間に、新しくローズが加わりました。オリバーたちは情報収集のために今日はオーベルクの街を歩いていました。はたして今日は何が起こるのでしょうか…？

なお、ご指摘があったので、今回のお話は一度台本形式の会話を普通に見してみようと思います。ご指摘を頂けるのは大変うれしいので、可能か不可能かは別にしてもどんどんご指摘していただければと思います。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「4・鉄血の騎士と笑顔の魔女」

ローズが仲間になってから三日後、オリバーは三人を連れてオーベルクの街を歩いていました。街中を流れる川にかかる橋の上で、ハンスがつぶやきます。

「へえ！ここが豪商のヴァルトシュタイン家か…。大きなお屋敷だなあ…。」

そんなハンスを見ながらオリバーは考え込んでいました。

（この街で仲間になってくれそうな人はもういないか…。まあ、ローズが仲間になっただけでも大きな収穫だ）

「おい！君はもしかしてオリバー・ローゼンハインじゃないかい？」

オリバーは後ろからした声にびっくりして振り返りました。立派な鎧を着た騎士が、きれいな白馬に乗っています。その姿を見た瞬間、オリバーは顔をほころばせました。

「お前は…パトリックか！懐かしいな！」

「先生、この人は…？」

ハンスとペーターは怪訝そうな顔をしています。

「ああ、俺の昔の仲間だ。名前はパトリック。『鉄血の騎士』とも呼ばれてる。」

「ええっ！？『鉄血の騎士』って、あの勇敢なことで有名な…。先生、そんな方とお知り合いだったんですね！」

パトリックと紹介された男は少し照れくさそうにしました。

「私はそんなにすごい人間じゃないよ。ここで立ち話もなんだし、あそこのカフェで座って話そうじゃないか。積もる話もあることだし。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

彼らはカフェのテラスで話をしました。ハンスとペーターはパトリックの話を聞いて感激しているようです。

「すると、パトリックさんは先生と一緒に魔獣との戦いで生き残った六人のうちの一人、ってことですか？」

「ああ、そういうことになる。」

「もう何年も昔の話だね。懐かしいものだよ。…しかし、オリバー、君には弟子ができたようだね。」

「ハハッ、いろいろ曰くつきで俺が引き取るようになっただけさ。ハンスもペーターも魔術を身につけようとは思っていないようだし、正式な意味の弟子とは少し違つかもな。」

「君のことを先生と呼んで慕っているんだ、ちゃんとした弟子さ。こんなにかわいらしい女性も君の弟子かい？」

ローズは突然話題に上がったことに驚いて体を硬直させました。

「ああ、いや、ローズは三日前に仲間になったんだ。」

オリバーが説明すると、パトリックは不思議そうな顔をしました。

「三日前に?...どうもいつもとは様子が違うようだね。こんな旅先でわざわざ仲間をつくるなんて。基本的に君は地元から仲間を連れて行くじゃないか。」

「まあ、ハンスとペーターがそうなんだがな。...実は今、極秘の任務を仰せつかっているんだ。」

「そんな大事なことを私に話して大丈夫なのかい？」

「お前が昔の仲間に悪影響を及ぼすようなことをするようじゃつじやないってことはわかってるさ。苦楽を共にした仲間だったじゃないか。実はな...、」

オリバーはこれまでのいきさつをパトリックに話しました。パトリックは真剣な表情でその話を聞いています。

「...そうか、わかったよ。ならば私も手を貸すよ。」

「本当か？」

「どうせ放浪の旅の途中だし、暇はいくらでもあるからね。」

「そうか、お前がいると心強いな。」

ハンスとペーターも大いに喜びました。ただ、ローズは少し不安げな表情を浮かべています。

「心配するな。パトリックは昔からの俺の仲間だ。…ローズもいろんなやつと接してもっと人に慣れた方がいいぞ？」

オリバーの言葉に、ようやくローズは安心したようでした。そして、パトリックにも笑顔を見せました。

「深くは追求しないけれど、なかなか大変そうだね。…私はあそこの宿に泊まっているから、必要な時はいつでも声をかけてほしい。」

「ああ、わかった。」

「…ところで、仲間を探しているんなら面白い話を聞いたことがあるよ。このオーベルクの北のはずれの森の中に、この辺じゃちょっと名の知れた魔術師が住んでる家があるらしい。…私も名前は忘れてしまったけれど…。」

「何だよ、お前にしては珍しく詰めが甘いな。」

「そう言わないでくれよ、情報を教えただけでも大きいだろう？…もし今から行くのなら、私も一緒に行こう。私も少し興味があるからね。」

「…そうだな、よし、早めに動くでしょう。…お前たちはどうする？」

オリバーは弟子たちに尋ねました。

「じゃあ、俺と先輩はもう少し街を歩き回って情報を集めたいと思います。」

「ああ、頼んだ。…ローズはどうする？ハンスたちと一緒に行動するか？それとも、先に宿に帰ってるか？」

ローズは首を横に振りました。

「…私たちと一緒にくるかい？」

パトリックの問いかけに、ローズはコクンと頷きました。

「そつだ、ローズ、その魔術師の名前、知ってるか？」

オリバーからの問いかけにもローズは頷き、言いました。

「イザベル…。」

「あ、そうそう！確かそんな名前だよ。よし、行こうか。」

パトリックは嬉しそうにしましたが、オリバーは少し考え込みました。

(魔術師のイザベル…どこかで聞いたような名前だな…)

オリバーはどこか引つかかるところがありましたが、それが何かは思い出せませんでした。

~~~~~  
~~~~~

三人は街の北のはずれの森へ向かって歩きました。案内役はローズ

です。パトリックは愛馬、フランソワに乗っています。

「この辺りに来ると、かなり緑が多くなってくるなあ…。」

「賑わっているオーベルクから少し歩くだけでこんなに景色も変わるものなんだね。」

その時、ローズが足をとめました。そして、森の中を指さしました。

「あれが…魔術師の家…。」

木の間に、小さな家が見えていました。

「よし、行こうか。」

パトリックがフランソワの足を進めました。しかし、道を外れて森へ一歩足を足を踏み入れた途端、急にフランソワは怯えて暴れました。

「おっと！…どつどつ！おいおい、落ち着くんだ。」



パトリックが何とかフランソワをなだめ、落ち着かせました。

「…ちょっと待て。」

オリバーは森の入口をじっと見ていました。

「…パトリック、フランソワはここにつないでおけ。獣よけの魔力線がここに張られている。」

「本当かい？まったく、面倒なことを…。」

「しかし…このレベルの魔力線を作り出すことが出来るのは相当な魔力を持った魔術師だけだ…。…ああっ！」

オリバーの突然の大声に、ローズがビクツと震えました。

「もしかしたら…。…二人とも、行くぞ。」

「どうしたんだい、オリバー。何か思い出したのかい？」

パトリックからの問いかけにも答えず、オリバーはひたすらに森の

中を歩いて行きました。

~~~~~

三人は森の中を進み、小さな家の前にたどり着きました。煙突から煙が上がっています。

「留守ではなさそうだな。」

しかし、何度ノックをしても、呼びかけても返事がありません。パトリックが扉を押してみると、ギギーツという音がして扉が開きました。

三人が中に入ると、奥で大きな鍋がグツグツと煮え立っていました。驚くべきことに、かき混ぜ棒が勝手に鍋の中をかき混ぜています。辺りを見渡すと、ナイフが独りでに薬草を刻んでいたり、棒が薬鉢で薬草をすり潰したりしています。

「さすがは…『伝説の魔女』だ。」

「伝説の…魔女？」

パトリックが聞き返したとき、入口の扉が開く音がしました。

「誰です？」

入口から聞こえた声に、三人は驚いて振り返りました。笑顔の女性がこちらを見えています。オリバーはひざまずいて挨拶しました。

「失礼いたしました。勝手に入った無礼をお許してください。…私は魔術師のオリバー・ローゼンハインです。伝説の魔女、イザベル様ですね？」

女性は微笑んだまま答えました。

「確かに私はイザベルです。ですが…伝説の魔女とというのは、私の曾祖母ですね。同じ名前なので…。」

「そうだったのですか…。どうか無礼をお許してください。」

「いえ、今でもときどき間違われます。…それよりも、わざわざこんな淋しいところまでいらっしゃったのには何か訳があるのではないですか？」

「そうでした。実は…、」

オリバーはここへ来たいきさつをイザベルに話しました。イザベルは困ったような笑みを浮かべて言いました。

「協力して差し上げたいのは山々ですが…、私の魔術はまだ未熟です。足手まといになるのでは…。」

「とんでもない。森の入口に魔力線を張ったり、道具を操ったりするのは高度な魔術を持ってしないと不可能なことです。それに…この薬草を見たところ…、毒の魔術について相当な知識を持っておられるのでは？」

「…そこまで見破られてしまいましたか。さすがは高名な魔術師、オリバー・ローゼンハインさんですね。」

オリバーはイザベルが自分の名前を知っていたことに大変驚きました。

「…私のことを、知っていましたか。」

「かねがね噂は耳にしていました。…わかりました、私も力を貸し

「下がっててくださいね。…ファイアーストーム！」

イザベルが唱えた瞬間、家が一気に燃えました。そして、跡形もなくなってしまうました。オリバーは驚きました。

「…イザベル、炎の魔術も使えるのか？」

「ええ、ほんの少しですけど。」

「すごいな。俺は呪いの魔術の専門だから、他のは使えない。」

「比較的簡単に覚えられるものもあります。機会があれば教えて差しあげますよ。」

「それはありがたい。ぜひお願いするよ。」

~~~~~  
~~~~~

ヴォルフの宿では、ヴォルフが驚いたような顔をして言いました。

「へえー、イザベルさんを仲間にしたのか。大人しそうなイメージがあったからあえて紹介はしなかったが…薬の調合なんかは裏に使ってない物置があるから、そこでやってくれ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「…ところでハンス、ペーター、何か情報は集まったか？」

ヴォルフと話すイザベルを見ながら、オリバーは二人の弟子に問いかけました。

「何でも、西の方にシーガルンという地方があるらしいです。もともとは別の王国だったらしいんですが、ギル大臣が最近占領した土地らしくて、かなりギル大臣に反感を持っているようです。」

「占領地、ということもあって、税金もかなり搾り取られているみたいですね…。」

「そうか、それなら仲間も集まりやすいかもしれない。ヴォルフが言っていた剣士とここで会えたら、さっそく行ってみるとしよう。」

すると、ヴォルフが口をはさんできました。

「お前たち、まだキンフィールドには行ってないんだろ？遠回りになるが、シーガルンに行くならキンフィールドを通って行けばいい。」

「キンフィールド…この国の首都か。」

「遠くに塔の牢獄も見えるはずだ。」

「塔の牢獄…、王女様がとらえられているところか…。確か、ここから少し南に行ったところがキンフィールドだな？」

「ああ。そこから西に行けば三日くらいでシーガルンに着く。」

「わかった、ありがとう。」

「よし、では私は先にここから直接シーガルンに行つて、いろいろ情報を集めておこう。ここから直接行くことも出来るようだしね。」

「…さあ、もう夜も遅い。私は自分の宿に帰るよ。それじゃあまた明日。」

パトリックはそういつとヴォルフの宿を出て行きました。

「よし、俺たちもそろそろ寝ようか。ローズ、イザベルもお前と同じ部屋に寝てもらうからな。」

オリバーたちもそれぞれ自分たちの部屋に戻り、眠りにつきました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

## 人物紹介

〈パトリック・テイボー〉

- ・「鉄血の騎士」
- ・25歳
- ・馬上では槍、それ以外は剣で戦う。
- ・一人称は「私」
- ・高名な騎士。オリバーとは昔から面識がある。背中に魔獣との戦いでついた大きな傷跡がある。綺麗な白馬・フランソワを連れていく。相談役のような存在。勇敢な人物。仲間には優しく、特に女性メンバーにはいつも紳士的な対応をするが、敵にはまったく容赦がない。ちなみに彼の鎧はものすごく高い。

〈イザベル・ローラン〉

・「笑顔の魔女」

・21歳

・魔術で戦う。

・一人称は「私」

・オーベルクのはずれの森に住んでいる魔術師。同じ名前で曾祖母のイザベル・ローランは「伝説の魔女」と呼ばれている。そのため少しコンプレックスを抱いているのだが、あまり表には出さない。

いつも笑顔で礼儀正しい。毒の魔術と回復術が得意だが、炎の魔術も少し使える。实用魔術もだいたい使いこなせる。

勇敢な騎士、パトリックと魔術師のイザベルがオリバーの仲間になりました。そしてギル大臣に反感を持つ民衆が多いシーガルン地方の情報…、旅立ちの時が近づいてきているようです。

次話ではいよいよオリバーたちがオーベルクを出発します。そしてローズにライバル出現の予感…。どうぞお楽しみに！

ちなみに、イザベルの曾祖母の「伝説の魔女」はあらゆる魔術を使いこなし、困っている人々を助けた、ということまで有名で、リバー王国のみならず近隣の国でもその話が伝わっているのです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「5・気まぐれ女剣士」 (前書き)

パトリックとイザベルを仲間に取り入れたオリバーは、さらなる仲間探しのために西のシーガルン地方への旅を計画していました。その計画も、いよいよ実行されることになったようです。

今回から、前話のように登場人物のセリフを普通にしますので、よろしく願います。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「5・気まぐれ女剣士」

その日、ペーターとイザベルと共に山へ薬草を探りに行ったオリバーは、疲れた表情でヴォルフの宿へ帰ってきました。すると、ヴォルフがオリバーに声をかけました。

「おお、オリバーか。ちょうどよかった。前に話してた剣士が来るぞ。」

「本当か！」

オリバーは中を見回しました。しかし、それらしい姿は見当たりません。一人の女性がリリーと話しているだけです。

「…どこにいるんだ？」

「ほら、あそこにいるだろう。そのカウンターでリリーと話してるやつだよ。」

「ええっ？」

オリバーは驚きましたが、その女性に話しかけることにしました。

「あー、」

するとリリーがその女性にオリバーを紹介しました。

「あ、ほら、ビアンカ。この人が今話してたオリバーだよ。」

「あっ、初めまして。あたしはビアンカっていうんだ。」

ビアンカと紹介された女性はオリバーの方を向き直りました。

「あ、ああ。俺はオリバーだ。」

「旅の仲間を探してるんだって？」

「ああ、まあ、そんなところだな。」

「そっか。うん、あたしが仲間になってあげてもいいよ。リリーたちの話を聞いていると、何だか面白そうだしね。」

あまりに軽いビアンカの言葉と口調に、オリバーは少しムツとしました。

「おいおい、俺たちは遊びに行くわけじゃないんだ。これでもこの国を救うために働こうとしているんだから。」

「むー、そういう重い雰囲気、あまり好きじゃないんだよねー。気楽に行こうよ、気楽にさっ。」

「じゃあ、いったいどうして仲間に加わろうと思ったんだ？」

「そりゃあ、気まぐれだよ、気まぐれ。あたしはいつつも気まぐれに生きてるからさー。」

「こんな大事なことを気まぐれで決められてもなあ…。」

オリバーは期待を裏切られたような気がしてため息をつきました。

「だいたい、こんなに華奢な体で、まともに戦えるの？」

ペーターがビアンカを見ながら少し馬鹿にしたように言いました。するとビアンカはニヤリと笑ってこう言いました。

「…あんたも剣士みたいだね。ちょっとお手合わせ願える？…ヴォルフ、訓練用の剣を貸してよ。」

「…こつなるから嫌なんだよ。備品を壊すなよ？」

ヴォルフはやれやれといった顔をして宿の奥に入って行きました。

~~~~~

さて、ペーターとビアンカは剣を構えました。ペーターは余裕たっぷりです。

「どこからでもどうぞ。」

しかし、余裕たっぷりなのはビアンカも一緒のようです。

「怪我しても知らないぜ？」

ペーターはビアンカに向かって突進しました。しかし、ビアンカは

攻撃を受け止めると見せかけてサツとよけると、一瞬のことに戸惑うペーターの腰に剣をつきたてました。

「痛ッ！」

「本気じゃないんでしょう？ほら、どんどんかかってきてよ。」

「くっそーっ！」

ペーターは剣を振りまわしてビアンカに向かって行きましたが、ビアンカはヒラリヒラリとかわし、ペーターの足がもつれたところできつめを刺しにきます。結局ペーターは一度もビアンカに勝てませんでした。

「はあっ、はあっ、もうダメだ…。」

「…どう？オリバーさん。考えてくれた？」

オリバーは少し感心したように言いました。

「なるほど、ペーターも訓練してそれなりの剣士であることは間違いない。それを軽くあしらうとは大したものだ。…だがまだ足りない。」

いな。ハンス！降りてきてお前も戦ってみろ！」

「はい！」

やる気十分のハンスも練習用の槍を小脇に抱え、一階に降りてきました。しかし、ビアンカは槍使いのハンス相手にも圧倒的な力を見せつけました。ハンスの隙を見てビアンカはすぐに間合いに入り込んでくるのです。

「うっっ、強い…。」

「なかなかの体さばきだな…。…よし、ローズ！」

上から様子を見ていたローズはいきなりオリバーに声を掛けられてピクツと震えました。

「お前もビアンカと戦ってみろ。素早さではいい勝負だろう。短剣の代わりにこのスプーンでも持ってやってみろ。」

ローズはコクンと頷くと、一階に下りてきました。

~~~~~

~~~~~

ローズとビアンカの試合はし烈を極めました。お互いに間合いをしつかり取ったかと思うと、一気に突っ込んだり、かと思うと、サツと飛びのいたり、ものすごい無言のやり取りが続いていました。最終的にはお互いの体力がなくなってしまいました。

オリバーはすっかりビアンカを見直したようです。

「…やめ！…よし、どんな相手にも適応できるみたいだな。君の気まぐれに賭けてみても悪くないかもしれぬ。ビアンカ、これからよろしくな…ビアンカ？ローズ？」

ローズとビアンカは床に倒れながらも睨みあっています。

「ついに見つけた…ライバルを！…ローズ、だよな？今後あたしはあんたをライバルと見るけど、それでもいい？」

ローズは真剣な顔で頷きました。

「よし、決まり！オリバーさん、これからよろしくね！」

「あ、ああ。よろしく。」

「それと、今からオリバーさんのことは師匠って呼ぶから！」

「し、師匠？えっ？えっ？」

突然のビアンカの言葉にオリバーは困惑しました。ハンスとペーターはローズをほめたたえています。

「すげえな、ローズ。」

「あれと対等に渡り合えるなんて…。」

ローズは激しい試合で火照った顔をさらに赤くしました。ハンスとペーターはさらにからかおうとしましたが、その前にヴォルフが言いました。

「…ハンス、ペーター、その辺の壊れた椅子を修理しとけよ。」

「ええっ!？」

「負けた者として当然だろう。」

「…はい。」

オリバーはがっくりと肩を落とす二人を見て笑いながら、ローズに言いました。

「よし、ローズ。パトリックを呼んできてくれ。ある程度人数も集まったしな、さっそく明日の朝出発する。作戦会議だ。」

ローズは頷くと、フラフラしながら宿を出て行きました。もちろん、ヒアンカをじっと見ながら。

~~~~~  
~~~~~

パトリックが来ると、オリバーたちの会議が始まりました。

「決定事項としては、パトリックはここから直接シーガルンに行つて情報を集めておく。俺たちはキンフィールド経由でシーガルンに入る。」

「キンフィールドでも一泊した方がいいと思うよ。距離としては大して遠くはないけれど、街の雰囲気を見ておくのも悪くはないと思うからね。」

パトリックが言いました。

「そうだな。そうするとしよう。」

「私もパトリックさんと一緒に行動しましょうか？」

イザベルが言いましたが、パトリックは首を横に振りました。

「いや、私は旅に慣れているからね、私の方は一人で大丈夫だ。」

「キンフィールドも広いからねー、じっくり時間を取ってみた方がいいかもしれないよ？」

ビアンカが提案しました。

「そうだな。では夜明け前に出発するとしてしよう。…それまでに椅子の修理が終われば、の話だな。」

オリバーがハンスとペーターを見て言いました。不器用なのか、なかなか手が進んでいません。

「それでは、私は物置で今日採ってきた薬草の仕込みをさせていただきます。何かあった時は呼んでくださいね。」

イザベルが笑顔のまま席を立ちました。

「じゃあ、あたしも帰って旅の支度をしてくるよ。」

ビアンカもフラフラと宿を出ていきました。もちろん、ローズから目を反らさずに。

「ローズは部屋でゆっくり寝ておけ。…疲れただろうからな。俺はもう少しヴォルフたちと話しておくよ。」

ローズはビアンカが出て行った入口をじっと見ていましたが、オリバーの言葉に慌てて頷くと、階段を駆け上がって行きました。オリバーは微笑ましげにその姿を見ていました。そしてヴォルフに尋ねました。

「ビアンカとはどこで知り合ったんだ？」

「前から時々ひよっこりと顔を出していたんだ。リリーとすぐに打ち解けちゃったんだ。自分でも言っていたように気まぐれだが、なかなか腕が立つだろ？」

「ああ。試した甲斐があったよ。」

「…だが俺が驚いたのはローズだ。あのビアンカと対等に戦えるなんて…。しかも短剣でだぞ？」

「お互いに相手の攻撃を避けるのが上手かったからな。…これがきつかけで、ローズも明るくなってほしいんだが。」

「俺が見ている分には、あれでかなり明るくなったと思うがな。お前らといるのが本当に楽しんだろ？。羨ましいよ…。」

「…なあ、ヴォルフ。あんたも一緒に来ないか？オットー様の護衛兵だったのなら、腕には自信があるだろ？」

「…言っただけでなかったか。三年前の事件の時、俺はオットー様を安全に逃がすために敵を引き付けて、肩を切られたんだ。普通に生活する分にはもう何ともないんだが、戦うとなるとな…。」

「そうか…。」

「まあ、オットー様への忠誠心は今でも誰にも負けない自信はあるがな。それに、お前らがオーベルクに戻ってくる時、帰る場所があった方が落ち着くだろう？」

「ははっ、そうだな。じゃあ留守の間は頼んだぞ。」

「安心しろ。お前らがいつ帰ってきてもいいように、部屋は空けておくからな。」

「ありがとう。…ほらお前ら、不器用だな！俺に貸してみろ！」

オリバーはハンスから木槌を取り上げました。

「先生…。俺たち大工仕事なんて教わってませんからね？」

「情けないな、まったく…。こんなもの習わなくても出来るだろう。ほら、木槌の持ち方はこうだ。その方が力が入るだろう？」

「あ、本当だ。…うがあああっ！」

ペーターが思い切り自分の指を木槌で叩きました。

「まったく…世話の焼ける弟子たちだ。」

オリバーは苦笑いしながら言いましたが、その表情はどこか楽しそうでした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌朝の夜明け前、オリバーと仲間たちが宿の前に集まりました。

「では、私は先にシーガルンに行っているよ。現地で会おう。」

パトリックは愛馬、フランソワにまたがると、悠々と去って行きま  
した。

「俺たちも出発するとするか。」

「気をつけて行けよ。オットー様にもお前らが旅立ったことは伝えておいてやるからな。」

「ああ、ありがとう、ヴォルフ。」

「…しかし、考えたな。薬商人になりすますとは。これでイザベルの持つてる薬草の説明もつくわけだ。」

ヴォルフは感心したように言いました。

「むしろ、イザベルが考えてくれたんだがな。…よし、みんな、行くぞ。じゃあ、またな、ヴォルフ。」

「いつでも戻ってこいよ！」

ヴォルフとリリーに見送られ、オリバーたちはキンフィールドへ向かって歩き出しました。

「ほら、先生！見てください！」

ハンスが指差した方を見ると、山の陰から、朝陽が昇っていました。

「きれいだな。…これが俺たちを祝福してくれてるものならいいんだが…。」

~~~~~

人物紹介

↳ビアンカ・ヴァルトシュタイン

・「気まぐれ女剣士」

・21歳。

・突剣で戦う。

・一人称は「あたし」

・オーベルクを拠点に気まぐれであちこち旅している女剣士。リリィとはとても仲がいい。友情に年齢差なんて関係ない。ずいぶん前からヴォルフの宿に顔を出している。ローズとは自他共に認めるライバル関係。どんな時でも明るくふるまっている。オリバーたちの仲間になったのも気まぐれ。仲間たちを振りまわすのも気まぐれ。オリバーを師匠と呼ぶのも気まぐれ。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「5・気まぐれ女剣士」 (後書き)

オリバーの仲間に、新たにピアンカが加わりました。その気まぐれっぷりにオリバーたちは振り回されることにはなりますが、頼りになることは間違いないようです。

次話ではオリバーたちがリバー王国の首都、キンフィールドに到着します。そこでオリバーたちはいきなり危機に遭遇するようですが……。どうぞお楽しみに！

ちなみに薬商人の変装をしているときは、イザベルが集団のリーダーということになっています。だから関所を通る時はだいたいイザベルが手続きをします。

では次話をお楽しみに！

オリバーと仲間たちはオーベルクを出発し、リバー王国の首都であるキンフィールドを経由して西のシーガルン地方へと向かうことになりました。そろそろキンフィールドが近づいてきたようです。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「6・キンフィールドの鍛冶屋」

オリバーたち一行は朝の街道を首都のキンフィールドへ向かって歩いていました。首都と一大商業都市のオーベルクを結んでいるだけあって、人の行き来も盛んなようです。

「もうすぐキンフィールドかあ！」

「どんな街なのか、楽しみツスね、先輩！」

ハンスとペーターは元気いっぱいです。しかし、一方でどんどん元気がなくなっていく仲間もいました。

「ローズさん、元気がありませんね。このお薬を飲みますか？元気になるですよ？」

イザベルの言葉に、ローズは首を横に振りしました。

「そうか…、ギル大臣たち、キンフィールドにいるんだもんね。…パトリックさんと一緒に行った方が良かったんじゃない？」

ハンスが言いましたが、ローズはうつむいたまま答えました。

「先生と離れたくない…。」

すると、ビアンカが脹れっ面をして言いました。

「…もう！あんなねー、もっと元気出さないよ！今実際に師匠と一緒にいるんだから、別に元気なくする必要なんてないでしょ！」

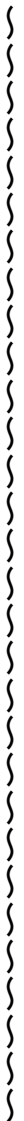
ローズはジロツとビアンカを見ました。

「…何？その目は。文句があるんなら、かかってきなさいよ。ほれほれー。」

ビアンカはローズの目の前でひもをひらひらさせると、走って逃げました。すぐにローズはビアンカを追いかけました。

「…まったく…。よし、二人が帰ってくるまで少し休憩しようか。」

オリバーは苦笑いしました。




~~~~~

しばらくすると、二人が戻ってきました。二人とも泥だらけでしたが、ローズの顔はいくらか晴れやかでした。

「イタタタ…。むー、ローズったら、本気で攻撃することないでしょうが…。」

歩きながらビアンカはオリバーにこぼしました。オリバーはビアンカに言いました。

「…楽しんでるな、ビアンカ。」

「えへへ、まあねー。」

「…ありがとうな、ローズに気を遣ってくれて。」

「楽しくないからねー、あの子に元気ないと。」

「それは確かにそうだな。…ところで何で俺は師匠なんだ？」

「気まぐれだよ、気まぐれ。それに何だかそのほづが呼びやすいしねー。」

~~~~~

やがて、一行は峠に差し掛かりました。坂道を登り切ると、眼下にキンフィールドの街並みが見えました。ハンスとペーターがため息をもらしました。

「広いですね…。」

「オーベルクの二倍くらいはありそうですね。」

「あそこに見えるのがキンフィールド城、そしてあの山の頂上にあるのが…塔の牢獄。」

ピアンカが指さした方を見ると、石造りの高い塔が見えました。心なしかその周囲も薄暗く見えます。

「まずは今日の宿を探して、それから街を歩き回ってみよう。ただ、ここはギル大臣のお膝元だ。変なことを言つと目をつけられるからな。…聞き込みは俺とハンス、イザベルで行こう。ペーターとロー

オリバーは驚きました。そして少しからかうように言いました。

「そんなに安いのかい？まがいものじゃないの？」

「失礼なこと言うなよ。俺たちはローレンツっていうここじゃちょっと名の知れた鍛冶屋なんだぜ？そこらを歩いてるやつに聞いてみなよ。ローレンツの刃物は最高って口をそろえて言うぜ？信用できないなら、ここに的がある。こいつを投げつけてみるよ。」

「ふーん、自信満々だな。…ローズ、やってみるか？」

ローズは頷くと、短剣を受け取り、的に投げました。彼女が投げた短剣は的のど真ん中に命中しました。

「へえーっ、お嬢ちゃん、なかなかやるねー。」

ローレンツが驚いたように言いました。オリバーがローズにききます。

「…ローズ、どうだった？」

ローズは目をまん丸にしています。短剣の使い心地にびっくりした

よじです。

「使いやすい…。欲しい…。でもまだちょっと高い…」

「よし！お嬢ちゃんの腕にやられちゃったからね、もう二〇カド二
一まけてやるよ！」

「買った。」

ローズは短剣を手に入れました。

「どうも！いい買い物したね！」

満足そうなローレンツにオリバーがたずねました。

「…なあ、この辺にいい宿はないか？」

「宿だって？ああ、それなら調度この先に俺たちの知り合いがやっ
てる宿がある。飯はまずいが、安い宿だぜ。」

「ありがとう。じゃあそこに泊まることにするよ。」

オリバーはローレンツに礼を言うと、その場を後にしました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは宿に荷物を置きました。オリバー、ハンス、イザベルの三人は街へと出て行きました。ハンスが辺りを見渡しながら言いました。

「兵隊が多いですね。」

「ああ…。イザベルはここへ来たことがあるのかい？」

「五年ぶりくらいですね。あまりオーベルクから出ませんでしたか」

「<sup>5</sup>」

「そうか…。…よし、まずはあの塔の牢獄の近くへ行ってみよう。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

三人は街を歩き、塔の牢獄がある山のふもとにやってきました。たくさんの警備兵がいます。その中の一人がオリバーたちを見つけて叫びました。

「止まれ！ここから先は立ち入り禁止だ！」

「ああ、すみません。…この山には何かあるのですか？」

「ん？旅の者か…。この山の上には罪人を幽閉する牢獄があるのだ。」

「牢獄、ですか…。」

「それも政治犯ばかりだ。ギル大臣に齒向かった者は容赦なくここに収容されるのだ。…お前らもここに入れられなくなかったらさっさと立ち去れ！」

「はは、これは失礼、すぐに退散しますよ。」

オリバーは笑いながら兵士に言い、その場を離れました。

「…それにしても皇女様を政治犯なんて…、ひどい扱いですね。」

ハンスがムツとしたように言います。

「…この牢獄はギル大臣の悪政の象徴だと言われています。ここに収容された人は死ぬまで出してもらえないとか…。」

イザベルが言いました。

「もちろん、収容されているのは…。」

「ええ、ギル大臣の反対派の人たちです。」

~~~~~  
~~~~~

その夜、オリバーたちは宿でゆっくりと疲れを癒していました。部屋がいっぱいであるため、男女同じ部屋ですが、翌日からのシーガルンへの旅のことで頭がいっぱいで誰もそんなことを気にしませんでした。すると、突然外が騒がしくなりました。

「一体どうしたんだ…?」

ペーターが窓から外を見ました。

「外に兵隊がたくさんいる！…中に入ってきた！」

「うわ、まずいなあ…。まさか宿検閲の時に泊まっちゃうなんて…。」

ピアンカが苦い顔をしました。ハンスがピアンカに尋ねます。

「宿検閲？それって何？」

「前にどこだかの宿で反乱計画を立てていた連中が捕まってるねー、それ以来、時々抜き打ちで宿を調べることになってるんだ。」

途端にローズが顔を真っ青にしてブルブル震えだしました。ペーターがオリバーに言いました。

「先生、ギル大臣と敵対してたミニエー家のローズがいるってのは、いろいろとまずいんじゃないですか？」

「だが、隠れるにしてもどの扉も開けるだろうし…困った。」

オリバーが困った顔をしました。その時、イザベルがローズに言いました。

「ローズさん、少しの間ならものすごいにおいに耐えられます？」

ローズはピクツと震えましたが、コクンと頷きました。

「ではその袋に入ってください。ハンスさん、ペーターさん、ローズさんの入った袋をその扉の中に！それとビアンカさん、この毛布をこちらの袋に詰めてください！」

「わ、わかった！」

準備が整うと、イザベルは毛布の入った袋に向かって叫びました。

「ポイズンラース！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

兵隊たちがオリバーたちの部屋に乗り込んできました。

「起きろーっ！宿検閲だ！」

「なっ、何ですか、あなたたちは…。」

オリバーたちは飛び起きました。

「これからこの部屋の検閲を行う！全員そこから動くな！」

兵隊たちは部屋の中を探りまわりました。しかし、特に部屋の中に変わった様子はありません。

「…あとはこの戸棚だけだな。」

「あら？そこは開けない方がいいですよ？」

イザベルが笑顔で言いました。

「我々のすることに口出しをするな！」

兵隊は怒鳴ると、扉を開けました。その瞬間、床に倒れこみました。

「うおーっ!」

「ど、どうした! うっ! な、何てにおいだ!」

「だから言ったのに…。それは薬品の材料ですよ。カエルの心臓とか、ネズミの爪とか、トカゲの黒焼きとか…。見てみます?」

イザベルが相変わらず笑顔で言います。兵士たちは顔を真っ青にしました。

「も、もついい! 引き揚げるぞ!」

兵隊たちは鼻を覆いながら退散していきました。

「ふう…。あとで宿の人に謝らなければなりませんね…。毛布を一枚台無しにしてしまいましたからね。」

「毛布に毒の魔術をかけてすごいにおいをつくるなんて…。」

「イザベルさんしかできないことですね。」

ハンスとペーターが感心しています。

「ああ、助かったよ。…んっ！？待て！ローズのことを忘れていた  
！」

オリバーが慌てて戸棚を開け、ローズの袋の口を開けました。ローズはぐったりとしています。

「あらー…、あまりのにおいで、気絶してしまっただみたいです…。  
このお薬を口に含ませてあげましょう。すぐに良くなるはずですよ。」

「本当に助かったよ、イザベル。」

オリバーは心からイザベルにお礼を言いました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

皆が寝静まった後、ビアンカはこっそりと宿を抜け出し、夜の街を散歩していました。もちろん、なぜそんなことをしているかというと、たまたまそういう気分になったからです。月明かりが家々を照らしています。空気も澄んでとても静かです。ビアンカはひとつ大きく深呼吸をしました。

その時、ビアンカは目の前の十字路を走って横切っていく見慣れた影を見つけました。彼女はとてもびっくりしましたが、すぐに状況を察しました。

(はっは一ん、そついうことね…)

ビアンカはその影を追いかけて走りだしました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夜中の街に、ビアンカの大きな声が聞こえました。

「どっ行くのー！」

ビアンカの前方の黒い影がピクッと揺れました。

「どこ行くの、ローズ。」

ローズは泣き出しそうな顔でビアンカを見ている。

「何も言わないで出て行くなんて、ひどすぎると思わない?…まあ何か言ったとしても師匠に止められるだろうし、そもそも無口なあんたが何か言うなんて思えないしね。」

その時、ランプを持った影が通りの角を曲がってきました。

(ヤバい、見回り兵かな?)

ビアンカは身構えました。しかし、その影をよく見ると…、

「おい、こんな夜中にお嬢ちゃん二人で何してるんだ!…あれ、昼間のお嬢ちゃんたちじゃないか。」

それはローレンツでした。

「調度よかった!ねえ、家に案内してよ。今からこの子を説教しな

きやならないから。」

「お、おう。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ピアンカはローレンツの家で先ほどの検閲のことを話しました。ローレンツが申し訳なさそうに肩をすくめました。

「…そいつは悪いことしたな。他の宿を紹介してやればよかった。」

111

「しょうがないよ、抜き打ちだもん。…で！？何で抜け出そうとしたの！？」

ローズはほとんど聞き取れないような細かい声で言いました。

「私のせいで…みんなに迷惑がかかる…。」

ピアンカは大きくため息をつきました。

「あんだねー、今日のことなんて誰が気にすると思うの？仲間が困ってたら助ける、当たり前のことでしょ？あんだだつて魔獣に襲われてた師匠を助けたんでしょ？だつたらこれで貸し借り無しでしょ。それでも気にするんだつたら、他の仲間の誰かがピンチになったらあんだが助けてあげればいいんだよ。そうすればお互い貸し借り無し。…それにさ、その短剣は何のためにわざわざお金を出して買ったの？」

ローズはピクツと震え、腰にぶら下げた短剣に触れました。

「…あたしにはわかる。それは師匠の役に立つために買ったものでしょ。せつかく役に立つための道具を手に入れたのに、それを使う前にいなくなっちゃうなんて、どうかしてるんじゃない？」

ピアンカは呆れたように溜息をつきました。そして言いました。

「…まあ、あたしの言いたいことは全部言ったから、あとはもうあなたの自由にしていいよ。オーベルクに帰りたいなら帰ればいいし。あんだなら一人で上手くやっていけるでしょ？」

すると、ローズはうつむきながら何かを言いました。

「…たい…。」

「ん？何？はつきり言わないとわからないじゃない！」

相も変わらず小さな声のローズに、ビアンカが怒ったような鋭い口調で言いました。するとローズはビアンカを睨むようにして言いました。

「戻りたい…！先生のところに戻りたい…！」

予想していなかったローズの大声にビアンカはびっくりしましたが、すぐに笑顔になって言いました。

「じゃあ約束して。何があっても二度と仲間に黙って抜け出そうとしない、って！」

ローズはしっかりとビアンカの目を見ると、頷きました。

「よし、それならさっさと宿に戻るよ！もしかしたらみんな起きちゃってて心配してるかもしれないしね。」

すると、これまでずっと黙っていたローレンツが口を開きました。

「…なあ。」

「ん？何？」

「…俺っちも旅に連れて行ってくれないか？」

「はあ？」

ローレンツは感慨深げに言いました。

「俺っちも前のヨーゼフ王の時代が懐かしいんだ。あの頃は何でも自由にやれたしな。…ほら、俺っちは鍛冶屋だろ？戦うことはできないが、武器や防具も作れるし、修理も出来る。役に立てると思うんだけど…。」

「ふーん、なるほどね…。じゃあ、一つだけ頼みを聞いてくれる？それならあたしから師匠に話しておいてあげる。」

「頼み？どんな頼みだ？」

「毛布を一枚ちょうだい！」

を離れて見るようになる。

宿検閲の一件でローズの離脱という危機に見舞われたオリバーたちですが、ビアンカの努力で何とかその危機を回避し、さらにローレンツという心強い仲間も増えました。彼は直接戦闘には参加できませんが、物語の間ずっと、まさに縁の下の力持ちといった働きをしてくれます。

次話ではオリバーたちがシーガルン地方への旅を再開します。長い旅を続け、シーガルン地方との境にある峠を登りきったオリバーたちの目に飛び込んできたものは…？どうぞお楽しみに！

ちなみにこの国の通貨単位「カドニー」ですが、特に名前の由来はありません。思い付きです。1カドニーでいたい250円くらいです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「7・遙かなるシーガルン」 (前書き)

鍛冶屋のローレンツを仲間に加えたオリバーと仲間たちは、西のシーガルン地方への旅を続けていました。目の前の高い峠を越えればシーガルン地方です。しかし、ビアンカによるとこの峠にはよく魔獣が出没することです。はたしてオリバーたちは無事に峠を越えることが出来るのでしょうか？

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「7・遙かなるシーガルン」

キンフィールドを出発して二日、オリバーたちは西のシーガルンに向けて歩いていました。ハンスとペーターが文句を言っています。

「先生…まだかかるんですかぁー？」

「そろそろ休みましょうよ…。」

「まったく…お前らは体力がないな。ローズでさえも黙って歩いているんだぞ？…とは言え、もうかなり長い間歩いたことも確かだな。よし、そろそろ休憩しようか。」

オリバーはそう言って草むらに腰をおろしました。

「ほら、お前ら武器を貸せよ。少し研いでおいてやる。」

「お、ありがとうございます。」

ローレンツがハンスとペーターから武器を受け取りました。

「さて…そろそろシーガルン地方に着くはずだが…。」

「この辺りがもともとの国境線だねー。ほら、正面に山があるでしょ？あれを越えたらシーガルンだよ。」

ビアンカが正面の山を指差しながら言いました。

「うへー、あんな高い山を越えるのか…。」

それを見ただけでペーターはやる気をなくしたようです。

「ビアンカは詳しいな。」

オリバーは感心したように言いました。

「えへへ、あちこち旅するのが好きだからね。」

…そうそう、あの峠の辺りは魔獣がよく出るらしいからねー…。しかもけっこう凶暴なやつ。リバー王国軍がシーガルンを占領する時に放った魔獣のうちの何種類かが自然に適応して棲みついちゃったみたいなんだよ。」

「そいつはやつかいだな。峠は常に警戒して越えないと。」

オリバーは厳しい表情をしました。ハンスは心配そうに言いました。

「パトリックさんは無事にシーガルンに着いたんですかね…?」

「ハハ、あいつはそこらの魔獣ごとき相手でくたばるようなやつじゃないよ。…なあ、ピアンカ。あの峠までに、街はあるのか?」

「うーん、確か小さな村があったと思うけど。」

「よし、今日はそこに泊まり、体力をためてから明日峠を越えようしよう。…よし、そろそろ出発だ。行くぞ!」

オリバーの声に仲間たちは立ち上がり、また歩き始めました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

峠のふもとの村で一晩休んだオリバーたちは、シーガルンとの境にある高い峠に向かいました。道の周りには木が鬱蒼と生い茂ってい

ます。オリバーが指示をします。

「よし、行くぞ。ハンスとペーターは横を、ローズは後ろを警戒しながら進め。」

彼らは急な上り坂をゆっくりと登って行きました。

~~~~~  
~~~~~

薄暗い森の中の細い道を、彼らは頂上へと歩いて行きました。上り始めてから五時間、ようやく彼らは頂上にたどり着きました。

「やった！頂上だ！」

「あれが…シーガルン…。」

眼下には広大な畑が延々と広がっていました。

「…不謹慎ですが、ギル大臣がここを占領したのもわかる気がします。」

ペーターが呟きました。

「ああ…。豊かな土地だな…。」

オリバーが同調したその時、ハンスが突然叫びました。

「あつ！先生！魔獣が！」

「な、何っ！？」

ハンスの声にオリバーが辺りを見渡すと、たくさんの魔獣がオリバーたちを狙っていました。何度か戦った、あの狼のような魔獣です。

「飛びかかってくるまでは絶対に刺激するなよ。あれだけの数だ、下手に突っ込むと囲まれてやられちまう。」

オリバーが魔獣を睨みながら言った時、イザベルが言いました。

「オリバーさん、やっかいな魔獣が出てきましたよ。」

イザベルの指さす方向を見て、オリバーは驚きました。

「陸ダコじゃないか…！あいつはやつかいだ。」

…よし、みんな！あのタコは俺とイザベルが相手をする。やつらに剣や槍はほとんど効かないからな！その代わり、そっちの狼どもは頼んだぞ！」

「はいっ！」

一匹の狼が飛びかかってきました。ペーターが一振りでも狼を切り裂きました。それを合図に、狼たちが一斉に飛びかかってきました。

「…タコは全部で六匹ですね。」

イザベルがオリバーに言います。

「あんな手ごわいやつを放つなんて、ギル大臣もどうかしてるな。…俺たちを食おうつての…？痛い目見るぞ！カーズアタック！」

オリバーの指から黒い光が放たれ、一匹のタコに命中しました。タコはキュウっと縮みました。

「くそつ、間違いなく効いてはいるが、呪いの魔術では効果は薄いな…。」

「あの手の魔獣には毒の魔術は効きません。炎の魔術を試してみましようか。…まだ専門外ですから、術を使うのに時間がかかってしまいますが…。」

「じゃあ俺が呪いの魔術で出来る限り弱らせておこう。とどめをよろしく頼む。」

「わかりました。まず一度使ってみましょう。ファイアーストーム！」

イザベルに指を差されたタコから炎が立ち上りました。タコは真っ黒に焦げてしまいました。

「ようし、効果てき面だ！次は一番左のやつだ。イザベル、魔力をためておいてくれ。」

「わかりました。」

「それまで俺が弱らせておく！行くぞ、カースアタック！」

~~~~~

一方、狼のような魔獣相手に他の仲間たちも果敢に戦っていました。ハンスとペーターは何度も戦っているというだけあって、戦いには参加できないローレンツをかばいながらも手慣れた様子で戦っていました。ビアンカも剣で狼たちを次々と倒し、ローズも隠れたところから狼に不意打ちをかけ、喉を切り裂いて倒していました。

と、ローズは草むらに隠れてペーターを狙っている狼に気づきました。狼がペーターに飛びかかります。

「うわっ！」

しかし、ほぼ同時に飛びかかったローズが狼に飛びつき、喉を切り裂きました。

「ありがとうローズ！助かったよ！」

「…これで一人…。」

「え？」

「…何でもない。…右、来てる。」

二人のやり取りを見て、ピアンカはおかしそうに笑っていました。

~~~~~  
~~~~~

一方、オリバーとイザベルの連携攻撃のおかげで、タコの数もかなり減ってきました。そして…、

「ファイアーストーム…！」

「よし！いいぞイザベル！残ったのはあと一匹だ！…バカでかいのがな。」

最後に残ったタコはこれまでの三倍はあろうかという大きなタコです。

「行くぞ、コースアタック！」

オリバーの指から出た黒い光はタコに命中しました。

「くそっ…でかい分丈夫だな…。イザベル、急いでくれ！」

「はい…。」

「頑張れよ！カーサアタック！」

しかし、ピアンカはイザベルの異変に気づきました。

「イザベル！フラフラじゃない！」

「だ、大丈夫です…。ファイアーストーム！」

タコが燃え上がりました。しかし、炎が消えてもタコは生きています。イザベルは思わず座りこんでしまいました。

「そんな…効かないなんて…。」

イザベルが苦しそうにしながらも笑顔でビアンカに頼みました。

「ほーい。これ？」

「いえ、それは悪魔の薬です。緑色の紙に包んであるはずですよ。」

「ああ、これね。」

(悪魔の薬って…何に使うんだ…?)

ハンスとペーターが首をかしげました。

「…よし、武器の手入れも終わったぜ。」

ローレンツがビアンカに武器を渡しました。

「どうもー。」

「俺たちにはこれくらいしか出来ないからな。まあ、切れ味が悪くなったらいつでも言ってくれ。」

「すまないな。」

オリバーもローレンツに感謝しました。

「これでこの峠も少しは通りやすくなってくれればいいんですけどね、先生。」

ペーターが感慨深げに言いました。

「そうだな。少なくともあのバカでかいのを倒したことで、少しはマシになったとは思うが…。」

「終わりよけりやあすべてよしって話だ。それより見るよ。もうすぐそこがシーガルンだぜ？」

ローレンツが明るく言いました。

「ああ、第一の目的地に到着だな。まずはパトリックと合流しなければな。とりあえずシーガルの中心都市であるハングリアに行ってみよう。恐らくそこにパトリックもいるはずだ。…ピアンカ、ハングリアにはここからどのくらいかかるんだ？」

「だいたい二日くらいかな。」

「まだまだ遠いな。」

オリバーが苦笑いしました。

「先生！あそこに小さな町が見えます！」

じっと目を凝らしていたハンスが言いました。

「よし、今日はそこに泊まるとしよう。みんな疲れただろうからな。」

オリバーたちは全身に疲労を感じながらも、心は晴れやかに峠を下って行きました。

体力を消耗しながらも、何とかオリバーたちは強力な敵を倒すことが出来ました。目の前にはシーガルの広大な耕作地帯が広がっています。第一の目的地に着くにはもう一息です。

次話ではオリバーたちはシーガルン地方の中心都市、ハングリアに到着します。そこでオリバーたちは挫折を味わいかけることになるのですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにイザベルは、本文でも言っていたように、炎の魔術を扱えるとは言っても今のところ完全に身につけたわけではないので、あまり連発するとすぐに魔力と体力をほぼ使い果たしてしまいます。また、オリバーの「カースレイン」は魔力を全開放する魔術なので、やはり使用後は魔力も体力もほとんど残りません。

それでは次話をお楽しみに！

長い旅を続けてきたオリバーと仲間たちは、やっとのことでシーガルン地方の中心都市、ハンゲリアに到着しました。すぐにオリバーたちはある人物と知り合うことが出来ましたが、同時にオリバーたちは挫折を味わいかけることになってしまいます。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「8・ハンゲリアの訓練師範」

オリバーと仲間たちはシーガルン地方で一番大きな街、ハンゲリアに到着しました。オリバーはハンスとペーターと話しています。

「さすが、元首都だっただけあって賑わっているな。」

「そうですね。ただ、この街の象徴だった美しい城は取り壊されてしまったらしいですね。」

「古い歴史のある建物もどんどん壊されてしまって、リバー王国風の建築様式に変えられているようです。」

「そうそう。それでシーガルンの民衆の怒りに拍車がかかっているってわけなんだ。」

「…ずっと前からいたように話に入ってくるなよ、パトリック。」

パトリックが笑いながら言いました。

「やあ、オリバー。遅かったじゃないか。」

「いつここに着いたんだ？」

「三日前かな。いろいろな情報が手に入ったよ。」

「それは助かる。さっそく聞かせてくれ。」

せかすオリバーに、パトリックは苦笑いしました。

「まあ、落ち着くんだ。この辺りは兵隊もつろつろしているからね。それに、君に会わせたい人もいるんだ。」

~~~~~  
~~~~~

パトリックは彼らを街の東にあるに建物に案内しました。中からは大きな雄たけびが聞こえてきます。パトリックは中へ入って行きましました。

「やあ、パトリック、今帰りかい？…ん？その人たちは？」

一人の男が出てきてパトリックに声をかけました。

ていました。ここは市民兵の訓練場のようです。レオンが笑いながら言います。

「俺の可愛い生徒たちだ。」

「レオンさんは何の武器を使うんですか？」

ペーターがレオンに質問します。

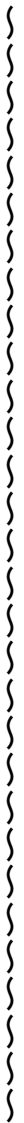
「だいたいの物は扱えるが、一番得意なのは斧槍だな。」

「訓練場を任されてるってことは、相当な腕なんだろう？」

ローレンツも問いかけます。

「ハハツ、魔術師や飛び道具使いには歯が立たねえだろうが、普通の連中にだったら負けねえ自信はあるぜ？」

レオンが自信たっぷりといったように言いました。



~~~~~

夕食を食べながらレオンはオリバーたちに話していました。

「…というわけだ。以来シーガルンのやつらのリバー王国に対する反感はどんどん高まってきている。」

「リバー王国に？それは少しおかしいんじゃないですか？」

ハンスが怪訝そうな顔をして言いました。

「何だって？」

「ギル大臣に対する反感、っていうならわかりますよ？でもリバー王国の国民の多くはギル大臣に反感を持っています。一緒に手を組んだりしようとは思わないんですか？」

レオンは厳しい顔で言いました。

「…確かに元からのリバー王国の国民もギルに反感を持っているかもしれないねえ。だが、その国民たちは俺たちシーガルンから搾り取られたものすごい額の税金で生活してやがる。」

… あんたらもわかってるだろ？ここに入る関所の通行料が他の関所の三倍だつて。それなのにここから農作物を運ぶリバー王国の馬車隊の連中は手形さえ見せればタダで通れちまう。… それにな、このシーガルンが攻撃されてる時、リバー王国の連中はみんな見て見ぬふりをしていた。俺たちの土地が汚されていくのをただ黙って見ていただけだ。」

レオンは冷静に、しかし鋭い言葉で言いました。オリバーたちは何も言えません。

「… あんたら、ここで仲間を探そうとしているらしいじゃねえか。確かに、ここはギル大臣を憎んでいるやつらばかりの土地だ。だが、それと同時にリバー王国を恨んでる連中も多い。」

… その女の子たちはオーベルク出身？あんた、そう、鍛冶屋のあんただ。あんたはキンフィールド出身？… リバー王国出身のやつらがいるってことで、誰も仲間になつてくれねえぜ？

… ただ、俺は他の連中みたいにそこまで過激なことを言うつもりはねえ。ここにいる分には好きなだけこの訓練場に泊まるといい。だが、仲間を探すのなら一刻も早くここを出て他の土地に行くべきだ。… これはあんたらを追い払おうとして言ってるんじゃない、お互いを知ったものとしての忠告だ。」

「…忠告には感謝するよ。とにかく今日は疲れた体を休ませてくれ。これからのことは明日になって考える。」

オリバーは肩をすくめながら言いました。

「ああ、そつするといい。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

広い部屋の中で、ハンスが悲しそうに言いました。

「先生…。ここまで来たのは…無駄足だったんでしょっか?」

「ああ…。もしかするとそつかもな…。」

「一般の国民にまで反感を持つてるんじゃないあ、やっぱり仲間探しは難しいかもしれないですね…。」

ペーターも残念そうに言います。

「でも…、言いたいことはわかるけど、ちょっと勝手すぎやしないか？見て見ぬふりをした、って言われたって、俺っちたちはこのシールガルンとは違ってもともとリバー王国の土地に住んでたんだ。別に民衆が軍隊を持っていてるわけじゃない。大臣直属の駐屯兵しかないのに。どうかしようって、無理な話だぜ…。」

ローレンツが不満そうに言いました。

「むー、難しい話はあたしにはよくわかんないよ。あたし、夜風に当たってくる。」

ビアンカが立ち上がり、部屋を出て行きました。

「あ、おい、ビアンカ！まだ話は…。しょうがないな、ひとまず解散だ。休みたいやつは休め。」

オリバーがため息まじりに言いました。それを見たローズはビアンカに文句を言いに行こうと部屋を出ました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ローズが廊下を歩いていると、ビアンカがある部屋に聞き耳を立てています。ローズが不思議そうな顔を見ると、ビアンカが手招きをしました。ローズは文句を言うのも忘れてビアンカと一緒に聞き耳を立てました。中からはレオンと弟子の話声が聞こえてきます。

「レオン先生、僕らは先生があの人たちと一緒に旅に出ても大丈夫です。訓練場の留守は弟子たちで力を合わせて守りますから。」

「だがやつらの中にはリバー王国出身の連中がいるんだぞ？」

レオンの声はどこかバカにしたようです。

「ギルを退けることを考えたら、その程度の我慢は必要なはずですよ！」

「おいおい、何か変なものでも食ったのか？…第一、どこの馬の骨ともわからねえような連中に命を預けられるか。オリバーとかいう魔術師も、鉄血の騎士も、本物がどうかさえわからねえんだぞ？」

そこまで言った瞬間、部屋の中のレオンの眼光が一気に鋭くなりました。

「…おい！そこにいるのは誰だ！」



レオンは槍を抱えると、扉を蹴破りました。しかし、そこには誰もいません。

「おかしいな…誰かの気配がしたんだが…」

「ネズミか何かじゃないですか？」

(ふうーっ、危なかった…)

ローズのとっさの判断で、何とか二人は物陰に隠れることができました。

「…これで二人…。」

「生意気なこと言ってるんじゃないの。まったく…。でも、これはちょっと面白いことになるかもね…。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

二人はオリバーたちのいる部屋に帰ってきました。オリバーが疲れた顔をしています。

「…ビアンカ、頼むからみんなで行動しているときに気まぐれな気分を起こさないでくれよ…。」

「まあまあ、気にしない気にしない！…それよりも師匠。一つ提案があるんだけど…。」

~~~~~

翌朝、オリバーたちは出発の準備をしていました。そこへレオンが入ってきました。

「何だよ、もう行っちまうのかい？寂しくなるなあ。」

「ハハ、仲間は効率よく探さないと。…そう、ここシーガルンでもな。」

オリバーの顔は、昨日とは違って変わってなぜか自信たっぷりです。

「おいおい、昨日も言っただろ。ここで仲間を探すのは無理だつて。」

「レオンが難しい顔をして見せましたが、オリバーは笑って言いまして。」

「ハハツ、俺たちが仲間になろうとしてるのは…レオン、あんたさ。」

「俺？俺だつて？ハハハハ…、笑わせるじゃねえか。あいにくだが、俺もあんたたちと一緒にいくつもりはねえよ。」

レオンは大笑いしました。しかし、オリバーも動じません。

「…なあ、あんた、腕には相当の自信があるんだろ？」

「…突然何を言い出すんだ？…まあ、そうだな。」

「じゃあ、こうしよう。俺の仲間のうちの一人と戦って、あんたが勝ったら俺たちは黙ってここを後にするよ。その代わり俺たちの仲間が勝ったら仲間になってくれ。」

オリバーからの提案に、レオンは怪訝そうな顔をしました。

「ああ？…何だよ、そんなことでいいのか？…まあ、俺は何一つ得しねえが、勝負は損得で決めることじゃねえしな。いいだろう、その勝負、乗った。…ただし、こちらからも条件がある。街の中心広場でその勝負を行うことだ。」

「民衆にも見せて、勝ち負けに公平な判断を下してもらったためだな？」

「ああ、そんなところだ。」

「わかった、いいだろう。」

オリバーが了承すると、レオンは大声で叫びました。

「おい！試合は三時間後だ！今から街の中にふれ回ってこい！」

オリバーとレオンのやり取りを見ていた弟子が慌てて外に出てゆきました。

~~~~~

~~~~~

三時間後、多くの市民が広場に集まっていました。そのまん中でレオンが槍を振りまわしています。

「頑張つてよレオン先生！」

「よそ者になんか負けるなーっ！」

市民もレオンに声援を送ります。やがて人の群れをかき分けてオリバーがやってきました。

「来たな……。相手はあんたかい？」

「いや、俺じゃない。俺は魔術師だ。さすがにそれは、な。」

オリバーの言葉をきいた市民からの野次が飛びます。

「大きなこと言って、本当に魔術師なのかー!？」

「魔法を見せてみるよー!」

騒ぐ民衆の声に、オリバーはやれやれと肩をすくめると、空を飛んでいるカラスに向かって指を向け、叫びました。

「カーサアタック！」

オリバーの指から放たれた黒い光はカラスに命中し、広場に落ちてきました。一人の市民がカラスに手を触れようとしてしまいました。

「触るな！」

オリバーが叫んだと同時に、カラスが黒い煙を全身から出しながらその市民に襲いかかりました。

「うわっ！」

市民は目をつぶりました。しかし、目を開けると、彼の体に何の異変もありません。ただ足元に体を裂かれたカラスが横たわっているだけです。そして、その少し前には短剣を持った小さな後ろ姿が見えました。

「…ローズがあんたの相手だ。」

オリバーが静かに言いました。レオンは一瞬驚きましたが、すぐに冷静さを取り戻しました。

「そうかい、じゃああなたは下がっていてくれ。…ローズって言うたかい？ここは俺があんたに有利な条件を提示してやるよ。俺はこの訓練用の槍を使う。あんたは短剣で戦うようだな。本物を使ってもいいぜ。どうだい？」

「さすがレオン先生！」

「余裕あるね！」

市民が騒ぎたてました。しかし、ローズはポケットから何かを取りだして言いました。

「いい…。これで、やる…。」

レオンはそれを見てあっけにとられたような表情を見せました。

「す、スプーン？」

市民は大笑いしました。

「おいおい、あのレオン先生にスプーンで挑むんだってよ！」

「聞いてあきれるぜ！」

「小娘にはぴつたりだな！」

ローズはサツと飛び上がると、一人の市民に詰め寄り、喉にスプーンを突きたてました。

「先生からのプレゼント……。ライバルの証……。」

「ま、まあ、いいだろう。お互いに今みたいに急所に刃先を突きつけたら勝ちだ。それでいいな？」

ローズはコクンと頷きました。

「よし、誰か、試合開始の合図をくれ。」





「別に戦うのはあたしでもよかつたんだけど、ローズの戦い方って独特でしょ？相手もより混乱するかな、って。」

「ローズさんは本当に身軽ですからねえ…。」

「…ねえ、イザベル、誰に対しても敬語だよ。別にハンスとかペーターとか、あの辺のお子ちゃまには普通に話していいんじゃないの？」

「ちよ、ちよっと!」

「お子ちゃまって!」

ピアンカの言葉を聞いてハンスとペーターが騒ぎました。イザベルは困ったような笑顔を見せました。

「別に、今その話をしなくても…。そんなことより、ローズさんを応援しようよ。」

「む…、だつてさー、こんなのつまないでしょ？目の前で！ライバルが！あんなに生き生きと！ライバルの証とか言ったスプーンを使って！戦ってるんだから!」

「ま、まあまあ、ピアンカさん。落ち着いてください。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その頃、試合はし烈を極めていました。レオンもさすがは訓練場の師範です、まったく体力の衰えを見せることなくものすごい勢いで槍を振りまわします。しかし、ローズはそれを上回るものすごい速さで避けてゆきます。ローズが空中高く飛び上がりました。

(空中ならよけられないだろう！)

レオンはニヤリと笑って槍を上に向けました。しかし…、

「しまった！石畳に挟まれた！」

槍の根元が石畳の隙間に挟まってしまったのです。一瞬の隙を、ローズは見逃しませんでした。ローズはレオンを突き飛ばして槍を手から離させると馬乗りになり、首元にスプーンを突きたてました。レオンは硬直したままです。

「何してるんだー！」

「武器を拾えー！まだ戦えるだろーっ！」

市民の声にレオンはハツとしてローズを引き離すと槍を拾って身がまえました。しかし…、

「ハイハイ、やめやめ！今のはどこからどう見てもローズの勝ち！」

二人の間に割って入ったビアンカは厳しい目をレオンに向けました。

「あんたねー、負けくらい潔く認めなさいよ。今の状況、どうだったのかわかってるでしょ？本当の命をかけたやり取りなら、間違いなくあんた、ローズに首を切り裂かれて死んでたんだよ？」

レオンはバツが悪そうに頭をかきました。

「あんたが仲間になるのを拒んだのは、別にリバー王国を憎んでいたわけじゃない。ただあたしたちを見くびっていただけ。自分が一番強いと思ってたから。」

ビアンカの言葉にレオンはびっくりしました。

(えへへ、まあ、盗み聞きしてたからわかるんだけどね)

ピアンカは心の中で舌を出しながら続けました。

「でもね、所詮は訓練場でしか訓練してない。ローズは何度も魔獣と戦ってる。圧倒的な戦力差に勝てるのは経験だけ。…まあ、ローズの戦力があんたに劣るとは言わないけどね。…じゃあ、あとは師匠に任せよう。よろしくー。」

(やれやれ、いろいろとしゃべりにくくなったなあ…)

オリバーは苦笑いしました。

「…レオン、」

しかし、レオンはオリバーが言う前に笑顔を見せて言いました。

「ああ、わかってるさ。俺も約束を破るつもりはねえ。…みんな！俺は今日この場所で自分自身の未熟さを知った！…俺は彼らと一緒に旅に出て自分の力を試し、経験を積んで、そしてあのギルを倒し帰ってくる！…お前たち、俺がいねえ間訓練場の留守を頼んだぞ！」

「はいっ!」

訓練場の生徒たちが返事をする、市民は沸き立ちました。

「うおーっ!」

「レオン!レオン!」

「ハア、バカみたい。負けたやつにこんなバカ騒ぎするなんて…。」

ビアンカが口をとがせました。

「まあ、仲間も増えたことだし、いいじゃないか。」

「パトリックは前向きでうらやましいなあ…。それより、ローズ?」

ローズは得意げな顔でビアンカを見ました。

「いや、あのね、もちろん試合に勝ったことは褒めてあげるけど…。」

- ・ 大きな斧槍を振り回して戦う。普通の槍や剣も扱える。
- ・ 26歳。
- ・ 一人称は「俺」。
- ・ ハングリアで市民兵の訓練場師範をしている。一流の槍使い。訓練場では、自分の腕を過信していた部分があった。でも市街地での戦いにはめっぽう強い。逆に自然の中の戦いには慣れていないらしい。仲間の中では一番力が強い。明らかに他の仲間と味覚が違う。口は悪いが意外と世話好き。少し疑り深い。女性メンバーからはなぜかバカ扱い。圧倒的な体力差のローズに惨敗したから、それはそれで仕方ないのかもしれない。

ハンゲリアの訓練場師範、レオンがオリバーたちの仲間になりました。彼が加わったことよって、オリバーたちの戦闘力も格段に上がりました。彼自身、自分の未熟さを知って反省したので、オリバーも非常に頼もしく思っているようです。レオンは物語の終盤で大きな役割を果たすこととなります。

次話ではオリバーたちはシーガルン地方と北のノーザリン地方の境にあるランダール峠に差し掛かります。そこでオリバーたちは思わぬ敵と戦うことになるのですが……どうぞお楽しみに！

ちなみに、レオンの市民兵訓練場には百人以上の生徒がいます。駐屯兵も多少は危険視しているようですが、レオンたちも大人しくはしているのでそれほどの注意は払っていません。中心広場での試合も、訓練場の生徒の試合、という名目になっているので大して警戒されていませんでした。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「9・ランダール峠の山賊」(前書き)

レオンを仲間にしたオリバーたちは、樹海と山脈に囲まれたリバー王国の北の地方、ノーザリン地方を目指していました。シーガルンとノーザリンの境目にあるのはランダール峠です。オリバーたちはそのふもとの村で旅の疲れをいやしていました。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「9・ランダー峠の山賊」

オリバーたちは西のシーガルンと北のノーザリンの境にあるランダー峠のふもとの村で休んでいました。ハンスとペーターが話しています。

「シーガルンに向かうときの峠よりも登りやすそうだなあ。」

「この辺りには魔獣もあまりいないようツス。比較的安全に越えられそうツスね。」

「…だといいな。」

レオンが穀物粥をすすりながら言いました。何とも言えないような気持ち悪い色をしています。オリバーが怪しそうな顔でレオンに聞きました。

「…何だい、それは？」

「シーガルンの名物料理さ。粥を食べる木の葉と一緒に煮詰めるんだ。うまいぞ？」

オリバーは勧められるままに口にしましたが言葉では表せないような味がして顔をしかめました。

「あんなに豊かな穀倉地帯なのに、こんなの食ってるのか…。」

「何だよ、失礼なやつだな。」

オリバーの横で、ビアンカも顔をしかめています。

「ローズ、食べなよ。あなたなら食べれるかもよ？あたしには耐えられない…。」

ローズはビアンカを睨みつけましたが、その得体のしれないお粥を口にしました。

「どっ？」

「…豚小屋と粘土と洗っていない先生のマントの味…。もういらない…。」

(豚小屋の味って何だ!?)

(どうしてオリバーのマントの味を!?)

仲間は驚愕の目でローズを見ました。

「 いいよいいよ、まったく! 食いたくなけりゃ俺が食うよ! まったく、こんなにつまいものを...。 」

「 レオンさんなら、リリーさんの料理も食べられるかもしれませ
ね。 」

ハンスが笑いながら言いました。

~~~~~  
~~~~~

「 はつくしよん... 」

オーベルクの宿で、リリーが大きなくしゃみをしました。

「 お、おい、どうした? 風邪か? 」

「まあ、山賊に見境なんかないだろう。俺たちも注意しないとな。
…それにしてもイザベル、さっきから黙ってその悪魔のようなお粥
を食べてるけど、大丈夫なのかい？」

オリバーが心配そうにイザベルに言いました。イザベルは相変わら
ず笑顔です。

「大丈夫ですよ。『悪魔の薬』を混ぜましたから。」

「…前に聞こうと思ってたんですけど、『悪魔の薬』って何なんで
すか？」

ペーターが聞きました。

「ええ、使う人自身が『これは悪魔のようだ』と思ったものに混ぜ
ると、中和してくれるんですよ。」

「じゃあ、リリーさんの料理も怖くないですね！」

「いえ…リリーさんのお料理はこのお薬を使っても中和できません
でした。…魔術でも手に負えませんか。」

~~~~~  
~~~~~

「はつくしょんー!」

「お前、風邪なら薬でも買って来いよ?」

「その薬のことでバカにされた気がする…。」

~~~~~  
~~~~~

夜明けとともに、オリバーたちはランダール峠を登り始めました。緩やかな峠ですが、木が鬱蒼と生い茂っていて太陽が出ているはずなのにまるで雨が降りそうな曇りの日のようでした。

「…不気味だな。」

すると、突然頭上からギーーツという鳴き声が聞こえました。

「…異常に大きな鳥だが、魔獣じゃない。」

「早く抜け出したいもんだな。」

ローレンツが呟きました。その時、前方から誰かが走ってきました。まるで初めて会った時のローズのようなボロボロの格好をした少女のようです。

「た、助けてーっ！山賊に襲われたのーっ！」

「な、何だって！？」

ハンスがその少女に駆け寄りました。

「ハンス！待て！」

（こんな森の中で少女が一人…畏の可能性が高い！）

オリバーは叫びましたが、もう手遅れでした。少女は隠し持っていた短剣を取り出すと、ハンスの腕を切りつけました。

「うわっ！」

少女はハンスの荷物を奪い取ると、森の中へ走って行きました。

「追いかけてよう！」

「待て、パトリック！」

オリバーはフランソワを走らせようとするパトリックを制止し、指を少女の背中に向けると叫びました。

「フィクセーション！」

途端に少女の動きがピタリと止まりました。

「えっ？何だこれ！？あっ…息…が…」

「急げ！取り押さえろ！」

ローズが少女を取り押さえました。オリバーが少女に言います。

「…息はできるようにしてやる。…さあ、荷物を返せ。」

少女は恨めしそうにオリバーを睨んでいました。

「返さないのか？そうか。フィク、」

「わかったよう！返せばいいんだろう！？」

少女は泣きそうな顔をして言いました。ハンスが少女から荷物を奪い返しました。

「…本当はこんな荒っぽい技を普通の人間相手に使うのは好きじゃないんだが…。…ほら、見逃してやるからどこへでも逃げろ。」

オリバーが言った瞬間、木の上から矢が飛んできました。

「山賊の待ち伏せだ！」

「殺すなよ！」

オリバーは叫びました。木の上にいるのはどうやら一人だけのよう

です。ローズが短剣を投げつけました。

「ぎゃああああっ!」

ローズが投げた短剣は木の上の山賊の腕に刺さりました。山賊は地面に落ちると、大急ぎで走って逃げて行きました。

「深追いはするな!」

オリバーが叫ぶと、あちこちの木の陰から山賊たちが現れました。

「ハンス!ペーター!イザベルとローレンツを守れ!」

オリバーは叫ぶと、腰の剣を抜いて山賊に向かって行きました。強力な魔術を人間に使うわけにはいきません。

「ローズ!何をポーっとしてるの!」

ピアンカがローズに叫びます。

「…先生…かっこいい…。」

「はあっ!?!…打ち抜かれても知らないよっ。ほら、左!」

「知ってる…。」

~~~~~  
~~~~~

やがて山賊たちは自分たちが不利なことを悟ると、一斉に逃げて行きました。オリバーとパトリックが話しています。

「やっと逃げて行ったか…。ずいぶん手こずらされたね。」

「これに懲りて大人しくなってくれればいいんだがな…ん?」

オリバーが足元を見ると、魔術で捕まえた少女がさつきよりもボロボロになって倒れていました。

「…何だ、まだ逃げてなかったのか?」

「お前が魔術をといてくれないからだ!何回踏まれたと思ってんだ

「よ…。」

「おっと、忘れてた。…ほいよ。」

少女はフラフラと立ち上がりました。

「あー、もう山賊団に戻れないじゃないかよっ！」

「何でだ？」

「あたいがお前らをこの先の谷に誘い込んだところで囲んで襲う予定だったのに…。…ああ、もう、お頭に殺される…。…」

「なるほど、道理で山賊の動きに統制がなかったわけだね。」

パトリックが苦笑いしながら言いました。その時、オリバーの頭にある考えが浮かびました。オリバーはいきなり指先を少女に向けてと、叫びました。

「クヴァール！」

「うわっ!」

「お、オリバーさん!何してるんですか!」

イザベルの焦った声が聞こえているのかはわかりませんが、オリバーはまた叫びました。

「クヴァール!」

「や、やめろ!やめろ!」

少女はすんでのところで黒い閃光をかわしました。

「…すばしっこさは超一流だな。」

「こっ、殺す気かあーっ!」

少女は短剣を振りかざしてオリバーに突進してきましたが、目の前でオリバーに指を向けられるとどうすることもできず立ち止まってしまいました。

「…気に入ったよ、そのすばしっこさ。…どうだ、俺たちの仲間にならないか？」

思わぬオリバーの言葉に、少女は少し戸惑ったような表情を浮かべました。

「…あたいはお前らを襲おうとしたんだぜ？それでもいいのか？」

「頼りになる仲間は一人でも多い方がいいからな。」

少女はため息をつきました。

「…わかったよ。もう山賊団には戻れないし…。よろしくな。あたいはマチルド。」

「オリバーだ、よろしく。」

ピアンカが難しい顔をしているレオンに聞きました。

「…何か不満でもあるの？」

「いや、あいつを悪く言うつもりはねえんだが、俺たちシーガルのやつを苦しめていたやつだと思つと、何だか複雑でな…。」

「まあ、もうこいつは山賊じゃないんだ、いいじゃないか。」

ローレンツも笑って言います。

「…そうだな。仲間の輪を乱すようなことは言わねえよ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その夜、ランダール峠を越えた一行はふもとの村の宿で一夜を過ごしたのですが…、夜中のオリバーの寝室に忍び込む、一つの黒い影がありました。その影はオリバーの場所を確認すると、何かをオリバーの鼻に近づけました。

(フフフフツツ…これで仕返しを…痛いっ！)

もう一つの黒い影が初めの黒い影を引っ張って行きました。やがて、大きな悲鳴が聞こえました。

「ぎいやああああああっ！」

「ど、どうした!？」

オリバーや他の仲間たちは声に驚いて慌てて飛び起きました。

「…何してるんだ、マチルド。」

手足を縛られたマチルドが涙を流しながらベッドの中で悶絶しています。そして彼女の鼻には…、

「ははははっ！マチルド、何だよ、その鼻の綿は!」

ペーターが大笑いします。

「はいはい、動かないでくださいねー。」

イザベルが慎重にマチルドの鼻の綿を抜きました。

「…これ、涙薬が塗られていますね…。…うん、私のお薬箱の中から  
すくい取った跡があります。」

「おいおい、誰だ？こんなことしたのは。」

「…レオンじゃないの？」

ピアンカはレオンをジトツとした目で見ながら言いました。

「人に濡れ衣を着せるな！俺はこんな陰湿なことはしねえよ！」

「おい、マチルド。誰にやられた？」

マチルドは涙を流しながらオリバーを睨んでいましたが、やがて大きな声で叫びました。

「今度こそは絶対に成功させてやるっ！」

マチルドはそう叫ぶとベッドにもぐりこんでしまいました。いくら呼びかけても、出てこようとしません。

「まったく、何なんだ、いったい…。」

「あつ…！…寝込みと狸寝入りには気をつける、ってことじゃない？」

ピアンカはわざとらしいまでに寝息を立てて寝ているローズに気づいて言いました。その寝顔はどこか勝ち誇ったようでした。

~~~~~

人物紹介

〈マチルド・アルヌール〉

・「山賊の下っ端」

・17歳。

・短剣で戦う。他の小型武器も扱える。

・一人称は「あたい」

・ランダル峠で旅人を襲う山賊団の下っ端。オリバーたちを襲撃する作戦に失敗して山賊団に戻るに切れなくなったので、仲間になる。仲間の中で一番すばしっこい。少し生意気。もともと峠の麓の村に住んでいたが、いろいろな事情で山賊団に拾われる。彼女自身は自分の性が「アルヌール」だということは知らない。隙があればオリバーに「仕返し」しようとするが、いつもローズに阻まれて失敗する。その反動からか、よくピアンカと組んでローズをからかう。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「9・ランダー峠の山賊」(後書き)

予想外の出来事から、山賊団の少女、マチルドが仲間になりました。生意気ですが、その素早さは今後のオリバーたちの冒険の中でしっかりと活かされることになります。しかし、それ以上にマチルドが加わったことにより、仲間たちも今まで以上に明るく、賑やかになりました。

次話ではオリバーたちはノーザリン地方の樹海の中を通る街道を歩いて旅を続けています。そんな彼らに突如馬のような魔獣が襲いかかってくるのですが…？そして、作者個人が最も気に入っている仲間も登場します。どうぞお楽しみに！

ちなみに、マチルドが入っていた山賊団は、基本的に抵抗さえしなければ人を傷つけたりしない主義で、実は旅人から強奪した金品を峠のふもとの村人に分けたりしています。ただ、オリバーたちはしっかりと抵抗してきたので戦いになったわけです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「10・北の樹海の狩人姉妹」 (前書き)

ひよんなことからマチルドを仲間に引き入れたオリバーたちは、北のノーザリン地方の樹海の中を通る街道を歩いていました。マチルドが加わって、仲間たちもとても賑やかになったようです。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「10・北の樹海の狩人姉妹」

ランダール峠を越えたオリバーたちは、ノーザリン地方、北の山脈のふもとを通る街道を歩いていました。さっきからレオンとマチルドが口論をしています。

「だから！わかるか？そういう短剣はな、ここをこう持った方がいいんだよ！」

「いちいち文句をつけんなよ！あたいはずっとこうやってきて失敗しなかったんだから！」

「うるせえ！だいたい山賊の戦い方は卑劣なんだよ！」

「何だつて？カッチカチの訓練場流よりもこっちのほうが実践的なんだよ！」

「何だつて！？訓練場流をなめるな！」

「そつちこそ、山賊戦法をなめんなよ！」

「…ずいぶん賑やかになりましたね。」

ペーターがオリバーに言いました。

「ハハツ、楽しくていいじゃないか。…そういえばここに来たばかりの頃に農夫を助けたのを覚えてるか？」

「はい。」

「確か禁じられた洞窟の封印が解かれたっていう話をしていたよな。それ以来この国に魔獣が増えた、って…。あれはこの山脈の樹海の中にある、と言っていなかったか？」

「ああ、確かに…。まさか今から行くつもりですか？」

ペーターが不安げに言いましたが、オリバーは笑って言いました。

「いや、時間は比較的たつぷりとある。仲間になったばかりのやつもいるんだ、じっくりと力をためてからの方がいいだろう。だが…いずれは封印しに行かなければならないだろうな。」

「そうですね。」

その時、一番後ろを警戒していたハンスが叫びました。

「魔獣だーっ！」

「…ハンスもまだまだ未熟だが、見張り役には一番向いているよ
うだな。…みんな！戦う準備だ！」

まるで馬のような魔獣です。三匹います。

「ここは私が行くっ！」

パトリックは叫ぶと、フランソワを走らせて魔獣たちに突進しまし
た。しかし、馬のような魔獣たちはパトリックのはるか頭上を飛び
越えました。

「こんなことだろうと思ったよ。私はおとりだ！あとは頼んだよ！」

ハンスとピアンカが武器を構えて魔獣たちを待ち構えています。し
かし魔獣たちは着地したと同時にクルツと向きを変え、再びパトリ
ックに向かって行きます。

「そう来るか！そこまで私に執着しなくてもいいだろうに…。：オ
リバー！イザベル！今からそっちに誘導するから、魔術で一気に倒
してほしい！」

パトリックは叫ぶと、オリバーたちの方に向かって馬を走らせまし
た。魔獣たちもそれを追いかけてきます。パトリックは巧みにフラ
ンソワを操ると、オリバーたちの上を飛び越えました。

「カース、」

「ポイズン、」

二人が同時に叫ぼうとした時、どこからヒュンという音がしまし
た。そして矢が飛んできたかと思うと、魔獣たちの首に刺さりまし
た。三匹の魔獣は地面に倒れこみ、もがき苦しんでいましたが、や
がてパツタリと動かなくなりました。イザベルがしゃがみ込んで魔
獣を見ました。

「…強力な毒矢ですね。人間相手なら即死ですよ。」

「一体誰がそんなものを…んっ？」

オリバーは矢の飛んできた方を見ると、馬に乗った人がこちらを見

ています。そしてオリバーと目が合つと、馬を走らせてこちらに近づいてきました。

「…怪我はなかったか。」

馬に乗っているのは凜々しい女性です。オリバーが女性に話しかけました。

「君がこの矢を射たのかい？」

「うむ。それは…吾れの子どもたちだ。吾れには仕留める責任があるのだ…。」

女性はそう言って表情を曇らせました。

「子どもたち…？」

「…正しくは、吾れらの子どもたちだな。…紹介が遅れた。吾れの名はアリスだ。この道の先は魔獣があふれていて危険だ。吾れが道案内をしよう。…その前に吾れらの狩人小屋で休んでいくといい。」

~~~~~

~~~~~

アリスという女性に案内され、オリバーたちは森の中の小さな狩人小屋に案内されました。中にはもう一人女性がいました。アリスとは対照的に、穏やかそうな顔立ちです。

「お帰りなさい、お姉さま。…その方たちは？」

「ああ、道案内をしてやろうと思ったのだ。…妹のエミリーだ。」

エミリーと紹介された女性は丁寧に頭を下げました。

~~~~~

オリバーたちはお茶を飲みながらアリスとエミリーの話聞きま  
した。

「すると、君らはここの森で狩人をしているのか。」

「うむ。昔はたくさんの動物たちがいる豊かな森だったのだが…最近  
は魔獣が増えて困っている。」

「さっきの馬のような魔獣みたいなものか？」

アリスは悲しそうな顔をしました。エミリーはうつむいてアリスに聞きました。

「お姉さま…今日は何匹でしたか？」

「うむ、三匹だ…。」

…実は、あの馬たちはもともと吾れらのものだったのだ。しかし魔獣に納屋を襲われてしまい、咬まれた馬たちが逃げてしまったのだ。繁殖してどんどん数も増えてしまっている。今では吾れらのところにはたったの二頭しか残っておらぬ…。」

「禁じられた洞窟の封印が破られなかったら、こんなことにはならなかったのに…。」

オリバーはエミリーの言葉に驚きました。

「禁じられた洞窟について何か知っているのか？」

アリスが答えました。

「少しはな。吾れらも伝承でしか知らぬのだ…。四〇〇年以上も前から封印されていたところだ、誰も近寄ろうとはしなかったのだ。…今回封印を解いた兵隊も、誰一人帰ってこなかったという話だ。」

「どうしてその洞窟は封印されていたんだ？」

今度はレオンが聞きました。アリスは洞窟について語り始めました。

「うむ、昔、さる暴君の治世、兵隊の結婚は禁じられていた。しかし中にはその禁忌を破って密かに会う男女が多かった。そこで暴君は違反を犯した女を洞窟に閉じ込めたのだ。女たちは出してくれと七日七晩も泣き叫び続けたという。」

「残酷な話ですね…。」

ハンスが悲しそうな顔をしました。

「うむ。結局戦争は長引き、女たちが閉じ込められてから二年の月日が経った。原因は愛する者と引き離されたことによる男たちの士気の低さだ。」

…何とか戦争に勝った兵士たちは女たちが閉じ込められた洞窟を探しまわった。が、気のふれた一人の兵士しか帰ってこなかったのだ。兵士は死ぬまで叫び続けたそうだ。『仲間が引き込まれた』と…。

暴君はこの話を心よしとしなかった。そして兵士を洞窟に派遣し、洞窟の封印を解いたのだ。…途端に突風が吹き荒れ、兵士たちはその風に飛ばされ地面や木に叩きつけられ命を落としたという。その後、国内には災害や飢饉が多発した。その間に力を盛り返した隣国に滅ぼされてしまった、というわけだ。洞窟は再び封印され、四〇〇年間誰も近寄らなかつたのだ。」

「ですが最近ギル大臣がまた封印を解いてしまい、今のこのような状況になってしまっているのです。」

「呆れ果てたものだ。少なくともこの樹海にリバル王の秘宝の伝承はないのだ。いたずらに魔獣を増やすだけではなかつたか…。」

アリスとエミリーの落ち込んだ顔を見て、オリバーが言いました。

「…俺たちはいずれ、禁じられた洞窟に行こうと思ってるんだ。」

オリバーの言葉に、アリスとエミリーはとても驚いたようです。

「何だと？」

「それは危険すぎるのでは……。」

「そして洞窟を封印し、魔獣がこれ以上増えるのを防ぎたいんだ。……君たちも協力してくれないか？」

アリスは疑わしげな目をオリバーに向けました。

「……貴様は何者なのだ？……確かによく見てみると、貴様たちはただの旅人ではないようだ。持ち物があまりに不自然だ。」

「俺は魔術師のオリバー・ローゼンハイン。リバー王国諸侯のオットー様に王家の復興を依頼されている。」

アリスは馬鹿にしたような目をオリバーに向けました。

「ハハハ、大きく出たな。」

オリバーはそのさげすんだような目に少しムツとしました。



「冗談ではないんだが。」

「信じろというのもなかなか難しい話だぞ？何しろオットー様は三年前の事件の際に亡くなったと聞く。」

「オットー様は生きているぞ！」

ペーターが叫びます。しかし、アリスは信用していないようです。

「だいたい貴様が魔術師というのも疑わしいではないか。確かにそれらしい格好をしてはいるが、ただの見かけ倒しかもしれぬ。」

「先生に何てことを言うんだ！」

ペーターが顔を真っ赤にして立ちあがったその時、入口の方で大きな音がしました。見ると、まるで虎のような魔獣が扉を壊して中に入ってきました。アリスとエミリーが慌てて弓を取りました。

「魔獣か！うぬっ！あいつは手ごわい！毒矢の準備だ、エミリー！」

「はいつ、お姉さま！…ああっ！お姉さま、毒矢がもうありません！」

エミリーが悲痛な叫び声を上げました。

「何だと!?!」

するとオリバーが立ちあがりました。

「下がっていてくれ！カースアタック！」

オリバーが呪文を唱えると、虎のような魔獣は一撃で倒れてしまいました。

「あの手の魔獣なら呪いの魔術は効果てき面だ。」

オリバーは再びアリスとエミリーの方を見ました。

「…信用してもらえたかい？」

アリスとエミリーは目をまん丸にしていました。やがて、落ち着き

を取り戻したアリスが言いました。

「なるほど、魔術師としての腕は確かなのだな。…そうだな、お前たちが本物なのか、旅の途中で見極めるのも悪くはないだろう。」

「じゃあ…。」

「うむ、これからよろしく頼む。エミリーもそれで構わぬか？」

「はいっ、お姉さま。」

エミリーも笑顔で答えました。

「それと…先ほどは高慢な態度を取ってすまなかったな。」

アリスは申し訳なさそうに肩をすくめましたが、オリバーは笑って言いました。

「気にしてないよ。」

「もっとも、お前たちが不甲斐ないようなら、吾れらはすぐに抜け



「なるほど。…じゃあアリスはそんなに好かれていないのか？」

「そのようなことはない。だが吾れとエミリーが並んだとしたら、間違いなくエミリーの方に行くだろうな。」

~~~~~  
~~~~~

一方、後ろの馬、アンヌにはエミリーの後ろにレオンが乗っています。

「馬に乗るってのも悪くねえな。」

「わたくしたちは毎日乗っていますからね。一心同体と言っても過言ではないのです。今アンヌが何を考えているかもだいたいわかりますよ。」

「へえっ、何て考えてるんだ？」

「…後ろが重い、だそうです。」

「…降りよつか？」

「いえ…、大丈夫…です。」

~~~~~  
~~~~~

その馬と馬の間で、ローズがビアンカに言いました。

「アリスさん…かつこいい…。」

「…めずらしくあなたと意見が一致したなあ。憧れるよねー、あんな凛々しい女の人って。」

~~~~~  
~~~~~

しかし、一行がノーザリンの中心都市、レバリーに入った時、アリスとエミリーに異変が起きました。オリバーが心配そうにアリスに声をかけます。

「…どうしたんだ、アリス。顔色が悪いぞ。」

「うむ…吾れはほとんど森から出たことがないのだ…。…街の空気がどうも合わぬ…。特にこの土煙がな…。」

すぐ後ろではエミリーも顔を真っ青にしています。

「う、うー…、お姉さま…、わたくし、もう…。」

「ああっ！エミリーがあまりの人の多さに目を回したぞ！」

レオンが叫びました。マチルドがさかさずはやし立てます。

「ほら、手綱をしっかりと持て！馬をおびえさせるなよ？」

「うるせえ！わかってる！」

（本当に賑やかになったなあ…）

オリバーは思わず微笑みながら思いました。



## 人物紹介

〈アリス・クラメール〉

・「狩人姉妹の姉」

・25歳。

・弓矢で戦う。

・一人称は「吾れ」

・ノーザリン地方の樹海で狩人をしている。男性的で古風な話し方をする。あまり森から出たことがないので、街を歩くのが苦手。逆に自然の中での戦いにはめっぽう強い。女性メンバーの中の憧れの的。意外と気が小さかったり、あまり妹離れできていなかったり、オリバーのことがちょっと好きだったりするが、ほとんど誰も気づいていない。基本的に尊大な口調で、男性メンバーを「貴様」と呼ぶが、信用した相手にはそうは呼ばない。よく土笛を吹いている。愛馬の名前はカトリーヌ。

〈エミリー・クラメール〉

・「狩人姉妹の妹」

・18歳。

・弓矢で戦う。

・一人称は「わたくし」

・ノーザリン地方の樹海で狩人をしている。弓矢の扱いが上手いが、アリスの方が腕は上。その代わり動物の扱いはアリスより慣れている。口ぐせは「はいっ、お姉さま！」ではない。アリスのように街



を歩くのが苦手。でもやっぱり自然の中の戦いには強い。実は姉よりもずっと度胸が据わっている。多分、その面ではパトリックとも同じくらい。どんな敵にも臆することなく立ち向かっていける。尊大な口調で話す姉の反動からか、とても丁寧な口調で話す。姉であるアリスと、優しいイザベルを心から慕っている。愛馬の名前はア  
ンヌ。

狩人のアリスとエミリーを仲間に加えたオリバーたちは、いったんオーベルクに引き返すことになりました。この二人は物語の最後まで仲間たちの主戦力として奮闘してくれます。ちなみに、作者は仲間の中でアリスが一番気に入っています。

次話ではオリバーたちがオーベルクに帰ってきます。しかし、オーベルクの街にはただならぬ不穏な空気が漂っていました。オリバーたちはオーベルクに迫る危機を回避しようと作戦を立てることになります。どうぞお楽しみに！

ちなみに、アリスがこういう口調になったのは、まだ幼かったころに樹海から出たときに近くの村で拾った本に登場していた強い王様にあこがれ、その口調を真似しているうちに自然と身に着いたのです。しかし、その村は最近ギル大臣の私兵による略奪で荒廃してしまったようです。

では次話をお楽しみに！

ゝ悪の大臣ゝ 一章・仲間を探して 「11・動死体の脅威」 (前書き)

新たにアリスとエミリーを仲間に入れたオリバーたちは、久しぶりに拠点であるオーベルクに帰ってきました。しかし、何やら様子がおかしいようです。いったい何があったのでしょうか？

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「11・動死体の脅威」

オリバーたちは久しぶりにオーベルクに帰ってきました。レオンがつぶやきます。

「何だよ、オーベルクは商業都市だって聞いたのに、ずいぶん人通りが少なえな。これならハングリアの方が賑わってるぜ？」

しかし、オリバーは首をかしげました。

「いや…おかしい。十数日前にここを発った時はもつと賑わっていた…。この短期間の間に、いったい何が起こったんだ？」

「まずはリリーたちの宿に行こうよ。そこで何があったのか聞こうよ。」

「そうだな、それが一番いい。」

ビアンカの言葉に、オリバーたちはヴォルフの宿を目指しました。



オリバーたちはヴォルフの宿の入り口から中に入りました。すると、ヴォルフの叫び声が聞こえました。

「動くな！…んっ？オリバー！いいところに帰ってきたな！」

ヴォルフはクロスボウを構えていましたが、入ってきたのがオリバーたちだとわかると、喜びをあらわにしました。

「なんだなんだ、ずいぶん物騒じゃないか。」

「いや、すまん。理由があつてな、この宿に大変重要なお客様がいらしているんだ。」

「重要なお客様？」

「そのテーブルに座っていらっしゃる。」

オリバーはヴォルフに言われた方向を見て、大変驚きました。

「…クララ様！」

オットー様の妻、クララ様がそこに座っていらっしやいました。オリバーが跪くと、穏やかに語りかけました。

「お久しぶりですね、ローゼンハイン殿。…仲間もずいぶん増えたようですね。」

「はっ、これもすべてオットー様とクララ様のお陰にございます。…オットー様のお体の具合はいかがでしょう？」

「かなりご回復なさっていますよ。ここ何日かはご自分で畑を耕しておいでです。」

「それは何よりです。…本日、ここへはどのようなご用事で？」

クララ様は穏やかだった表情を一転させ、真剣な表情をされました。

「…実は、このオーベルクの郊外にある墓地が暴かれたのです。死体が掘り起こされた穴は三〇ほど…。」

オリバーはびっくりしました。

「何ですって？」

「更に近隣の農民が森の中を歩く死体を見えています。」

「動死体を扱えるとなると…強力なネクロマンサーがバックにいる可能性が高いですね。…しかし、クララ様がそのことを？」

「私はあの事件の前は、オットー様にお仕えする一種の伝令兵だったのです。…ヴォルフとはある意味同僚だった、ということですね。」

「そうだったのですか…。」

「今でも時々オットー様のためにこのあたりを偵察することがあります。そんな時に今回の事件を知ったのです。」

「そうでしたか…。わかりました。今回の事件、我々にお任せください。我々が必ずオーベルクの街を守って見せます。」

「そうですね、それを聞いて安心いたしました。それでは私はオットー様へのご報告があるので、これにて…。」

クララ様は宿から風のように去って行かれました。

「…物騒なことになってしまっているんだな。」

オリバーは固い表情でヴォルフに言いました。

「ああ。…それにしても、ずいぶんと仲間を増やしてきたな…。大したもんだ。」

ヴォルフは新しく加わった仲間を見渡しました。鍛冶屋のローレンツ、訓練場師範のレオン、元山賊のマチルド、狩人のアリスとエミリー…。

「個性的な仲間ばかりだが、俺たちは必ずオーベルクを守る。」

オリバーは緊張した様子で、それでも確固とした表情で言いました。

「俺もそう信じるよ。それじゃあ部屋の追加をしなけりゃな…。馬がいるなら、裏の納屋に繋いでおいてくれ。」

ヴォルフも安心したように言いました。



~~~~~  
~~~~~

その夜、彼らはヴォルフの宿の一階で会議を開きました。

「…アリスとエミリーはまだ来ないのか？」

「街を見て回る、って言ってましたよ。」

そこへ、ドドドドツツという音と共にアリスとエミリーが馬から飛び降りてきました。

「すまぬ。道に迷ってしまった。」

「やはり街は苦手です…。」

「ハハハ…。それじゃあ全員揃ったことだし、まずは動死体の特徴について教えよう。」

オリバーは仲間たちに動死体のことを話し始めました。

「パトリックはすでに知っているとは思いますが…動死体の弱点は頭だ。逆に、頭以外を攻撃しても何度も復活してくる。」

…それと、突属性の武器はあまり効かない。というより、例えば槍などで突いたとしても肉が刃先にまとわりついて抜けなくなることが多い。とにかく斬ることを心掛ける。

…それと、やつらに炎以外の魔術はあまり効かない。」

「ええっ?」

仲間たちは驚きました。これまで無敵のように思っていた魔術が使えない敵がいるということに驚いたようです。

「俺も剣で戦おうと思う。…そうそう、馬に乗っているなら槍でもある程度有効だ。速さで勢いをつけられるからな。」

「弓矢はどうなのだ?」

アリスが質問しました。

「命中率に自信があるならかなり有効だ。ただし、頭に命中しなかった場合はただ矢の無駄使いになってしまう。」

「安心しろ。俺っちが頭以外に当たっても動死体にダメージを与えられる矢を作ってやるよ。他はともかく矢なら何とかなる。」

ローレンツが言いました。

「そのようなことが可能なのですか？」

「まあ、戦いのおきまで楽しみにしていてくれよ。」

心配そうなエミリーとは対照的に、ローレンツは自信たっぷりのようです。

「あたいらみたいに短剣を使う場合は？」

今度はマチルドが質問しました。

「…正直、短剣は動死体相手には一番無効な武器だ。やつらはすぐに再生するからな、首を切り裂いたって無意味だ。…他のやつらの

補助になってもらうかもしれんな。」

ローズとマチルドは残念そうな顔をしました。それを見てイザベルが提案しました。

「オリバーさん、…やって、ごう…、…ねっ？」

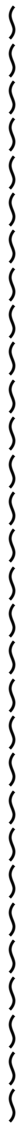
「…危険だな。俺が判断することは出来ない。だが本人たちがいいというなら許可しよう。」

「わかりました。二人とも、ちょっといいですか？…やって、ごう…、…どうですか？」

ローズとマチルドは緊張した表情を見せましたが、はっきりと首を縦に振りました。

「決まりですね。ローレンツさん、銅か鉄のこてを早急に作ってもらえますか？二人分。」

「お安い御用だ。すぐに取り掛かるぜ。」



~~~~~

その夜、オリバーはなかなか寝付けませんでした。すると、隣の部屋から苦しそうな声が聞こえてきました。

(イザベルたちの部屋か…心配だな。声をかけてみるか)

オリバーはマントを羽織ると、隣の部屋の扉をノックしました。どたばたという音がして、ローズが扉を開けました。オリバーは心配そうに言いました。

「大丈夫か？何だか苦しそうな声が聞こえたんだが…。」

すると、部屋の奥からマチルドがオリバーに突進してきました。

「オリバーか！？よし、今こそこの腕の威力を試すところだ！覚悟しろ！」

「うおっ！？」

オリバーは驚きましたが、ローズが黙ってマチルドを殴り倒してしまいました。

「お前たち、その腕…そういうことか…。」

ローズとマチルドの腕は紫色に変色していました。イザベルが説明します。

「短剣の使い手が動死体に対抗するにはこてのような武器をはめて打撃で戦うしかありません。でもこてで動死体に攻撃すると必然的に頭を狙う以上、噛みつかれて感染する危険が何倍も増えます。」

「…だから戦う前にあえて腕を弱い毒におかせ、アンデッドの毒性を弱めよう、というわけだな。今から訓練させているのか…。」

「でも、それにも限界があります。…私の魔力だと、五回噛まれるまでが限界ですね。」

イザベルが申し訳なさそうに言いました。

「それでも十分すごいじゃないか。」

「いえ…、私の曾祖母なら…。」

イザベルはため息まじりに小さな声で言いました。

「ん？何か言ったか？」

「…いえ、何でもありません。…私も耐える訓練をしましょうか…。」

イザベルは部屋の窓を開け放ちました。涼しい夜風がスツと室内に入ってきます。イザベルは周りの安全を確認すると、言い放ちました。

「ファイアーストーム。」

声の大きさに比例した、小さな火柱が登り立ちました。オリバーが心配します。

「おい、大丈夫か？炎の魔術は体力を使うんだろ？」

「…動死体に有効な魔術は炎の魔術だけです。少しでも扱える以上、皆さんのお役に立ちたいですから…。」

「…ありがとう、イザベル。みんなのことを考えてくれてて。…な

あ、炎の魔術の中にも簡単なものはあるんだろ？」

「ええ。このファイアーストームは比較的簡単です。…もちろん体力はかなり消耗してしまいますが…。」

「今度、時間のある時でいいから教えてくれないか？」

「ええ、いいですよ。」

イザベルと親しげに話すオリバーを見て、ローズは少し淋しそうな顔をしました。マチルドがニヤニヤしながらローズを小突くと、ローズは思い切りマチルドを蹴飛ばしました。イザベルはその様子を見て苦笑いしました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

#### 人物紹介

↳ クララ・フランツ

・「オットー様の妻」

・31歳。

・クーデター前は一般人に混じって国中の情報をオットー様に伝える特殊伝令兵だった。どんな困難な状況でもオットー様を助ける。

やさしい顔をしているが、怒らせると手がつけられないほどになるという噂も。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「11・動死体の脅威」 (後書き)

クララ様からもたらされた情報により、オリバーたちはオーベルクが危機に瀕していることを知ります。はたしてオリバーたちは動死体とそれを操るネクロマンサーを排除することが出来るのでしょうか？

次話ではオリバーたちが動死体との戦いに臨みます。どうぞお楽しみに！

ちなみに、動死体というものは、一般的に言うところのゾンビをそのまま想像していただければけっこうです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「12・オーベルクの死闘」(前書き)

オットー様の妻、クララ様からもたらされた情報により、オーベルクの街が動死体の襲撃という危機にさらされていることが判明しました。オリバーたちはオーベルクの窮地を救うことができるでしょうか？

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「12・オーベルクの死闘」

オリバーたちが街に着いて三日後、ついに状況が変化しました。偵察に出ていたハンスとマチルドが報告をしました。

「動死体たちが森の中に集まってる。七〇体くらいだったかな。」

マチルドの報告を聞いてオリバーの顔が厳しくなりました。

「クララ様が見たときの二倍以上だな。ネクロマンサーはいなかったか？」

ハンスは首を振りました。

「それらしいやつは見当たりませんでした。まだどこかに身をかくしているんだと思います。」

「今までこんなことはなかった。きっとここを襲撃してくるのは今夜あたりだぜ。」

マチルドも言います。オリバーは一度大きく深呼吸しました。そして仲間たちに指示しました。

「よし、みんな所定の位置に移動しよう。ローレンツとヴォルフはここに残っていてくれ。いざとなればヴォルフのクロスボウもあるしな。パトリックとアリス、エミリーは街の反対側の入口だ。念のためにそこにいて、背後からの攻撃を警戒するんだ。何も襲ってこないようだったら街の外を経由して墓場へ行け。そこで待ち伏せするんだ。馬だから素早く移動できるだろうしな。」

「二人とも、迷ってはいけないよ？」

パトリックが笑いながらアリスとエミリーに言いました。

「うむ、街の中は貴様について行けば問題ない。」

「街の外の地理は覚ええました。暗闇でもわかります。」

「残ったメンバーは墓場側の入り口を固める。…最前列はハンスとレオン。その次にローズとマチルド。更に俺、ペーター、ビアンカがいて、最後列にイザベルだ。奥に行くにつれてどんどん攻撃力を高くしていくぞ。」

全員、緊張した面持ちで頷きました。

「…よし、日も暮れてきた。もうすぐ夜だ。みんな、行くぞ！」

~~~~~

オリバーたちは街の入り口に着きました。もうすっかり暗くなっています。

「…苦しいかもしれませんが、いきますよ。」

イザベルがこてをはめたローズとマチルドの腕に毒の魔術をかけました。

「…っ！」

「うっっ…よし、これで大丈夫！さあ、いつでもかかってこいー
いー！」

「いいですか、五回噛まれたら撤退するんですよ？五回ですからね
？」

やる気に満ちた二人に、イザベルは何度も念を押ししました。

~~~~~

彼らが所定の位置に着いてからしばらくして、遠くの方から何かの唸り声が聞こえてきました。

「…来たな。気を抜くなよ！」

オリバーが仲間たちに檄を飛ばします。やがて、遠くに動死体の隊列が見えました。

「何てにおいだ…。」

ペーターが顔をしかめます。

「よし、ハンス！レオン！行け！疲れたら無理をせずすぐに後ろに下がれ！」

「うおおおおっ！」

オリバーが指示すると、二人は雄たけびを上げて突進してゆきました。突くことではあまりダメージを与えられないので、二人は長い槍を振りまわして動死体を切り裂いてゆきます。

「槍での斬撃かあ…。ハンスはちょっともたついてるけど、レオンはさすがに慣れてるね。」

ピアンカが少し感心したように言いました。

「もともと武器が斧槍だからな、斬撃に特化している。ただ、あれだけ重いものを振りまわすんだ、体力の消耗は著しいだろう。」

オリバーの言った通り、やがて二人とも息が荒くなってきました。

「…そろそろ苦しくなってきたな。ハンス！あとは後ろに任せてひとまず下がるぞ！」

「はい！」

二人は速やかにオリバーたちのもとに戻ってきました。



「よし、よくやった。不利な槍で十体以上も倒すなんて大したものだ。…よし、次の攻撃だ。ローズ！マチルド！行け！」

二人は頷くと、迫ってくる動死体の列に飛び込みました。片っ端からこてでアンデッドの頭を粉碎してゆきます。二人はたくさん動死体にひるむことなくどんどん向かってゆきました。

しかし、ついにマチルドが五回動死体に咬まれてしまいました。

「うっつ！…ローズ！悪いけどあたいは先に撤退させてもらっぜ！」

「…不注意。」

「うるせえなあ！お前は何回咬まれたんだ？」

「まだ一回…。」

「くっ…。と、とにかく応援を呼んでくるからな！」

マチルドはオリバーたちのもとに一瞬で戻ってきました。

「あたいは五回噛まれたからもうダメだ。ローズを助けてやってくれ。」

「わかった。お前は宿に帰って休んでおけ。ペーター！ビアンカ！行くぞ！」

「はいっ！」

「そこなくっちゃ！」

三人は剣を構えるとローズの周りの動死体に斬りかかりました。

「ローズ！大丈夫？」

「まだまだ平気…。」

ビアンカの問いかけにもローズはすぐに答えました。ペーターも声をかけます。

「きつくなったら俺たちに任せて撤退しなよ！」



「残りはあと二、三〇体というところだ。」

「思ったより少ないですね。さすがは皆さんです。わかりました。  
…ファイアーストーム！」

最前列の動死体たちが一気に燃え上がりました。これまで見たこと  
もないような大きな炎です。オリバーはイザベルを心配しましたが、  
イザベルはしっかりと動死体を見据えて立っています。そして続け  
ざまに叫びました。

「ファイアーストーム！」

動死体たちは次々に燃え上がります。その数はどんどん減り、残り  
はたったの十五体位になってしまいました。

「ファイアー…あら？」

突然動死体たちはクルッと向きを変えると、元来た道を引き返して  
行きました。

「後ろから追い打ちをかけましょうか？」



「くそっ！まさか失敗するとは…。残ったのはたったの十四体か…。」

ネクロマンサーがぼやくと、突如背後から声がしました。

「何を言っているのだ。一体も残りはせぬ。エミリー、行くぞ！」

「はいつ、お姉さま！」

ネクロマンサーが驚いて後ろを振り返ると、森の中から愛馬に乗ったアリスとエミリーが飛び出してきました。

「ローレンツが作った新しい矢の威力を見るがよい！」

アリスは叫ぶと、動死体に向かって矢を放ちました。飛んでいる間に矢は燃え上がり、それで射抜かれた動死体もまた燃えてしまいました。

（矢に燃えやすい油を塗って飛ばす勢いで発火させるとは…ローレンツという男、面白いことをするものだ…）

「エミリー！右だ！」

「はいつ、お姉さま！」

猛然と動死体の中を駆け回るアリスとエミリーを見て、パトリックは苦笑いしました。

（やれやれ…私が出る幕はなさそうだな…ん？）

「そのネクロマンサー！隠れても無駄だ！出てこい！」

パトリックは木陰に隠れているネクロマンサーを見つけました。

「ひっ！」

ネクロマンサーは小さく悲鳴を上げると、小さな煙と共に消えてしまいました。

（逃がしてしまったか…）

そこへ、アリスとエミリーが戻ってきました。

「パトリック、こちらは片付いたぞ。」

「手際がいいね。」

「やつらは動きが鈍いからな。魔獣を追うよりもずっと戦いやすいものだ。」

「ネクロマンサーは逃げてしまったようですね…。」

「文字通り、煙のように消えてしまったよ。」

パトリックは心底残念そうです。

「仕方あるまい。今後戦うことになるだろう。捕まえる機会はいくらでもあるはずだ。」

「ああ、そうだね。…とりあえず宿に戻ろう。オリバーたちと合流しないぞ。」



「うむ。では行くか。…ハッ！」

三人は馬を走らせ、ヴォルフの宿へと向かいました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

三人が宿に着くと、皆がローズを囲んでいました。驚いてパトリックがたずねました。

「どうしたんだい？」

「私が悪いんです。ローズさんにかかる術の強さを誤ってしまいました…。」

イザベルが落ち込んだように言いました。

「気にしないで…。もう大丈夫だから…。」

ローズがイザベルを見上げて言いました。オリバーは心配そうでしたが、パトリックたちに向き直りました。

「…動死体は排除できたか？」

「うむ、お前の予想通りだった。やつらは墓場に戻ってきたからな。ローレンツが作ってくれた矢のおかげで相当手間が省けた。感謝している。」

「お役にたてて嬉しいぜ。」

アリスに感謝され、ローレンツは鼻高々です。

「でも動死体を操っていたネクロマンサーは逃がしてしまったよ。」

パトリックはまだ悔しそうです。オリバーは励ますように言いました。

「仕方ないさ、やつらも外道とはいえ魔術師だ。逃げることなんてたやすい。今オーベルクに迫っていた危機を乗り切っただけでもよしとしようじゃないか。…反対側の入り口からはアンデッドは来なかったのか？」

「十体ほど来ました。パトリックさんが一人で蹴散らしてくれましたけれど。」

エミリーが笑顔で言いました。

「いや、私一人の手柄ではないよ。アリスとエミリーもしっかり援護してくれたじゃないか。カトリーヌもアンヌも、素晴らしい馬だね。…とにかく、今回の作戦ではオリバー、君の作戦には一つの狂いもなかった、ということだよ。」

パトリックはようやく笑顔を取り戻してオリバーに言いました。

「だがその作戦が成功したのは、ここに一人ひとりが頑張ってくれたからだ。…今日はみんなゆっくり休んでくれ。特に…ローズはな。」

オリバーの言葉に、仲間たちはそれぞれ言葉を交わすと自分の部屋に戻って行きました。パトリックとビアンカも、宿を出て行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その夜、誰かがオリバーの部屋の扉をノックしました。

「どうぞ。…イザベルとマチルドか。」

「オリバーさん、今何かなさっていますか？」

「いや？気まぐれに古代の魔道書を翻訳していただけだけど。」

「…もしよろしければ、ローズさんのところに行ってあげていただけますか？」

オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「ローズのところ？何か問題でも起こったのか？」

「いえ…、その…、あの、ローズさんは特に疲れてしまっていますので…。」

イザベルが目を白黒させながら言います。

「あ、ああ、そうか…。それじゃあ、顔を出してくるか…。」

オリバーは不思議そうな顔をして本を片手に部屋を出て行きました。

「あの朴念仁、どうしてこつも鈍いかなあ？」

マチルドが呆れたようにつぶやきました。

~~~~~  
~~~~~

オリバーがローズの部屋に入ってくると、ローズはびっくりしました。

「イザベルに言われてきたんだが…体は大丈夫か？」

ローズは少し残念そうな顔をしました。

「どうした？」

「イザベルには借りを作ってばかり…。何だか悔しい…。」

ローズが小さな声で言いました。

「ん？何て言ったんだ？」

「何でもない…。」

「イザベルは本当にお前に悪いことしたと思ってるみたいだな。」

「…全然気にしていない…。…死ぬかと思ったけど。」

ローズがため息まじりに言いました。オリバーは心配そうです。

「そんなにつらかったのか？」

「…まだ死ねない。…まだ全然先生の役に…。」

ローズはまた小さな声で言いました。

「まだ全然…何？」

「何でもない…。」

オリバーは苦笑いしました。

「…相当疲れてるんだな。今日は早めに寝るよ?」

「そつする…どこ行くの?」

ローズが立ちあがったオリバーのマントをつかんで聞きました。

「ん? いや、寝るなら一人にしてやったほうがいいかな、と思って。」

「誰かが一緒じゃないと眠れない…。」

「じゃあ、イザベルとマチルドを呼んでくるよ。」

「…たまには違う人がいい。先生とか…。」

ローズは懇願するような目でオリバーを見えています。





動死体たちを退けたオリバーたちは、体力を消耗しながらも間接的ではありませんが、初めて魔術師との戦いに勝利することができました。仲間たちもこれで少し自信がついたようです。

次話ではオリバーたちがオーベルク近郊の森の中で訓練をしたり、素材集めをしたりしている話になります。どうぞお楽しみに！

ちなみに、今回動死体を操っていたネクロマンサーは、死体を操ることには特化していますが、オリバーやイザベルのように攻撃魔術を扱うことはそこまで得意としていません。必要最低限の魔術しか身につけていないのです。それでも、一般人にとっては驚異的な存在であることには変わりありませんが。

では次話をお楽しみに！

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「13・森の中で」 (前書き)

オリバーたちが動死体を排除したことにより、オーベルクに迫っていた危機は何とか回避することができました。オリバーたちは、今日は近くの森に來ているようです。

悪の大臣 一章・仲間を探して 「13・森の中で」

キンフィールド城のある一室、ある男が側近の報告を受けていました。

「ほう、ネクロマンサーが敗れたか。」

鋭い眼光に青白い顔、この男が悪政を行っているギル大臣です。

「はい。オーベルクに動死体を突入させる前に撃退されてしまったということです。…召喚して処刑いたしましょうか。」

「まあ、まだいいだろう。やつもこれまでそれなりの功績を挙げたきた者だ。すぐに切り捨てることもあるまい…。しかし、そのネクロマンサーを退けるとは、なかなか腕の立つ者がオーベルクにいたのだな。」

「それが…何でも外部の者の力によるものだという噂も飛び交っております。」

「ほう、外部の者、か…。」

「捕らえましょうか。」

ギル大臣は笑って言いました。

「…放っておけ。この作戦が失敗したところで私の立場が危うくなるわけではない。」

「はっ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その頃、オリバーたちは以前魔獣退治を依頼された村の近くの森にやってきました。パトリックは情報収集のためキンフィールドへ旅立っているためいませんでしたし、ローレンツも新しい武器のアイデアを思いついたと言って宿の物置にこもりつきりだったので来ませんでした。オリバーがイザベルに言いました。

「俺とレオンはここでハンスとペーターの武術の訓練をする。」

「私たちは森の奥に行って薬草なんかの素材を集めてきますね。」

「まだ魔獣がうろついている可能性も高い。気をつけるよ。」

オリバーが注意しましたが、イザベルは笑顔のまま言いました。

「大丈夫ですよ。相手が魔獣でしたら心おきなく魔術を使えますからね。」

(イザベルも最近は随分と大胆になってきたな…)

すでにハンスとレオンは訓練を始めています。

「ほらハンス！もっと体重をかけてどっしりと構えるんだ！それを維持したままあの人形に突っ込め！」

「うおおおおっ！」

「まだまだ軽い！吹けば飛ぶようじゃねえか！」

ハンスとレオンを見ながらオリバーは笑っていました。するとペーターがオリバーに言いました。

「先生！俺にもお願いします！」

「ああ。…訓練刀を持ったな？よし、ペーター！俺を殺す気でかかってこい！遠慮はいらないからな！」

「はいっ！…うおおおおっ！」

~~~~~  
~~~~~

「あの元気がいつまで続くことやら…。」

ピアンカが苦笑いしていました。

「さて、村人の話によると、この森の中を少し行ったところに小川があるという。まずはそこに行くとするか。」

「でも…全員馬に乗ってもらうことはできませんね…。」

アリスとエミリーが言いました。するとマチルドが胸を張って言いました。

「あたいとローズは大丈夫。ビアンカとイザベルが乗せてもらえよ。」

「それで、いい…。」

ローズも同意しました。

「そうか。ではビアンカ、カトリーヌに乗るのだ。」

「イザベルさん、どうぞ。」

イザベルとビアンカが馬に乗りました。

「乗ったか？乗ったな？では行くぞ。ハッ！」

アリスとエミリーはカトリーヌとアンヌを駆け足で走らせました。ローズとマチルドがそれを追いかけます。二人も風のように走っては行きますが、どんどん距離が離されていきます。

（くっそー、強情張って大丈夫なんて言わなきゃよかった！人間が馬に勝てるわけないだろーっ！）

「うおう！？エ、エミリー！もっと下流で洗ってくれよーっ！」

「えっ、そ、そんなこと言われても…。」

ビアンカは木に登って果物をほおばっていました。アリスが笛を吹くのをやめてビアンカを見上げています。

「ビアンカ！吾れにも一つ投げてはくれぬか！」

「ほーい！」

ビアンカは真っ赤な果実を切り取ると、アリスに投げました。

「うむ、よく熟れている。甘くて美味だな。」

アリスは満足そうです。

「ビアンカ！あたいらにもくれよー。」

ローズとマチルドも見上げています。

「ほいよっ。」

ローズとマチルドは果実を頬張って顔をしかめました。

「何だよこれ！」

「酸っぱい…。」

ピアンカは枝の上で笑い転がっています。

「お子ちゃまになんて早い早い！疲れた時には酸っぱいものでも食べっておきなっ！」

「何だとーっ！？降りてこーい！」

「降りろと言われて降りると思っっ…」

「じゅっちは甘い…。」

いきなりローズが隣に現れたので、ピアンカはびっくりして枝から落ちそうになりました。

「ロ、ローズ！？あんた、いつの間に！？…まあ、せっかくここまで来たんだからね、ここに来たあんたには甘いフルーツを食べる権利をあげる。」

ローズは果物を食べながらコクコクと頷きました。

「くっそーっ！裏切ったなローズ！このやろう！」

マチルドは木の根元に思い切り体当たりしました。

「うひゃっ！？」

その衝撃でローズとピアンカが座っていた枝が折れてしまいました。二人は地面に落ちてしまいました。

「へっへー、ざまあみろ！」

「むー！もう怒った！ローズ！行くよっ！」

ローズはコクンと頷くと、ビアンカと二人でマチルドに飛びかかりました。

「ぎゃああああっ！わ、わかったよう！あたいが悪かったよう！だから二人がかりなんて…やめろおおっ！」

大騒ぎする三人をアリスは笑いながら見ていました。

~~~~~

一方その頃、男たちは…、

「戦闘では俊敏さが求められる。それは剣士や槍使いでも一緒だ。今からお前らに尋問用の魔術を飛ばす。それをよけてみる。俺の指の動きをみればそれも可能はずだ。本来はものすごい苦痛を与えるものだが、魔力を弱めるから安心しろ。」

「…それは俺もやらなきゃならねえのか？」

やや面倒くさそうにレオンが聞きました。

「当然だ…。…クヴァール！」

「ぎゃああああっ！」

~~~~~  
~~~~~

「あら…。…何か聞こえませんでしたか、お姉さま。」

「つむ…。…魔獣の鳴き声、ではないと思うが…。…」

~~~~~  
~~~~~

「…ふ、不意打ちはねえだろう！」

レオンが怒鳴ります。

「何を言ってるんだ。敵は情けなんてかけてくれないんだぞ？クヴァール！」

「うがあああっ!」

今度はペーターが叫びます。

「…ちよつどいい機会だ。お前ら呪いの魔術を見くびっているようだからな。これを機にこの恐ろしさをとことん味わえばいい。」

そう言いながらオリバーは悪魔のような笑みを浮かべてハンスに向き直ります。

「せ、先生!目的が変わって…、」

「問答無用だ!クヴァール!」

「ぐわあああっ!」

「あははははは!クヴァール!」



馬たちに水を飲ませていたエミリーのところに、たくさんの薬草を抱えたイザベルがやってきました。

「エミリーさん、こちらをどうぞ。この薬草はお馬さんたちも喜んで食べますよ。」

「ありがとう、イザベルさん。」

エミリーはイザベルから受け取った薬草をカトリーヌとアンヌに食べさせました。二頭はとても喜びました。イザベルはそれを微笑ましげに見ています。

「すっかりエミリーさんに懐いていますね。」

「いつも世話をしていますからね。私がお姉さまよりも上手くできることといたら、この子たちの世話くらいでしょうか…。」

「アリスさんとエミリーさん、雰囲気が全然違いますものね。」

「お姉さまは私の憧れの人です。…でも同時に、絶対に追いつけない人ですね。」

エミリーは少し残念そうに言いました。

「そうですね？そんなことはないと思いますよ？たととしても、私はそれぞれの良さがあっていいと思いますよ。」

イザベルはいつものように笑顔で言いました。エミリーは何だか心が安らぎました。

~~~~~

やがて日が傾いてきました。オレンジ色の光が森を包んでいます。

「そろそろ戻りましょうか。」

イザベルが声をかけます。

「そうだねー。あまり遅くなると師匠も心配しそっだしね。」

ピアンカが答えたその時、小川の向こうで木の葉がカサカサと揺れました。目ざとくそれを見つけたアリスは不敵に笑いました。

「イザベル、みなと一緒に先に戻っていてくれ。」

「アリスさん？どうしたんですか？」

「少し用事が出来た。安心するのだ、すぐに追いつく。…エミリー、行くぞ！」

「はいつ、お姉さま！」

「ハアーツ！」

アリスとエミリーはものすごい勢いで馬を走らせていきました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

四人が森を出てくると、オリバーが待っていました。

「おお、今帰ってきたのか。調度よかった。」

「は、はい…何があつたんですか？」

イザベルが辺りを見渡して言いました。ハンスたち三人が地面に倒れています。ペーターに至っては軽く痙攣しています。

「もう、訓練でへばつたの？だらしないなあ…。」

「反論する気にもならねえ…。」

ビアンカがバカにしたように言いましたが、レオンはビアンカの方を向くこともできません。ハンスもマチルドに言います。

「マチルド、先生の寝首をかこうとするたびにローズに阻止されるらしいけど…その方が何倍もマシかもしれないよ…。」

「…はあ？」

「そういえばアリスたちはどうしたんだ？」

オリバーが辺りを見渡してビアンカに聞きました。

「何か用事が出来たって。すぐに追いつくって言ってたけど…。」

その時、眩しい夕日を背にして二頭の馬のシルエットがこちらに向かってきているのを見えました。

「どつどつどつ！…すまぬ、イザベル。待たせてしまったか？」

「いえ、私たちも今着いたところです。」

笑顔でアリスと話すイザベルとは対照的に、オリバーはびっくりしています。

「そ、それよりそれは何だ!？」

「うむ、たった今エミリーと仕留めてきたのだ。大物だろう？」

オリバーが驚いたのも無理はありません。アリスが乗っているカトリーヌの後ろには大きなシカがくりつけられていたのです。アリスは得意げです。

「今日の食卓は豪華なものになるぞ。さあ、良い汗もかいたことだ、

早く宿に帰るつもりではないか。」

「あ、ああ。そうだな。」

オリバーはまだ驚きを隠せないようです。

「イザベルさん、後ろに乗りますか？」

エミリーがイザベルに声をかけました。

「いえ、私は結構です。あ、もしよろしければこの袋を運んでいただけますか？薬草がたくさん入っていますので…。」

「わかりました。」

エミリーはイザベルから薬草の入った袋を受け取ると、アンヌにしっかりと結びつけました。

彼らの晚餐が豪華なものだったことは言うまでもありません。

オリバーたちはつかの間の平和な時間を十分に楽しめたようです。もつとも、ハンスたちに関しては楽しめたといえるかどうかわかりませんが…。

次話では、オリバーとパトリックが経験した巨大魔獣との戦いの話をパトリックが仲間たちに語ります。しかし、ペーターはどうも納得がいかないようですが…？どうぞ楽しみに！

ちなみに、オリバーがハンスたちに向けた尋問用の魔術は、唱えてから相手に苦痛を与えるまでに数秒の時間差があるので、実際に避けようと思えば避けることも可能です。初登場のマチルドがこれを避けることができたのはそのためです。そのため本来この魔術を使う際は、まず相手の動きを止めてから尋問を開始するのです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「14・一人前の剣士に」 (前書き)

今日はヴォルフの宿に、普段はいないパトリックとビアンカも来て一緒に夕食を食べているようです。お酒も入り、中にはすでに気持ちよさそつに酔っている仲間もいるようです。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「14・一人前の剣士に」

ヴォルフの宿屋は今日も賑やかです。ヴォルフは楽しそうにオリバに言いました。

「お前らがいると、楽しくていいよ。…だが、またすぐに旅に出るんだらう?」

「ああ、今度は東のロンドランド地方と南のナンジューマ地方に行ってみようと思う。俺の国からオットー様に会いに行く途中も、ロンドランド地方は通っただけだからな。」

「そうか、ロンドランドもナンジューマもいい場所だぞ。土地も豊かだし、暖かいしな。」

ヴォルフは笑って言いました。

「何だよ、オヤジ。それじゃあシーガルンは不毛の地だ、っていうのかい?」

「聞き捨てならぬな、亭主。ノーザリンも豊かな土地であることに間違いはないのだ。」

気持ち良さそうにお酒に酔ったレオンとアリスがヴォルフに文句を言いました。

「ハハツ、別にそういうわけじゃないよ。」

ヴォルフは苦笑いしています。

「仕方ねえな、少なくともノーザリンよりはシーガルンの方がいいって認めてくれれば許してやるぜ。」

「何を言う。それを言うならノーザリンの方がシーガルンよりも素晴らしい土地なのだ。亭主、そう言え。」

「何だつて？ノーザリンなんか、森と山脈しかねえじゃねえか。冬は雪に閉ざされちまうしな。」

レオンがアリスを睨みながら言いました。

「泥のような粥を食う者どもに言われたくはないな。」

アリスはすまして言います。これにレオンは頭に來たようです。



「何だと！？よし、表に出ろ！決着をつけてやる！」

「ふむ、よかるう。貴様とはいずれこうなるような気がしていた。貴様のようなバカ者など素手で十分だ。」

「面白いじゃねえか！俺だって素手でやってやらあ！」

「貴様が素手だと？ならば吾れは片手で十分。」

「減らず口を叩くんじゃねえよ！お前のその作ったような口調！化けの皮を剥いでやるぜ！」

「作ったも何も、吾れは幼少のころよりこの口調だ。そつだろつ、エミリー！」

「は、はい！お姉さま！」

エミリーは困ったように返事をしました。

「くそーっ、こじじゃらちがあかねえ！さっさと表へ出やがれ！」

「望むところだ。」

二人は睨みあいながら宿の外へ出て行きました。テーブルに取り残されたエミリーはため息をつきました。

「お姉さまはお酒を飲むと気が大きくなってしまうので…。レオンさんにはご迷惑をおかけしてしまいました…。」

「レオンのことなんて気にすることないって。どっちにしろ、明日になったら二人とも覚えていないだろうしね。…ローレンツもマチルドももう酔っぱらって寝てるし…。パトリックももう一杯どう？」

ピアンカがパトリックにお酒をすすめました。

「…いや、私はもう遠慮しておこう。初めの一杯が飲めればそれで十分だからね。」

「パトリックったら、強いくせに飲まないんだから。…ねえ、パトリック。今何本の指が見える？」

「…二本じゃないのかい？」

「だよー。…ねえ、イザベル！この指何本？」

ピアンカは隣で顔を真っ赤にしているイザベルに聞きました。

「え、ええっと…、四本…六本…ああ、どんどん増えて…、ピアンカさん、いつの間に魔術を覚えたんです？」

「…飲んだ量が同じ一杯だけの人とは思えないね。」

ピアンカがおかしそうにいました。

すると、突然ペーターがパトリックに話しかけました。

「そっだ、パトリックさん！パトリックさんは先生と一緒に巨大魔獣と戦った生き残りなんでしたよね？俺の兄さんのことは知ってます？。」

「君の？名前は何だい？」

「エミールです。エミール・ヘルマン。先生の親友でした。」

「エミール・ヘルマン…。…オリバー！」

突然パトリックが叫びました。鋭い口調に、オリバーはびっくりしました。

「…ちよつとこつちに来るんだ。」

オリバーはパトリックの剣幕に驚きつつもパトリックの向かいの席に座りました。

「オリバー、君は弟子に話していないのか、あの時の戦いのことを。」

「一応話はしたさ。…だが、知らない方がいいこともあるんじゃないか？」

オリバーは少しバツの悪そうな顔をしました。

「それは甘すぎるのではないかい？ペーターは君の弟子となり、魔獣と戦い、成長したんだ。事実をしっかりと伝えるべきじゃないのかい？」

オリバーは黙っています。

「…反論しないということは話していいということだね。ペーター、君の兄は、命令に反して死に急ぎ、命を落とした上にその後の作戦にも悪影響を与えた大バカ者さ。」

「お、おい、パトリック、そんな言い方はないんじゃないのか？」

あまりに厳しい言葉に、たまらずオリバーが言いました。

「私は事実をそのまま伝えただけだよ。」

しかしパトリックは落ち着いています。ペーターは黙ってうつむいています。ハンスは遠慮がちにパトリックを見えています。

「…ハンスも詳しく聞きたそうだね。どうやら君たちの師匠はるくにその時の話をしていないようだね。私が代わりにくわしく話してあげよう。」

パトリックが話し始めました。

~~~~~

「あれは六年前か……。私もオリバーもまだ十九歳だった。本来なら私たちのような未熟な若い戦士に超一級の危険生物と戦わせることはないんだけど、私たちの国には魔獣と戦えるような戦士の数が本当に少なかった。……まあ、あの戦いの後はさらに減ったわけだけれどね。もつとも、あの魔獣を倒してからは魔獣の被害はほとんどないらしい。」

……指揮官はトミーという歴戦の戦士だった。私たちの国ではトミーさんの名前を知らない戦士はいないだろう。トミーさんはこれまでの経験を生かし、まずは剣士や騎士たちにやつを巣穴に追い込ませ、次に魔術師に魔獣の巣の入り口に魔力線を張らせて閉じ込め、飢え死にさせる戦法を取ったんだ。作戦は上手くいっていた。魔獣を巣穴に追い込み、魔力線で閉じ込めることにも成功した。

……しかし経験もないのに血の気だけは荒い戦士が巣穴の中へ突撃すると言いだしたんだ。巣穴の一番奥まで追い込めば簡単に仕留められるというのがその戦士たちの意見だ。そしてその案を言い出したのがペーターの兄のエミールだった。エミールたちは魔獣を巣穴に追い込む作業があまりに上手くいったことで自信をつけていたらしい。

もちろんトミーさんは反対した。しかし夜間にエミールたちは仲

間を連れて巣穴に突撃していった。残ったのは私やオリバーを含めて十人だけだった。…自信満々で魔力線を解いて中に入って行った戦士たちは、あまりの空腹さで気を荒げ更に凶暴になっていった魔獣に襲われ全滅した。それに気づいたオリバーが慌てて魔力線を張りなおそうとしたが、魔獣はもうすでに巣穴を出た後だったんだ。…仮に出ていなかったにしても、あの当時のオリバーの魔力では封印なんて無理な話だっただろうけどね。

結局私たちは更に凶暴になった魔獣相手にたった十人で戦うことになったんだ。結局何とか勝つことはできたけれど、残った十人のうちでも四人が魔獣に命を奪われ、二人がまともに生活できないほどの重傷、他の戦士たちもどこかしらに傷を負ったんだ。私も背中に爪で裂かれた傷が未だに残っているよ。もっとも、オリバーだけは何故か無傷だったけどね。

…トミーさんは若い戦士たちをたくさん死なせたということと責任を取って現役を退いたんだ。とにかく、」

「もういい！やめてくれ！」

ペーターが叫びました。

「兄さんは…きっと兄さんは一日でも早く俺たちのところへ帰ってきてそうしたんだ！」

感情的なペーターとは対照的に、パトリックはあくまでも冷静です。

「そんなことは知らないよ。しかし、例えそうだとしても魔獣は私情にかまけて戦って勝てるような連中ではないことは確かだ。」

「じゃあ、何であんたや先生は残ったんだ！あんたたちだってそんなに若かったなら、今みたいな深い考えが出来るわけないだろ！」

「君はずいぶんと自分の師匠を見くびっているんだな。…まあ、それはいいでしょう。確かに私に関してはその時に思案を巡らせていたわけではないよ。私が思っていたことはただ一つ…命令に逆らうのは騎士として恥だ、ということだよ。」

「じゃあ指揮官が突撃を指示していたら突撃していたのか!？」

パトリックは意志のこもった目で言いました。

「これは私の騎士としての誇りだ。無論一般的には無茶な命令には反対する権利もある、ということが普通なのだろう。」

「もついいよー」

ペーターはガタンと立ち上がると階段を荒々しく登り、二階へと上がって行きました。

「ふう…。みんな、すまないね。楽しい空気を台無しにしてしまった。お詫びに、今日の飲食代は私が持つことにするよ。」

パトリックが申し訳なさそうに言いました。すると、ハンスが遠慮がちに言いました。

「でも…ペーターには悪いですけど…俺は今まで知らなかったことを聞いてよかったと思いました。先生も教えてくれなかったので…」

「もう、師匠！隠したい気持ちもわかるけど、やっぱりこういう大事なことを隠しておくのはダメだよ！」

ピアンカが口をとがらせました。

「そうだな…。これは俺のせいだよ。」

「…それで先生、先生はどうして残ったんですか？やはり先生も命令には従うべきだと思ったんですか？」

ハンスがオリバーに聞きました。

「それももちろんだが…、俺はペーターたちを守るために残るしかなかった。」

「それはどういうことですか？」

エミリーが興味深そうに聞きます。

「俺はペーターの兄貴のエミールとは本当に仲が良かったし、あいつの腕を信用していた。だが、もし俺がエミールと一緒に洞窟に入り、二人とも死んでしまったとしたら身寄りのないペーターとその妹は路頭に迷うことになる。だが俺が残ればエミールが死んだとしても俺がペーターたちを世話することができるし、エミールたちが生きて帰ってくればそれはそれで何も問題がない。そう考えたのさ。…実際エミールは早く戦いを終えてペーターたちに会いたがってた。」

「俺はペーターの様子を見てくるよ。」

オリバーは静かに階段を上って行きました。

「…ペーター、羨ましい…。」

ローズがポツリと呟きます。ビアンカが不思議そうに聞きます。

「どつして？」

「一人ぼっちになった時のことを考えてくれる人がいて…。」

ビアンカはちょっとだけムツとして言いました。

「何言ってるのさ。あんたはそういいながら自分から人を遠ざけてたんでしょ？それに、今は一人ぼっちじゃない。ほら、仲間がたくさんいるでしょ！」

あきれたようなビアンカの言葉に、ローズはハツとして顔をあげました。たくさんの仲間の笑顔がローズを見ていました。

「…そうだった。…それにもう一人じゃない。」

「でしょー？仲間の一人として、今の発言は聞き捨てならなかったからね！」

ローズはかすかに笑い、ビアンカに言いました。

「でも、ビアンカを仲間と思ったことはない…。」

「…はあっ！？かわいい笑顔でいきなり何を言ってるの！？」

「…先生のこと師匠って呼ぶなんて、なれなれしい…。」

「あんただって弟子でもないのに師匠のこと先生って呼んでるでしょ！？もう頭に来た！表に出なさい！決着つけてやる！」

「望むところ…。」

二人は火花を散らしながら外へ出てゆきました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーが部屋の扉を開けると、ペーターが真っ赤な顔をして剣を振りまわしていました。

「あつ、先生……。…先生、すみませんでした。先生をバカにするようなことを言ってしまった。…」

「いや、いいんだ。それより俺もお前に黙っていて、」

「…いいんです、先生。」

ペーターは剣を壁に立てかけると、オリバーに言いました。

「あれから怒りのままに剣を振りまわしてました。…でも、時間が経つにつれて、悔しいけどやはりあの人の言っていることが正論としか思えなくなってしまうて…。結果的に兄さんは死んでしまったわけですからね。」

…兄さんは確かにバカです。でもバカだけど、俺たちのことをいつでも考えてくれてた。それは先生もわかってくれていますよね？」

「ああ、もちろんだ。」

「…俺は強くなって見せます。兄さんや、パトリックさんよりもずっと強くなります。もちろん剣の腕だけじゃありません。心も一緒に強くなって見せます。そして、誰の前でも胸を張っていけるよう」



「ザリンもどつちもいい場所だよ。それで文句ないだろ？ほら、中に入って飲みなおそうぜ？俺が付き合つてやるから。」

ヴォルフが二人に手を貸すと、二人ともよろよろと立ち上がりました、が、目が合つとまるで縄張り争いをする獣のような目つきで睨みあっています。

屋根の上からはものすごい物音と悲鳴が聞こえてきます。

「ピアンカー！ローズ！いい加減にしろ！…まったく、楽しくなったのはいいが、後片付けをすることうちの身にもなってくれよ…。」

ヴォルフは小さくため息をつきました。

~~~~~  
~~~~~

\*ペーターが一人前の剣士になることを目指してパワーアップしました\*

パトリックに反抗したペーターでしたが、結局は彼の言うことを認めざるを得ないということに気づいたようです。そしてそのやりきれない気持ちを剣にぶつけることで、彼自身の飛躍にもつながったようですね。

次話ではオリバーたちが東のロンドランド地方に向けて、また旅を開始します。そして、あの人も再会することには…？どうぞお楽しみに！

ちなみに、巨大魔獣との戦いするとき、オリバーはそれ以前にもある程度経験を積んではいましたが、パトリックは騎士としてデビューしたばかりだったので本当にこれが初陣でした。にも関わらず、獅子奮迅の働きをしたので、彼自身の評価が急上昇したのです。オリバーと初めて出会ったのもこの時でした。

では次話をお楽しみに！



オリバーと仲間たちは旅の支度を整え、ヴォルフの宿を出発するところ。目指す目的地はリバー王国の東側に位置するロンドランド地方です。ロンドランドへの旅路は比較的近くて安全なので、オリバーたちは戦力を分けることにしたようです。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「15・ロンドランドへの旅立ち」

朝、オリバーたちは旅支度を整えていました。

「それじゃあオリバー、私たちは先に出発するよ。」

パトリックがオリバーに話しかけます。

「ああ、ハンスとペーターをしつかり頼んだ。お前らもしつかりと腕を磨いてこいよ。」

「必ず先生の期待に応えて見せます。」

「見ていてください！」

パトリックたち三人は最近魔獣がたくさん出現するようになったというシーガルンへ向かう街道沿いの村へ向けて出発しました。

「今回は戦力を分けるんだな。」

見送りに来たヴォルフが言います。

「ロンドランドはあまり遠くない。一週間もあれば行って帰ってこれる。だがそこからナンジューマに行くにはかなりの時間がかかってしまうからロンドランドに行ったらもう一度ここに帰ってくる。パトリックたちならそれくらいの時間があれば簡単にかたをつけてきてくれるはずだ。ペーターもあれ以来パトリックを信用しているし、ハンスも気分転換ができていいだろう。」

「なるほどな。ロンドランドは基本的に安全な土地だ。魔獣に会うこともまずないだろう。…とにかく、気をつけて行け。」

「ああ、わかった。…よし、みんな行くぞ！」

オリバーの号令に、仲間たちは東へと向けて歩き始めました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

先頭はピアノカを一緒にカトリーヌに乗せたアリスです。

「ほらほら、ここで左に曲がって！…もう、アリスももう二週間近くもオーベルクにいたのに、そろそろ道を覚えなよ。」

「うむ…努力はしているのだが…。」

「森の中なら初めて行った場所でもすすい進めるのに…。」

「森の木々は一つ一つがまったく違う形をしている。だが…街の建物はすべて同じに見えてしまう。そう思わぬか？」

「…あたしからすると、木が違う形してるようにはまったく見えな
いけどね。それこそ全部同じ形に見えるよ…。」

「何だと、不思議なことを言うのだな、ピアンカは。」

~~~~~  
~~~~~

その後ろではレオンとマチルドがいつものように口論していました。

「そもそも占術の重要さをお前はわかつちやいねえ！」

レオンが息巻いて言います。

「何だよ、型にはまった訓練場流の話のしすぎで頭でもやられたのか？」

「何を言ってるんだ。古くから占術は戦いの前に重要視されていた。星のまたたき、雲の流れ、獣の不自然な行動。すべて戦いにおいて重宝される。」

マチルドはバカにしたような顔で言いました。

「…まったく、お前みたいに、街の連中は占い師の言うことを鵜呑みにするようなバカだからろくに戦えないんだ。」

「いいか？それらはだいたい天気の変わり目を現しているんだ。例えば雨が降る、とか、霧が出る、とか、日照りが続く、とか。占い師なんて言うのはそういうのをちゃんと知っていてもっともらしくお前らに言うんだ。少なくともあたいらのような山賊や、アリスたちみたいな狩人なら生活の中で自然に身につくような知識だぜ。」

「…ふ、ふざけるな！それでも俺が知っている占い師の先生はな、三年前にハングリアの街に洪水が襲いかかってくることを、」

「それも説明してやるよ。それはそもそもお前らが悪いんだぜ？お前らが山の木をたくさん切りまくったから、…。」

~~~~~  
~~~~~

その後ろでオリバーは次々とマチルドに種明かしをされて焦るレオンを見て苦笑いしながらローレンツの話聞いていました。

「なあ、オリバー。火薬というものを知っているか？」

「カヤク？…さあ、聞いたことがないな。何だ、それは。」

「何でも、ここから東に歩いて何年もかかるような遠い国の燃える薬らしい。どうやら、何かの物質と物質が反応して爆発する、っていう原理らしいぜ。」

「まるで魔術みたいだな。」

「そう、俺たちもそう思ったんだ。だからお前が何か知っているかな、と思ったんだ。」

「うーん…、俺も東方世界のことは古い文献で少し読んだだけだからあまりよく知らないなあ…。」

「実はちよつと考えてみたんだ。ものが爆発する時にはものすごい力が生まれるだろ？だから、それを利用して例えば鉄の球なんかを筒で飛ばしたら、ものすごい武器になるんじゃないか、って。」

ローレンツが興奮気味に言いましたが、オリバーは苦笑いしました。

「おいおい、わざわざそんなもの使わなくても、飛び道具なら弓矢があれば十分じゃないか。」

「まあ、それはそうなんだが……。」

ローズはオリバーとずっと話しているローレンツを、すぐ後ろで少し恨めしそうに見ていました。

~~~~~

一番後ろはアンヌに乗ったエミリーとイザベルです。

「お馬さんの背中からだとずいぶん遠くまで見渡せますね。」





「もしもし？あなたがたはもしや、ローゼンハイン様のご一行で？」

「そつだよー、へむっ！？」

ビアンカは陽気に答えましたが、アリスがビアンカの口をふさぎました。

「待つのだビアンカ！…農夫、名乗ってしまったからにはもう遅い話だが、なぜ吾れらがオリバーの仲間だとわかる？…貴様、ただの農夫では、」

「待てアリス！」

オリバーは慌てて農夫のもとへ走ってきました。農夫は笑いながらかぶっていた帽子を取りました。

「久しぶりだな、ローゼンハイン殿。」

それは農夫に扮したオットー様でした。

「やはりオットー様でございましたか。」「ご病気も回復なさったようで、何よりでございます。」

「クララの看病のおかげだ。…なあ、クララ。」

オットー様の呼びかけに、クララ様も近づいてこられました。

「…ローゼンハイン殿、オーベルク以来ですね。」

「クララ様も。お元気そうで何よりでございます。」

「あなた方の近況はクララから聞いている。この前もオーベルクを動く死体から救ったという話だな。」

オットー様が感心したように仰いました。

「頼りになる仲間たちの力で何とか頑張っております。」

オットー様はオリバーの仲間たちを見まわされました。キョトンとしていた仲間たちも、驚いてオットー様の前にひざまずきました。

「オットー様とはつゆ知らず、無礼な発言をお許し下さい。」

アリスは無礼を心から詫びました。オットー様は笑って仰います。

「気にすることはない。この格好をしている間は、余もクララもただの農夫だ。…ローゼンハイン殿、オーベルク方面から歩いてきたところを見ると、これからロンドランドへ向かうようだな？」

「ちよつでございませす。」

「うむ、ロンドランドには港町であるトリポート、それに古都であるパカロンという大きな二つの街がある。まずはトリポートへ向かうがよい。」

「ありがとうございます。そのようにさせていただきます。」

「うむ。それではまた会おう。…余も収穫が忙しいものでな。」

「必要とあらばお手伝いいたしますが…。」

「何の、自分自身で収穫するからこそ口にした時の喜びも増えるというものだ。…この暮らしを始めて最初に学んだことだな。」

オットー様は笑って仰いました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

後で、レオンがつぶやきました。

「自分自身で収穫したからこそ食ったら喜びも増える、か…。いいこと言ってくれませ。」

「…確かに他のやつからふんだくった食い物を食っても、あまりうまくねえもんな…。」

マチルドが顔をしかめて言いました。

「おっ？お前もついに山賊から足を洗うつもりになりやがったか！」

レオンが快活そうに笑いましたが、マチルドは頭をかいて言いました。

「いや…そもそもあたいはもう山賊じゃない。…そういつことじゃなくてな、時々お前の弁当から食い物をいくつか盗んでるんだけど、まずくてまずくて…。」

「何だと！？じゃあ時々弁当の中身が減ってるのはお前のせいか！」

「いくら腹が減ってるとは言え、食い物は選んだほうがいいかな…。」

「うるせえ！だいたいお前もシーガルの出身だろう！？」

「あたいの生まれはノーザリン側の村だけ。あいになことにノーザリンの食い物は何でもうまいからな。」

レオンとマチルドはまた口論を始めました。一方、エミリーはアリスを心配しています。

「お姉さま、まだ顔色が…。」

「う、うむ…。オットー様へのあの無礼な言葉を思い出すと恐ろしさがかみ上げてくるのだ…。」

「大丈夫だつて！オットー様はそんなことで怒るような人じゃないよ、きつと！」

ピアンカが励まします。イザベルが苦笑いをしています。

「ピアンカさんも、もう少し危機感を持ちましょうよ…。」

一方、ローレンツは相変わらず興奮しながらオリバーにまくし立てています。

「…でよ、俺っちは思うんだ。少しでも火薬つてやつが手に入ったら間違いなくすごいことが出来るって！」

「あ、ああ。そうだな。」

（さっきから背後にもすごい殺気を感じる…。ローズも険しい顔をしているから、きつとそれを感じているんだろう。用心しよう）

オリバーは殺気を放っているのが嫉妬に燃えているローズだとは夢にも思いませんでした。

オットー様と再会したオリバーたちは、一路ロンドランド地方の港町、トリポートを目指すことになりました。初めのころに比べると冒険の仲間も増え、オットー様も心の底から安心したようです。

次話ではオリバーたちが港町、トリポートに到着します。今まで海を見たことがなかったアリスとエミリーは目の前に広がる光景をよく理解できないようですが…？そして新たな出会いもあります。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーとローレンツが話していた「東方世界」というのはあの4000年の長い歴史を持っている国をモデルとしています。ローレンツはオーベルクに滞在しているときに買った本でこの国のことを知り、興味を持ったのです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「16・港町の大工」 (前書き)

オリバーと仲間たちはリバー王国の東側にあるロンドランド地方への旅が続けていました。途中で再会したオットー様に勧められた通り、オリバーたちは港町のトリポートを目指しました。

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「16・港町の大工」

オーベルクを出発して三日目の朝、オリバーたちはロンドランド地方の港町、トリポートに到着しました。港にはたくさんの船が泊まっています。時間も早いので彼らは街のそばの砂浜で休憩することにしました。

海を見たことがなかったアリスとエミリーは、目の前の光景がよく理解できていないようです。

「うーん！何度来てもこの景色は綺麗だなあ。…アリス、どう？」

ビアンカが気持ちよさそうに体を伸ばした後、アリスに聞きました。

「うむ…、この海というものは、川のようなものか？向こう岸はどこにあるのだ？どこからどこまで流れているのだ？」

アリスが不思議そうな顔をしています。

「それは少し違いますよ。海というのはたくさんの川が集まって出来たものなんです。向こう岸は…私たちの知らない国、ということかもしれませんね。海は世界中とつながっています。」

イザベルが説明します。

「違いが知りたいなら、水をちょっと舐めてみればいいよ。」

アリスとエミリーはピアンカに言われるままに水をすくって飲んでみました。

「けほっ！けほっ！しょっぱい！」

「何と塩辛い……。これでは魚は棲めぬのではないか？」

「それはいずれわかるよ。」

ピアンカはアリスたちの反応を見て楽しそうです。

「湖とも違うのですね……。湖はこのようにしょっぱくありません。」

エミリーがオリバーに話しかけました。

「ははは、そうだな。」

「そうそう、わたくしたちの森の中に、とてもきれいな湖があります。それで、面白いことに注ぎ込む川も、流れ出る川ありません。」

「ほう、面白いな。よく行っていたのか？」

「わたくしたちがよく狩りをした、水の枯れた谷を登って行った時に偶然見つけたのです。それ以来、いつも狩りの帰りにはそこで休んだり泳いだりしたものですよ。」

「もっとも、こんなに塩辛いのでは泳ぐ気にもならぬがな。…吾れにはあの男たちが信じられぬ。」

アリスが沖の方を見えています。レオンとローレンツは海に入り、銚子を振りまわしています。やがて重そうなかごをさげて帰ってきてきました。

「おーい、大漁大漁！」

「昼飯にしようぜ！」

籠の中には魚がたくさん入っていました。エミリーが籠の中を警戒しながら覗き込みました。

「こんな水の中でも魚が棲めるのですね…。食べられるのですか？」

「何だって？海の魚を食ったことねえのか？」

レオンは驚きを隠せません。その時、ローズとマチルドが走ってきました。

「おい！貝をとってきてやったぜ！」

マチルドの声を聞いて、アリスが顔をしかめました。

「なっ、貝だと！？…吾れはあの泥臭さが苦手だ。食糧がなくて追い込まれた時にしか食わぬ。虫よりはましだとは思うがな。」

「それ…川の…。」

ローズがショックを受けたような顔でアリスを見ています。

「アリス、虫なんて食べたんだ…。まあ、食べてみなって。」

ビアンカが食事を二人に勧めます。

「うむ…。」

「はい…。」

~~~~~

食事が終わると、気味悪がっていたアリスとエミリーも満足そうに  
していました。

「こんなおいしいものがあるなんて思いませんでした。」

「これだけでも、オリバーとともに旅をしてきた甲斐があったとい  
うものだな。」

オリバーが笑います。

「はははっ、これで満足されちゃ困るよ。まだまだやることはたくさんあるんだからな。」

「さあ、街に行こうよ。宿を探さないかね。」

ピアノカの声に、仲間たちは街に向かって歩き始めました。

~~~~~  
~~~~~

一行は街の中に入りました。港町というだけあって、外国の人もたくさんいるようです。

「？。？ ♯ ？、 ？？？？」

外国の人に話しかけられたオリバーはすました顔で答えました。

「？ ♯ ？ ……？、 ？？？？」

「???! 「！」

外国の人は嬉しそうにオリバーと握手をすると、去って行きました。

「…師匠、何を話していたの？」

ピアンカがびっくりしたようにオリバーに尋ねました。

「いや、港はどっちだと言われたから、ここをまっすぐ行けば着くって。」

仲間たちはあんぐりと口を開けたままです。

「言葉ってというのは少しでも覚えておくと便利だぞ？」

オリバーが笑いながら言ったその時、彼らの前の方で騒ぎが起こりました。

「…何だろう、見に行ってみるか。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちが大声が聞こえたところにつくと、一人の青年が倒れていました。遠くの方では何人かの兵隊が大笑いしています。レオンが兵隊を見て眩きました。

「あの格好…中央から派遣された駐屯兵じゃねえか。」

オリバーが青年に駆け寄ります。

「おい、しっかりしろ。大丈夫か？」

「切り傷がありますね…。このお薬を塗りましょうか。そしてこれを飲ませてあげてください。」

イザベルが薬を差しだしました。

「あ…ありがとうございます。くそーっ、駐屯兵のやつら…。」

青年が悔しそうにぼやきます。

「何があったのか聞かせてくれ。」

「迷惑な連中だな。住民を守るためのはずの駐屯兵が、住民の生活を脅かしているなんて…。」

オリバーは顔をしかめました。その時、家の外から大きな歌声が聞こえてきました。先ほどの兵士たちが戻ってきたようです。オリバーはマチルドに言いました。

「…マチルド、お前、最近昔の血がうずくことはないか？」

「最近はないな…。でも今日はそうかもしれない。」

マチルドがニヤリと笑って言いました。

「そうだな、今日は暴れてきてもいいぞ。」

「合点だ！」

マチルドは家を飛び出すと、兵隊たちから金貨の入った袋をサッと奪い去りました。

「ああっ！金を盗まれた！」

「ほーら、こっちだこっち！悔しかったらなくなる前に取り返してみろー！」

マチルドは笑いながら言うと、金貨を一軒に一枚ずつ投げ込んでゆきます。

「俺たちをバカにしゃがって！痛い目見せてやるぞ！」

「できるもんならやってみなーっ！」

マチルドは楽しそうに兵隊をからかって逃げました。結局兵隊たちは夜までマチルドを追いかけましたが、捕まえることはできませんでした。

~~~~~

結局オリバーたちはラルフの家に泊めてもらうことになりました。ラルフは日頃の鬱憤をオリバーたちにぶつけています。

「前の王様の時はここの街は本当に自由だったんです。でもギル大

臣はこの街の持つ財力に目をつけました。駐屯兵なんて言うけど、やつらはいつても何かと理由をつけて僕らから金を巻き上げるんです。…しかもギル大臣の公認で。」

「ひどいことを平気でするんだなあ…。」

オリバーがあきれ果てたように言いました。すると、ローレンツがラルフに話しかけました。

「…おい、ラルフと言ったか？この図面はいつたい…。」

「あはは、恥ずかしいもの見られちゃったな…。それは僕が駐屯兵に仕返しできないかと思って考えた装置の図面ですよ。」

ラルフは照れ臭そうに言いましたが、ローレンツはひどく感心したようです。

「恥ずかしいだって？何を言ってるんだ。こんな素晴らしい仕掛けを思いつくなんて、お前はなかなかの素質があるぞ…。他にはないのか？」

「あ、はい、奥の部屋にあります。」

二人は奥の部屋へと入って行きました。オリバーが笑いながら言いました。

「…どうやら、仲間がもう一人増えそうな感じだな。こういうサポ―ト型の仲間が増えると大いに助かる。」

「それにしても…、ラルフってやつはどんな図面を書いていたんだ？」

レオンが図面を覗き込みます。

「えーっとね…、水の力で槍を飛ばす機械？なのかな？」

「細かいうえに歯車がたくさんあってよくわかりませんね…。」

イザベルとビアンカは首をかしげています。

「…これは専門家しかわからないところだな。」

オリバーが笑って言いました。そこへマチルドがこっそりと帰ってきました。マチルドはそれにまったく気づかないオリバーに襲いか

かろうとしましたが、ローズに蹴り飛ばされてしまいました。

「ふえぶっ！」

「…お帰り、マチルド。」

ピアンカが笑いをこらえながら言いました。

「くっそーっ…。何か知らないけど街の人からお礼をもらったから土産を買ってきてやったぜ。人のために働くってのはいいねえ。」

マチルドは担いでいた袋をどさつと床に下ろしました。中にはおいしそうな食べ物がたくさん入っています。

「よくやったな、マチルド。よし、ローズ。奥から二人を呼んできてくれ。とりあえずみんなで食べようじゃないか。」

ローズはコクンと頷くと、部屋を出て行きました。

翌日からラルフがオリバーたちの仲間になったことは言うまでもありません。



## 人物紹介

↳ラルフ・ハーシュ

・「大工」

・20歳。

・一人称は「僕」

・トリポートの優秀な大工。気の優しい青年。いろいろな発明のアイデアを持っている。ローレンツのことを親方とあがめている。何を教えてものみ込みが早いので、ローレンツも少し焦っている。

やはり戦闘には参加できないが、サポート役としての存在は大きい。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「16・港町の大工」（後書き）

オリバーの仲間に、新たにラルフが加わりました。ローレンツと同じように戦闘に参加することはできませんが、いつも武器の手入れをしてくれます。欠かすことのできないサポート型の仲間です。

次話ではオリバーたちはロンドランド地方の古都、パカロンに到着します。ここで久しぶりにビアンカの気まぐれが仲間を振り回すことになるようですが…？そしてこの街で最後の仲間が加わります。どうぞお楽しみに！

ちなみにトリポートは、ギル大臣が政治を行う前は商人たちの自治がおこなわれていました。中世の関西のS市のような感じですね。しかしギル大臣はこの街を強引に支配下に置き、商人たちから多額の税金を巻き上げて私腹を肥やしているのです。

では次話をお楽しみに！



「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「17・未熟な魔女」 (前書き)

ロンドランド地方のトリポートでラルフを仲間に加えたオリバーたちは山を一つ越えたところにある古都、パカロンに向かいました。ここはギル大臣が王様を退けるまではオットー様が治めていた街です。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「17・未熟な魔女」

新たにラルフを仲間に加えたオリバーたちはトリポートから半日かけて歩き、昼過ぎにロンドランド地方の古都、パカロンに到着しました。オリバー、イザベル、ビアンカが先頭になって歩いていきます。

「初めて来たのに何だか懐かしい感じのする街ですね。」

「さすが古都、といった感じだな。」

オリバーとイザベルが感慨深げに言いました。

「もともとリバー王国とは別の国だったらしいけど、ずっと昔に友好的に一つの国にまとまった。それまではここがこっちの国の首都だったらしいね。」

ビアンカが説明しました。

「ああ。…確かオットー様はロンドランドの旧王家の末裔だったな。」

「うん。とっても位の高い人だもんね。」

その後ろではローレンツとラルフが話しこんでいます。

「いやいや親方、この長さはこのくらいにした方がいいんじゃないですか？」

「おお、なるほど、そういう手もあるか。だとしたら、この軸も調節しなきゃならないな。」

「さっすが親方！」

「…あの二人、すっかり意気投合したのはいいけど、話すことが専門的すぎて意味がわからないや…。」

ピアンカが難しい顔をつくって見せました。

「ハハッ、そうだな。…今回の旅はラルフが仲間になったという大きな収穫を得ることができた。今日はゆっくりとこのパカロンで休んで、明日オーベルクに出発することにしようか。」

「さんせい！…そうと決まれば、エミリー！アンヌに乗せて！」

ピアンカは嬉しそうに声を上げると、エミリーに声をかけました。

「はい?…ええ、構いませんが…。」

「イザベルはカトリーヌに乗って!」

「はい?…よくわかりませんが、アリスさん、乗せていただけます?」

「うむ、かまわぬが…、いつもはピアンカが吾れの後ろに乗っているではないか。」

「気まぐれだよ!準備できたー?じゃあ行くよっ!ハーツ!」

ピアンカはアンヌのお腹を蹴りました。エミリーはアンヌが急に走り出してびっくりしました。

「ひゃっ!?!ちょっとピアンカさん!何を!?!」

「アリスたちもちゃんとしてきてーっ!はいっ、そこ左!」

「ま、待つのだエミリー！」

二頭の馬は土煙を巻き上げて走り去って行きました。取り残されたローズとマチルドは拗ねたような顔をしています。

「しょうがないな。この辺りにいればそのうちに帰ってくるだろう。……ほら、ローズもマチルドも元気出せ。その店で食べ物おごってやるから。」

二人はオリバーにそう言われると、とても嬉しそうにしました。

「ハハッ、まだまだ子どもだな。」

「何だとっ！？」

マチルドはまたレオンと言い争いを始めましたが、ローズはオリバーの後ろにぴったりとくっついてお店の中に入って行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちが宿の中で休んでいると、一人の少女が店の中に入ってきました。店の主人がその顔を見るなり迷惑そうな顔をして言いました。

「おいおい、お前はもう来ないでくれって言っただろっ?」

少女は悲しそうな顔で店を出て行きました。マチルドがすかさず主人に文句を言います。

「せっかくの客にあんなこと言うなんて、この店はそんなにはやってるのかよ?」

すると店主は困った顔をして言いました。

「いやあ、本当はあんなこと言うつもりはないんだけどねえ、あいつが来るといつも店の中が大変なことになるんだ…。」

「へえー?」

ローズが窓の外を見ると、先ほどの少女が向かいのお店から出てきました。やはり追い払われたようです。ローズは立ち上がりました。

「アイスドゥーム！」

少女は大空に向かって叫びました。ローズは思わず目を閉じました。しかし、彼女が目を開けても街には何も起こっていません。ただ、たった今叫んだ少女が氷漬けになっていました。ローズは驚くと少女に駆け寄り、短剣で周りの氷を叩いて壊してゆきました。

「痛いよう！痛いよう！氷が砕けて痛いよう！」

ようやく氷が砕けて少女は動けるようになりました。

「うつつ…。助けられてありが…、え？ちょっと待って？もしかしてさっきの私の言葉、聞いてました？」

「さっきの、言葉…？」

ローズが首をかしげました。

「街を、氷漬けにしてやる、って…。」

「…今自分で言ってる…。」

少女は自分自身にショックを受けたようです。

「あーもう、どうしよう！こんなこと街の人に知られたら…、そう
だ、あなたがいなくなればいいんだ！覚悟っ！ファイアーストーム
！」

少女がイザベルがいつも使う炎の攻撃魔術を使ったので、ローズは
体をピクツと硬直させました。しかし…、

「…いやあああつ！熱い！熱い！熱い！」

少女の服が燃え上がりました。ローズはたまたまオリバーから預か
っていた寝袋で叩いて少女の火を消しました。

「また失敗してしまいましたっ…。」

少女はもう泣きそうな顔をしています。ローズは黙っていましたか、
何かを思いついたのか、少女の手を引いて歩き出しました。

「え？ちよつと、どこへ連れて行くんですか？離してください！」

「どこだっという…。…私はローズ。」

「え？名前？…私はモニカです…。」

「別に聞いてない…。」

~~~~~  
~~~~~

そしてオリバーたちの泊まる宿…。

「…で、放っておくのは危なっかしいから連れてきた、と…。」

ローズがコクンと頷きました。オリバーはやれやれと息を吐きました。

「まあ、ここで知り合えたのも何かの縁だ、ということにしておこうか。」

「そう考えるのが一番よいだろう。」

アリスが笑顔を見せながらも疲れを隠しきれない表情で言いました。アリスとエミリーは一日中ピアンカに振り回されくたくたに疲れてしまっているのです。

「…アリスもエミリーもお疲れさん。こうなるだろうと思ったから、今日は二人用の個室をとってある。」

「かたじけない…。」

「ありがとうございます、オリバーさん…。」

「一晩ゆっくり休んだら疲れも取れるよ！」

ピアンカがケロツとした様子で言いました。

「誰のせいだと思ってるんですか…。」

エミリーはため息をついて部屋を出て行きました。

「…それにしてもオリバーさん、この子はすごいです。」

イザベルがオリバーに話しかけます。

「イザベルは疲れていないのか？」

「少なくともあのお二方よりは大丈夫かと…。」

「そうか…。で、何がすごいったって？」

「この子の魔力です。…名前はモニカさん、でしたっけ？」

「魔力が？」

「ええ。もしかするとオリバーさんよりも強い魔力を持っているかもしれません。」

「何だって!？」

オリバーはびっくりしました。

「ものすごく強い魔力です。…失敗したとはいえ、魔術の中では最も難しいと言われる氷の魔術の呪文を知っているわけですからね。」

失敗したようですが。」

「ああ、それは俺も聞いた。失敗したようだが、ローズの聞き違いでなければ、それもかなり上級の氷の魔術だ。失敗したようだが。」

「そんな、失敗失敗って言わなくても…。」

すでにモニカは泣き出しそうな顔をしています。イザベルが続けま

「私はこの子が仲間になることには賛成ですよ。大きな力と可能性を秘めているわけですからね。…魔術に関しては私が面倒を見ましよう。それでどうですか？」

「無論、拒むつもりはないよ。まあ、モニカが嫌だといったら話は別だがな。モニカ、どうする？」

オリバーとイザベルはモニカを見ました。

「…皆さんと一緒にいたら、魔術も使いこなせるようになりますか？」

「ああ、イザベルがすっかりと面倒を見てくれるだろうからな。」

モニカは意を決したように言いました。

「…わかりました、ではお願いします。」

モニカが頭を下げると、ローズが嬉しそうにしました。マチルドが怪訝そうにローズを見ています。

「…何だよ、ローズ。ずいぶん嬉しそうだな。」

「…アリスに…褒めてもらった…。」

「はあ？」

「妹がまた一人増えて嬉しいって…、頭を撫でてもらった…。私にも妹ができたみたい…。」

「じゃああたいも妹だぜー？お前より年下だし。」

ローズはマチルドを遠い目で見た後、言いました。

「こんな乱暴な妹はいらない…。」

「なっ、何だつてーっ!？」

ローズとマチルドはつかみ合いを始めました。そんな二人を見ながらレオンは苦笑いしました。

「やれやれ…。ところでオリバー、ローレンツとラルフの姿が見えねえが、別室にでもいるのか？」

「…何でもここでしか手に入らない金属があるとかで、夜市に言ったよ。」

「…あいつら、どんどん俺たちの理解できねえ方向に走っていつてるな。」

「まあ、すべて自分の力を発揮するために頑張ってるってことだろ。俺たちも頑張らないとな。」

「そうそう! みんなで頑張らないとね! もう一回街に出てこようかな? 師匠! レオン! 一緒に来る?」

「お前は少し落ち着け。」

「むー…。」

興奮気味のピアンカをレオンが押しとどめました。オリバーはその様子をおかしそうに見ていました。

~~~~~

## 人物紹介

〈モニカ・クラウド〉

- ・「未熟な魔女」。
- ・15歳。
- ・魔術で戦う。
- ・一人称は「私」
- ・パカロンに住んでいた。炎と氷の魔術を使えるが、失敗して暴発することが多い。実は持っている魔力はオリバーやイザベルよりもずっと大きい。コントロールができないだけ。口癖は「また失敗してしまいました」。それじゃいけない。まだまだ経験不足。でもいつも一生懸命がんばる。後に判明するが、パトリックのことが大好きになる。



魔術師のモニカがオリバーたちの仲間に加わりました。このモニカが最後の仲間となります。とにかく経験不足でよく魔術を暴発させてしまうようですが、イザベルの言ったように大きな可能性を秘めていることは確かです。

次話では、オリバーたちがロンドランドへの旅を終え、オーベルクのヴォルフの宿に帰ってきました。しかし、そこで待っていたのはボロボロに傷ついたハンスでした。はたして何が起こったのでしょうか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにパカロンはリバー王国内ではキンフィールド、オーベルクに次いで大きな街です。オットー様は本当に領民のことを考えて治めていたので、人々はオットー様がいなくなって本当に寂しがっているようです。オットー様はギル大臣に真っ向から対抗していたので、今はパカロンはギル大臣直属の駐屯兵に制圧されているという感じですよ。

では次話をお楽しみに！

ロンドランド地方の古都、パカロンで魔術師のモニカを仲間に加えたオリバーたちは再び拠点であるオーベルクに帰ってきました。しかし、どうやら彼らはゆっくりしてもいられないようです。

「悪の大臣」 一章・仲間を探して 「18・逆襲のネクロマンサー」

一週間ぶりにオリバーたちはオーベルクに帰ってきました。街はすっかり活気を取り戻しています。レオンとアリスが話しています。

「やっぱり街はこごじやなくちゃな。」

「うむ…人が多すぎるのは苦手だが、活気がないのは寂しいものだからな。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちはヴォルフの宿に帰ってきました。

「ただいま、ヴォルフ。」

すると、血相を変えたヴォルフがバタバタと奥から出てきました。

「お、オリバーか！大変なんだ、ハンスが大変なんだ！」

「ハンスが…？何かあったのか！？」

~~~~~

いつもの部屋でハンスがリリーの看病を受けていました。額からも血を流しています。

「ああつ、先生…。お恥ずかしい姿を見せちゃって…。」

オリバーはリリーに向き直りました。

「リリー…。ハンスを看病してくれてるのか。ありがとう。」

「当然だよ。大事なお客さんだからね。」

「先生…これから何があったのかお話しします。それが終わったらすぐにペーターとパトリックさんを助けに行つてあげてください。」

「わかった。」

ハンスが話し始めました。

「西の村の方は着いたその日に片付きました。すぐに帰ってこられたんですが、二日前に北の村を魔獣と動死体が荒らしまわっているという情報を受けて三人で状況を確認に行っただけです。そして前に動死体を操って襲ってきたネクロマンサーが気づいたらしく、俺たちを巧みに追い込んでついに囲まれてしまいました。」

俺は先生に応援を頼むようにパトリックさんに言われ、動死体たちは突破できたんですが、魔獣にやられちゃいましたよ…。」

動死体は少なく見積もって百体、魔獣もかなりの数がいました。」

オリバーはハンスの話を聞いて少し考えていましたが、すぐに立ち上がりました。

「よし、アリス、エミリー、悪いが俺とイザベルを乗せて北の村まで全速力で走ってくれ。動死体を叩きに行く。」

「うむ、わかった。」

「準備をします。」

アリスとエミリーは部屋を飛び出して行きました。

「確かレオンとマチルドも馬を扱えたな？俺たちよりは遅れてもかまわないから、お前らも馬で俺たちを追いかけてきてくれ。ローズとビアンカもそれに乗せてもらうんだ。そして外側の魔獣たちを始末してくれ！」

「よし、馬は俺が工面しよう。知り合いに頼めば二頭くらい貸してくれるだろう。」

ヴォルフも言います。

「ローレンツとラルフとモニカは残っていてくれ。：特にラルフとモニカは、魔獣や動死体のことをハンスとローレンツから聞いておくといい。」

すると、外から大声が聞こえました。

「オリバー！用意ができた！早く乗れ！」

窓の外でアリスとエミリーが待ち構えています。

「わかった。イザベルも準備はいいな？」

「大丈夫です。」

「すぐに追いかけるからな！」

レオンが後ろから声をかけます。オリバーはカトリーヌに飛び乗りました。

「よし、乗ったぞ、アリス！」

「少々荒っぽくなるが、覚悟をしておけ。エミリーも準備は出来たか！」

「はいっ、お姉さま！」

「では行くぞ！ハアーツ！」

二頭の馬はものすごい勢いで街の中を駆け抜けてゆきました。それを見送るとヴォルフも言いました。

「よし、俺も馬を連れてくる。用意して待っていてくれ！」

「頼んだよっ！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

山の断崖の下に、ペーターとパトリックは追いつめられていました。

「まさか、パトリックさんが剣の使い手でもあるとは思いませんでした。」

「馬から降りるときはだいたい剣で戦うからね。」

パトリックは愛馬、フランソワの身を案じ、戦いになる直前で逃がしていたのです。

「…生きていれば、またどこかで会うこともあるぞ。」

「それにしても俺たち、まだ咬まれていないのが奇跡みたいですね…。」

二人はボロボロでしたが、咬まれてはいませんでした。

「咬まれた時点で、私たちは向こう側の仲間入りだ。」

パトリックが木々の陰から見え隠れしている動死体たちを指さして言いました。

「ついにここまで追いつかれましたか…。」

「逃げ場所はないようだね。」

「俺たちが今すべきことは、ただ目の前の敵に向かって行くことだけです。」

「そうだね。…これが最後の戦いだ。精一杯やろうじゃないか。」

「はい。」

二人は剣を構えなおしました。

「ぎんぎん…」

アリスとエミリーは馬を止めました。

「見る、何かを引きずったような跡が森の奥へと続いている…。この奥に動死体たちがいることは間違いない。」

「用心して進みましょうか？」

エミリーが提案しましたが、オリバーは首を横に振りました。

「…どうせ奥に動死体がたくさんいることはわかっているんだ。それならば一気に突っ込んだ方がいい。」

「うむ、わかった。ならば森の中も今の速さで行こう。オリバー、イザベル、頭は常に吾れらよりも低くしておけ。枝に当たって吹っ飛ばかもしれぬからな。行くぞ！」

アリスとエミリーは二頭の馬をものすごい勢いで森の中を走らせました。狩りの獲物を追うような速さです。時おり魔獣が襲いかかってきましたが、オリバーとイザベルが魔術で倒しましたし、そうではなくてもものすごい速さの馬たちに追いつけることなど出来ません

でした。

~~~~~

ペーターとパトリックは果敢に戦っていましたが、ついに体力の限界が来てしまいました。そこへ仮面をかぶったネクロマンサーが二人の前に現れました。ねちっこい声で話しかけてきます。

「：なかなかよく戦うじゃないか。どうだい、私の手下にはならないかい？もちろん動死体としてではないよ。人間として。」

「あいにくだが俺には心から慕っている先生がいる。悪魔に魂を売るつもりはないね。」

ペーターがネクロマンサーを睨みつけながら言いました。

「残念だねえ。すぐにでも強力な魔力を授けてやろうと思ったのに。まあ、それならそれでいいさ。動死体どもに食われてしまうがいい。」

その時です。ヒュンという音がしたかと思うと、二人に迫っていた動死体が燃え上がりました。ネクロマンサーは驚いて逃げようとし

ましたが、何歩か走ったところで後ろから聞こえた叫び声のせいで足が動かなくなりました。

「フイクセイション！」

カトリーヌとアンヌが動死体たちの輪の中に入ってきました。二頭からオリバーとイザベルが降りてきます。

「ファイアーストーム！」

イザベルが叫ぶと、近くの動死体たちが一斉に燃え上がります。

「エミリー！吾れらも行くぞ！」

「はいつ、お姉さま！」

アリスとエミリーも次々と炎の矢を射て行きます。オリバーはペーターとパトリックに駆け寄ります。

「何とか無事だったか！」

「無事：なんででしょうか？」

ペーターが苦笑いしながら言いました。

「冗談を言えるってことは、無事ってことだ。ここまでよく頑張ってくれた。あとは俺たちに任せろ。」

オリバーも剣を抜くと、動死体たちに斬りかかりました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一方、遅れて駆けつけたレオンたちも、森の中で魔獣たちと戦っていました。ローズとマチルドも慣れた短剣で戦えるため生き生きしていました。

「魔獣相手じゃ、お前らにはかなわねえな。」

レオンが少し肩をすくめながらピアンカに言いました。

「経験が違うからね。ほら、来てるよ！」

「これでかたがついた…。：さあ、お前には聞かなければならないことがあるな、ネクロマンサー。オーベルクに続いてなぜ近隣の村も襲った！」

オリバーはネクロマンサーに近づいて言いました。ネクロマンサーは黙ったままです。

「…答える気はないか。ならば尋問が必要だな。まずはその仮面を外してもらおうか。」

オリバーはネクロマンサーの仮面を外しました。そこへ、魔獣との戦いを終えたレオンたちが駆けつけました。イザベルが声をかけます。

「皆さん！お怪我はありませんでしたか？」

「下つ端の魔獣ばかりだったからねー、戦いやすかったよ。」

ピアンカが威張ったように言いました。

「ちよつどこちらも終わったところです。」

「今から捕らえたネクロマンサーを尋問するところだ。」

アリスとエミリーも嬉しそうに言いました。レオンとマチルドは興味津々です。

「ネクロマンサーを捕まえたって？そりゃあいいや！」

「尋問かあ、面白そうだな！おい、オリバー！あたいにもやらせろよーっ！」

マチルドは走り出そうとしました。が、ローズが手を出してそれを止めました。

「何だよ、ローズ。」

「先生…様子が、変…。」

オリバーはじっとネクロマンサーを見えています。そして、ついに冷酷な声でこう言いました。

「…尋問はやめだ。死ね。」

オリバーは魔術をかけて動けないままのネクロマンサーに叫びました。その目は冷酷、というより残酷そのものでした。

「カーズアタック!…一撃などで殺してやるものか。苦しめ。苦しんで死ね!」

「お、おい待てよオリバー!そいつは貴重な情報源だろ!?殺すなよ!」

レオンが慌てて叫びますが、オリバーは魔術をやめようとしません。

「オルクス!」

ネクロマンサーは動けぬままもがき苦しんでいます。あまりのことに、仲間たちもその場に硬直してしまっています。

「…キラーサンダー!」

最後にか叫ぶと、空から真っ黒い雷がネクロマンサーに落ちてきました。ネクロマンサーは地が裂けそうな叫び声をあげると、消えてしまいました。オリバーは肩で荒い息をしています。仲間たちは茫然としていましたが、やがてイザベルが口を開きました。

「超一級の…いにしえの禁じられた闇の魔術をあんなに使うなんて…。…みなさん！まずはヴォルフさんの宿に引き返しましょう！…ここの仕事は終わりですからね！…オリバーさんも行きましょう。」

オーベルクへの帰り道、宿に着くまでオリバーも仲間たちもほとんど無言でした。

オリバーは仮面を外したネクロマンサーの顔を見た瞬間、何かにとりつかれたように自我を失ってしまいました。はたして何が起こったのでしょうか？

次話ではオリバーが自分の秘密について仲間たちに語ります。はたしてオリバーの過去とは…？そして仲間たちは今までどおりに冒険を続けることができるのか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーはネクロマンサーを瞬殺しないようにわざと魔術を弱めていました。それだけでもネクロマンサーに対しての怨念が強いということを示しています。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「19・オリバーの秘密」 (前書き)

突如捕えたネクロマンサーに対して禁じられた魔術を連発して葬ったオリバー、その目には深い憎しみの念が込められていました。はたしてオリバーとネクロマンサーとの間にいったい何があったのでしょうか？

「怨嗟というかさ…、もう自我を見失ってる感じだったぜ？」

レオンが肩をすくめました。ヴォルフはレオンにたずねました。

「そのオリバーはどこへ行ったんだ？」

「さつきからハンスが寝ている部屋にいるみたいだ。…まあ、様子を見に行こうってやつはいねえだろうがな。」

他の仲間たちも小さな声で今日の出来事を話しています。どの表情も不安げです。

「…とりあえず、みんな疲れただろうから飯でも食えよ。オリバーも黙ったままってことはないだろう。そのうちにわけを話しに下りてくるぞ。」

ヴォルフがみんなを落ち着かせるように言いました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ヴォルフが言った通り、やがてオリバーはハンスと一緒に階段を下りてきました。仲間たちは黙ってオリバーを見えています。オリバーはカウンターに座ると、ヴォルフに声をかけました。

「…ヴォルフ、まずは水を一杯くれ。」

「ああ。…ほら、水だ。」

オリバーは一気に水を飲み干しました。

「ありがとう。…ふうっ。冷たくてうまいな。」

「当然だろ？」

「さすがだ。…みんな、こっちに集まってくれ。ほら、この魔術師の指輪も外すよ。」

オリバーが仲間たちに言いました。しかし、レオンが静かに言いました。

「…なあ、オリバー。別に俺たちはお前を怖がってるわけじゃねえんだ。ただお前の話が聞きたいだけだ。指輪ははめていてくれ。」



「ああ、すまなかった。失礼なことをしちまったな。…今までハンスと話をしていたんだ。」

…今日起こったことを説明するには、俺の昔話をしなきゃならん。この話を聞いて俺のことを信用できなくなった場合は、仲間を抜けてもらっても一向にかまわない。」

深刻なオリバーの声に、仲間たちも黙って聞いています。

「これは俺がパトリックたちと一緒に魔獣と戦ったさらに前の話だ。俺はまだ十七歳だった。その頃俺は、今のような呪いの魔術師、などという肩書きではなかった。…魔術師たちは俺をこう呼んだ。闇の魔術師、と…。」

「闇の…魔術師…。」

モニカがびっくりしたように眩きました。マチルドがたずねます。

「それってどんなものなんだ？」

「呪いの魔術を扱う魔術師は善悪二つに分かれていますと言われている。」

ます。∴闇の魔術師とは、悪を司る方の魔術師です。」

「今日唱えていた魔術も、その頃使っていたものだ。∴当時の俺はあちこちで悪事を働いたが、その後、前にパトリックの話に出ていた魔獣退治の時に指揮官となるトミーさんに倒されてしまった。トミーさんは心を入れ替え、人々のために働くのなら許すと言って俺の命を奪わなかった。俺は感激し、トミーさんのもとで戦うことを決意した。」

ある日、闇の魔術師がある村を襲おうとしている、という情報が入った。トミーさんは先遣隊として、俺ともう一人、同じように闇の魔術師から改心した部下を現地に派遣した。俺たちの活躍によって闇の魔術師の撃退には成功した。しかし、そこで事件が起こった。」

オリバーはそこまで一気に話すと、フウツと息をつき、水を飲んだ。

「トミーさんは俺たち二人をその村にしばらく警戒のために残らせた。その間にもう一人の魔術師は村の長老の娘に惚れたんだ。だが娘はその魔術師に見向きもしなかった。なぜなら∴俺が自分で言うのもおかしい話だが、その娘と俺は惹かれあっていたんだ。何度も人の目を盗んで密会していた。」

それを知ったもう一人の魔術師は激怒した。そして俺に苦痛を味わせながらも絶対に死ぬことができない魔術をかけ、俺が苦しんでいる目の前で長老の娘を殺し、更に村に火を放ったんだ。やつはそ

れ以来姿をくりました。かけつけたトミーさんたちのおかげで俺も命は救われたが、村人もほとんどが焼け死んでしまった。

親を失った幼い子供はトミーさんの部下が手分けして育てることになった。そして俺が担当することになったのが…ハンスだ。」

みんな驚いてハンスを見ました。

「それにもうわかっていているやつもいるだろう。…今日戦ったネクロマンサーこそ、その時村を焼きつくした闇の魔術師だ。」

俺にはレオンの声も聞こえていた。貴重な情報源を殺すな、という声がな。だが俺は、自分の中の憎しみを押し殺すことができなかった。その上…決して許されない禁じられた闇の魔術も使ってしまった。それも、自分自身で絶対に使うまいと誓ったのに…。自分の復讐のため、それだけに俺は間違ったことをしてしまった…。

…これが、俺が話そうと思ったことだ。これを聞いて、心穏やかではないやつもいるだろう。仲間を抜けたいとも思うかもしれない。でも…、俺は止めるつもりはないよ。」

オリバーは力なく肩を落としました。

~~~~~  
~~~~~

すると、誰かがオリバーの肩に手を置きました。まじまじとオリバーを見ています。

「ローズ…。」

オリバーはびっくりしたようにローズを見ました。

「先生…やっぱり、変…。」

「一流の魔術師ともあるう君が、そんな小さなことを気にするとは思わなかったよ。」

パトリックが笑いながら言いました。

「魔術師というものがたびたびつらい思いをする、その気持ちは私もよくわかりますよ。」

イザベルも笑顔を取り戻して言いました。

「結局どうであれ、あたしたちの敵が間違いなく一人消えたんだよ。あたしたちやオーベルクの人を危険にさらした一人の敵がさっ。」

ピアンカが励ますように言いました。

「憎しみで感情を押さえられなくなるのは人間として当然のことだと思っけどな。現場にいたわけじゃないから、そんなことしか言えないが。」

ローレンツが頷きながら言いました。

「少なくとも俺はこんなことでおさらばしようとは思わねえぜ。俺はあんたを信用してここまでついてきたんだ。その気持ちは今だって変わっちゃいねえぜ?」

レオンがオリバーの肩をバンバン叩きながら言いました。

「これで弱みを握ったからな、夜の襲撃だってしやすくなるかもしれないぞ!」

マチルドがニヤリと笑いながら言いました。

「少なくともこの度のことで改めて自分自身を知ることができたの  
だろう？それはお前にとって大きな飛躍になると思うのだが。」

「逆にわたくしたちもオリバーさんのことを改めて知ることができ  
ました。今後またこういうことがあっても、今度はわたくしたちが  
補助できることができるのではないですか？」

アリスとエミリーが安心したように言いました。

「僕は、改めてオリバーさんがすごい人なんだ、ってことがわかり  
ました。それに、ついてきてよかったとも思っています。」

ラルフがオリバーを尊敬するようなまなざしで言いました。

「私と同じくらいの中からそんな危険な魔術を使いこなしていたな  
んで…。でも今はそれを封印してみんなの役に立っていることがす  
ごいです。オリバーさんは素晴らしい魔術師だと思います。」

モニカが目をまん丸にして言いました。

「みんな…。」

「…俺たちは言うまでもありませんよね！」

「先生はいつまでも俺たちの先生です！」

最後にハンスとペーターが元気いっぱいに言いました。

「おいおい、そんなこと言って、お前ら一生一人立ちしねえつもりか？」

レオンが笑って言いました。

「ち、違いますよ！」

「ふうーっ、どうなることかと思ったが、問題は無事に解決だよ！ ようし、今日は俺とリリーのおごりだ。みんな好きなだけ食って好きなだけ飲んで好きなだけ騒げ！」

「はいはい、みんな遠慮なく飲んでね！」

ヴォルフとリリーの言葉にオリバーの仲間たちは大声をあげて喜びました。

~~~~~  
~~~~~

仲間たちがお酒に酔って大騒ぎしている中、オリバーは屋根の上に寝転んで星を見上げていました。たくさん星が輝いています。休むように目を閉じると、サツという音がしました。

「ローズか。」

ローズがコクンと頷きます。

「みんなは？」

「もつ…めっちゃくちゃ…。」

「なるほど…。察したよ。」

オリバーは笑いましたが、少し沈んだ声でローズに聞きました。

「…俺のこと、怖くないのか？」



ローズは首をかしげました。

「その気になれば、今だって俺は人を殺す闇の魔術を使おうと思えば使えるんだ。お前らだってやられるかもしれない。」

「…やっぱり今日の先生、変…。」

「えっ？」

「先生が信頼してる仲間を攻撃するなんて絶対にありえない…。少なくとも私はそう思う…。昔どっしっていたかより、今どっしっているかの方が大事…。」

オリバーは驚いた顔をしました。急に笑い出しました。ローズは怪訝そうな顔をしています。

「ハハハハ…。いや、俺は何をバカなことを悩んでいたんだろう。あは、あは、ハハハハ…！」

「やっぱり変…。でも、よかった…。」

(最終的に不安になっていたのは…俺一人だけだったんだな…)

下ではボタンと大きな音がしました。レオンとアリスが宿の外に飛び出しています。なぜかラルフも引つ張り出されています。

「いい加減にしろ！貴様が何と言おうと、ノーザリンが一番住みよいのだ！」

「わかんねえやつだな！シーガルンに決まってるだろ！」

「…うむ、やはり貴様とは言葉では決着はつかぬようだな。」

「あ、あの、僕は何のために連れてこられたんですか？」

ラルフは戸惑いを隠せません。

「ラルフ！そこで俺たちの勝負を見届けろ！…いくぞ、狩人娘！」

「望むところだ！バカ訓練師範！」

目の前で取っ組み合いをしている二人を見てラルフは、

「僕はロンドランドが一番だと思えますけど…。」

と言いましたが、二人には聞こえていなかったようです。

「ローズ！いつまで師匠といい感じになってるの！ちょっと降りてきなさいっ！」

「お前を倒せばオリバーの寝首をかける！」

ビアンカとマチルドが屋根を見上げて叫んでいます。オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「俺の寝首…？何のことだ？」

ローズはびっくりしたようです。

「何も…知らないの？」

「んっ？」

「…何でもない。ちょっと行ってくる…」

「ハハッ、ライバルとの絡みが恋しくなったか？」

「そんなところ…」

ローズは屋根から地面にスタンと降り立ちました。それを見てオリバーは微笑みました。

（俺は本当にいい仲間たちを持ったなあ…）

~~~~~  
~~~~~

\*オリバーが自信を取り戻してパワーアップしました\*

く悪の大臣く 一章・仲間を探して 「19・オリバーの秘密」 (後書き)

オリバーと仲間たちとの間の絆は、オリバー自身が思っていた以上に強いものだったようです。この話で一章「仲間を探して」は終了です。

次話からは二章「リバー王の秘宝」に突入します。オットー様からの依頼の一つ、「リバー王国初代王のリバー王の残した秘宝を探す」ため、オリバーたちの冒険が続きます。そして次々と強力な敵が現れてきます。どうぞお楽しみに！

この後、オリバーや仲間たちの固有能力などを改めて表記しようと思いません。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く おまけ（前書き）

ここではオリバーとその仲間たちのステータスや固有技を書いていきます。

く悪の大臣く おまけ

くオリバーく

固有技 ・ 呪いの魔術

能力 ・ 魔術

・ 指揮

・ 剣

・ 冷静

・ 対魔獣

・ 援護

「呪いの魔術」は、使用する魔術が主に呪いの魔術となる。特有の能力「指揮」は仲間全体の攻撃・回避能力を上げる。短所は体力の減りが他の魔術師に比べ早いこと。

くハンスく

固有技 ・ 突進

能力 ・ 槍

・ 警戒

・ 剣

・ 慎重

・ 対人

・ 勇敢

「突進」は、相手に致命的な貫通攻撃を行う。特有の能力「警戒」は敵の不意打ちの確率を下げる。短所は精神力が低めであるため、異常状態になりやすくなること。

くペーターく

固有技 ・ 気合の一撃

能力 ・ 剣

・ 畏感知

・ 槍

・ 大胆

・ 対獣

・ 根性

「気合の一撃」は、通常の二倍のダメージを与えることができる。特有の能力「畏感知」は畏を見つける範囲が広がる。短所は「気合の一撃」の後、隙が出来て敵に狙われやすくなること。

くローズく

固有技 ・ かばう

能力 ・ 小型武器

・ 潜伏

・ 連携

・ 回避



- ・先制
- ・???

「かばう」は、瀕死の仲間をかばって攻撃を受ける。特有の能力「潜伏」は戦闘中敵に狙われにくくなるとともに、ときどき敵に不意打ちをかける。短所は体力値が低いこと。最後の能力はストーリーのネタばれになってしまうので非公開でお願いします。

くパトリックく

固有技 ・騎士の誇り

能力

- ・槍
- ・騎士
- ・剣
- ・騎馬戦
- ・対人
- ・勇敢

「騎士の誇り」は攻撃五回につき一回、強力な全体攻撃を行う。特有の能力「騎士」は絶対に精神的な異常状態にならない。短所は「騎士の誇り」の直前直後に戦線を離脱すること。

くイザベルく

固有技 ・毒の魔術

能力 ・魔術

- ・応急手当
- ・冷静
- ・鼓舞
- ・対魔獣
- ・援護

「毒の魔術」は使用する魔術が主に毒の魔術となる。特有の能力「応急手当」は戦闘後仲間の体力を少し回復する。短所は体力値と素早さが低いこと。

くビアンカく

固有技 ・フェイント

能力

- ・剣
- ・反撃
- ・連携
- ・回避
- ・鼓舞
- ・先制

「フェイント」は敵を不意打ちした際、敵を混乱状態にする。特有の能力「反撃」は攻撃を受けた後に反撃する。短所は小型武器以外の武器を使用する仲間の中で攻撃力が最低であること。

くレオンく

固有技 ・斬り払い

能力

- ・ 槍
- ・ 市街戦
- ・ 剣
- ・ 大胆
- ・ 対人
- ・ 勇敢

「斬り払い」は通常の二倍のダメージを敵に与える。特有の能力「市街戦」は市街地での戦いの場合攻撃力が二割増しになる。短所は森の中での戦いの時に攻撃力が二割下がること。

〈マチルド〉

固有技 ・ 引きつける

能力

- ・ 小型武器
- ・ 暗視
- ・ 連携
- ・ 回避
- ・ 根性
- ・ 先制

「引きつける」は仲間が特殊行動に入りそうになった時に敵の攻撃を受ける。特有の能力「暗視」は暗闇で見える範囲が広がる。短所は精神力が低いこと。

〈アリス〉

固有技 ・ 毒の矢

能力 ・ 射撃武器

・ 山岳戦

・ 騎馬戦

・ 大胆

・ 対獣

・ 援護

「毒の矢」は敵を瞬殺もしくは毒のダメージを付与する。特有の能力「山岳戦」は森での戦いの場合攻撃力が二割増しさになる。短所は市街地での戦いの場合攻撃力が二割下がることと、精神力がやや低めなこと。

（エミリー）

固有技 ・ 炎の矢

能力 ・ 射撃武器

・ 山岳戦

・ 騎馬戦

・ 慎重

・ 対獣

・ 援護

「炎の矢」は敵を瞬殺もしくは火傷のダメージを付与する。なお、オーベルクでの動死体との戦いの前はエミリーも「毒の矢」が固有技。「山岳戦」はアリスと同じ。短所は市街地での戦いの場合攻撃

力が二割下がることと、攻撃力がやや低めなこと。

〈モニカ〉

固有技 ・ 氷の魔術

能力 ・ 魔術

・ 暴発

・ 連携

・ 根性

・ 対魔獣

・ 援護

「氷の魔術」は使用する魔術が主に氷の魔術になる。特有の能力「暴発」は発動時敵に大ダメージを与えることが出来る。短所は暴発発動時、味方にも多少のダメージを与えてしまうこと。

・ 剣 剣の扱いがうまくなる

・ 槍 槍の扱いがうまくなる

・ 小型武器 小型武器の扱いがうまくなる

- ・射撃武器 射撃武器の扱いがうまくなる
- ・魔術 魔術の扱いがうまくなる
- ・対人 人型の敵に強くなる
- ・対獣 獣型の敵に強くなる
- ・対魔獣 魔獣の敵に強くなる
- ・冷静 精神的な異常状態になりにくくなる
- ・援護 他の仲間の攻撃命中率が上がる
- ・大胆 攻撃力が上がるが、命中率が下がる
- ・慎重 命中率が上がるが、攻撃力が下がる
- ・根性 瀕死ギリギリで耐える

- ・勇敢 攻撃を重ねることに攻撃力が少しずつ上がる
- ・連携 ときどき仲間の攻撃と連携して敵を攻撃する
- ・回避 敵の攻撃の回避率が上がる
- ・先制 ときどき敵に攻撃される前に攻撃する
- ・鼓舞 仲間の攻撃力を上げる

く悪の大臣く おまけ（後書き）

ゲームの解説みたいになってしまいました。が…、仲間たちの能力はこんな感じですよ。



く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「20・次なる目的地へ」 (前書き)

このお話から「悪の大臣」は二章に入ります。オリバーたちはリバー王国の南にある地方、ナンジューマ地方への旅の準備をしているようです。

オーベルクの街の外れの小さな宿、その使われていない納屋で二人の魔術師がもう一人の魔術師を見ていました。

「だいぶまともになったな。明日からの旅にもつれていけそうだ。」

「ええ。以前より暴走することも少なくなってきました。まだ若いので、大きな技を使ってもすぐに体力を回復できます。…よくできましたね、モニカさん。」

「ありがとうございます、イザベルさん、オリバーさん。」

オリバーとイザベルに褒められ、モニカは照れくさそうにしました。

「これならパトリックも感心するんじゃないのか？」

オリバーはからかい気味に言いました。モニカはヴォルフの宿に遊びに来たパトリックと少し話をただけで、紳士的な彼をすぐに憧れのまなざしで見えるようになったのです。モニカは顔を真っ赤にしています。

「かつ、からかわないでください!…ひゃあっ!」

「おっと、ちょっとやりすぎたかな?」

「あらー…、またまた氷漬けに…。ファイアーストーム。」

イザベルが放った小さな炎が氷漬けになったモニカを溶かしました。

「…また失敗してしまいましたっ…。」

落ち込むモニカを見てオリバーは苦笑いしながらイザベルに言いました。

「イザベルも、すっかりと炎の魔術を身につけたな。」

「モニカさんの魔術を指導していたら、いつの間にか使いこなせるようになりましたよ。」

イザベルは少しだけ得意げに言いました。

「俺もやってみるか。ファイアーストーム!」

オリバーもほんの少しだけ炎の魔術を身につけていました。炎が消えるのを見届けてからイザベルがオリバーに言いました。

「…そうそう、ローレンツさんたちに頼んでいたものがあるんです。オリバーさん、申し訳ありませんが、受け取ってきてもらえますか？」

「ああ、いいよ。」

オリバーは快くその頼みを引き受けました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーは宿の裏の使われていない物置に入りました。

「よう、オリバー！今ちょうど一仕事終えたところだ！」

ローレンツとラルフが中で作業をしていました。

「二人とも、調子がいいな。」

「僕も親方も、いつでも絶好調ですよ！」

ラルフが胸を張ります。

「ハハハ。…イザベルから頼んでいたものを受け取ってくれと言われたんだが。」

「ああ、これです。…おっと、刃先には気をつけてくださいよ?」

ラルフが注意深く短剣をオリバーに見せました。

「あのイザベルってお嬢ちゃんも、考えるもんだぜ。まさか鉄粉の中に魔術をかけた粉を混ぜて短剣をつくれ、なんてな。」

ローレンツが感心したように言います。

「なるほど…。考えつかなかったが、いい考えだな。うまくいったのか?」

「当たり前だ。見る、炎の短剣で壁を焦がしちまった。」

ローレンツが指さした壁には焦げた跡がありました。それからローレンツが言いました。

「悪いんだが、頼んできたのはイザベルだが、こいつはローズとマチルドのものなんだ。届けてくれないか？」

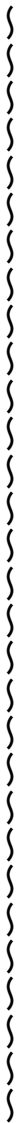
「ああ、いいぞ。」

「こつちが毒の短剣、こつちが炎の短剣です。…一応、混ぜりものが入っている分切れ味は少し悪くなっている、ってことを伝えておいてください。」

ラルフが短剣をケースに入れ、オリバーに渡しました。

「わかった。いずれ俺が呪いの魔術をかけたやつもつくってくれな
いか？」

「お安い御用だ。」



~~~~~

マチルドは宿の一階のカウンターに座っていました。やっぱりレオ  
ンと口論しています。

「だから、言ってるだろ？こういう山道の場合はこういう風に陣取  
るのが一番いいに決まってるぜ。」

「違うな。それよりもこうした方がいい。」

「バカ、そうしたらいざというとき逃げられないだろ？それだった  
らな、」

「おい、何をするんだ！俺の美しい陣形を崩すな！」

「よう、二人とも。相変わらず元気だな。」

オリバーが笑いながら言いました。レオンがしかめっ面をします。

「おいおい、ずいぶんなご挨拶だな。」

「ははっ、すまんすまん。マチルド、ローレンツがこれをお前に届けるって言ってたぞ。」

「ああ、イザベルが言ってたやつか。ありがとよ。」

「いやいや。扱いには注意するようにつて。」

「そんなに言わなくてもわかるぞ!」

マチルドは口をとがらせました。

「お前はまだ子どもだからな、オリバーも安心できねえんだろ。」

レオンがニヤニヤしながら言いました。

「何だとーっ!？」

勝ち誇った顔でマチルドを見ながら、レオンがオリバーに言いました。

「そっだ、オリバー。こいつはペーターのだろっ?そこに忘れてた



ぜ？」

「胸当てか。確かにペーターのだ。昨日からないって大騒ぎしていたんだ。しょうがないな、持って行ってやるか。」

~~~~~

オリバーは自分の部屋の扉を開けました。中ではハンスとペーターが荷造りをしています。

「ペーター、この胸当て、一階にあったらしいぞ。」

「あっ！俺の胸当てです！ようやく見つけた！」

「自分のものくらい、しっかり管理しておけ！」

オリバーは厳しい顔でペーターを叱りました。

「すみません…。」

「やれやれ…。そうだ、ローズを知らないか？」

「さあ、知りませんよ。宿にはいないんじゃないですか？」

ハンスが答えました。

「そうか…。それなら先にパトリックと旅の打ち合わせをしてくる
とするか…。」

「パトリックさんのところに行くんですか？それなら、これを届け
てあげてください。」

ハンスがオリバーに何かの包みを差ししました。

「薬か？」

「イザベルさんがみんなに、って解毒薬を新しくつくってくれたん
です。あと渡していないのは先生とパトリックさんだけだって…。
先生の分は机の上に置いてあります。」

「そうか、それなら持って行ってやるつ。」

オリバーは薬を受け取ると、部屋を出て行きました。

~~~~~

オリバーはパトリックが泊まっている宿につきました。部屋に案内されると、パトリックがベッドに寝転がっていました。

「やあ、オリバー。」

「明日からの旅の打ち合わせに来た。それと、これはイザベルがつくった解毒薬だそうだ。」

「おお、ありがとう。」

パトリックは笑顔で受け取りました。

「基本的に今回は俺たちとずっと一緒に行動してくれ。…それにしても、フランソワが帰ってきてよかったな。」

ネクロマンサーとの戦いのおきに逃がしたパトリックの愛馬、フラ

ンソワですが、数日前に主人の前にひよっこりと帰ってきたのです。パトリックは涙を流して喜んだそうです。

二人はしばらく談笑していました。

「さて、そろそろ戻るか。」

オリバーが腰を上げると、パトリックが思い出したように言いました。

「あ、そうそう。この前ビアンカに借りた旅行小説があるんだけど、もしよかったら返しておいてくれないかい？とても面白かったと伝えておいてほしい。」

「ああ、わかった。」

オリバーはパトリックから一冊の本を受け取りました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

とは言え、オリバーはオーベルクにいるときいつもビアンカがどこ

にいるのか知りません。普段ヴォルフやリリーに聞いても首をかしげるばかりなのです。

(まあ、最悪明日の朝に返すか、それがヴォルフの宿に置いておいてもらえばいい…)

しかし、ビアンカは意外とすぐに見つかりました。ビアンカは橋の欄干の上で土笛を吹いていました。オリバーを見かけると、ビアンカはご機嫌な様子で声をかけました。

「よっ、師匠！何してるのー？」

「パトリックのところからの帰りだ。…お前こそ、こんなところで何をしてるんだ？」

「見てわかるでしょ？笛を吹いてるんだよ。」

「何でこんなところで…。しかもそれはアリスの笛だろう？」

「そうそう、返しそびれちゃったんだよねー。宿に帰るんなら、返しておいてもらえる？」

「そうか、わざわざすまないな。」

「あれ？オリバーさん、その短剣は何ですか？」

エミリーがオリバーのマントから見え隠れしている短剣を見つけて
言いました。

「あっ、忘れるところだった…。これはローズの短剣だった。」

「ローズか。うむ、先刻、お前のことを探していたぞ。」

「本当か。どこにいるかわかるか？」

「部屋にいなかったら…いつもの場所じゃないですか？」

エミリーが首をかしげながら言いました。

「宿にはいるんだな。わかった、ありがとう。」

「いえ…。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーは屋根の上に上りました。お目当ての仲間やはりそこにいました。

「ローズ、やっぱりここにいたか。」

ローズは突然声をかけられてピクツと体を硬直させました。

「最近、お前はよくこの場所で時間をつぶしているな。ここが気に入ったのか？」

ローズはコクンと頷きました。

「そうか。…ほら、短剣だ。イザベルが魔力を封じ込めたやつだ。こっちが毒、こっちが炎らしい。」

ローズは短剣を受け取り、まじまじと見ていました。



「先生のは…ないの？」

「俺の？それは、呪いの魔術をこめた短剣、ってことか？」

ローズはコクコクと頷きます。

「いずれ作ってもらおうとは思ったが…欲しいのか？」

「欲しい…。」

「そうか。じゃあ、ローレンツたちと相談するとするか。よし、そろそろ晩飯だ。下に降りようか。」

ローズは頷くと、オリバーと一緒に下に降りて行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌日、オリバーと仲間たちが宿の前に勢ぞろいしました。ヴォルフとリリーが見送ります。

「またしばらく会えないな。寂しくなるよ。」

「ああ、何しろ今回は長旅になる。ナンジューマは相当遠いようだからな。ナンジューマはキンフィールドから遠い分、まだギル大臣の影響力もそれほど大きくないらしい。」

「体に気をつけてね。」

リリーもどこか心配そうです。

「ありがとう。…それじゃあそろそろ俺たちは出発するよ。」

「体に気をつけるよ!」

二人の見送りを受け、オリバーたちは南へと旅立って行きました。

オリバーと仲間たちは南のナンジューマ地方に向けて旅を始めました。しかし、この旅はこれまでにないほどに大変な旅となります。

次話ではオリバーたちがナンジューマ地方を目指してひたすら旅を続けます。しかし、そんな彼らに次々と問題が発生します。果たして彼らは無事に旅を続けることができるのでしょうか？

ちなみにローズが時間を潰していた屋根は、本当の屋根ではなく、宿の入り口の雨よけのような小屋根で、二階の廊下からそこに行くことができます。

では次話をお楽しみに！

オリバーたちはリバー王国の南、ナンジューマ地方に向けて旅をしていました。旅はとても長いものになっていますが、仲間たちの中にはすでに何かがおかしいことに気づいている仲間がいるようです。

オリバーと仲間たちは街道を南に向けて歩いていました。

「あれ、モニカ？苦しそうな顔してるけど、大丈夫？」

ピアンカがモニカの異変に気づきました。

「こんなに長く歩いたことがなくて…。足のマメがつぶれてしまいました。」

「パトリックの馬にでも乗せてもらったら？」

ピアンカがいたずらっぽく言いました。

「ああ、かまわないよ。ほら、手を貸すんだ。」

パトリックのことを尊敬しているモニカはすこしまごつきましたが、フランソワに乗せてもらいました。モニカは馬に乗ったことがないのかパトリックにしがみついていたましたが、だんだん顔が赤くなってきました。

「広い…背中…」

それを見たビアンカはニヤニヤしながらローズに話しかけました。

「…おやおやー？ローズ、モニカもあんたと一緒だね。」

「…どづいつ意味？」

「だってさー、どうやらモニカはパトリックの背中にしがみついて真っ赤でしょ？ほら、ローズだって師匠に、うひゃっ！」

ローズが顔を真っ赤にして短剣を振りまわしています。走って逃げるビアンカを追いかけ、ローズも走りだしました。だんだん遠くなくなって行く背中を見て、先頭を歩くオリバーは苦笑いしました。

「まったく、旅はまだまだ長いっていうのに、あいつら大丈夫か？」

「いつものことでしょう？」

「どうせもつ少し歩いたら二人ともボロボロになって道端に座りますよ。」

二人の弟子も笑います。しかし、オリバーは何か引つかかるものがあるようです。

「ああ。…うーん、しかし、何だか妙だな…。」

「やっぱりオリバーさんもそう思われます?」

すぐ後ろを歩いていたイザベルが話に入ってきました。

「イザベル、やっぱり気づいたか?」

「ええ…。」

「何ですか…何もわかりませんよ。」

ハンスは首をかしげています。

「俺はわかりますよ、先生。…まだ昼飯を食べてない!」

ペーターが胸を張って言いました。オリバーはあきれたようにため息をつきました。

「バカか。さつき宿で朝食を食べたばかりだろう。」

すると、後ろから笑い声が聞こえました。アリスとエミリーです。二人は少し馬の脚を早めると、オリバーたちに追いつきました。

「オリバー、お前の魔術は徹底されたものだが、弟子の教育はまだまだ不徹底なようだな。」

「はは、みつともない限りだな。」

オリバーは苦笑いしました。

「吾れらも気づいているぞ。…向こうからこちらに来る旅人が明らかに少ないな。」

「さすがだな、アリス。」

「これだけ狭い道なのに、すれ違ったためにアン又たちを道の端に寄せることがほとんどありません。」

エミリーも言います。オリバーは難しい顔をしました。

「もう旅の半分以上は進んでいるんだ。ナンジューマからの旅人が増えてきてもおかしくないはずなんだがな…。」

「ナンジューマで、何かが起こっているのでしょうか…。」

エミリーは少し心配そうです。

「さあな。行ってみなければわからないさ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

しかし夕方になると、今度はナンジューマの方向からやってくる旅人が一気に増えました。オリバーは一人の旅人に聞いてみました。

「失礼、突然ナンジューマの方から来る旅人が増えた気がするんだが…。君はナンジューマの人かい？」

「いや、俺はロンドランドの者だ。レオポートで仕入れた香草を売  
るためにナンジューマに向かっていたんだ。」

「あんたたちもナンジューマに向かっているのかい？ だったら無駄  
足だ。引き返した方がいいぜ。」

「無駄足？ なぜですか？」

今度はイザベルが聞きました。

「この先のナンジューマとの境にある関所が封鎖されているんだ。  
旅人は中に入れないぜ？」

「何だつて？」

オリバーはびっくりしました。

「ここから関所までの間に宿もない。引き返すんなら早めにした方  
がいいぜ。」

「そうか、ありがとう。…関所が封鎖されてるだって？」

「他の関所について回はできないんですか？」

ハンスがたずねます。

「ここは一本道だから…。だが、他の道だって封鎖されていない保証はない。むしろ、すべてが封鎖されている可能性もある。」

「私に任せていただければ、関所を通ることはできますよ。」

イザベルが言いました。

「何をするつもりなんだ？」

「方法は内緒です。」

「…だがみんなの意見も聞く必要がある。…どうもナンジューマには恐ろしい危険が待ち構えている気がする。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは仲間たちにこれからの旅について意見を求めました。

「俺は引き返した方がいいとは思うが…みんなが行くっていうんならそれに従うつもりだ。」

レオンが言いました。

「詳しく聞かせてくれ。何で引き返した方がいいと思う？」

「お前と同じ気持ちだからだよ。俺もこの先へ進むと何か危険に巻き込まれる気がする。それも、今までとはまったく違うような危険にな。」

「あたしは進んだ方がいいと思う。」

今度はビアンカが言います。

「…詳しく聞かせてくれ。」

「少なくともあの関所の向こうでは異変が起こってる。もしその異変が人々を苦しめているとしたら…？そうだとしたら、あたしたち

はオットー様からの依頼がある以上、それをみんなに広める必要があると思う。」

「そうか。…よし、多数決を取ろう。正直に手をあげてくれ。引き返した方がいい、そう考えているのは誰だ？」

オリバーの言葉に、レオン、ローレンツ、アリスが手をあげました。

「じゃあ他の全員は進んだ方がいいと考えているんだな？…では今手をあげた三人に聞こう。多数決で俺たちは進むことに決まった。レオンはその決定に従って行動すると言ったが、他の二人にも確認しよう。自分の意思に従って、引き返そうと思っているのは？」

オリバーは三人を見渡しましたが、誰も手をあげませんでした。

「よし、決定だ。全員でナンジューマに向かおう。」

「関所を越えるときは私に任せてください。」

イザベルが言いました。

「わかった。関所での対応は全部イザベルに任せるぞ。」

~~~~~  
~~~~~

山の中の関所で、兵士が叫びました。

「止まれ！ここから先は通行禁止だ！引き返せ！」

「そんな…。私たちはナンジューマにお薬を運んでいるんです。これを運ばないと、多くの人が…。」

イザベルが兵士に文句を言います。

「いかなる理由があろうと、ここを通すわけにはいかん。」

「そんな…。何かこの先には危険なものでもあるのですか？」

「そうだ、この先ではギル、」

兵士が何か言いかけてましたが、別の兵士がその言葉を遮りました。

「あー、この先では魔獣が大量に発生しているのだ。通行人を危険にさらすわけにはいかん。」

「そうですか……。それでは仕方ありません。引き返しましょうか。皆さん、行きましよう。」

あっさりと引き返そうとするイザベルに、オリバーはびっくりしました。

「お、おい、」

「いいですから。」

イザベルたちは関所から引き返しました。それを見届けると兵士たちが話し始めます。

「まったく、余計なことを口にするんじゃない！」

「申し訳ございません。…あれ？俺たち、いつの間に関所の外に出ていたんだ？」

~~~~~  
~~~~~

その頃、アリスとエミリーも異変に気づいていました。

「お姉さま…？登ってくるときにこのような木は見当たらなかった
気がするのですが…。」

「うむ…。それにこのような曲がり道もなかったはずだ。」

「それはそうですね。ここはもうナンジューマです。登ってきた道
とは反対側ですよ。」

「ええっ！？じゃあ俺たちは関所を通りぬけたってことですか!？」

「い、いつの間に!？俺たち、確かに関所で引き返して、」

ハンスとペーターがびっくりしました。

「えっと、あそこで止められて、それで引き返して…、考えれば考
えるほどわからなくなるぜ。」

ピアンカも同調します。

「それはいいんだが…何だか焦げくさくないか？」

「…油のようなおいもしますね。」

ローレンツとラルフが険しい顔をしています。オリバーはマチルドに指示を出しました。

「…マチルド！ちょっとこの先の様子を探ってきてくれ！」

「あいようっ」

マチルドは軽やかに走って行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

しかし、戻ってきたマチルドの顔は真っ青でした。

「やられた！村が全滅だ！」

「何だって!?!」

「この先にある村が焼き尽くされちゃまっているんだ!」

「すぐに案内しろ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは焼け跡となった村につきました。

「逃げ遅れた者たちがこれほど。」

「むごすぎます。」

アリスとエミリーが茫然としています。オリバーがハンスに問いかけました。

「…ハンス、この光景を見てどう思う?」

「…これは少なくとも魔獣のせいじゃない、人間の手によるものです。山賊に襲われたのか、あるいは…」

「ちょっと待てよ、弁護するつもりじゃあないけど、この国の山賊はこんなことはしないぜ？目的さえ達成すれば相手の命を取ることなんて絶対にしない。まして村に火をつけるなんてことは絶対になんないんだ。」

マチルドが言ったその時、前の方から声が聞こえました。

「おい！生き残りがいるぞ！」

「逃げられたら面倒だ！始末しろ！」

剣や槍を手に向かってきたのは…、

「あれはリバー王国の正規軍じゃねえか！百人近くいるぞ！まさか軍がこの村を襲ったのか！？」

レオンが驚いたように言いました。

「許せない…。何の罪もない民を圧倒的な力で手にかけるなど！」

エミリーが怒りの炎を目に宿しながら言いました。それはオリバ―も同じのようです。

「…俺は今までみんなに人間は殺さないように言ってきた。だが、あの連中は丸腰の人間を手にかけて悪魔どもだ。…あとはわかっているな？みんな、行くぞ！」

パトリック、アリス、エミリーが馬に乗って突撃していきます。その後ろからローズ、マチルド、そしてビアンカにレオンが兵士たちに向かって行きました。ハンスとペーターは魔術師たちを護衛します。

「イザベル！モニカ！俺たちもみんなを援護するぞ！」

一人の兵士が馬の上のエミリーを槍で突き刺そうとしました。

「させませんよ！ポイズンラース！」

イザベルが叫ぶと、兵士が血を吐いて倒れました。毒におかされているようです。エミリーがイザベルに叫びました。

「イザベルさん、ありがとうございます！」

「気をつけてください！」

一方モニカは一生懸命魔力をためています。オリバーも励まします。

「ほら、モニカ。頑張れっ。」

「ふう。ふう。…行きます！ファイアーストーム！」

モニカが叫ぶと、今まで見たことのないような火柱が立ち上りました。

「うおおおいつ！あたいらを巻き込む気がよっ！」

「袖が燃えた…。」

ローズとマチルドはとてびっくりしたようです。

「…威力はものすごいが…。」

「コントロールできるようになるまではまだまだ時間がかかりそうですね。」

オリバーとイザベルは苦笑いしました。

「くそーっ、ローズ！あたいらも新しいのを使ってやろっぜ！」

マチルドはまず毒の短剣を引き抜くと、兵士に飛びかかりました。首筋を切り裂こうとしましたが、兵士もすばやく身をかわし、頬のところに小さな傷をつけただけででした。

「生意気な小娘が！串刺しに…うっ？うっ、うわあああっ！顔が焼けるっ！顔があーっ！」

兵士の小さな傷の周りがどんどん紫色に変色していきます。苦しむ兵士の胸に、マチルドは炎の短剣を突きたてました。

「うわあああっ！熱い！体が熱い！」

兵士は転がりまわっていましたが、やがて動かなくなりました。

モニカがびつくりしています。オリバーが使ったのが禁じられた魔術なのではないかと心配したようです。

「心配するな。これは尋問用の魔術として、呪いの魔術師の間で広く認められているものだ。：威力は絶大だがな。さあ、答える！それとも一生この苦痛を味わいつづけるか？」

「俺は王国の兵士だぞ！こんなまやかし程度で、」

「クヴァール！」

「ぎゃああああっ！わ、わかった！これはギル大臣様のご命令だ！」

「ギル大臣の？」

兵士の言葉に、オリバーはびつくりしました。

「はあ…はあ…、ああ、そうだ。ナンジューマに反乱の計画があるって話だったからな。」

「それは村を襲う理由になっていないな。」

「村に賊がかくまわれてるって情報が入ったからな。」

「ほう、確認はしたのか。」

「そんなことをしてたら賊が逃げちまうだろ？だから一気に焼き討ちにしたのさ。俺はただ言われたからやってただけだぜ？」

「それは嘘…。袋に宝石がたくさん入ってる…。血まみれの…。」

ローズが兵士が手にしていた大きな袋を指差して言いました。

「…村人から強奪した何よりの証拠だな。」

「な、なあ、もう許してくれよ。ほら、全部話したからいいだろ？」

「先生が許しても…私は絶対に許さない…!!」

オリバーも他の仲間たちも予想外のローズの大声に驚きました。ローズは炎の短剣を鞘から抜くと兵士に飛びかかり、首を切り裂きました。

「ぎゃああああっ!」

兵士は叫び声をあげたきり、動かなくなりました。

「ローズ…。」

オリバーが心配そうにローズの顔を覗き込みました。ローズは悔しそうに言いました。

「あの時と同じ…。何も調べないで…。ただ憎いだけで…。何もかも奪った…。あの時と同じ…。」

(自分の家族のことと重ね合わせているのか…)

「…だがこれではつきりした。ナンジューマは今危機にひんしている。俺たちが出てくるのが少し遅かったらしい。…恐らく反乱計画もでっち上げだろう。ギル大臣はこの豊かなナンジューマの地をどうにか自分の思うままにしたいらしい。」

…ここで兵隊と戦った以上、俺たちは間違いなく軍に目をつけられるな。旅はより困難になる。今後は兵隊との戦いも増えるだろうが、みんな覚悟しておいてくれ。」

「任せとけてっ！どうせ危険な目に遭うことは承知の上だ。こうなったらとことん行ってやろうぜ！」

強気のレオンの言葉に、ビアンカはあきれたように笑いながら言いました。

「何さ、あんなに弱気だったのに、すっかり元気になっちゃってさ。ま、その方がいいけどねっ！」

「よし、大至急ナンジューマの中心都市、ダナラスフォルスに向かう。恐らく軍の本隊はそこにいるのだろう。ナンジューマ、そしてリバー王国を救うんだ！」

「おおっ！」

オリバーの声に仲間たちは一斉に声を上げました。

「ローズも行くぞ。まだまだ救わなければならない人がいる。」

ローズもすっかりオリバーを見つめると、はつきりと頷きました。

オリバーたちは村を焼き払った兵士たちを蹴散らし、ナンジューマで王国軍による大規模な略奪行為が行われていることを知りました。オリバーたちはナンジューマ地方を救うため、中心都市のダナラスフォルスへと向かいました。

次話ではオリバーたちが神殿都市ダナラスフォルスを解放するため、王国軍と戦います。はたしてオリバーたちはダナラスフォルスを救うことが出来るでしょうか？

ちなみに、リバー王国軍は正規軍のほかに傭兵部隊もいます。しかし、レオンの言ったようにこの村で略奪を行っていたのは正規軍です。より悪質ということですね。

では次話をお楽しみに！

オリバーと仲間たちは軍によって大規模な略奪が行われているナン
ジューマ地方の神殿都市、ダナラスフォルスに到着しました。偵察
に出ているハンスとマチルドが帰ってきたようです。

ちなみにこの前のおまけで、「騎馬戦」の能力の説明を書き忘れて
いたので、ここに書いておきます。「騎馬戦」は馬に乗っていると
き攻撃力が上昇する、です。

オリバーたちはナンジューマの中心都市、ダナルスフォルスの近くの森に潜んでいました。そこへ、偵察に行っていたハンスとマチルドが帰ってきました。オリバーが二人に尋ねます。

「偵察ご苦労。街の様子はどうだった？」

「兵隊たちの本隊は街の北の丘の上の神殿にいるみたいです。全部で三百人、ってところですね。」

「街では兵隊による虐殺や略奪があちこちで行われてるし、女たちも襲われている。目の当てられる光景ではなかったぜ……。」

422

マチルドはしかめっ面をしています。

「そうか、わかった。作戦は夜だ。みんなそれまで打ち合わせをするなり休んだりして、準備を整えておいてくれ。」

仲間たちはそれぞれ木の影に座ったりして体を休めました。すると、ローレンツとラルフがオリバーに話しかけてきました。

「おい、オリバー。お嬢ちゃんが話があるそうだ。」

「ん？…ローズか。何だ？」

ローズは上目でオリバーを見ながら言いました。

「呪いの短剣が…欲しい…。」

「わざわざここですか？すぐに必要なのか？」

ローズは静かに言いました。

「あいつらを苦しませてやりたい…。」

オリバーは厳しい顔をしました。ローズはビクツと震えました。

「…ローズ、お前は今何のために戦っているんだ？」

もちろんお前が復讐したい気持ちもわかる。俺もネクロマンサーを見たときには思わず復讐の衝動に駆られた。だから俺が言えた立場ではないのかもしれないがな。だがこの戦いは危機にさらされてい

るダナラスフォルスの人たちを助けるための戦いだ。わかるか？」

ローズは申し訳なさそうに頷きました。オリバーも笑顔を見せました。

「わかってくれたか。素直なところがお前のいいところだな。」

「でも…短剣は欲しい。」

ローズは遠慮がちに言います。オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「…どうしてそんなに呪いの短剣にこだわるんだ？」

ローズは少しまごつきましたが、言いました。

「呪いの魔術は先生の魔術…。戦っている時も先生がいるみたいで、安心して戦える気がする…。」

オリバーは大笑いしました。

「変なことをいうやつだな、安心できないなんて。お前もまだまだ

子どもだな。わかったよ、そんなに言うなら協力してやる。」

「それなら、この粉に魔術をかけてください。」

やり取りを黙ってみていたラルフは安心したようにオリバーに粉を差し込みました。

「わかった。カーズアタック！」

オリバーが魔術をかけると、白かった粉は真っ黒に変わりました。更に粉がまるで苦しむ顔のような絵を描いています。ローレンツは思わず身震いしました。

「…恐ろしいもんだな。」

「これでいいんだな？」

「ええ。あとはこれを鉄粉に混ぜて短剣を作ります。戦いにはギリギリ間に合うと思います。」

ラルフが自信たっぷりに言いました。

「わかった、出来たら俺にも見せてくれ。俺はパトリックたちと打ち合わせをしてくるよ。」

「わかりました。」

「…それにしてもお嬢ちゃん、気の毒なもんだな。オリバーもあそこまで鈍いとはな。」

オリバーが立ち去った後、ローレンツが気の毒そうにローズに言いましたが、ローズは首を横に振って言いました。

「もう慣れた…。でもこっちの方が好都合…。」

「親方！準備できました！」

「おう、じゃあやるぞ！…うん、この量なら二本作れるな。」

ローズはオリバーに子どもと言われ少し不満そうでしたが、すぐにニヤニヤしながら近づいてきたビアンカとマチルドを追いかけ走って行きました。

やがて、夜になりました。オリバーたちのいる場所からも、街の北の丘の上の神殿のかがり火が赤々と燃えているのが見えます。

「オリバー、呪いの短剣が完成した。何とか間に合ったぞ。」

ローレンツがオリバーのところに行きました。

「見せてくれ。」

ローレンツはケースから短剣を抜きました。夜の闇のような、真っ黒い短剣です。

「ありがとう。じゃあ、ローズに届けてやるか…。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーは仲間たちを集めて、最後の指示を出しました。

「ではペアを確認する。市街地で待機するのはハンスとレオン、ロズとマチルド、ペーターとビアンカだ。ローレンツとラルフは逃げ遅れた人を見つけたら、安全な場所に誘導してやってくれ。」

「神殿に突入するのは、パトリックとモニカ、イザベルとエミリー、そしてアリスと俺だ。俺たちは馬で一気に神殿に突入し、魔術や矢で兵隊たちを混乱させる。そして外に出てきた兵たちを、市街地でお前らが迎え撃つてくれ。道が狭いようだから、槍を使うハンスとレオンは特に用心しろ。」

「合図は火柱だ。神殿の上で、火柱が二回立ち上ったら失敗、すぐにこの場所に帰ってくるんだ。成功した場合は火柱を三回立ち上らせる。その時は全力で神殿に走ってこい。いいな？…よし、作戦の成功を祈る。」

~~~~~

丘の上の神殿で、兵士たちがお酒を飲んで大騒ぎしています。

「まったく、酒はうまい、女は上物、最高だね、ここは！」

「いつまでもここにいたいもんだぜ！ギル大臣万歳！」

すると、見張り台に立っていた兵士が言いました。

「…あれ？おい、こっちに向かって馬が走ってくるぜ？東側からだ。」

「

「見張りに行っていたやつらじゃないのか？」

「それが、一頭しかいないんだ。」

すると、他の見張り台に立っていた兵士たちも次々と騒ぎ出しました。

「おい、西側からも来てるぞ！」

「北からもだ！」

すると、北から来た馬の上から、声が聞こえました。

「カーズアタック！」

すると、北の見張り台に立っていた兵士が急に苦しみました。

「ぎゃあああああっ!」

「どっ、どっした! 苦しみましたぞ!」

今度は西からも声が聞こえます。

「ポイズンラース!」

「うっっ。。。ぐあああっ。。。」

「お、おい! 急に血を吐いたぞ!」

最後に東からも声が聞こえました。

「アイスドウム!」

「か、あっ!」

「うわっ！急に氷漬けになった！」

神殿の北門からオリバーとアリスが、西門からイザベルとエミリーが、東門からパトリックとモニカが突っ込んできました。すっかり油断していた兵隊たちは大混乱です。

神殿の真ん中にオリバーたちは一度集結しました。

「徹底的に暴れまわってやろうじゃないか。」

パトリックが言います。

「うむ。エミリー、矢の準備は出来ているか？」

「もちろんです、お姉さま。」

アリスとエミリーもやる気十分です。

「馬を操るのはお前たちに任せる。俺たちは魔術で行くぞ。」



「わかりました。モニカさん、落ち着くんですよ?」

「頑張ります!」

魔術師たちも気合を入れなおしました。ようやく武器を手にした兵士たちがオリバーたちに向かってきました。

「みんな!行くぞ!」

「オオーツ!」

三頭の馬はバラバラの方向へ走り出しました。アリスとエミリーは巧みにカトリーヌとアンヌを操りながらも正確に炎の矢や毒の矢を射てゆきます。兵士たちはその威力にひるみました。パトリックもフランソワと息の合った動きで突撃していきます。

更に兵士たちを恐怖に陥れたのは、馬の後ろに乗っている魔術師たちでした。呪い、毒、炎、氷の魔術を惜しげもなく使ってきます。

「グレイブ!」

「ポイズンブレス!」

「ファイアーホース！アイスストライク！」

三人の魔術師は、近づいてくる兵隊を馬に寄せ付けません。その結果、パトリックやアリスたちもとても戦いやすくなっていました。

「に、逃げる！ここは捨てて街に逃げるんだ！南門から逃げる！」

兵士たちは南門に殺到しました。半分くらいの兵隊が出たところを見計らって、オリバーはモニカに指示を出しました。

「アイスドウム！」

モニカが叫んだ途端に、扉のところにいる兵士たちが凍ってしまい、中の兵士たちが外に出られなくなってしまいました。

「降伏するなら、今のうちだぞ？」

「くっそーっ！」

オリバーの呼び掛けには答えず、兵士たちは捨て身の攻撃に出てき

ました。

「やれやれ…どうなっても知らないぞ？グレイブ！」

「ぎゃあああっ！」

~~~~~  
~~~~~

街に出た兵隊たちは仲間の兵隊たちが後ろから来ないことを不安に思いました。彼らは街の広場に集まりました。

「でもかまっつてられるか！あんな魔術師にやられるなんてごめんだ  
！」

「あいにくだな！街には俺たちがいる！」

兵士たちは驚いて辺りを見渡しました。前でペーターとビアンカが身構えています。右にはハンスとレオン、後ろにはローズとマチルドです。左には道はないので、兵隊たちは完全に囲まれてしまいました。

「た、たった六人で我らを封じ込めようと言うのか！我らは三十人以上いるんだぞ！」

「人数なんて関係ないよ。問題は腕だね。」

ピアンカがニヤニヤしながら言いました。

「くそっ、女だからと言って手抜きはしないぞ！」

「むー…、女だからって手を抜かれるのは気に食わないなあ。…ペーター、行くよっ！」

ピアンカは不満そうな顔をしてペーターに呼びかけました。

「おおっ！」

二人は兵士たちに斬りかかりました。

「俺たちもやるぞ！」

「はいっ！」

レオンとハンスも槍を手に突っ込んでいきます。

「いいなあ、新しい短剣…。でもそれはお前専用のだからな。大事に使えよ?」

マチルドはローズの呪いの短剣を羨ましそうに見て言いました。

「当然…。重くなるから、代わりにこれあげる…。」

「おっ、お前の毒と炎の短剣か!ありがとう!」

ローズとマチルドも兵士に飛びかかりました。ローズがオリバーの魔術が込められた短剣で兵士を切り裂くたび、真っ黒い煙が巻きあがって兵士たちを苦しめます。絶命前に恐ろしい奇声をあげる兵士もいます。短剣の威力は今までの毒や炎のものとは桁違いのものでした。

「…怖い。でも、使いこなして見せる…。」

ローズは口元を引き締め、兵士たちに向かって行きました。

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちの神殿での戦いも、終わりが見えてきました。

「受け取れ！」

「ぎゃああっ！」

アリスが放った矢は二人の兵士を串刺しにしました。その後ろでオリバーもアリスを援護します。

「カーズアタック！」

兵士たちは次々と苦しみ、倒れてゆきます。オリバーの表情はなぜか晴れやかでした。その時、フランソワに乗ったパトリックとモニカが近づいてきました。

「オリバー、そろそろいいんじゃないか？」

「…ああ、そうだな。エミリー！引き揚げて来い！」

「はいっ！」

彼らの攻撃が終息した瞬間、わずかに生き残った兵士たちは蜘蛛の子を散らすように逃げてゆきました。アリスはカトリーヌを走らせようとしたが、オリバーが押しとどめました。

「追う必要はない。…どうだ、街の様子は。」

「広場で戦っているようですが…。兵士たちの動きはバラバラで統率がとれていません。こちらが優勢なんでしょう。」

イザベルが言いました。

「よし、ならばもうこれで十分だ。モニカ、頼んだ！」

「は、はい！ファイアーストーム！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

広場でハンスが神殿の火柱を見つけました。

「火柱だ！一つ…、二つ…三つ！成功だ！」

「よし！」

六人は一斉に神殿に向かって走り出しました。

「も、もう神殿に戻るのはたくさんだ！」

「逃げろ！もうこんなところにはいられない！」

兵隊たちはみな逃げ出してしまいました。

~~~~~

次の日、ダナラスフォルスからギル大臣の兵隊は一人もいなくなっていました。

「何とかダナルスフォルスの解放には成功した…。だが、これで俺



たちのこともギル大臣に知られてしまっただろう。これからはもつとつらくなる。みんな、それでも大丈夫か？」

オリバーは仲間たちに声をかけました。

「当然だろ？俺たちだってたったこれだけの人数であんなに多くの兵士の撃退に成功したんだ。」

レオンが満足げに言いました。

「街の人たちも感謝してた。あたしたちのやってることはみんなが応援してくれてることだよ。ちょっとくらい困難があったって平気だって。」

ピアンカも胸を張ります。

「これをわたくしたちの新たな出発と考えるべきだと思います。これからわたくしたちの敵は魔獣からギル大臣そのものにな変わったのです。」

エミリーも力強く言いました。

「今さら退けるか、って話だよ。途中でやめるのが一番悪いことだからな。」

マチルドは頷きながら言っています。

「よし、じゃあみんな、これからは今まで以上に団結して頑張って行こう。必ずリバー王国を救うんだ。」

「オオーツー！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その頃、キンフィールド城では…、

「そうか…。やむをえまい、ナンジューマから軍を撤退させるのだ。そして兵たちに国中を巡回させる。ローゼンハインとやら、余の計画をこごとくつぶしおって…。」

食事中だったギル大臣は思わず目の前にあったお皿を叩き割りました。

「大臣、どうぞお気をお鎮めに…。」

「黙れ!…かくなる上は、魔術師に相手をさせる。プレグーとレジオンをここに呼ぶのだ!」

「はっ!」

~~~~~  
~~~~~

やがて、二人の魔術師がギル大臣の前に姿を現しました。

「プレグー、レジオン。ダナラスフォルスが解放されたことは知っておるか?」

「は、大臣様。」

ギル大臣の言葉にプレグーが答えました。

「うむ、それなら話は早い。ダナラスフォルスを解放した魔術師オリバー・ローゼンハインの抹殺、それがお前たちへの命令だ!」

「はっ！」

「…心得ました。」

~~~~~  
~~~~~

二人の魔術師が話しています。

「オリバー・ローゼンハインねえ…。懐かしい名前だ。」

「プレグー、私はこの仕事はどうも気が進まない。手柄はそっくりお前にやるから、お前の好きにしてくれていい。」

「吾輩に？…ヒヒヒ、それならご厚意に甘えることにしよう。安心するのだ。君も戦いにはちゃんと参加していたと伝えておいてやるう。」

気味悪く笑うプレグーを見て、レジオンは心の中で思いました。

(…自信家のプレグーめ、せいぜいあがいて死ぬがいい…。…ロー

ゼンハインはお前ごとときには倒せぬ。やつを葬るのはこのレジオン
なのだ…)

~~~~~  
~~~~~

呪いの短剣を手に入れ、ローズがパワーアップしました

*プレグー・レジオンの人物紹介は後に行います。

ダナラスフォルスの解放に無事成功したオリバーたちですが、すでにもう次の脅威が出現しようとしています。オリバーたちの運命はいかに…？

次話ではオリバーたちの前に闇の魔術師、プレグーが現れます。オリバーはプレグーとは面識があったようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに二人の闇の魔術師の名前ですが、単に「グレープ」と「オレンジ」の語順を並べ替えただけです。とはいえ、彼らの実力と名前の由来は比列しません。

では次話をお楽しみに！

悪の大臣 二章・リバー王の秘宝 「23・新たな敵」 (前書き)

ナンジューマ地方の神殿都市、ダナラスフォルスをギル大臣の兵から救ったオリバーたちは拠点であるオーベルクに帰ることになりました。オリバーはすでに次の目的地を決めているようです。

悪の大臣 二章・リバー王の秘宝 「23・新たな敵」

オリバーたちはオーベルクに戻るため、街道を歩いていました。少し人通りも増えたような感じでした。

「ふう…。よし、みんな。今日はこの辺りで野宿をしよう。」

「また野宿かよお…。」

レオンが思わずこぼします。

「仕方ないさ。宿に敵兵が押し寄せてくる可能性もあるんだ。無関係の人を巻き込むわけにはいかないだろう。」

「それはもちろんそうだが…。」

レオンはまだ不服そうです。

「ビアンカやアリスたちは野宿には慣れてるみたいだな。」

オリバーからの問いかけに、ビアンカたちは得意げに答えました。

「そうだねー。少なくともあたしは旅から旅の生活だから。」

「うむ、その気になれば、吾れもエミリーも木の上にだろつと寝られるな。」

「慣れない頃は、よく落ちたものですよ…。」

「だが、それならあの宿屋にも戻れなくなるんじゃないかねえのか？」

レオンは心配そうに言います。

「ヴォルフの宿では、イザベルが多少無理をして防護の魔術線を張ってくれるらしい。少なくとも魔術師以外にはわからないさ。」

「そ、そうか…。そついやイザベルは野宿には慣れてるのか？」

イザベルは笑って答えます。

「はじめはびっくりしましたが、もう慣れましたよ。」

「イザベルは適応が早いからなあ…。」

オリバーは感心したように言います。

「そこはちょっとだけ自慢できるところかもしれないね。」

イザベルも少し得意げです。

「ほらよ、オリバー。肉が焼けたぜ。」

たき火のそばに座っていたマチルドがオリバーに肉を差しだしました。

「おう、ありがとう。…うん、うまいな。何の肉だ？」

「野ウサギです。ついさっきお姉さまと仕留めてきました。」

エミリーが説明します。

「なるほど。初めて食べたよ。」

「大物のシカを狙っていたのだが…結局それだけだった。」

アリスは少し残念そうです。

「これだけあれば十分さ。」

オリバーが笑って答えます。すると、ハンスがオリバーに言いました。

「そつだ、先生。これからの方針はどうするんです？」

オリバーは少しだけ緊張した面持ちで言いました。

「うん…。みんな十分に経験を積んだし、そろそろ禁じられた洞窟を探してみようかと思っている。」

「いよいよですか…。」

ペーターも緊張した様子で呟きました。

「昔はよくこうやって未来について話していたね。」

「バカなことを言い合って笑ってたもんだ。」

「本当に懐かしいよ……。」

パトリックは笑った後で、少し真剣な表情で言いました。

「……今回のダナラスフォルスの戦い、君は本当にいい表情をしていました。……恐ろしいくらいに。」

「……俺も、自分の中に兵士を殺すことを楽しんでいる自分がいることに気がついた。だから結局、俺にはローズを諭す権限などないのかもしれないな。」

「……これはもともと闇の魔術師だった俺には仕方のないことなのかもしれない。だが……、これともうまく付き合って行かなければならない。」

「少なくともあの兵士たちは民衆を苦しめることを何とも思っていなかったんだ。情けは不要さ。」

「ああ…。」

少し肩を落としたオリバーをパトリックが励まします。

「…ほら、元気を出すんだ。みんな君を慕ってここまで来ているんだ。君が元気なくしてどうするんだい？」

「ハハツ、そうだな。…闇の魔術師が相手なら、だいたいこういう心の隙を狙ってくる。気をつけないとな。」

そう言った途端、オリバーの目が突然鋭くなりました。

「いきなりどうしたんだい？何かの気配でも感じたのかい？」

「…どうやら俺が言った通りのようだ。俺の五感が正しければ…、非常にやっかいなやつが近くにいます。みんな！起きろ！」

オリバーの大声に、仲間たちは慌てて飛び起きました。オリバーが森の中を睨んでいます。

「てっ、敵ですか!？」

ハンスの問いには答えず、オリバーは森の中に向かって言いました。

「…隠れていないで出てきたらどうだ?闇の魔術師。」

オリバーの声に、木の後ろから真っ黒いマントを着てフードをすっぽりかぶった人影が出てきました。

「…プレグー、だな。」

「ヒッヒッ、お見通しとは恐れ入ったね、元闇の魔術師、オリバー・ローゼンハイン。」

魔術師はフードを取りました。仲間たちはその気味の悪い笑いに、背筋がゾッとしました。オリバーは冷静にプレグーに話しかけました。

「お前がいる、ということとは、レジオンもいるのか?」

「レジオンはあんたに愛想を尽かしたよ。ここにいるのは吾輩だけだ。」

「嘘…ではなさそうだな。何の用だ？」

「まあまあ、今日はこのまま帰るつもりさ。今後手合わせをする」とになるだろうから、その挨拶にうかがったまです。」

「お前が俺たちと、だと？」

「そうさ。じゃあ、吾輩はこれで。」

プレグーはそう言ってオリバーに背を向けた。

「待てっ！フィクセーション！」

オリバーは叫びましたが、その前にプレグーはどこかへ消えてしまいました。

「先生…あれは…？」

明らかに動揺したようなペーターがたずねました。

「闇の魔術師、プレグーさ。」

「どんなやつなんですか？」

ハンスも不安げにたずねます。

「…もしプレグーをギル大臣が雇ったのだとしたら…ギル大臣という男は悪魔の申し子としか言えないだろうな。」

俺も若いころに何度も戦ったことがあったが…、見せしめのために女子供三十人の足に穴を開けて鎖を通し、その鎖を熱して死ぬまで踊らせるような男だ。」

「…それはたとえなんだよな？」

冷静に語るオリバーに、レオンは恐る恐るたずねました。

「一点の曇りもない事実だ。俺がやつのかかった一人一人の鎖をはずし、丁重に葬ってやった。他にもやつがどんなことをしたのか聞きたいか？」

「い、いや。あの男がとてつもなく残酷な男だということは十分に伝わった。」

レオンはすっかりと怖れをなしたようです。

「とにかく、あいつは闇の魔術師というものを絵に描いたような男だ。絶対にあいつとは決着をつけなければならぬ。」

「だが、あいつ以上に恐ろしいやつがいる可能性がある。もう一人の闇の魔術師、レジオンだ。」

プレグーはレジオンはいないと言っていたが、レジオンは狡猾だ。プレグーが俺たちを追い込んだところでとどめだけ刺しに来る、なんていうことも考えるやつだ。味方さえも欺く男だからな……。」

オリバーは厳しい顔をして言いました。

「ここに来て、強敵が次々と現れてきたようだな……。」

ローレンツも少し不安げです。

「正直、奢っているプレグーはまだ戦いやすい。問題はレジオンが

どろどろ出てくるのかだな。」

「…おいおい、今からどうのこうの言っただってどうしようもないだろ？まずは今の疲れを取ることが重要なのさっ。寝ようぜー。」

マチルドはそう言って目を閉じました。レオンがあきれたように言います。

「まったく、緊張感がねえなあ…。」

「…だが、マチルドの言うことは正しい。みんなもとりあえず休むんだ。火の番は私とオリバーに任せてほしい。」

パトリックの言葉に仲間たちは気持ちを落ち着けると、また目を閉じました。次第に寝息も聞こえてきます。オリバーがパトリックに言います。

「…俺はこのまま一晩火の番をするつもりだ。お前も寝ていいぞ。」

「いや、私がやるよ。君は気を張りすぎているだろう。君こそ休んで体を休めるべきだよ。」

「いや、いいんだ。今のうちに眠気をたっぷりためて、ヴォルフの宿の固いベッドでぐっすり眠ってやるんだ。」

オリバーが笑いながら言ったその時、ガサリという音がしました。二人が驚いて振り向くと…、

「ローズ？まだ寝ていなかったのかい？」

パトリックが心配そうに言いました。

「眠れない…。だから火の番をする…。」

ローズはオリバーの真横にぴったりとくっつきました。パトリックは少し笑うと、言いました。

「…オリバー、やはり私は眠いみたいだ。すまないけれど二人で番を頼むよ。」

「あ、ああ…。」

「さーて、その前にフランソワの様子を見てこようか。」

パトリックは笑いながらその場を立ち去りました。

~~~~~

パトリックが馬たちがいるところに来ると、上の方から声が聞こえました。

「貴様も気が回るいい男だな。」

「アリス、か…。君も寝ていないのかい？」

アリスが木の上で笑いながらパトリックを見下ろしていました。

「うむ…。恥ずかしい話だが、あの魔術師を見て以来足の震えが止まらぬ…。エミリーはぐっすりと眠っているのにな。よっぽど妹であるエミリーの方が度胸が据わっている。…こんな姿はオリバーには見られたくはないな。」

パトリックは少し驚いたような表情を見せました。

「アリス、もしかして君もオリバーを…、いや、あえて触れる話題でもなかったね。」

パトリックの言葉にアリスは恥ずかしそうに笑いました。

「まあ、な。だがローズには到底かなわぬだろうな。そこは吾れも諦めがついている。…貴様は初めて敵と戦った時はどう感じたのだ？」

「私も騎士として駆け出しの頃はそうだったよ。初めて人間の敵を殺した時も、三日間は眠れなかった。」

「皆同じなのだ。吾れもあの村で兵士を殺した時、とてつもない罪悪感にさいなまれた。それ以前に、今考えてみると…ナンジューマに向かう途中、関所で引き返すか否かという話になった時、内心では吾れは戻りたくて仕方がなかった。恐ろしくてたまらなかったのだ。エミリーが確固とした表情で進むことを決めていたため姉としての体裁を保たねばならなく最終的には進むことにしたのだが…。だが、これに耐えねば国を救うことは出来ぬのだろう…。イザベルも、あのようにつきも笑顔を見せているが内心では恐ろしくてたまらぬと吾れに打ち明けていた…。」

「…君は女性メンバーの中でもまとめ役みたいな位置づけだからね。」

「複雑な気持ちなのだがな。吾れはどちらかというところ新参者の部類だ。なのにこれほど頼られてよいものかと…。」

「そんなことは関係ないさ。失礼かもしれないけれど、君は女性メンバーでも一番年上のようだからね、特にまだ大人になりきっていないローズやマチルドにとってはなくてはならない存在だと思うよ。」

「そのようなものなのか…。頼られている以上は、責任感も生まれてくるな。」

「それをどういう風にとらえるかは君しだいじゃないかな。責任感に押しつぶされるか。」

「それともそれを力に変えるか…。まだやってみなければわからぬな。」

「君なら大丈夫さ。オリバーも君のことをとても頼りにしてるんだ。」

「はは、更に責任感の増すことを言われても困るな。だがオリバー

に頼られているというのは嬉しいことだ。…お前のおかげで何とか眠れそうだ。感謝している。」

「ああ、お役に立てて嬉しいよ。」

二人も笑顔をかわずと、それぞれ木の上と下で目を閉じました。

~~~~~  
~~~~~

一方、焚き火の前では…、

「アリス…ライバル…。先生に頼られて嬉がって…。」

ローズがポツリとつぶやきました。

「ん？何か言ったか？」

「何でもない…。」



闇の魔術師プレグーがオリバーたちの前に現れました。残忍な性格で、仲間たちもすつかりと怖れをなしてしまっただようですが、何とか気持ちを落ち着けることが出来たようです。オリバーのみならず、パトリックも仲間たちをしっかりと励ます役割を担っているのです。

次話ではオーベルクに到着したオリバーたちですが、息をつく暇もなく新たな敵が迫ってくるようです。どうぞお楽しみに！

ちなみにパトリックは周りの誰からも「騎士」と認められています。が、実際のところは馬に乗って戦っているというだけなので、厳密な意味の「騎士」とは異なります。本人も自覚はしているようです。しかし、彼の立ち振る舞いはいつも紳士的で、誰に対しても優しいので騎士本来の理想像には近いのかもしれない。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「24・骸骨兵士」 (前書き)

ナンジューマ地方からの旅を終えたオリバーたちは、オーベルクに帰ってきました。無事に帰ってきたオリバーたちを見てヴォルフたちも安心したようです。

オリバーたちはオーベルクの宿に帰ってきました。ヴォルフが待ち焦がれていたようにオリバーたちを迎えました。

「よく帰ってきたな。ナンジューマはなかなか大変なことになっていたそうだな。」

「ああ…。出来ればすべての人たちを救いたかったが…。ただ、俺たちがここにいる以上、ヴォルフたちにもある程度の危険は覚悟してもらわなきゃならないかもしれない。」

「それははじめから一緒さ。俺だってこれまでに何度も兵士の襲撃を受けてる。…まあ、魔術師からの襲撃は受けたことがないがな。」

ヴォルフは笑いながら言いました。

「オリバーさん、魔力線を張り終えました…。」

イザベルが青白い顔で中に入ってきました。

「ありがとう。まだしばらくはここに滞在するつもりだ。まずは部

屋に帰って、ゆっくりと休んでくれ。」

「はい。」

「…今回の旅はイザベルに世話になりっぱなしだったよ。感謝しないとな…。」

オリバーが笑顔で言いました。

「おい、オリバー。俺たちはラルフと裏で作業をしてるぜ。ちょっとした武器のアイデアを思いついたんだ。」

今度はローレンツがやってきました。

「休まなくていいのか？」

「確かに疲れてはいるが、いい思いつきってのはすぐに行動に移さないとな。それが終わったら休ませてもらうよ。」

「ああ、わかった。…ローレンツたちも、ローズとマチルドの武器を強化してくれた。どれだけ戦力として重宝したことか…。」

俺は今回の旅で仲間の大切さっていうのを改めて知ったよ。俺は基本的にには単独行動、せいぜい連れて行ってもハンスとペーター程度だ。だがここに来ていろんなやつと知り合うことができた…。もちろん、ヴォルフとリリーもだよ。」

「ハハツ、俺たちは宿に泊めてやってるだけじゃないか。」

ヴォルフが笑います。

「いやいや、前にあんたが言っていたように、帰れる場所がある、っていうだけでも大きな心の支えになる。」

「そう言ってもらえると嬉しいね。」

リリーも笑顔で言いました。

その時、宿の外で大声が聞こえました。

「大変だーっ！隊商が襲われたーっ！」

「…山賊か？しかし、この辺りで山賊が出るなんて話は聞いたこと

がないな。」

「聞いてくる。おい！どうしたんだ！」

オリバーは街に転がり込んできた商人のような男にたずねました。

「た、助けてくれ。北の墓地の方に骸骨の兵士が現れたんだ。」

「なっ、何だって！？骸骨兵だと！？」

「隊商は全滅、でも積み荷は一切盗まれなかった。」

「くそっ……。ありがとう！」

オリバーは宿の中に戻ってきました。騒ぎを聞いて、仲間たちも下に降りてきました。

「骸骨兵はとても危険だ。武器にも向き不向きがある……。疲れているだろうが、ローズとマチルドだけついてきてくれ。あとはここで待機だ。」



「そもそも傷をつけられないだろうな……。とにかく打撃で何とか倒してくれ。ただやつらはものすごく素早い。攻撃力も高いから十分用心しろ。俺はここで援護をする。」

「あいよっ。よしローズ、人暴れして来ようぜ！」

二人は茂みを飛び出し、骸骨兵に飛びかかりました。そして骸骨兵の頭を砕こうとします。

「くわっ、なんて硬さだ！こっちにも反動がくるぜ……。」

「一撃入れたら退却だ！それを何度も繰り返せ！カーズアタック！」

オリバーが叫ぶと、骸骨兵の体の一部が砕け散りました。

「くそっ、頭には当たらなかったか！」

「うわっ！」

マチルドの腕から血が出ています。





マチルドが首をかしげます。

「何がおかしいんだ？」

「はじめは十体いたはずなんだ。だけど残骸を数えたら九体しかない……。」

「まさか、」

その時、ローズがオリバーを突き飛ばしました。背後に迫っていた最後の骸骨兵がオリバーに斬りつけてきたのです。ギリギリのところで地面に倒れたオリバーはその体勢のまま叫びました。

「カースアタック！」

骸骨兵は魔術を頭部のだ真ん中に受け、一瞬で崩れ落ちました。

「…すまない、ローズ。油断してしまった。」

「先生らしくない……。」

「まったくだ。このような骸骨兵ごときに後ろを取られるとはオリバー・ローゼンハイン、貴様弱くなったな？」

どこからか聞こえてきた声に、オリバーはサッと身構えました。

「お、おい！あんなところに人間が！」

マチルドが空中を指差しました。

「…レジオン…。」

もう一人の闇の魔術師、レジオンが宙に浮いてオリバーたちを見下ろしています。オリバーが敵意をむき出しにしてレジオンに叫びます。

「レジオン！この骸骨兵たちはお前の仕業か！」

「私はただここを通りがかっただけだ。恐らくプレグーの仕業だろう。まあ、やつは今頃自分の根城で茶でも飲んでいるのだろうがな。」

「

「…嘘ではなさそうだな。だが、ここをお前が通りかかっただけというの嘘だろう。」

「さあ、それは知らんな。ただ一つ忠告しておこう。今の隙だらけの貴様なら、プレグーのような三流の魔術師にもやられてしまうだろうな。…ほら、後ろを振りかえってみろ。貴様の仲間が短剣を片手に斬りかかってくるぞ?」

オリバーはレジオンから目を離さないまま静かに言いました。

「…俺の仲間はそんなことはしない。」

レジオンは興醒めしたというような顔で言いました。

「本当に甘い男になってしまったようだな。私がお前の仲間を操ったとしたらお前の命はもうないのだ。…まあ、いいだろう。私の出る幕はなさそうだ。せいぜいプレグーにでも倒されるがいいだろう。」

レジオンはつまらなさそうにそういつと、サッと消えました。

「待てっ!」

オリバーが叫んだときにはもうレジオンの姿はありませんでした。オリバーがゆっくり振り返ると、ローズとマチルドもはじめの場所を一步も動いていませんでした。

「…安心しろ。俺はお前たちが襲ってくるなんてはじめから信じていないから。」

マチルドは少し焦った顔をしましたが、無理に笑顔を浮かべました。夜の「仕返し」のことを思い浮かべたからです。ローズもジロリとマチルドを見ています。

(結局オリバーのやつを守ってるのはローズってことだよな…)

マチルドは心の中で納得しました。が、オリバーが視線をそらすと、ローズからの文字通りの鉄拳が飛んできました。

「じ、じつははずせーっ！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

三人が宿に帰ってくると…、

「みんな…。」

仲間たちが武器を構えて宿の前に集まっていました。

「ああつ！師匠たち無事に帰ってきた！」

ビアンカが叫ぶと、ハンスとペーターがオリバーのもとへ飛んできました。

「お前ら、休んでなかったのか？」

「先生たちにもしものことがあったら、すぐに飛んでいけるように準備していたんですよ！」

「俺たちが黙って休んでると思っただんですか？」

「マチルドさん、腕を怪我していますね。それに顔も腫れあがっています。すぐに手当てをしましょう。」

イザベルがマチルドに言います。

「まったく、すばしっこいのが取り柄のお前がこんなにやられるんじゃ、相当な相手だったらしいな。」

レオンがからかうように言いました。

「い、いや、斬られたのは敵にやられたけど、殴られたのは…いや、敵に殴られたんだ！いやぁー、あれだけの力で殴られるとは思わなかったぜー。」

背後からの危機を察したマチルドはとっさに言葉を変えました。大騒ぎする仲間たちを見て、オリバーは思いました。

(…レジオン、確かに俺は弱くなったかもしれん。だが俺はあの時なかったものを手に入れた。…心強い仲間たちだ！)

闇の魔術師レジオンはオリバーを惑わそうとしましたが、オリバーはそれを突っぱねました。オリバーと仲間たちの絆はこのようなハツタリではもう崩せないようですね。

次話ではオリバーたちが北の樹海に存在するという禁じられた洞窟探しの準備を始めます。アリスとエミリーは洞窟のありかを示す伝承を知っているようですが……？どうぞお楽しみに！

ちなみに骸骨兵を仕向けたのはレジオンの言った通りプレグーです。本当はオーベルクの街を強襲する予定でしたが、それよりも先に隊商を襲ったことによりその存在がオリバーに早く知れてしまったのです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「25・洞窟の手がかり」 (前書き)

オーベルクに襲撃寸前だった骸骨兵を倒したオリバーたちは、ヴォルフの宿に滞在していました。そして新しい旅がまた始まるようです。

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「25・洞窟の手がかり」

骸骨兵の襲撃から一週間後、パトリックはヴォルフの宿の前を通り
ました。

「赤い…、棒か。」

入り口のところに赤い棒が立てかけてありました。これは『今夜会
議を行う』というオリバーの合図です。

「また旅支度をするのでしょうか…。」

~~~~~  
~~~~~

その十五分くらい後、今度はビアンカがフラフラと歩いてきました。

「おっ、赤い棒…。さーて、用意しますか!」

~~~~~  
~~~~~

夜、二人が宿の中に入ると、ヴォルフが待っていました。

「よう、お二人さん。オリバーたちは上のいつもの部屋だ。」

「ほいよー。」

「オリバーは何か言っていなかったかい？」

パトリックの問いに、ヴォルフは首をかしげました。

「さあな。ただ、重要な話なのかもな。ハンスとペーターが緊張した顔をしていた。」

「あのお子ちゃんたちはいつもそうでしょ。パトリック、行こうよ。」

「ああ、そうだね。」



部屋の扉を開けると、オリバーや仲間たちが全員そろっていました。

「

「よっ、師匠！元気にしてた？」

「遅くなってすまないね。」

「いや、気にするな。…今日集まってもらったのは他でもない。今度の旅の話だ。」

行き先は…禁じられた洞窟だ。」

オリバーの言葉に、仲間たちの顔に一気に緊張が走りました。

「…問題は、禁じられた洞窟の場所を誰も知らないということだ。今回封印が解かれたのもたまたま兵士が見つけたからだ。その兵士たちも一人も帰ってきていない。ただ、北の山脈のふもとの樹海にある、ということがわかっているだけだ。」

「それならアリスとエミリーが詳しいんじゃないか？何か伝承みたいなものは伝わってねえのか？」

レオンがたずねます。

「ええ、あります。」

…禁忌の扉は五本の指の六本目、その奥の三人の主たちの真中にあ
る、というものです。」

「…何が何だかさっぱりだね。」

エミリーの言葉に、ラルフは首をひねりました。

「うむ…。吾れらも小さな頃に興味を持ち、森の中をあちこち探し
回ってみたのだが…少なくとも吾れらの行動範囲内にはそのような
ものはなかったな。」

アリスも肩をすくめました。

「とは言え、まずは北の樹海に行かなければならないな。まずはア
リスたちの狩人小屋に向かうとしよう。」

「うむ、それがよい。この人数では少し狭いかも知れぬが、まあ何

とかなるだろう。」

「そこで体勢を整え、洞窟探しを始める。現段階ではその言い伝えの言葉だけが手掛かりだがな……。」

「五本の指の六本目……？何なんだよ、さっぱりわからねえ……。」

レオンが頭を抱えます。

「ない頭で考えるだけ無駄だぜ？もつと本能的に動けよ。」

マチルドがバカにしたように言います。

「いちいち突つかかってくるなよ！」

レオンが腹を立て、結局二人はいつものように口論を始めました。オリバーは苦笑いしながら言いました。

「とりあえず当面の予定は決まった。出発は三日後だ。それまで各自でしっかりと準備を整えておいてくれ。ローレンツとラルフが武器の手入れをしておいてくれるらしい。必要なやつは二人に武器を預けておけ。」

オリバーはそう言って会議を閉じました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

しばらくしてオリバーがローレンツたちのところにやってきました。

「お疲れさん。」

「よう、オリバーか。」

「今レオンさんの斧槍を打ちなおしたところです。」

ローレンツとラルフは楽しそうに武器の手入れをしています。

「いつもすまないな。」

「非戦闘員に出来ることといたらこれくらいしかないぞ。」

「本当に助かるよ。：ラルフ、その本は何だ？」

オリバーはラルフの持っていた本を見ました。

「ああ、ナンジューマに行った時に見つけたんですよ。何でも、遙か東方世界のことを書いた本ですね。」

オリバーはその本を手にとって読みました。

「ほーう……。：お、ローレンツ、カヤクとやらのことも出ているぞ？」

「ああ。だが、俺っちに手に入るような鉱石じゃつくれないらしい……。残念だな。」

ローレンツは心から残念そうです。

「そうか……。：お、おい、何だよこれは！ものすごい、山のような船だな！」

オリバーは思わず声を上げました。



「何でも、東方世界の王様、そこでは皇帝と呼ぶようですが、その人が国内を見て回るために造らせたそうです。しかもその船を通すため、ものすごい大きな運河もつくったらしいです。結局、その王朝はあまりの出費と度重なる遠征でつぶれちゃったみたいですね。」

ラルフが説明します。

「…その次の王朝は皇帝とやらが一人の侍女にうつつを抜かしたために内乱がおきて衰退、か…。結局統治者が悪いとどこの国も衰退する運命なんだろうな…。」

オリバーは眉をひそめました。

「だが文明は最先端を行っているらしいな。ぜひこの目で見てみたいもんだ…。」

オリバーとは対照的に、ローレンツは目を輝かせています。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

宿に帰ってきてみると、イザベルとモニカが話していました。

「あれ？さっきまでビアンカやアリスたちがいなかったか？」

「アリスさんたちは森へ行ったみたいです。ビアンカさんはいつものようにブラブラと外に出て行きましたね。」

イザベルが笑って答えました。

「なるほど。…モニカの魔術もかなり上達してよかったよ。」

「は、はい！イザベルさんとオリバーさんのおかげです！」

モニカが嬉しそうに言いました。

「俺たち以上の魔術師になるのも時間の問題だな。」

その時、マチルドが宿に入ってきました。

「おーい、モニカ！悪いんだけど、こいつに魔術で火を通してくれ」

マチルドが持ってきたのは羽をむしられたニワトリでした。モニカはびっくりして腰を抜かしてしまいました。

「早くやってくれよ。みんなで食おうぜ！」

「…マチルド、そのニワトリはどうやって手に入れた？」

オリバーの言葉に、マチルドはピクツと震えました。

「あー、いやー、ほら、その辺を歩いてたんだよ！何て言うかな、野良ニワトリ？はぐれニワトリ？」

「…どこで盗んだ？言わなければ尋問の魔術をかけるが…。」

オリバーの低い声に、マチルドは悔しそうに言いました。

「くそーっ！盗んだんじゃねえよ！ほら、この近くに目の見えないじじいがあるだろ？あのじじいの荷物を持ってやったら、その礼にっつて一羽くれたんだよ！」

「ああ、それなら俺も見てたぜ。それは確かにマチルドがバートじいさんからもらったニワトリだ。」

ヴォルフも言います。

「…疑ったのはすまなかったが、どうして隠したんだ？」

オリバーからの問いかけに、マチルドは目を白黒させました。

「それは…その…、」

「恥ずかしいから…。」

突然どこからか現れたローズが言いました。

「うわーっ！ローズ！お前、後で覚えてやがれ！」

マチルドは顔を真っ赤にして階段を登って行きました。ローズはどこか勝ち誇ったような表情です。オリバーは申し訳なさそうに肩をすくめました。

「やれやれ…。あとでちゃんと謝っておかないとな。」

「その必要はない…。」

「え？どうしてだ？」

「その方がマチルドも、燃える…。そうすれば夜の『仕返し』も防いで…。」

「燃える？『仕返し』？どついつことだ？」

「何でもない…。」

ローズは一瞬しまった、というような顔をしました。

「それよりも早くニワトリを焼こつぜ！モニカ、頼むよ。」

「レオン…どこにいたんだ？」

オリバーの言葉にレオンはガクリと肩を落としました。

「ひどいやつだな…。ずっとそこにいたよ。…さあ、モニカ！」

「え、じゃ、じゃあ行きます。ファイアーstorm！」

レオンにせかされ、モニカは慌てて魔術をかけました。

「ぎゃあああああっ！」

突然ハンスとペーターのお尻に火がつきました。

「ああっ！いけない！アイスドゥーム！」

「ぎゃあああああっ！」

今度は二人の下半身が氷漬けになってしまいました。

「また失敗してしまいましたっ…。」

モニカは落ち込んでいます。

「先生…早く助けてください！」

「痛い！ローズ痛い！氷が砕けてる！もっと優しくやってよ！」

「うるさい…。我慢して…。」

ハンスとペーターは大騒ぎです。

「…とりあえずこのニワトリは俺が焼いておいてやるぜ。」

ヴォルフがニワトリを宿の奥に持って行きました。

「初めからそうすればよかったのに…。」

イザベルがおかしそうに大騒ぎする仲間を見ていました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夕食はアリスたちが森で狩ってきた野ウサギも料理され、豪華なも

のになりました。カウンターでオリバーとヴォルフが話しています。

「今回の旅は特に大変なものになるようだな。」

「ああ…。闇の魔術師も動いてきている。万が一のことも考えて、あなたたちも用心しておいてくれ。」

「わかった。…そうだ、さっき街に出た時に小耳にはさんだんだが、最近ノーザリンでは小さな地震が何度も起きているらしい。また、山の方から地鳴りも聞こえてくるようだ。ノーザリンの住民たちは神が怒っているんじゃないかと心配しているようだ。」

「不気味だな…。わかった、用心するようにするよ。」



オリバーたちはエミリーから洞窟の位置を示す伝承をききました。  
はたしてこの言葉が意味するものは…？

次話ではオリバーたちがアリスたちの狩人小屋に到着します。アリスとエミリーは仲間たちをお気に入りの湖に案内しますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスとエミリーは定期的にオーベルク郊外の森に行つてシカや野ウサギを狩つたり、木の実を採つたりしてきます。そうすればヴォルフはその日の分の宿泊費は免除してくれます。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「26・北の樹海」 (前書き)

オリバーたちはアリスとエミリーが住んでいた狩人小屋に到着しました。ここを禁じられた洞窟探しの拠点とするようです。

オリバーたちは懐かしい小さな小屋の前にきました。ノーザリンの樹海にあるアリスたちの狩人小屋です。

「久々に帰ってこられましたね、お姉さま。」

「うむ…。よし、中に入ってくるがよい。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは小屋の中でくつろいでいました。しかしアリスとエミリーは落ち着かない様子です。ピアンカがそれに気づきました。

「二人とも、どうしたの？」

「うむ…。小屋の周りに魔獣の足跡が増えているのだ…。」

「心なしか、足跡の大きさも大きくなっている気がします。」

「私が魔獣よけの魔力線を張ってきてあげます。魔獣よけ程度だったらすぐにできますから。」

イザベルが提案しました。

「うむ、よろしく頼む。」

イザベルは扉を開け、外に出ました。その途端、

「ポイズンラース！」

イザベルの大声が聞こえました。驚いてオリバーたちが外に出ると…、

「…こりゃあでかい…。」

とても大きな魔獣が倒れていました。

「外に出た瞬間に襲ってきましたから、びっくりしましたよ。」

イザベルが苦笑いして言いました。

「こんな大きな魔獣、この森では見たことがありません…。」

エミリーは少しショックだったようです。オリバーは難しい顔をしています。

「明らかに生態系が狂ってきているな。早く禁じられた洞窟を見つけて出して、封印しないと…。」

「少し休んだらこの辺りの森を案内してやろう。だが、今のよう凶暴化した魔獣が出てくる可能性も高い。武器を忘れぬようにな。」

アリスが言いました。

~~~~~

アリスとエミリーが歩いて森を案内しました。

「あっ！湧き水がありますよ、先生！」

「しかも、ものすごい量であふれだしているなあ！」

ハンスとペーターの声に、オリバーたちは湧水のところへ行きました。確かにものすごい量の水が突然地面にあふれ出しています。

「ふーん、不思議だな。こんな平らなところから水が湧き出しているのか。しかも水のない谷がずっと奥まで続いている…。」

オリバーがつぶやきました。それをきいてアリスが言いました。

「うむ、この先の谷は水が枯れているのだ。今日はこの谷の先の湖に案内しようと思う。」

「ああ、前に言っていた湖か。」

オリバーたちは水の枯れた谷を上流の方へ登って行きました。やがて、目の前に大きな崖が現れました。

「この上が湖です。右の斜面を登ると簡単にたどり着けますよ。」

エミリーが斜面を指差しながら言いました。

~~~~~  
~~~~~

しかし、あくまで簡単というのはアリスたちの感覚です。アリスとエミリー、そして山に慣れたマチルドは斜面をすいすいと登ってゆきますが、オリバーたちはやっとのことで二人についてゆきます。モニカに至っては三回くらい斜面を滑り落ちてゆきました。その度にパトリックに助けを求めています。

やっとのことで斜面を登り切ると、そこにはアリスたちが茫然とたずんでいました。

「どうしたんだ、アリス…うわっ！」

本来澄んでいてとてもきれいなはずの湖が、毒々しく濁っています。ところどころに魔獣の死骸が浮かんでいます。

「…水は完全に毒におかされています。」

湖のほとりまで降りたイザベルが言いました。

「確かに流れ込む川も流れ出る川もない。…一度毒におかされたら







「手こずらせやがって…。明らかに魔獣たちに宿る魔力も強くなってるな。」

「感慨に浸るのもいいが、あいつらをどうにかしてやれ。」

ローレンツがハンスとペーターを指差して言いました。

「また氷漬けだ！」

「モニカ！いい加減に上達してくれ！」

「待ってる、今溶かしてやる。…安心しろ、モニカ。少なくとも前はあれだけ危険な魔獣相手にも対等に渡り合えているんだ。」

オリバーは落ち込んでいるモニカを励ましました。

「ありがとうございます、オリバーさん…。」

「よし、そろそろ狩人小屋に戻ろう。アリス、エミリー。また案内を頼むぞ。もう日も暮れそうだ。」



「ふうつ、ビアンカか。斧槍の訓練だ。」

「訓練？」

「ああ、ほら、湖で魔獣と戦った時、オリバーたちばかりが戦って俺たちは見ているだけだっただろ？…確かに今の俺たちじゃあそうするしかねえかもしれねえ。だから俺自身もっと強くならなきゃならねえ。そう考えたら寝てもいられなくてな。」

レオンが真剣な目をして言いました。

「ふーん、バカはバカなりに考えてるんだね。」

ビアンカはからかうように言いました。

「うるせえな。ほら、見るよ。アリスたちも矢の特訓をしてるぜ。」

ビアンカが森の奥の方に目を凝らすと、アリスとエミリーが真剣なまなざしで矢を射ています。それを見て、ビアンカも思うところがあつたようです。

「ふーん…。…ねえ、レオン。ちょっとお手合わせ願えない？」

「あいにく、俺は訓練用の槍を持っていねえが？」

「あたしだって、これは本物だよ。どーせ怪我したってイザベルが治してくれるって…！」

「それもそうだな。よし、それじゃあやるぞ…！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌朝、オリバーは仲間たちの顔を見て怪訝そうにしました。

「…アリス、エミリー、目の下に真っ黒な隈ができています。寝不足か？」

「う、うむ、まあそのようなところだ。」

「や、やっぱりあの湖のことを思うと悔しくて眠れなくて…。…」

「そうか…。しっかりと頑張らないとな。…で、ヒアンカとレオンはどうしてそんなに傷だらけなんだ？」

「んっ！？あ、いや、朝の散歩に行ったら転んじやってさ、イザベル、後で傷薬塗ってよ。」

「俺も朝の準備運動をしてたら木のトゲにやられちゃってさ…頼むぜ、イザベル。」

「バカの傷は何をやっても治らないと思うぜ？」

マチルドが舌を出しながら言います。

「う、うるせー！」

「やれやれ…、朝から元気だな。さて、いよいよ今日から禁じられた洞窟を探すしよう。五本の指の六本目、か…。さっぱりわからんが、まずは山脈の端からしらみつぶしに歩いてみるか…。」

「そういえば洞窟というよりは縦穴のようなものだ、って言うてましたよね。」

ハンスが言います。

「ああ。つまり、斜面にあるわけじゃないから探すのは余計に難しいかもな。」

∴よし、出発しよう。まずはランダー峠の方に行ってみよう。」

~~~~~  
~~~~~

ビアンカとレオンが本気の訓練をしてパワーアップしました

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「26・北の樹海」(後書き)

ノーザリンの樹海の魔獣は確実に強さを増しているようです。オリバーたちの洞窟探しも難航しそうです。

次話ではオリバーたちが洞窟探しを開始します。やはり伝承でしかその存在を知ることが出来ない洞窟を探すのはなかなか大変なようです。

ちなみにこの樹海は東西に約50キロ、南北に約10キロの範囲で広がっています。山脈の山肌の森も加えるとさらに広い範囲です。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「27・洞窟探し」 (前書き)

オリバーたちはランダール峠のふもとの村から樹海に入ることになりました。禁じられた洞窟は樹海のどこかに必ずあるはずです。

オリバーたちは北の山脈の一番端、ランダール峠のふもとの村にやってきました。

「さて、ここから樹海に入ってみるか。」

その時、彼らの横を小さな棺を抱えた村人たちが通って行きました。オリバーが声をかけます。

「…失礼、誰がお亡くなり？」

「仕立屋の十歳の一人息子が魔獣にやられたんだよ。親の手伝いをよくするいい子だったのに…。」

「そうですか…。魔獣の被害は相当なものなんですな…。」

オリバーたちは棺を見送ると、樹海の中に入って行きました。



森の中に入ってみると、小鳥のさえずりがあちこちから聞こえ、大変のどかな雰囲気です。

「いい雰囲気だな…。」

「…だが、見るのだ。ところどころに魔獣の足跡がある。この辺りも完全に魔獣どもに浸食されているらしいな。」

「正直、お前たちと一緒に旅をしていなければ、吾れもエミリーも今頃魔獣どもに食い尽されていただろう…。」

アリスがカトリーヌの上から感慨深げに言います。

「…洞窟から出る魔力はどんどん強くなっている。それに比例して、魔獣の強さも増してきているからな…。」

「オリバーさんたちのおかげで、わたくしたちも経験を積みました。あとは…根本を断ち切るだけです。」

エミリーが力強く言います。

イザベルが水の様子を見ました。

「おかしいですね。色は変ですが、毒に侵されてはいません。」

「こつという色の川なんですかね？もしくは光の加減でこつ見える、とか。」

ハンスが首をかしげましたが、オリバーはハツとした表情で呟きました。

「…これはプレグーの仕業だ。」

オリバーの言葉に仲間たちはギョツとしました。

「思い出したんだ、あいつのやり方を。あいつは自分が近くにいると示す時、周りの自然に何らかの異変を起こさせていたんだ。この川の変色は…恐らくやつが近くにいるということ、それに近いうちに俺たちを攻撃してくる、ということを示している。」

その時、小さな地震が起こりました。

「…じゃあ、今の揺れもその魔術師の仕業ってこと？」

ビアンカがたずねます。

「…うーん、だが地面の揺れを起こす魔術なんていうのは効いたことがないな。古代の歴史書にもそんな記述はなかった…。もしかしたらまったく新しい魔術かもしれんな。」

「ごちゃごちゃ考えるなよ。どうせあたいらは敵を全部倒さなきゃならないんだろ？」

マチルドが短剣をかざしながら言いました。それを励ましと受け取ったオリバーは笑ってうなずきました。

「ああ、そうだな。」

その時、背後から魔獣たちが襲いかかってきました。

「この樹海の中じゃ心の休まる時はなさそうだな！みんな、戦うぞ！」

~~~~~

~~~~~  
結局その日、三度も魔獣と戦うことになったオリバーたちは森の中の小さな空き地で野宿をすることになりました。危険な樹海の中で狩りをするわけにもいかないので、オリバーたちはアリスが狩人小屋から大量に持ってきた干し肉を食べることになっています。

「ひーっ、固いなあ…。」

レオンが干し肉と格闘しています。それを見てアリスとエミリーは笑っています。

「少しずつ噛みちぎって口の中でふやかすのだ。意外と腹もちもいいものだぞ。」

「これだけでかなりの間過ごせますよ。」

「…狩人っていうのはなかなか大変な生活をしているんだな。もっと自由で優雅なものだと思ってたぞ。」

レオンが肩をすくめながら言いました。

「そう言えばアリス、前に追い詰められたら虫を食べたって言ったもんね。」

ビアンカが大きさに顔をしかめて言いました。

「イモムシはまだ脂肪分もあっていいが：羽虫はおすすめできぬな。もし食べたいのならは床下のカメの中にイモムシの、」

「うわーっ、もういいよっ！聞きたくない！」

真顔で答えるアリスに、ビアンカは顔を真っ青にしました。

「最悪の場合、私たちも食べなければならなくなるかもしれないけれどね。」

パトリックが笑いながら言います。

「や、やめてよパトリック！仮にそうだとしても、黙ってて！」

「心配いりませんよ。今は木の実や草もたくさんある季節です。少なくとも虫を食べなければならぬということはないですよ。」

エミリーが笑いながら言いました。

「むー、それならいいけど。」

オリバーはやりとりを笑いながら見ていましたが、やがて言いました。

「よし、ビアンカとイザベル、最初の火の番は頼んだぞ。」

「あ、わかったよ。」

「了解しました。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは交代で眠りにつきました。ビアンカたちの次に番をしたオリバーとレオンは、ハンスとペーターを起こしました。

「ハンス、ペーター、次はお前たちの番だ。」

「わかりました。」

ハンスとペーターは起き上がると、武器を片手に火を挟んで向かい合って座りました。ハンスがたき火を見つめながら言います。

「…ついにこんなところまで来ちゃったんだなあ…。初めはどうなるかと思っただけ。」

「先生、俺たちを家に置いて一人で出て行った時はあんな恐ろしい魔術師と戦っていた、ってことツスよね…。」

「あの当時は俺たちも未熟だったから、行っても足手まといになるだけだっただろうな。」

「何しろ、先生がボロボロになって帰ってきてても、その理由がさっぱりわからなかったツス。」

「ああ。」

返事をした後で、ハンスはペーターにたずねました。

「…なあ、火の勢いが強いと思わないか？」

「…確かに。風もないのに、変ッスね…。」

二人が首をかしげた瞬間、突然たき火の炎がものすごい勢いで燃え上がりました。まるで火柱です。炎の真ん中にはまるで怒った顔のようなものが見えます。ハンスはびっくりしてオリバーを起こしました。

「先生！先生！起きてください！」

「ん…何てこった！」

オリバーは飛び起きました。他の仲間たちも飛び起きます。

「くそっ、カーサアタック！」

オリバーは叫びました。が、燃え盛る火柱はどんどん大きくなるばかりです。火柱がまるで腕のように分かれ、オリバーたちに襲いかかってきます。

「うがあっ、熱い！」

レオンは炎を体に受け、思わず叫びました。オリバーがモニカに指示を出します。

「モニカ！早く氷の魔術を！」

「は、はい！アイスドゥーム！」

モニカが氷の魔術の呪文を唱えると、炎はそのままの形で氷漬けになりました。

「炎がそのまま氷漬けに……。」

「すげえな、モニカ！」

ラルフとマチルドが感心しました。しかし、オリバーは厳しい表情を崩しません。

「いや…、こいつは厳密には炎じゃない。本来自然界には存在しない、魔術師が作り上げた魔獣の一種だ。」

「魔獣の…一種？」

レオンがびっくりしたように聞き返します。

「ああ。固定した以上、恐ろしさはもうない。…パトリック、馬の速さを活かしてこの氷に突進し、槍でこいつの体を貫通させてくれ。」

「よし、わかったよ。」

パトリックはフランソワをつないでいた綱を外すと、勢いをつけて突進しました。

「それっ！」

パトリックのかまえた槍は氷を砕き、炎の魔獣の体を貫きました。その瞬間、魔獣がスツと消え、辺りは真っ暗になりました。

「…仕方ない、もう一度火をおこそう。プレグーめ、相変わらず汚い手を使うな…。闇の魔術師はこつやっつて隙について襲ってくる。今この瞬間も警戒を怠るなよ。」

やがて再び火が起きました。もう誰も眠る気になれません。みんなたき火を囲んで身を寄せ合っています。

「オリバー、こんなことをいうのはよくねえんだろ？…、本当に闇の魔術師に勝てるのか？…これは励ましてほしくて言ってるんじゃない、真剣な質問だ。だから正直に答えてくれ。」

レオンがオリバーに問いかけます。オリバーは少しの間目を閉じて考えていましたが、やがて口を開きました。

「勝てる。間違いなくな。もちろん一人ひとりが相手では勝てない。俺だって勝てない。だが、みんなで力を合わせさえすれば、絶対に勝てる。」

「みんなで力を合わせれば、か…。確かに、そうなんだろうな。」

…なあ、俺のこと、臆病者だと思ってるか？」

レオンが肩をすくめながら聞きました。しかし、オリバーは笑って言いました。

「だとしたら、俺も臆病者さ。」

「…そうか、ありがとう。」

レオンはオリバーの言葉を聞いて安心したようです。しかしその瞬間、木の上から背筋の凍るような気味の悪い声が聞こえてきました。

「ヒッヒッヒッ…。じゃあその仲間が襲ってきたら、驚くだろうねえ…。」

オリバーがサツと声のした方を向きました。

「プレグー！」

「それっ、どう戦つか見物だねえ。ヒッヒッヒッ…。」

プレグーは気味悪く笑うとサツと消えました。プレグーがいた木の真下でローズが震えています。途端にオリバーの顔が真っ青になりました。

「ローズ…！まずい！ローズ！正気に戻れ！」

恐怖心かられていたオリバーの仲間たちに追い打ちをかけるように、プレグーがあらわれました。プレグーはローズに何かの魔術をかけたようですが…？

次話ではプレグーに操られたローズが仲間を襲いだします。それに立ち向かったモニカに危機が訪れますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスが言っていたカメの中のイモムシは緊急時用の最後の保存食です。アリスとエミリーも出来ればこれに口をつけたくありませんが、木の実などが不足しているときはそれを食べざるを得ません。

では次話をお楽しみに！

禁じられた洞窟探しをしているオリバーたちを突如闇の魔術師プレグーが襲撃しました。プレグーはローズに何かの魔術をかけたようです。

木の下で震えていたローズがやがてゆっくりと顔をあげました。

「ローズ！あんだ、大丈夫！？」

ビアンカが心配そうにローズに歩み寄りました。

「ダメだビアンカ！ローズから離れる！」

「うひゃあっ！」

オリバーが叫んだ瞬間、ローズは突然呪いの短剣を引き抜くと、ビアンカに斬りかかりました。瞳の色が真っ赤になっています。

「完全に操られている！みんな！用心しろ！」

ローズは仲間たちに次々と斬りかかってきます。持っているのがオリバーの強力な魔術を封じ込めた短剣であるため、迂闊に近寄れません。

「あの短剣で傷をつけられたら…きっと死は免れません！」

イザベルも困惑しながら言いました。

「苦しいだろうが我慢してくれ！フィクセーション！」

オリバーが相手の動きを止める魔術をかけました。しかし、ローズには全く効いていません。どこからかプレグーの声も聞こえてきます。

「ヒツヒツ、その小娘には吾輩と同じ能力を備えさせた。そんな程度の低い魔術は通用せんよ。…そうさな、絶命術なら止められるか…。」

「き、貴様ーっ！」

オリバーは怒り心頭です。

仲間たちは必死にローズの攻撃から逃げようとしませんが、その中でもモニカは果敢にローズに立ち向かいました。彼女はサッとローズの目の前に立ちました。

オリバーはローズの短剣を自分の腕で受け止めました。

「ぐっっ！」

「オリバー！お前、呪いの短剣で切られて…、」

ローレンツが真っ青な顔で言いました。しかしオリバーは痛みに耐えながら言いました。

「くっ…、心配するな、俺は呪いの魔術を使う以上、ある程度呪いには耐性がついている…。…ローズ！目をつ、醒ませえっ！」

ローズは赤い瞳のまま荒い息でオリバーを見ていました。しかし、だんだん正気を取り戻してきたのか、少しずつ青い瞳に戻ってきました。ローズは自分が何をしているのか理解できていないようです。

「…先生…。私は一体何を…。」

「…正気に、戻ったか、ローズ…うっっ…。」

オリバーは笑顔になると、地面に倒れました。

「ヒツヒツ、身を呈して目を醒まさせたか。甘いねえ、ただ一言、絶命術を唱えればいいものを。」

木の上でプレグーが気味悪く笑っています。しかし…、

「ぎゃあああっ！」

プレグーの腕と脚に矢が刺さりました。アリスとエミリーが顔を真っ赤にしています。

「ふざけるな！貴様、オリバーは闇の魔術を封印したのだ！絶命術などを唱えさせるわけにはゆかぬ！」

「同士討ちをさせようとするなど、極悪非道！」

「ヒーツー！」

プレグーは腕と脚から血を流しながらサッと消えました。

「オリバー！大丈夫か！」

「お怪我の方が…。」

アリスとエミリーがオリバーに駆け寄ります。イザベルが笑顔で言いました。

「出血が多すぎたようですね。大丈夫、傷はもう魔術でふさぎました。あとは気を取り戻すだけです。」

その時、ローズが落ちていた短剣をサツと取りました。そして自分の喉に突きたてようとしてました。

「エクスクルージョン！」

イザベルが叫ぶと、ローズの短剣は遠くに飛ばされました。イザベルはローズに鋭い視線を向けました。

「…バカなことを考えないでください！あなたがいなくなって一番悲しむのはオリバーさんです。今回あなたには自分を責める要素は一切ありません。強いて言うなら、今の行動です。」

イザベルが厳しい口調で言いました。仲間たちは強い口調で話すイザベルを初めて見たので、とても驚きました。でもイザベルはすぐにいつもの笑顔に戻りました。

「…今のごときは黙っていてあげます。皆さんも、お願いしますね。」

仲間たちは深く頷くのでした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夜が明けるところ、ようやくオリバーが目を覚ましました。

「先生！」

「先生が目を覚ました！」

ハンスとペーターの声に、仲間たちが集まってきました。ハンスとペーターを突き飛ばして一番初めにオリバーのところに駆け寄ってきたのはローズです。

「みんな…。…そうか、プレグーに襲われて…。」



「お前がぶっ倒れている間、みんな武器を持って周りを警戒していたんだぜ？」

レオンが斧槍をかざしながら言いました。

「そうか…すまないな。」

「先生…ごめんなさい…。」

ローズがうつむきながら言いました。しかし、オリバーは笑顔で言いました。

「…ローズ、お前は立派だ。」

オリバーの意外な言葉に、ローズは驚いてオリバーを見ました。

「俺に斬りかかってきた後、お前はじつと俺を見つめていた。初めはプレグーに操られているらしく、瞳は真っ赤だった。だが、お前は自分でその力に勝ったんだ。意志の強い人間じゃないと、自分から覚醒状態から目を醒ますなんて無理なことだ。」

…もちろん、操られている以上、そんなことを自分からそうすることとはできない。お前の目を覚まさせたのは、お前の心の中にある潜在意識だ。お前の国を救うという気持ちは相当強いようだ。その潜在意識が、闇の魔術師の支配力に勝ったんだ。」

ローズは驚いた表情のままオリバーを見ていました。しかし、顔を真っ赤にすると木の陰に走っていつてしまいました。

「潜在意識とやらがオリバーが好きっていう気持ちだってあいつが気づいたら、もうローズはまともにあいつを見れねえぜ？」

「…気づいてないみたいだけどね。」

ピアンカとマチルドがくすくす笑いながら言いました。

「でもオリバー、俺も確信したよ。力を合わせれば、何だってできるってな。」

レオンがニヤリと笑って言いました。

「そうか、それはよかったよ…。よし、朝食を摂ったら出発だ。洞窟はまだまだ見つからないからな。」

~~~~~  
~~~~~

一方、プレグーの根城にレジオンが訪ねてきました。

「無様だな、プレグー。ローゼンハインに傷つけられるならともかく、魔術師でも何でもない者に矢を射られるとは。」

「黙るのだ、レジオン！」

傷だらけのプレグーがレジオンを睨んで言いました。

「何のためにここに来た？吾輩のこの姿を笑うためか？」

「そうカリカリするな。冗談を言ってみたまでだ。いやなに、お前の戦いぶりを見に来たのだ。変なことをギル様に伝えるわけにはいかんだろう。」

「そついつことか。」

「まあ、少しずつでもローゼンハインたちを追い詰めているようだ。ギル様にはよろしく報告しておこう。」

…それと、お前はリバル王の秘宝の場所を知っているか？」

「さあ、吾輩にもわからぬ。」

「そうか。…やつだ。」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない。」

(まったく、使い物にならんやつだ…)

ローズは心の中にある強い潜在意識でプレグーの支配力に勝つことができました。どうやら操る相手が悪かったようですね。

次話では洞窟探しを続けるオリバーたちに徐々に疲れの色が見え始めます。アリスたちの狩人小屋に帰ろうとした時、突如彼らを人食い植物が襲い始めます。どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスとエミリーがプレグーに射たのは普通の矢です。とつさのことで毒の矢や炎の矢を射ることが出来なかったのです。もしかしたらプレグーを即死させることも出来たかもしれませんが、少なくとも高慢なプレグーのプライドを傷つけるには十分だったようです。

では次話をお楽しみに！

オリバーたちはノーザリン地方の樹海の中でひたすら禁じられた洞窟を探していました。しかし、広い樹海の中でそれを探し出すのはやはり大変困難です。しかし、地道な作業を続けているといつかは終わりが見えてくるものです。

オリバーたちが樹海の中を歩き回って、もうかなりの日数が経ちました。何度も狩人小屋と樹海の中を行き来し、魔獣との戦いも、数え切れないほどぐりぬけてきました。やはり疲れの色は隠せません。オリバーは仲間たちに言いました。

「そろそろみんな疲れてきたな…。よし、今日一日この辺りを探索したら、またアリスたちの狩人小屋に戻ろう。疲れをいやしたらまたこの辺りから探すんだ。」

「賛成です。危険なところには万全の状態で行くのがいいですからね。」

「うむ、ちょうど干し肉も底をついてきた。狩人小屋に帰ればいくらでも作れるからな。」

イザベルとアリスも同調します。

「よし、じゃあ探索はとりあえずここで一旦、」

「うわあああっ!」

「じ、これは！」

突然先頭を歩いていたレオンとマチルドの叫び声が聞こえました。

「どうした!…うおっ!」

そこにいたのは魔獣ではありません。動く植物です。大きな口を開け、オリバーたちを食べようと襲ってきます。

「ファイアーストーム！」

「ファ、ファイアーストーム！」

イザベルとモニカが叫ぶと、植物が一気に燃え上がりました。オリバーは目を閉じて考えています。

「…今まで魔獣は出てきても、魔力に影響された植物なんていうものは出てこなかった…。これは、もしかしたら…、」

「オリバーさん!ちょっと来てください!」



焼け焦げた植物を踏み越えて先に行っていたエミリーが叫びました。

「どづした、エミリー。」

「これを！」

「ん？…ああっ！」

そこには小川が流れていました。そして少し上流の方を見ると…、

「これが…五本の指か…。」

そこではさらに小さな五本の小川が合流していました。

「うーん、上から見るとまるで手みたいだよ！」

木の上に登ったビアンカが川を見下ろして言いました。

「つまり、五本の指の『六本目』と言うのは…、」

「この小川の中に、更に二つに分かれているものがあるんだろう。それがきつと、五本の指の六本目だ。俺の予想では、きつと両端のどちらかだ。」

オリバーは辺りを観察しながら言いました。

「よし、じゃあまずは右の方に行ってみるとしよつか。」

パトリックが提案しました。

「ああ、そうだな。」

~~~~~  
~~~~~

しかし、オリバーたちは人食い植物を焼き払いながら進んで行きましたが、右の方に分かれて行った小川はすぐに水源にたどり着いてしまいました。分かれる川もありません。

「…よし、引き返そう。今度は左端の川を登ってみるんだ。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは今度は左端の川を遡りました。すると…、

「やはりあったね。」

「ああ、五本の指の六本目だ。」

オリバーとパトリックは満足げに頷きました。オリバーの予想通り、その川は少し上流で二手に分かれていました。エミリーも興奮したように言います。

「次の手掛かりは、奥の三人の主たちの真中、です。」

「何があるのかはわからんが、今までの流れから言って、きっと左の川の奥の方に何かあるんだろう。…ここから先は何が出てくるかわからない。用心しろよ。」

オリバーたちはやはり襲ってくる植物を焼き払いながら川を遡って行きました。やがて、三人の主の正体がわかりました。

「これが、三人の主たちだね。」

「あはっ、こいつは確かに主って感じだな。」

ピアンカとマチルドがおかしそうに言いました。川のそばに、三つの大きな巨石が並んでいました。

「…三人の主たちの真中…。つまり、あの真ん中の巨石のところに禁じられた洞窟が…。」

「…先生、行きますか。」

緊張したようにハンスが言いました。

「ここまでたどり着いたんだ。行かなければな。」

その時、これまでになかったような大きな地震が起こりました。山の方から何かが爆発するような大きな音も聞こえてきます。

「…先生…。」



に叫びます。

「ksdieyosimaocyv!lppdivmama!」

すると、洞窟の中からの唸り声と風がピタリと止みました。

「…師匠、何をしゃべっていたの？」

ビアンカがたずねました。

「古代語だ。この霊たちは俺たちのことを眠りを妨げる侵略者だと勘違いしたらしい。だが、俺たちは再び君らを静かな眠りにつかせるために洞窟の入り口を封印しに来た、と言ったら安心したよ。だよ。」

「洞窟の中から聞こえてきた唸り声のような声…、何だか聞いているとても淋しい気持ちになったんです。ものすごく中の霊たちは淋しい思いをしてきたんでしょうね…。」

「愛する者たちと引き離された無念さ、今でも消えることはないのだから…。」

イザベルとアリスが感慨深げに言いました。すると、オリバーたちの周りを、やわらかな風が吹き抜けました。まるで彼らの気遣いに感謝しているようです。

「…早く封印してやろう。そうすれば霊たちも安らかに眠ることができる…。」

オリバーは穴に向き直りました。

「ヒツヒツ、そんなことをしてもらっては困るねえ…。」

背後から聞こえたねちっこい声に、オリバーたちはサッと振り返りました。

「プレグー！」

闇の魔術師プレグーがそこに立っていました。彼はオリバーたちを舐めまわすように見渡して言いました。

「その洞窟を封印してもらっちゃ困るねえ…。何しろここには底知れない魔力があふれているんだ。吾輩たち魔術師にとって、こんな興味深い場所はないと思わないかい、ローゼンハイン。」

「思わん。俺はこの霊たちを安らかに眠らせてやりたいだけだ。」

オリバーは確固とした表情で言い放ちました。

「まったく、本当に甘くなっちまったねえ。まあ、安心しなよ。お前たちもすぐにここの霊たちと仲間になれる。そして眠ることなく永遠にここで、」

プレグーが話している途中で、突然大きな音が聞こえました。何と、背後の山が大爆発したのです。真っ黒い煙が立ち上っています。

「か、火山の噴火だ！」

レオンが叫びました。

「ここ何日も続いた地面の揺れは、この前触れだったのか！」

オリバーが啞然とした表情で言いました。

「大変だ！見ろよ！こっちに真っ赤な溶岩が流れてくるぜ！」



マチルドの声に、オリバーはハッと我に帰りました。

「みんな！急いであの巨石に登れ！」

仲間たちは一斉に巨石に向かって走りました。

「エミリー！パトリック！カトリーヌ！又たちを逃がすぞ！カトリーヌたちなら自力で吾れらの狩人小屋まで帰ることができる！」

アリスがエミリーとパトリックに言いました。

「はいっ、お姉さま！」

「わかった！フランソワ、カトリーヌとアンヌについて行くんだ！」

「そうはさせないよ。フィクセイ、ぎゃああっ！」

プレグーは魔術を唱えようとしてました。しかし、ずっと息をひそめて草むらに隠れていたローズが音も立てずに飛びかかったのです。プレグーは呪いの短剣でお腹を刺され、のたうちまわっています。さらに、洞窟から強い風が吹いてきてプレグーを取り囲みました。

「吾輩の動きを封じ込めるつもりか！おのれっ！」

「私を操って先生を襲わせた…そのことを後悔して…。」

ローズは目に怒りを宿し、何度もプレグーに短剣を突きたてます。

「ローズ！早く来い！もう溶岩がそこまで来ている！」

オリバーの声にローズが顔をあげると、溶岩がもう目の前まで迫ってきていました。

「h a k e n x c h f h x s k a i n !」

オリバーが何かを叫びました。すると、風がローズを持ち上げました。そして、彼女の身体を巨石の下まで運びました。

「ぎゃあああああっ！」

プレグーの体が真っ赤な溶岩の中に飲みこまれました。オリバーはローズに叫び続けます。

「早く！上がってこい！」

ローズは巨石に上りました。しかし、もう少しで頂上、というところまで足を滑らせました。

「…っ！…あ…。」

「…くっ、足元はちゃんと見ておけ！」

滑り落ちそうなローズの腕をオリバーががっちりつかんでいます。それをビアンカとマチルドが足を踏ん張って支えています。ローズも力を振り絞り、巨石の上に這い上がりました。

「リフリッジエーション！」

モニカが叫ぶと、溶岩で熱せられた巨石が冷やされました。

「闇の魔術師、プレグーは死んだか…。」

パトリックが溶岩を見ながら言いました。



「古代の方法で封印をした。恐らく、これで誰もこの洞窟のことを見つけられなくなるだろう。…この場面を目にした、俺たち以外はな。」

「逆にこの場所を知った吾れらには、この悲劇を語り継いでゆく義務がある、ということだな。」

アリスも言います。

「ああ、そうだな。…これで魔獣がこれ以上増えることはない。魔力も弱まり、魔獣そのものが存在できなくなる可能性もあるな。」

「では、この樹海も！」

エミリーが顔をほころばせました。

「ああ、もうじき元通りになるさ。」

「そうか！そうだ！やったなエミリー！」

「ええ、わたくしたちの森が帰ってまいります、お姉さま！」

アリスとエミリーはまるで子どものように抱き合い、涙を流しながら喜びました。そしてオリバーたちの方に向き直りました。

「それもこれも、すべてみなのおかげだ。感謝する。」

「これ以上の喜びはありません。しっかりと恩返しさせてもらいますよ。」

「じゃあ…、」

「うむ、もちろんだ。吾れらは最後まで力を貸す！」

「まだまだ未熟ですが、精一杯力をお貸しします！」

「アリス！エミリー！ありがとう！」

三人はガツチリと握手を交わしました。

「よし、まずはアリスたちの狩人小屋に帰ろう。そして休んだら、

オーベルクに帰るぞ！」

「オオーツ！」

オリバーの言葉に、仲間たちは大喜びしました。

~~~~~  
~~~~~

その頃、キンフィールド城では、ギル大臣がレジオンと話していました。

「そうか…プレグーは敗れ、洞窟も封印されたか…。」

「は…。」

「残るはリバル王の秘宝だけが頼りだ。レジオン、何としても見つけ出すのだ。」

「は…。」

(フン、リバル王の秘宝を見つけたところで、あなたにはそれを有効に使うほどの能力はない。秘宝を最後に手にするのは…このレジオンだ)

~~~~~

* 静かな樹海に戻るめどがついてアリスとエミリーがパワーアップしました。

~~~~~

## 人物紹介

「プレグー」

- ・「悪魔の使い」
- ・年齢不詳

・ギル大臣の手先として悪事を働く闇の魔術師。オリバーとは過去に何度か戦ったことがある。高慢で自信家。背筋の凍るような甲高い気味の悪い笑い方をする。よく人を操って同士討ちをさせそのさまを見て楽しむことから「悪魔の使い」と呼ばれた。オリバーたちを襲撃するが、最後は真つ赤な溶岩に飲み込まれて命を落とす。



オリバーたちは禁じられた洞窟を封印すると同時に、闇の魔術師の一人であるプレグーを葬ることができました。これによって自然界の生き物が洞窟から放出される魔力で変性させられた魔獣はその生命力を弱められることになります。しかし、もう一人の闇の魔術師レジオンはまだ生きていますし、オットー様からの以来の一つであるリバー王の秘宝についての手掛かりはまだ見つかっていません。

次話ではオリバーたちは拠点のオーベルクに帰りますが、到着してすぐに燃える馬のような魔獣がオーベルクの街で暴れ始めます。オリバーは魔術師が作り上げた魔獣と判断したようです。

ちなみにオリバーたちが登った巨石は本当に大きく、その頂上は三十人くらいの間人が楽に過ごせるくらいの広さがあります。ただ、余りにも樹海の奥地なので人に発見されることはまずありませんでした。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「30・つくられた獣」(前書き)

禁じられた洞窟を封印し、闇の魔術師プレグーを葬ったオリバーたちは拠点のオーベルクに帰ってきました。



「張っていた気が一気に緩んだのだろう。吾れらも少し休むとしようか。」

「はい、お姉さま。」

アリスとエミリーも部屋に入って行きました。

「だが今回の旅ではリバー王の秘宝に関する手掛かりは何にも見つからなかったな。俺にはよくわからねえんだ、リバー王の秘宝っていうのが。」

レオンが言いました。

「あんたはもともとこの国の人じゃないもんね。まあ、あたしも知らないけどさ。ヴォルフ、何か知ってる？」

ピアンカがヴォルフに問いかけます。

「ああ、実は、王家の人間にもその秘宝が何なのか知っているお方はないらしい。どこに眠っているのかもだ。ただ、その秘宝は初代のリバー王がとても大事にしていたものらしい。」

「じゃあ、王冠か何かもな。」

レオンが言います。

「もちろん大きな宝石に決まってるよ。」

ピアンカが言います。

「ものすごい武器かもしれないぜ？」

マチルドも言いました。

「よくわからんが、その秘宝を手に入れたものは、この国を意のままに動かすことが出来ると言われている。」

「それなら、なおのことギル大臣たちに先を越されるわけにはいかないな。早く見つけ出して、オットー様に献上しないと。」

オリバーが真剣な表情で言いました。

「オットー様はもともとロンドランドを治めていた王家の直系の末裔だ。だから王位継承権もあるんだが、あくまでオットー様はヨージェフ王の二一歳の第一皇女、ヘルガ様に王位を継がせたらしい。それが正統だと主張なさっておられる。」

ヴォルフが言いました。

「謙虚なお方だな、オットー様は。」

オリバーが感心したように言いました。

「ああ、素晴らしいお方だよ……。」

ヴォルフはまるで自分のことのように誇らしげに言いました。

~~~~~

数時間後、ピアンカは、机に座ってアリスが置き忘れて行った土笛を吹いていました。

「師匠、どう？上手くなったと思わない？」

「ははっ、まあな。でもアリスには劣るけどな。」

「ええーっ？この前エミリーがあたしが吹いている時にアリスだと間違えたらしいよ？」

「エミリーが寝ぼけてただけじゃないのか？」

「むー、ひどいなあ、師匠は。」

ピアンカは脹れっ面をしました。と、その時、宿の外が急に騒がしくなりました。悲鳴も聞こえてきます。

「…何かあったのか？」

すると、二階からバタバタと音を立ててイザベルが降りてきました。

「オリバーさん、魔獣が街の中で暴れているみたいです。」

「何だっつて!？」

オリバーは突然のことにびっくりしました。

「一刻も早く街の人を助けに行きましょう。」

「わかった。準備ができたやつから、俺についてきてくれ！」

オリバーはそういうと、イザベルと共に外へ飛び出して行きました。ビアンカも、少し遅れて階段を下りてきたローズたちと外へ出ました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

外で暴れまわっていたのは五頭のまるで馬のような魔獣です。全身から炎が出ています。

「こんな魔獣は見たことがない…。おそらく魔術師が作り上げたものに間違いないな。」

「冷静に分析してる場合かよ！あっちこっちで荷物なんかが燃えてるぞー！」



マチルドの声に、オリバーは指示を出しました。

「モニカ！お前は燃えている炎を消してきてくれ！ローレンツとラルフもだ！」

「は、はい！」

モニカはローレンツたちと一緒に走って行きました。

「アリスとエミリーは宿の二階から矢で援護してくれ！」

「うむ、わかった。行くぞ、エミリー！」

「はいつ、お姉さま！」

アリスとエミリーは宿に駆け込んで行きました。

「全身が燃えている以上、うかつには近寄れない。間合いが大きい  
槍使いが大きな戦力になる。ハンスとレオン、頼んだぞ！」

「任せてください！」

ハンスは叫ぶと、一頭の燃える魔獣に突撃していきました。しかし魔獣はその頭上を飛び越え、攻撃をかわしました。

「く、くそっ！」

「うおおおおおっ！」

レオンは大声をあげて魔獣に突撃しました。魔獣はそれに気づくと、また頭上を飛び越えようとしてました。

「へっ、かかったぜ！」

レオンは素早く槍を引くと、今度は真上に突き上げました。槍は魔獣のお腹に突き刺さりました。倒れた魔獣を、ピアンカが突き刺しました。

「熱いなあ！…レオンもようやく魔獣とまともに戦えるようになったね。」

「あの時の特訓のおかげだ。」

~~~~~  
~~~~~

ローズとマチルドは、短剣やこてでは燃える魔獣相手に戦うことができないので、相手を混乱させることに専念していました。魔獣の前に現れたかと思うとサツと隠れたり、短剣をかまえて突っ込むかと思うと横に飛びのいたり、素早い動きを最大に生かしていました。

「よし、混乱してきたぜ！今だ！」

「ポイズンラース！」

マチルドが合図するとイザベルは魔術を魔獣に向け、ペーターがとどめを刺しました。

「いい連携だな！」

マチルドが楽しそうに言いました。

「あっちにはかなわないよ。」

ペーターが指さした方向では、オリバーとローズがペアとなって魔獣と戦っています。

「カーズアタック！」

オリバーが四頭目の魔獣を倒しました。

「ローズ！行ったぞ！」

ローズが魔獣からサッと遠のきました。しかし、魔獣に気を取られ、そこにいたモニカに気がつきませんでした。

「きゃあっ！」

「っ…！ごめん…。見えなかった…。」

「ローズさん！魔獣が！」

「あっ…。」

魔獣がローズとモニカめがけて突進してきます。

「そこから逃げろ！カーサアタック！」

しかし突然のことにオリバーも十分に魔力をためることができず、魔獣に決定的な打撃を与えられませんでした。その苦痛に怒り狂った魔獣は勢いのままローズたちに突進してきます。

「ローズ！モニカ！逃げろ！」

しかしモニカは腰を抜かしてしまって立つことができません。ローズが必死に引っ張っています。

「早く！魔術を！」

ビアンカがオリバーをせかしましたが、オリバーは魔術を唱えられません。

「ダメだ！あの距離じゃあ二人も巻き込んでしまう！」

魔獣がローズとモニカに飛びかかりました。ローズはモニカをかばうように立ち、ギョツと目をつぶりました。

~~~~~  
~~~~~

その時、ヒュンという音がしました。矢が一本、魔獣の首に刺さっています。魔獣は苦しさに地面に倒れてもがいていましたが、やがて動かなくなりました。宿の二階からエミリーが静かに言いました。

「…間に合いましたか。」

「エミリー！」

「矢じりに毒を塗っていて射るのが遅れてしまいました。申し訳ありません。」

エミリーはそう言って哀しそうな顔をしました。アリスが心配そうにのぞきこみます。

「…どうしたのだ、エミリー。」

「あの魔獣たち…、こうやって人を襲うためにつくられたということですよ。…あの子たち、それを悲しんでいるような気がして…。」



たのか!？」

ヴォルフがオリバーに詰め寄ります。オリバーは悲しそうな表情を  
しました。

「…ある意味、その通りと言えばその通りだ。…望んでいたこと  
はないがな。」

「じゃあお前たちは、」

すると、たまりかねたようにリリーが口を開きました。

「あんだ、ちょっと待ちなよ。あんだがまくしたてていたんじゃ、  
オリバーたちだって話せないよ。」

…話してごらんよ。難しいことはわからないけど、今までずっとみ  
んなのために頑張ってたあんなたちのことだし、私たちを苦しめる  
ようなことをわざわざしたとも思えないしね。」

リリーがオリバーに言いました。

「ああ。俺も言い方が悪かったな。…洞窟はしっかり封印してきた。」



それと同時に、闇の魔術師の一人であるプレグーも葬った。魔獣の数は、確実に減る。…だが、俺たちが樹海を歩いている時、俺たちはプレグーの襲撃を受けたんだが…。」

オリバーはプレグーがたき火から魔獣をつくりだして襲わせたこと、更にローズを操って仲間を襲わせたことを話しました。

「で、その時の傷がこれさ。」

「ずいぶんざつくりとやられたね。しかも傷口が黒く変色しているねえ…。」

「それは、ローズの短剣が呪いの魔術を封じ込めたものだからだ。俺にはある程度呪いの魔術に対する耐性が備わっているから普通に刺された痛みしかなかったが、この黒い傷は一生消えないだろうな。」

「なるほどねえ…。ローズがオリバーを襲うなんて、まず考えられないもんね。」

「闇の魔術師はそうやって油断や混乱を誘い出し、同士討ちをさせることも多々ある。過去にも俺はそうやって何人もの仲間を失った。…それに、まだ闇の魔術師だった頃は何度もその手を使ったしな。」

「で、今そこで暴れてた魔獣も闇の魔術師がつくりだしたもので、つてことなのかい？」

「経験を積んだ魔術師なら簡単にそこら辺にいる動物を魔獣にすることはできる。…俺も闇の魔術を使うことが許されるならできるが、そんなことをするわけにはいかないからな。だが、完全に闇の魔術に傾倒した連中にはある程度の素材があれば、それを魔獣に変性させることができる。木の根っこや布切れからでもな。今日襲ってきたのは、恐らく後者だ。」

「つまり、これからの魔獣は自然のものは減るけど、そのかわりにいるのは魔術師がつくった危険なものだ、ってということかい？」

「ああ、そうだ。…俺も今回の騒動に闇の魔術師が絡んでいるとは思わなかったんだ。だからこの状況も予測がつかなかった…。」

オリバーは肩を落としました。リリーはヴォルフに聞きました。

「…どうだい、これでオリバーたちを信用したかい？」

ヴォルフは申し訳なさそうに言いました。

「すまないな、お前らも頑張ったのに、それをすべて否定することを言っちゃまって…。」

「いや、確かに魔獣を強力なものばかりにしたのも俺たちだ。必要とあらば俺たちは出て行くよ。そういう場合はアリスたちが二人の狩人小屋を提供してくれる、って言ってたしな。」

「どうかそんなことを言わないでくれよ。お前たちにはここにいてほしいんだ。この街を動死体から救ったり、ナンジューマを解放したことでこの街の連中はお前たちを心の拠り所にしてるんだ。街のやつらの希望を俺の一言で追いだした、なんて、後味が悪すぎるじゃないか…。」

「本当に、勝手なことばかり言うね、あんたは。…だけどさ、やっぱりここに残ってくれないかな。」

私たちもさ、あんたたちが来てから本当に楽しかったんだ。何とゆうかさ、ほら、私たちも仲間の一員みたいにあんたたちの出発前の会議に参加していただろう？だからさ、あんたたちが無事に帰ってきた時は本当に嬉しいんだ。」

「ありがとう、リリー。嬉しいよ。わかった、ここに残るよ。みんなもいいだろ？」

仲間たちも笑顔で頷きました。

「よし、今日は祝勝会だね！宴会の準備をするよ。さあヴォルフ、あんたも行くよ！」

リリーは満足げな顔でヴォルフを引っ張って行きました。

オリバーたちは凶暴で強力な合成魔獣を何とか倒すことができました。リリーのおかげでヴォルフからの疑いも晴れたようです。

次話では狩りから戻ったアリスとエミリーが、魔獣の骨が大量に転がっている場所を見つけたとオリバーに報告します。オリバーは何かの仲間を連れてその調査に向かいますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに今回合成魔獣をけしかけてきたのは闇の魔術師であることにはかわりありませんが、レジオンではありません。果たして誰でしょうか…？

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「31・死の使い」 (前書き)

闇の魔術師によってつくられたと思われる魔獣がオーベルクの街で暴れたり、オリバーたちを取り巻く環境は相変わらず危険なものとなっています。そんな中でも仲間たちは自分の力を最大限に活かせるように頑張っているようです。

悪の大臣 二章・リバー王の秘宝 「31・死の使い」

ある日、イザベルがこれまで見たこともないほどたくさんのお薬を  
抱えて宿に帰ってきました。オリバーはびっくりしました。

「ずいぶん採ってきたんだな。」

「ええ、森の中に薬草がとってもたくさん生えている場所を見つ  
けました。これでまたいろんな種類のお薬が作れます。」

「へえーっ、この花なんか、綺麗な色してるなあ。」

オリバーが一輪の花を手にとろうとしました。

「あっ！触ってはいけません！」

イザベルが大慌てで花を取り上げました。

「うおっ！…どうしてだ？」

「このお花はアリスさんたちに頼まれて毒矢用に採ってきたもので

す。触っただけで死んでしまいますよ。」

「…どうやって採集したんだ？それに、今つかんでいるし…。」

オリバーは心配そうにイザベルを見ましたが、イザベルは笑って言いました。

「オリバーさんが呪いに対して耐性があるのと一緒で、私にも毒に対して耐性があります。…恐らくモニカさんも、氷に対して耐性があるのではないのでしょうか。」

「なるほど…。得意な魔術には自然と耐性がつくという文献を読んだことがある気がする…。」

「ええ。では私はこの薬草を調合してきますね。」

「ああ、わかった。」

（俺が呪いの魔術に耐性がついたのには、原因があるんだけどな…）

オリバーが心の中で苦笑いすると、今度はビアンカが宿に入ってきました。



「よっ、師匠！元気？」

「あれ？ビアンカか。珍しいな、呼び出してもいないのに来るなんて。」

「今日はリリーに用事があったんだよ。小説を貸してって言われたから。」

ビアンカは本をパタパタさせました。

「ふーん。…なあ、ビアンカ。前から聞こうと思っていたんだが、お前はオーベルクにいるときはどこで寝泊まりしているんだ？」

「ああ、特に誰にも言っていないもんね。ほら、いつもあたしが座ってる橋があるでしょ？そのそばの店だよ。」

ビアンカは珍しく面倒くさそうに言いました。

「そのそばの店、って、まさか、豪商であるヴァルトシュタイン家のか？」

「そうそう。あたし、その三番目の娘なんだよね。」

「何だつてーっ！？お前が豪商の娘だと!？」

オリバーは驚きのあまり声を大きくしました。ビアンカはあまりこの話題には触れて欲しくないらしく、早口で続けました。

「女ばかり続いて、しかもあたしのすぐ後に弟が生まれたからあたしくらいの立ち位置となるともうどうでもいいいらしくてさ、だからあつちこつち旅してたんだ。まあ、この方が気楽だからあたしは気に入ってるけどね。あ、リリー！小説持ってきたよ！」

「あつ、ありがとう！」

ビアンカはリリーと立ち話を始めました。そこへ、今度はアリスとエミリーが帰ってきました。また大きなシカを仕留めてきたようです。アリスが得意げにヴォルフに言いました。

「亭主、シカを仕留めてきたぞ。料理してくれぬか。」

「はいよ。いつもすまないな。」

「あ、オリバーさん。今帰りましたよ。」

エミリーがオリバーに話しかけました。

「お疲れ。狩りの後は表情が生き生きとしているな。」

「やはり森の中を駆け回るのは気分がいいからな。」

アリスが満足げに言いました。

「あ、そうそう。オリバーさん、実は森の中で魔獣の骨が大量に転がっている場所を見つけたのですが…。」

「魔獣の?…恐らくは洞窟を封印したことによって魔力を保てずに力尽きたんだろう。一応明日、手が空いているやつを連れて見に行ってみるか。道案内を頼んでもいいか?」

「わかりました。」

二人は快諾しました。

「そうそう、イザベルが毒矢の材料を採集してきたらしい。今裏の物置で調合しているはずだから、行ってみるといい。」

「そうか。では行ってみるとするか。」

二人は宿を出て行きました。

~~~~~  
~~~~~

翌日、ハンスとペーター、ローズとマチルドが宿の一階に集合しました。

「レオンさんも来ないの？」

ハンスがマチルドに聞きました。

「死んだ魔獣なんて、見に行っただって面白くないから寝てる、だよ。相変わらずバカだな。」

「パトリックはまたキンフィールドに行っただけで情報を集めているし、

イザベルも薬の調合に忙しい。ローレンツとラルフも作業場にこもりつきりだからな。ビアンカはいつもの場所にいなかったから探すのも面倒だし。」

オリバーが説明します。

「そう言えばモニカはいないんですか？」

「パトリックと一緒に行かせてやったよ。たまには気を遣ってやらないとな。」

オリバーが笑いながら言いました。

(他人のことには気が回るのに…)

(どうして自分のことには気づかないかな…)

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちはアリスとエミリーの案内で森へやってきました。

「あれ？ここは一番初めに魔獣を倒す依頼を受けた森じゃないか？ほら、ローズが仲間になった…。」

「ああ、確かに！まだこんなところに魔獣がいたんスね…。」

ハンスとペーターが驚いたように言いました。

「もうすぐ着くぞ。…うむ、ここだ。」

アリスがカトリーヌの足を止めました。そこには大量の魔獣の骨が山のように転がっていました。

「…魔力がなくなれば魔獣の生命力は低下する。しかし、封印したのはつい何日か前だ。この短期間でこんなに風化するなんて不自然だ…。」

オリバーが首をかしげたその時、骨の山が突然ガラガラと音をたてました。そしてオリバーたちの背よりも三倍は大きい獣のような形になりました。

「な、何ですか！？」

「下がっている!」

オリバーは指先を骨獣に向け、エミリーも素早く矢をつがえました。すると、骨獣がオリバーに話しかけました。

「待て。あなたを襲うつもりはない。…あなたは魔術師、オリバー・ローゼンハインであるか?」

「…そうだ。俺は禁じられた洞窟を封印し、魔力を弱めた。お前たちが死んだのは、そのためか?」

オリバーはゆっくり腕を降ろしながら言いました。

「確かにあなたの行動によってわれらは衰弱した。しかし、われらが死んだのは違う者にとどめを刺されたからだ。」

「違う者? 誰だ?」

「『死の使い』だ。」

「なっ、何だっ!?!」

オリバーはびっくりしたようです。骨獣は続けます。

「われらは『死の使い』の遊びによってこのような姿にされた。その深い恨みからこのような形となってあなたに話しかけることができたのだ。

…われらからの願いだ。『死の使い』を葬り去ってほしいのだ。残忍な方法で、われらをこのような姿にした『死の使い』を…。」

「…俺たちもいずれ戦うことになる。安心してくれ。約束は果たそう。」

「ありがたい…。」

骨獣はオリバーの言葉に感謝すると、ガラガラと崩れ、それっきり動かなくなりました。

「先生…。『死の使い』ってというのは何なんです？」

ハンスがオリバーにたずねます。



「レジオンの別名だ。」

「レジオン、って、あたいとローズが見たやつか？」

マチルドもたずねます。

「そうだ。…この話は宿に帰ってしよう。他のみんなにも知らせなければならぬことだしな。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

宿に帰ると、パトリックとモニカが中にいました。ビアンカもイザベルとリリーと話をしています。

「おお、早かったな、二人とも。」

オリバーがパトリックとモニカに声をかけました。パトリックが厳しい顔で言いました。

「今日、ギル大臣への謀反の疑いをかけられて貴族のマウント家の

人を含め、五十人余りが処刑されたよ。人々は恐怖におののいている。…魔術師が裏で動いていた、という噂もあったな。」

「マウント…家…。」

ローズは呆然とした表情でパトリックを見ました。

「それは…本当？」

「当主の幼い子どもも一緒に、根絶やしにされたよ。むごいもんだよ、まったく…。…おや？ローズ、どうしたんだい？」

ローズは言葉も出せずにその場に座り込んでしまいました。

「…マウント家は、ローズのミニエー家の最後の生き残りが生い立ちを隠してロンドランドに住んでいたものだ…。」

ヴォルフが気の毒そうな顔でローズを見ました。

「もう…本当に家族は私だけ…。」

「…ローズ、つらいだろう。部屋で気を落ち着かせてきてもいいぞ。」

オリバーはローズの肩に手を置いて言いました。しかしローズはしっかりとオリバーを見て言いました。

「一人だけわがままは言ってられない…。」

(強くなった…。ローズは本当に強くなった…)

オリバーはパトリックの方に向き直りました。

「パトリック、その魔術師の噂を聞かせてくれ。どうも引っかかるんだ。」

「何でも、魔術師が市民を十人さらい、そのうち五人を殺し、残った五人を恐怖に陥れたところで尋問したらしいんだ。」

仲間たちは思わず身震いしましたが、オリバーは首をかしげています。

「…レジオンにしてはぬるいやり方だな…。別人かもしれん。」

「げえつ、そんな残忍なことをして、まだぬるい手段なのか？オリバー、そろそろ話してくれよ。レジオンってやつのこと。」

マチルドがオリバーに頼みました。

「ああ、わかった。：俺たちがこの前戦ったプレグーと、今国内で動き回っているレジオンは昔から二人で行動していた。プレグーはこの前見たように相手を操ったり混乱を誘ったりして、その様子を見て楽しむことから『悪魔の使い』、そしてレジオンは人の命をまるでおもちゃのようにもてあそぶことから『死の使い』と呼ばれていた。」

前にプレグーが熱した鎖で女子供をなぶり殺しにした話はしたと思う。だがレジオンはそれ以上に残酷なことをした。

やつは昔、討伐に来た魔術師や剣士たち五十人を生け捕りにした。そして術でその討伐者たちの妻や姉妹、母親など女の肉親ばかりを集め、目の前で痛めつけた。」

「だったらプレグーの方が残酷な気がするが…。」

レオンが呟きました。

「…まだ終わりじゃない。レジオンは地面に大きな穴を掘ると、中に毒虫やへび、サソリなんかをたくさん入れた。そして女たち同士、素手で戦わせたんだ。そして負けた女たちを穴の中に放り込んだ。」

勝った者は勝ったもの同士戦わせ、また負けた者を放り込む。最後に残った者は洗脳した兵士と戦わせ、最終的に全員を穴の中でなぶり殺しにしたんだ。その様子を最後まで見せつけたところで、討伐者たちも全員闇の魔術で殺された。」

「同じ魔術師として…許せないことです。」

モニカが顔を真っ赤にしています。

「確か、あの東方世界のことを書いた本にその処刑方法が書いてありました。レジオンという魔術師は東方世界のことを傾倒しているのかも…。」

ラルフが言いました。

「なるほど、それは知らなかったな…。とにかくレジオンという魔術師は危険だ。しかし、俺たちは必ずレジオンも倒さなければならぬ。レジオンがギル大臣の手駒の一つである以上、戦いは避けら

れないだろうからな。みんなも覚悟してくれ。」

~~~~~

夜、ローズは屋根の上に寝転がって星を見ていました。無意識のうち星が歪み、見えなくなりました。ローズは慌てて目を吹きました。

「やっほー、ローズ！いる？」

「お邪魔しますね。」

イザベルとビアンカが屋根の上によぎって来ました。ローズは起き上がって二人に言いました。

「聞いてほしいことがある。」

「私たちに、ですか？」

「そう。。。」

「何だか深刻な感じだね。ほら、話してみなよ。」

「うん…。私の一族をわざわざ魔術師まで使って探させる、っていうことは、あいつは本当に私たちが邪魔になっけてきているということ…。そのうちに私も狙われる…。」

イザベルとビアンカは、正直に頷きました。

「でも…私は負けない…。最後に残った私が頑張らないと、みんなが悲しむ…。先生のもとで、私は私自身の手で…。」

ローズはそこまで言うと、言葉を詰まらせました。

「…泣きなよ、ローズ。あんた、今まで無理してたからね。師匠に弱いところ見せたくないからってこらえていたんだろうけど。」

「無理は禁物です。じゃないと精神が参ってしまいますよ。ここで吐き出すのも大切です。」

イザベルとビアンカが言いました。ローズはうつ伏せになって震えていました。声は押し殺していますが、かすかに嗚咽も聞こえます。

「最後まで強情だね。…まあ、あんたらしいけどさ。」

「見守ってあげましょう。」

~~~~~  
~~~~~

ローズはその後しばらく同じ姿勢で「震え」続けていました。が、  
ようやく顔をあげました。

「落ち着きましたか？」

「うん。。。。ありがとう。」

「ほら、これ食べなよ。」

ピアンカはお菓子を差し出しました。ローズは受け取り、一口食べ  
ました。

「…う。」



ローズが顔をしかめると、ビアンカはおかしそうに笑いませした。

「あははっ、さっき台所の調味料を適当に混ぜたからねー。」

「…許さない。」

ローズはビアンカに飛びかかりました。ビアンカも応戦します。それを見てイザベルは安心したような表情を見せました。

(元気になってくれましたね…。よかった…)

「悪の大臣」 二章・リバー王の秘宝 「31・死の使い」（後書き）

一族の中でたった一人の生き残りとなってしまうたローズですが、自分の中でしつかりと決意を固めているようです。闇の魔術師レジオンの残虐行為、そして別の魔術師の影も…。脅威はまだまだ取り除かれていないようです。

次話ではビアンカがオリバーのもとにある一冊の古い本を持ってきます。オリバーはそれを読み始めたたん部屋にこもって出てこなくなってしまうたようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにレジオンの「遊び」の内容は、リバー王の秘宝が見つからないストレスを発散するために魔獣を集め、残虐な方法で殺す、という内容です。具体的には…残虐すぎてここでは書けません。

では次話をお楽しみに！

魔獣の数が減ってきたとはいえ、それでも時々あちこちの街や村に出没する魔獣は一般の人々にとって脅威であることには変わりません。今日もオリーブたちはオーベルク近くの村で魔獣を退治し、報酬をもらって帰ってきたようです。

オリバーは近くの村での魔獣討伐の依頼から帰ってきた後、ハンスにお説教をしていました。

「お前はもっと視野を広げなければならない。お前は気合だけで敵に向かって行く傾向があるな。気合だけで勝てるなら、苦労はない。

レオンをみてみる。初めは魔獣と戦うことに慣れていなかったが、今では自分なりに対策をたてて適応している。それなのにお前はいつも攻め一辺倒だ。一度他のやつらの戦い方をしっかりと見ておけ。

「はい…。」

「槍での戦い方はレオンを、敵との駆け引きはビアンカを参考にしろ。」

その時、部屋の扉がノックされました。

「どござ。」

「よっ、師匠！元気？」

入って来たのはビアンカです。

「ビアンカか。ちょうどよかった。ハンスに敵との駆け引きを教え  
てやってくれないか？ハンスときたら攻め一辺倒だから…。」

「あたしが？」

「お前は退き方もうまいからな。お前の思うようになっていいから、  
頼まれてくれないか？」

「いいよ。どうせやることなくて暇だしね。…そうそう、師匠に  
見せたいものがあつて来たんだ。」

「俺に？何だ？」

ビアンカは一冊の本を取り出しました。

「昨日家の書庫を整理してたらこんな本を見つけちゃ。何でもリバ  
ー王国の初代の王様であるリバル王に仕えてた魔術師についての  
本らしいんだ。参考になることが書いてあるかな、って思っで。

も、何だかよくわからない文字で書かれてて読めないんだよ。ちょっとは解読した跡があるんだけどね。師匠なら読めるかな、って思ってた。」

「ふーむ…、古代語だな。魔術師の名前は…エーベル・ブラッハーか…。初めて見る名前だな。よし、読み解いてみるか。少し集中して読んでみるよ。ビアンカはハンスのことを頼んだ。」

「ほいよー、了解。ハンス、行くよっ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夜、宿の一階でみんな夕食を食べていました。しかし、オリバーはいません。

「オリバーは何してるんだ？」

レオンがローレンツに聞きました。

「何でも、古い書物を読んでもらうらしいぞ。ずいぶん熱中してるらしい。」

「飯も食いに来ないほど熱中してるのか…。ローズ、これを持って行ってついでにオリバーの様子を見てきてくれ。」

ヴォルフの言葉にローズはコクンと頷くと、料理の乗ったプレートを運んで行きました。

~~~~~

やがて、ローズが戻ってきました。

「どうだった？」

「何か…怖かった…。目が血走ってた…。」

「狭くなると思うが、ハンスとペーターは俺たちの部屋で寝ろよ。邪魔するわけにはいかねえだろ。」

レオンがハンスとペーターに言いました。結局その夜は、オリバーの部屋の明かりが消えることはありませんでした。

~~~~~  
~~~~~

次の日もオリバーは朝から部屋にこもったままです。ローズは少し心配そうです。ペーターは苦笑いしています。

「先生はいつも熱中しだすと止まらないからなあ…。」

「よっ、ハンス！今日もやるよっ！」

ピアンカが元気いっぱい宿に入ってきました。それを見た瞬間、ハンスの顔が凍りつきました。

「げえっ！もう体がボロボロなのに…。」

「あんなので参るなんて、師匠も育て方が甘いね！ほら、今日も修行修行！」

…そうだ、ローズ。あんたも手伝ってくれない？」

ローズは不思議そうな顔でピアンカを見ました。



「何…するの？」

「難しいことは考えなくていいよ。とにかくハンスを不意打ちしてくれれば。」

「ハンスが…よけられなかった時は？」

「遠慮なくボコボコにしちゃって。」

ローズはしばらく考えていたようでしたが、やがて頷きました。

「わかった…。やる…。」

「嫌だあああっ！誰か助けに来てくれーっ！」

「皆さん元気ですね…。」

イザベルが笑いながら言いました。すると、アリスが声をかけました。

「イザベル、これからエミリーと森に行こうと考えているのだが、来ぬか？」

「そうですね…。じゃあモニカさんも連れて行って大丈夫ですか？私もビアンカさんたちを見ていると、久しぶりにモニカさんの訓練をしてあげようと思ひまして…。」

「うむ、かまわぬ。その間吾れらは狩りでもするとしよう。」

「いいですね、モニカさん。」

「あ、あの…。これからパトリックさんのところにお邪魔しようと思っていたんですけど…。」

モニカが遠慮がちに言いました。イザベルがモニカに語り出します。

「…いいですか、モニカさん。こういう状況を考えてください。あなたとパトリックさんがペアになって魔術師と戦っています。しかしパトリックさんはあなたをかばって魔術師の攻撃を受け、落馬してしまいました。あなたは当然パトリックさんを援護しようとしません。でも魔術が暴発してしまい、誤ってパトリックさんを氷漬けにしてしまうんです。あなたはもっとしっかり魔術を訓練しておけばよかったです…。」

「いやああっ！イザベルさん！そんな、あまりにも現実的すぎて、手が震えています…。」

モニカは真つ青な顔をしています。イザベルは満面の笑みで言いました。

「…行きますね？」

「はいっ」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

夜、夕食の時間になってもまだオリバーは降りてきません。マチルドでさえも心配しました。

「あいつ、何やってるんだよ…。こっちは腹をすかせてるっていうのに…。」

「文句を言つなよ。ほら、この果物やるから。」

ヴォルフがマチルドに果物をあげました。

「よしっ！」

「餌付けされてる……。」

ローズが喜ぶマチルドを見て言いました。

「あたいを犬みたいに言うな！」

「でも本当に遅いよな。昼飯の時とかどうだったんだ？」

レオンがリリーに聞きました。

「朝持って行った食事がそのまま置いてあったよ。水は飲んだみただけだね。」

「……いいんじゃないか？お前ら先に食っても。せつかく作ったシカのシチューが冷めちゃうしな。」

ヴォルフが苦笑いしながら言いました。結局その日もオリバーは姿

を現しませんでした。

~~~~~

翌日、パトリックが宿にやってきました。そこにはレオンしかいませんでした。

「おや？暇そうだね。みんなはどうしたんだい？」

「ああ、話し相手が出来てよかった…。ハンスはビアンカとローズが引つ張って行った。モニカも、イザベルやアリスたちと森に行った。ローレンツとラルフは物置にこもりっぱなしだしな。ペーターは寝てるし、マチルドはその辺をフラフラ歩いてるんだろう。」

「取り残された、ってわけだね。オリバーは？」

「さあ、三日間部屋にこもって古い本だか何だかを読んでいるらしい。ろくに飯も食ってねえらしいぞ。」

それを聞いた瞬間、パトリックは顔をほころばせました。

「…それはよかった。」

「あん？」

「オリバーが食事も口にしないほどに熱中して本を読んでいる時は、有用な手掛かりを見つけた時なんだ。きっとそのうち何かいい報せがあると思うよ。」

「ふーん。…で、お前は何で来たんだ？」

するとパトリックは真面目な顔に戻りました。

「最近ノーザリンで魔術師の動きが活発化しているという噂が流れていてね、それを伝えようと思ったんだ。」

「それはこの前のローズの一族を根絶やしにするための行動か？」

「いや、それは私も考えたよ。でもどうやらノーザリンでのミニエー一族狩りは三年前に終了しているらしい…。もしかしたらリバル王の秘宝を探しに行ったのかもしれないね。」

「だがアリスたちは北の樹海にはリバル王の秘宝の伝承は伝わっ

てねえと言っていたらどう？」

「うん、そうなんだよ……。とにかく、そのことを伝えなきゃならぬ  
いからね。オリバーが降りてくるまで私はここにいるよ。」

パトリックはそう言って椅子に腰をおろしました。

「ああ、そうしてくれると助かるぜ。何しろ暇だからな。そつだ、  
チエスはできるか？」

「まあ、人並みにはね。」

「よし、やろつぜ。」

~~~~~  
~~~~~

夜、みんな疲れた顔で宿に帰ってきました。ハンスとモニカはもう  
倒れそうなくらいにフラフラです。

「やれやれ。イザベル、あんたの指導もなかなか厳しいみたいだね。」

「

「うふふ、ビアンカさんにはかないませんよ。」

イザベルとビアンカが笑いながら話しています。ハンスとモニカは顔面蒼白です。

「あれ、パトリックが来てるなんて珍しいな。チエスか？」

マチルドが声をかけました。

「ちょっと話しかけないでくれ。今集中しているんだ。」

「戦績はどうなんですか？」

ラルフが聞くと、ヴォルフが苦笑いしながら言いました。

「レオンの一六連敗中さ。」

「くっそーっ！どうして勝てねえんだ！」



「結局バカは何をやってもダメだ、ってことだな。」

マチルドがバカにしたように言います。

「ご主人、今日はあまりいい獲物はありませんでした。果物はたくさん採って来たのですが…。」

エミリーがヴォルフに果物の入った袋を渡しました。

「昨日のシカ肉がまだ残ってるからな。その果物はデザートにでもしよう。」

その時、二階でボタンという音がしました。足音も聞こえます。

「…おっ、いよいよオリバーのお出ましだな。」

部屋にこもりきって古代の文献を読みふけているオリバーでしたが、パトリックの言葉通りならそれは何か重要な手掛かりを見つけたサインです。事実、その言葉通りだったようです。

次話ではオリバーが古代の文献を読んで分かったことを仲間たちに話し、そしてリバー王の秘宝のありかに見当をつけます。また、ギル大臣はオリバーたちを捕らえるためにある優秀な衛兵隊長をオーベルク近郊に派遣します。どうぞお楽しみに！

ちなみにパトリックは謙遜してはいませんが実はチェスの達人です。ですから決してレオンが弱いわけではありません。ただし、太刀打ちできないほどの実力差であることも間違いはないようです。

では次話をお楽しみに！

ビアンカが持ってきた本を読むなり自分の部屋にこもってしまった  
オリバー。パトリックによれば、それは何か重要な手掛かりを見つ  
けた証拠だといふのですが……？そしてついにオリバーが仲間たちの  
元に姿を現すようです。

二階から本を小脇に抱えてオリバーが降りてきました。頬は痩せこけ、目元には真っ黒い隈ができ、目も真っ赤に腫れています。彼はかすれ声で言いました。

「パトリックもビアンカもいるのか。ちょうどよかった。明日ノーザリンに向けて旅立つぞ。」

「ノーザリンだって!？」

パトリックから魔術師の噂のことを聞いていたレオンは驚きました。

「師匠、何かあの本からわかったの？」

ビアンカがたずねます。

「ああ、あの本にはまさしくリバー王の秘宝のことが書いてあった。あ、あの本にはまさしくリバー王の秘宝のことが書いてあった。」

リバー王の秘宝というものは二つあるらしい。文献でわかったのは宝剣だ。初代の王、この国の名前の起源となったりリバー王が使

っていたものだ。しかし、もう一つの秘宝に関しては具体的な記述はなかった。同じところに隠されているという事は間違いないんだが…。」

「なるほど、リバー王はバラバラだった国を統一してリバー王国を建てた。その秘宝で国を動かせる、というのはそういうことだったのか。」

ヴォルフが納得したように言いました。

「その隠し場所は北の樹海の中にある地下王宮の跡だ。」

オリバーの言葉にアリスがびっくりしました。

「何だと！？しかし樹海にはそのような伝承はない。ましてや地下王宮など…。」

「伝承は消されたのぞ。」

「消された…？一体どういふことですか？」

エミリーもよく理解できていないようです。

「そうだな…、じゃあローレンツ。リバル王はどのような人物だと言われている？」

「リバル王は今にも滅ぼされそうな小国の没落貴族だったが、忠実な家来を従えて徐々に国をまとめ、リバー王国を建国した後も善政をしいた。この国のやつなら誰でも知っている話だぜ。」

「だがそれは間違っているらしいことがこの文献に書いてある。リバル王は国を統一した後、大きな国を治めるといふ重圧からやがて精神が不安定になって疑心暗鬼になり、別荘として使っていた地下王宮にこもって、これまでつき従ってきた家来や民衆を大勢殺したらしい。」

「何だつて！？じゃあどうしてその話を今は誰も知らないんだ？」

マチルドがたずねます。

「そこでこのエーベル・ブラッハーという魔術師が出てくる。エーベルはリバル王が若いころからずっと王につき従っていた。だが王のすることは黙って見ていられなかった。しかし王を諫めても相手にしてくれない。そこで、王が死んだ後に国中に魔術をかけたんだ。」

「国中に？一体どんな魔術ですか？」

イザベルもたずねます。

「記憶操作術さ。エーベルはリバル王の悪政を国民の記憶からすっきりと取り除いたんだ。そして恐怖の象徴だった地下王宮への入り口を隠したらしい…。恐らくはこのことを広めたくない気持ちがある一方、事実をねじ曲げたことを悔いて古代語で書いたんだろう。そうすれば一般の人は読めない。」

「何でそんなものがあたしの家にあつたのかな…。」

ピアンカが首をかしげました。

「どうやらお前の実家はこの頃から王家の財政を支援していたらしいんだ。最後の方にそれを感謝する一文が書いてあったよ。」

「むー…、何だか複雑だけど、まあいつか。」

パトリックがオリバーに報告しました。

「オリバー、街で聞いてきた噂によると、ノーザリンでは最近一週間ほど前から魔術師の動きが活発化しているらしいんだ。もしかしたらその魔術師も情報をつかんだんじゃないかな？」

「な、何だつて!?!?…こうしちゃいられない。すぐにも出発しよう!」

すぐにも立ち上がるうとするオリバーでしたが、レオンが押しとどめました。

「…まあ、待てよオリバー。お前三日間寝てねえんだろ?まずはたくさん食って寝ることの方が大切だ。考えてもみるよ。その魔術師が地下王宮とやらの位置を知っているんなら、一週間もうるうるしねえはずだ。きっとそいつもまだ位置まではわかつちやいねえはずだ。」

「バカの割にいいこと言うな。でもレオンの言うとおりだぜ。まずは体力つけるよ。」

マチルドも同調します。

「少し急げば樹海の入り口まで五日で着く。まずは休むのだ。」



アリスも言いました。

「…すまない。俺はいつもみんなに迷惑をかけてばかりだ。」

「お互い様ですよ。実際にオリバーさんがこの文章を読み解いてくれなかったら僕らは何もできなかったんですからね。」

ラルフが励ますように言いました。

「じゃあ、悪いが一晩ぐっすり眠らせてくれ。明日の朝に出発だ。ヴォルフ、悪いんだが、」

「心配するな。弁当を作っておいてやるよ。」

「ああ、頼んだ。」

その時、入り口で声がありました。

「…どうやらオットー様の判断は間違いではなかったようですね。さすがローゼンハイン殿。」

「クララ様…！」

入り口にはオットー様の妻、クララ様が立っておられました。オリバーと仲間たちは一斉に跪きました。

「クララ様。どのようなご用件で…。」

ヴォルフがクララ様にたずねました。

「ローゼンハイム殿にオットー様からの伝言です。リバール王の秘宝を手に入れたらオットー様はロンドランドのパカロンで反乱軍を指揮します。その決起と同時に塔の牢獄に幽閉されているヘルガ王女を救出してほしい。そのため秘宝を見つけたらオットー様のもとへ来るように、と。」

「なるほど…。わかりました。我々は明日の朝に出発いたします。必ずや秘宝を手に入れてまいります。」

「くれぐれも気をつけるのですよ…。」

クララ様は微笑むと、宿を出て行かれました。

「では私は物置でお薬の調合をしますね。矢に塗る毒もつくらないと。」

イザベルが笑顔で席を立ちました。

「よし、これから武器の手入れをしてやるよ。みんな武器を貸せ。叩きなおしてやる。」

ローレンツとラルフも腕まくりをして宿を出て行きました。

「…あ、そうだ。モニカには用がある。ちょっと部屋まだ来てくれ。」

「へ？あ、はい！」

モニカはフラフラしているオリバーと一緒に二階に上がって行きました。

「さてと、あたしたちも旅支度をしてくるとしますか！」

「ああ、そうだね。」

パトリックとビアンカも宿を出て行きました。

「吾れらも納屋に行ってカトリーヌたちに餌をやってこよう。急ぐ旅になりそうだからな。」

「はいっ、お姉さま。」

アリスとエミリーも納屋へと向かいました。

「あたいはもう寝るよ。ローズ、お前はどつするっ。」

「眠くない…。いつものところに行く…。」

「俺たちも寝ようぜー。」

「そうツスね、先輩。」

ハンスとペーター、ローズとマチルドも階段を上って行きました。

「…結局俺が取り残されるんだよな…。」



「まだ見つけれられそうにありませんわ。」

「うむ…、ローゼンハインとか言う魔術師も、最近は動きをつかめていない…。しかし何かがあつてからでは遅いな。こちらも手を打つておくとするか…。衛兵隊長マティアス！マティアスはどこにいるか！」

ギル大臣が声を上げると、真つ黒な鎧に身を包んだ一人の兵士が中に入ってきました。

「これに…。」

「おお、マティアス。すぐに衛兵の小隊を率いてオーベルクに向かうのだ。レジオンの報告によるとオリバー・ローゼンハインはオーベルク近郊に潜んでいる可能性が高い。オーベルクに駐在し、怪しい人物は徹底的に調べ上げるのだ。見つけ次第捕らえるのだ。」

「心得ました…。」

「数々の手柄をあげてきたお前なら、造作もないことだろう。」

衛兵隊長マティアスは小さく会釈をすると、その場を後にしました。

「…私はあの男を信用できません。旧王家時代からの衛兵隊長、いつ謀反を起こすやら…。」

「心配は無用。マティアスは主人の命令には絶対に従う。…どのような命令にもな。」

リバー王の秘宝のありかがついに明らかになりました。北の樹海にあるという地下王宮です。しかし、オリバーはその地下王宮の位置をまだ仲間たちには明かしていません。それには何かの意図があるようですが…？そして、ギル大臣は衛兵隊長のマティアスをオーベルクに派遣しました。彼は今後の物語の中でも重要な存在となります。

次話ではオリバーが地下王宮があると目星をつけた場所に到着します。はたしてその場所に地下王宮、そしてリバー王の秘宝は眠っているのでしょうか？どうぞお楽しみに！

ちなみにビアンカの疑問を補足すると、リバー王が挙兵した際、唯一財政的に支援してくれたのがビアンカの実家であるヴァルトシユタイン家だったのです。当時のヴァルトシユタイン家は小さな商家だったのですが、このことがきっかけで代々続く豪商となったのです。

では次話をお楽しみに！



く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「34・地下王宮」 (前書き)

オリバーが読み解いた古代の文献には、リバー王国初代王リバー王の秘宝は北の樹海の中にある地下王宮跡にあるという記述がありました。オリバーたちはそれを手がかりに北の樹海にまた戻ってきました。

六日前にオリバーたちはヴォルフの宿を出発しました。いつものようにヴォルフとリリーが見送りました。

「いよいよだな…。」

ヴォルフも緊張しているようです。

「後のことは頼んだ。必ずリバー王の秘宝を見つけ出して帰ってくるよ。」

「その秘宝がある地下王宮とやらだけど…、本にも具体的な場所は書かれていなかったらしいけど、場所に見当はついているのかい？」

リリーが心配そうに聞きました。

「ああ、まだみんなにも言ってはいないけどな。確信がある。気になる場所があるんだ…。」



そして今、オリバーの隣でアリスとエミリーが怪訝そうな顔をしています。

「その気になる場所というのが、ここだというのか。」

「この辺りには森しかありませんよ。第一、いつも私たちはこの辺で狩りをしていました。」

オリバーたちはいつかの湖のほとりに来ていました。アリスとエミリーがよく狩りで疲れた体を休めたというあの湖です。美しいはずの水面は相変わらず毒々しく変色しています。

「まったく、誰に聞かれても言わねえで、結局はここかよ。何だかがっかりだぜ……。」

レオンが拍子抜けしたように言いました。

「オリバーさん、あの文献に何かこの湖のことが書いてあったんですか？」

イザベルもどこか心配そうです。

「いや、あくまで樹海の中にあつた、としか書いていなかった。…  
だが俺には確信がある。モニカ！頼む！」

「は、はい！」

モニカは大きく息を吸い込むと、叫びました。

「エバポレーション！」

途端に湖が一面炎に覆われました。熱い蒸気が立ち上ります。

「伏せろ！顔を覆え！」

オリバーたちは地面に伏せました。彼らの体を熱気が包みます。

~~~~~  
~~~~~

やがて熱気が徐々に冷まされてきました。彼らはゆっくりと顔をあげました。途端にマチルドとローレンツが叫びます。

「うわっ！湖がなくなってるぜ！」

「また魔術が暴発したのか!？」

しかしモニカは興奮したようにオリバーに言いました。

「オリバーさん！これでいいですか!？」

「ああ、大成功だ！」

モニカの問いかけに、オリバーは大喜びで頷きました。

「湖を…蒸発させたのですか…?」

魔術に精通したイザベルでさえも、さすがにあっけにとられたようです。

「何を言っているのですか!！」

エミリーが血相を変えてオリバーに詰め寄りました。

「わたくしたちの湖を干上がらせておいて、何が成功なのですか！」

「ま、待つのだエミリー！」

アリスが慌てて押しとどめましたが、エミリーはそれを振り払いました。

「あんな姿になっていたとはいえ、わたくしたちが愛する湖には変わりないのです！それなのに……。」

エミリーが涙ぐみながらオリバーに詰め寄った時、ピアンカが叫びました。

「し、師匠！みんなも！あれを見てよ！湖の底！」

仲間たちは湖を覗き込みました。

「そ、そんな……！」

「信じられない！」

「湖の底に…あんなものが！」

湖の底に降りる斜面には魔獣の骨がたくさん転がっていました。そして一番深いところには…、

「地下王宮の入り口に…間違いないな。」

オリバーが深く頷いて言いました。大きな石でふさがれた、明らかに人の手によってつくられた地下への入り口がありました。

「思った通りだ。この湖はあの地下王宮への入り口を隠すためにエーベル・ブラッハーがつくった人工の湖だ。」

「ま、待つのだ！だとしたら、どうしてここだと見抜いたのだ！？」

アリスが信じられないといった表情で言いました。オリバーが淡々と語り始めました。

「一番初めにここに案内されてきた時にいくつか疑問に思うところがあったんだ。」

まずはこの下の方にあつた湧水だ。森の平らなところからあんなに大量の水が湧き出しているというのも変な話だ。

二つ目、そこからこの湖まで続いていた枯れた谷だ。本来、谷は川の流れが山を削って出来るものだ。あれだけ大きな谷は相当な水量がなければ形成されない。でも仮に、もともとあの湧水の量の水が流れていたとしたら、自然に出来たといつてもおかしくはない。

第三に、この湖の形状だ。両端は山肌が落ち込んでいるが、今登ってきた方とその反対側は崖になっている。反対側の崖の向こうもまだ枯れた谷が続いているようだしな。

水が流れ込んでこない川、というのは普通火山の火口なんかには水がたまって出来るものなんだが、ここは火山だという痕跡がない。土も火山灰ではないようだしな。

恐らくここはあの入り口を隠すため上流と下流に崖をつくって囲むようにし、そして水を満たしたんだらう。もとは川だったはずだ。

…二人の大切な場所をなくしてしまったことは本当に申し訳ない。だが、きつと事前にこの計画を話してもきつと許してくれなかっただろ？」



オリバーが頭を下げました。エミリーは短く息を吐きました。

「この現実を見せられて、反論しろという方が無理です。…早く下へ降りましょう。…オリバーさんには驚かされてばかりです。…その代わり、どこかでちゃんと埋め合わせはしてもらいますよ。」

「ああ、もちろんだよ。」

~~~~~

オリバーたちは滑りやすい斜面を注意深く降りて行きました。

「不気味な光景だね…。こんなに魔獣の骨が転がっているとはね…」

パトリックが辺りを見渡しながら言いました。

「相当量の魔獣がここで水を飲もうとして毒にやられたんだろ。やはりあの洞窟から出ていた魔力はものすごいものだったんだな。」

オリバーが静かに言いました。すると、後ろの方で悲鳴が聞こえました。

「きゃあっ!」

モニカが足を滑らせたのです。

「うわっ!」

ハンスとペーターもそれに巻き込まれました。彼らは斜面を転がって行きます。オリバーとパトリックが駆け寄りました。

「三人とも、大丈夫かい?」

「足元には気をつけろ、って言ったたろうっ!」

「イテテテ…。うわっ、こっやって見ると、この大きな石だなあ…。」

地下王宮への入り口をふさいでいる石はとても大きなものでした。

「うつすらですけど…石の表面に何か書いてありますね。やっぱり古代語でしょうか…。オリバーさん、読めます?」

石を眺めていたイザベルが言いました。

「見せてくれ。」

オリバーは石の表面に描かれた古代文字をじっくりと眺めました。

「…みんな、下がっていてくれ。出来るだけ離れるんだ。」

仲間たちは言われるがままに後ろに下がりました。

「ue o m e b a k l x n q n ! ! r l p a q v s !」

オリバーが古代語で何かを唱えました。すると、入り口をふさいでいた大きな石がガラガラと崩れ、地下への入り口がぽっかりと穴を開けました。

「あつ、先生!」

オリバーはその崩れてきた石に巻き込まれました。しかし、土煙が消えるとオリバーが何もなかったかのようにそこに立っていました。石はまるでオリバーを避けるかのように崩れていました。

「…安心しろ。エーベル・ブラッハーは俺たちを歓迎してくれている。」

「あの石には何と書いてあったんですか？」

イザベルが興味深そうにたずねました。

「『この入り口を見つけた者はリバル王の秘宝を心から必要とするものである。苦勞してここを見つけたことを称え、扉を開ける呪文を授け、汝を加護しよう』とあった。」

「すげえや！古代の一流の魔術師が味方かあ！」

マチルドが興奮して叫びました。

「何百年も経った今でも魔力を残せるなんて…、このエーベル・ブラッハーという魔術師は強大な魔力を持った魔術師だったんですね…。」

「同じ魔術師として、憧れます…。」

イザベルとモニカは目を輝かせています。

「よし、中に入ろう。ハンス、ペーター、持ってきたランプに火をとませ。」

「はい。」

火がともると、彼らは中に入って行きました。

~~~~~  
~~~~~

斜面の上で、一人の男がその一部始終を見ていました。

「リバル王の秘宝がこのようなところに…。だが秘宝を手に入れるのはこのレジオンだ。待っている、ローゼンハイン。」

悪の大臣 二章・リバー王の秘宝 「34 地下王宮」 (後書き)

エーベル・ブラッハーが隠した地下王宮の入り口を見事にオリバーは見つけることができました。あとは中に入ってリバー王の秘宝を見つめるだけです。

次話ではオリバーたちが地下王宮の中を進みます。そしてその一番奥にあったものとは…？どうぞお楽しみに！

ちなみに湖を蒸発させる魔術は、モニカの強力な魔力を持ってしなければ成功しないものでした。オリバー自身は何度かに分けなければ湖の水すべてを蒸発させることはできないと考えていましたが、モニカは一度で完全に蒸発させたので大喜びでした。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 二章・リバー王の秘宝 「35・リバー王の秘宝」 (前書き)

オリバーの鋭い観察力で、かつていにしえの魔術師イーベル・ブラッハーによって封印された地下王宮の場所が判明しました。あとは中にあるという二つのリバー王の秘宝を見つけるだけです。

ちなみにこのお話で第二章「リバー王の秘宝」は最後となります。次話からは第三章「最後の戦い」をお楽しみください。

悪の大臣 二章・リバー王の秘宝 「35・リバー王の秘宝」

ランプを持ったハンスとペーターを先頭に、オリバーたちは慎重に地下王宮の中を進みました。

「すごいな……。宝石や金貨がたくさん転がっている……。」

「これだけでもものすごい価値ツスね、先輩……。」

「でも初代の王様の宝剣と比べられるほどのものだ、もう一つの秘宝、っていうのはこんなもんじゃ済まないんだろうな。」

すると、突然マチルドが叫びました。

「おい！ハンス！足元に気をつけろ！」

「えっ？うわっ！」

ハンスは落とし穴に落ちました。

「イタタタ……。」

オリバーが穴の中を覗き込みました。

「大丈夫か？今ロープを下ろしてやる。」

「はい…。」

ハンスはロープを這い上がってきました。

「注意力不足ツスねえ。」

ペーターがハンスを見てニヤニヤ笑っています。しかし、またマチルドが叫びました。

「おいペーター！頭！」

「え？うわっ！」

ペーターの頭にサソリが乗っていました。ペーターは大慌てです。

「マチルド、お前、暗闇でも目が利くのか？」

オリバーが驚いたように言いました。

「まあなー。夜に隊商を襲ったりもしてたから、普通のやつらよりは見えると思う。」

「それはすごいな。…よし、先頭はマチルドだ。ランプをマチルドに渡せ。ハンスは後ろを警戒するんだ。」

「とほほ…。」

「どんどん俺たちの影が薄くなっていくよ…。」

「黙って言われたとおりにしる。悔しかったらお前らももっと頑張れ。」

ハンスとペーターは肩を落としました。

「おい、オリバー。ここはどっちだ？二手に道が分かれてるぜ？」

イザベルが言いました。

「ああ、頼む。」

イザベルは一番近くにあった燭台に火をともしました。すると、他の燭台にも一斉に火がともりました。イザベルは感嘆の息をもらいました。

「…ものすごい魔力です。」

「おい！あれを見るよ！」

先頭のマチルドが指さした方向を見ると…、

「あれが…リバル王の宝剣…。」

パトリックが呟きました。宝剣は銀色にキラキラと輝いていました。柄の部分には宝石がちりばめられています。

「美しい…。」

ピアノカはため息をつきました。オリバーが静かに歩み寄り、宝剣を手に取りました。その瞬間、宝剣はまばゆい光を放ちました。その光は部屋全体をさらに明るく照らし出しました。そして徐々に剣は輝きを失い、やがて元のように戻りました。オリバーはそれを見届けると静かに言いました。

「…ここでの用事は終わった。帰るとしよう。」

「なっ、何だって！？おいおい、もう一つの秘宝を見つけてねえじやねえか。」

レオンがびっくりしたように言いました。それに呼応するように、オリバーたちの背後から鋭い声が聞こえてきました。

「その通りだ！ローゼンハイン！二つ目の秘宝は一体どこにあるというのだ！」

仲間たちが声のした方を振り返ると、レオンがものすごい表情でオリバーを睨みつけていました。

「レジオンか。…二つ目の秘宝のことを知っているという事は、お前もあの文献を読んだのか。」

「いかにも。王宮の古い書庫で見つけたのだ。だが第二の秘宝とおぼしきものがどこにもないではないか！最深部のこの大広間にあつたものもその宝剣だけではないか。いったいどこに第二の秘宝があるのだ！」

「…ううむ。」

オリバーの言葉に仲間たちは驚きました。

「ほう、二つ目の秘宝もお前たちが手に入れたというのか。」

「違うな。…壁画を見てみる。」

オリバーの仲間たちもレジオンも、壁画を見渡しました。

「…壁画がどうしたというのだ。リバール王の画ばかりではないか。」

「よく見てみるよ。リバール王の周りを。」

「先生、これは…リバール王の家族、ですか…？」

ハンスがオリバーに聞きました。

「そうだ。…リバル王の第二の秘宝、それは愛する家族さ。」

「ば、バカな！」

レジオンは信じられないといった表情をしました。

「どの壁画でも、リバル王は家族に囲まれている。それも言葉で言い表せないほど幸せそうな表情をしている。」

国民のみならず、ずっと付き従ってきた忠臣ですら信じられなくなったりリバル王が唯一心を休めることができたのは、この家族と過ごした時間だったのだろう。」

「バカな…。そのようなバカなことが！」

レジオンは完全に動揺しているようです。

「もらったあーっ！」

その瞬間、物陰に隠れていたマチルドがレジオンに飛びかかりました。

「エクスクルージョン！」

しかしすぐにレジオンは我に帰り、魔術でマチルドの短剣を吹き飛ばしました。そしてマチルドに指先を向けました。

「そのバカげたことが事実ならば宝剣を持ち帰るまで！まずはお前から地獄に送ってやるう！憎、^{レジオン}」

レジオンが聞きなれない言葉を叫ぼうとしたその時、レジオンの背後からやはり隠れていたローズが飛び出してきました。ローズが突き立てた短剣はレジオンの背中から体に深く刺さりました。

「へへっ、あたいはおとりさー！」

「う、呪いの、力を、込めた、短剣…。もう、一息の、ところで…。」

レジオンは静かに床に倒れこみました。ローズはレジオンにたずねました。

「死ぬ前に答えて…。マウント家を根絶やしにさせたのは誰…。」

「ギル…大臣の…直属の…魔術師…レイ、だ…。」

「それだけ聞ければ十分…。家族をバカげたものなんて、何もわからないくせに…。」

ローズは短剣をさらに深く突き立てました。レジオンは苦しんでいましたが、やがて動かなくなりました。

「…気の毒なやつだ。」

オリバーがポツリとつぶやきました。

「え？」

「これほどの強大な魔力、人のために役立てていれば、こんな無惨な最期を迎えずに済んだものを…。」

「天罰ってやつさ。」

レオンが仕方ないといったように言いました。

「それにしても、何だか感慨深げですね…。過去に何かあったんですか？」

イザベルがたずねました。

「ああ、俺の体に呪いの耐性を埋め込んだのはこのレジオンだ。

…一度、俺が闇の魔術師だった頃に決闘したことがあったんだ。だが互いに決着はつかず、相打ちで終わった。その時に俺を襲ったレジオンの魔術によって俺の体は死ぬまいと拒絶反応を起こした。苦しみは三日間続いた。そして苦しみが収まった時、俺の体は呪いの魔術に耐性がついていた、というわけさ。

…あの頃のレジオンは人に危害は加えても殺しはしなかった。だが歳を重ねるにつれその心は歪み、やがて『死の使い』と呼ばれるまてになってしまったんだ…。

時間は人を変える。良いようにも悪いようにもな。問題はその時間をどう過ごすか、だ。」

オリバーはフウツと息をつきました。

「さあ、帰ろう。そしてオットー様に報告だ。この宝剣も献上しなければな。」

オリバーと仲間たちは地下王宮を後にしました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

人物紹介

レジオン

- ・「死の使い」
- ・年齢不詳

・ギル大臣の手先として悪事を働く闇の魔術師。プレグーよりもよ  
り冷酷で残酷で、人の命をおもちやのように弄ぶことから「死の使  
い」と呼ばれる。かつてオリバーとは面識があった。リバール王の  
秘宝探しに躍起になっていたが、マチルドとローズの連携奇襲攻撃  
で命を落とす。

オリバーと仲間たちは無事にリバー王の秘宝を見つけることができました。そのうち宝剣のほうはもって帰ることができたようですが、少なくとももう一つの秘宝に関しては今のオリバーたちには持つて帰ることができなかつたようですね。

このお話で第二章の最終話となります。次話ではオーベルクに戻ろうとしているオリバーたちの前にある人物があらわれます。はたして一体誰でしょうか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーとレジオンの関係ですが、過去の二人は絶対に相容れないライバル、といった感じでした。しかし、オリバーも言っていたように当時のレジオンは危害は加えても人を殺しはしませんでした。オリバーの言葉に当てはめると、時間の流れによってオリバーはいい方向に変わり、レジオンは悪い方向に変わってしまった、というわけです。

では次話をお楽しみに！

「悪の大臣」 三章・最後の戦い「36・衛兵隊長」（前書き）

北の樹海の中に隠されていた地下王宮の中で、オリバーたちはリバー王国の初代王リバー王の宝剣と「もうひとつの秘宝」を見つけ、さらに闇の魔術師であるレジオンを葬りました。オリバーたちは宝剣をオットー様のもとに届けるため、街道を南へと歩いていました。

く悪の大臣く 三章・最後の戦い「36・衛兵隊長」

オリバーたちはオーベルクに向かって街道を歩いていました。リバル王の宝剣はイザベルの薬草袋の中に隠してあります。

「最近の旅の途中で魔獣と出くわすこともほとんどなくなりましたね。人々も安心して暮らしています。」

ペーターが嬉しそうにオリバーに言いました。

「ああ、そうだな。だがまだギル大臣という大きな恐怖が残っていることには変わらない。気は抜けないな。」

オリバーはいったん緩めた頬をひきしめなおしました。

「先生！」

突然ハンスがオリバーを呼びました。

「どつした？」

「あそこの村から火の手が上がっているようです。」

オリバーが目を凝らすと、確かに遠くの方に黒い煙が見えます。

「…本当だ。よし、マチルド。探ってきてくれ。」

「あいよっ!」

マチルドは風のように走って行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

やがてマチルドが厳しい顔で帰ってきました。

「ただだぜ。兵士の略奪に遭っている。早く助けないとダメだ。」

「そうか。…よし、みんな。急ごう。」

オリバーたちは煙が立ち上っている村に向けて走り出しました。

~~~~~

しかし、村に着いた彼らは異様な光景を目にしました。

「王国軍同士が…争っている？」

「おかしいなあ。さっきあたりが見た時はこんなことにはなっ  
てな  
かったぜ？」

マチルドも首をかしげています。その時、立派な黒い鎧に身を包ん  
だ兵士がこちらに向かってきました。

「何者だ！」

すぐさまイザベルが応対します。

「旅の薬売りです。あなた様は…？」

「私は衛兵隊長のマティアスだ。」



「衛兵隊長様がこのような場所で何を？」

「肅清だ。」

「肅清？」

イザベルはびつくりしました。衛兵隊長マティアスは肅清を受けている兵士たちをまるでゴミを見るような目で見て言いました。

「あの監視兵どもは村で略奪を働いていたのだ。見過ごしておけぬ。」

「それはそれは……ご苦労様です。」

「それにしても…薬商人にしては不自然に重装備だな。人数も多い。」

マティアスはイザベルやオリバーたちをジロジロ見ました。

「リバー王国は魔獣たちがあふれていて危険だという噂を聞いたので…。大事な品物を台無しにするわけにはいきません。しかしここ

まで魔獣に出会うこともなかったので安心していたところです。」

イザベルが笑顔で言いました。

「魔獣なら数が減ってきている。何でもオリバー・ローゼンハインとかいう魔術師の一行が魔の洞窟を封印したらしいからな。」

「そうでしたか…。ではその魔術師はこの国の救世主ですね。」

「だがやつは王国の兵士たちを大勢殺した。私はその男を捕らえるために派遣されてきたのだ。」

イザベルは驚きましたが、何とか平常心を保ちました。

「旅の者に話しても仕方のないことだったな。さあ、さっさと立ち去れ。」

「はい。…皆さん、行きましょう。」

一行はそこを離れました。そこへ、兵士の一人がマティアスに報告に来ました。

「隊長、肅清完了しました。」

「」苦勞。」

「…今の旅の者、怪しいように感じるのですが…。」

「私もそう思う。」

「ではなぜ荷物の取り調べをしなかったのですか？」

「今はこの兵たちの肅清をしていた時だ。丸腰の者に手をかけるなど、人の道を外れた行為だからな。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは心なしに早歩きになっていました。

「みんな、ひとまず落ち着こう。…あの分だと、オーベルクの街は王国の兵士でいっぱいだと思います。」

…パトリックとモニカ、お前たちは宿に行つてヴォルフに今回のことを報告してきてくれ。俺たちは街を避けて直接オットー様のもとへ行く。あとを追いかけてきてくれ。」

「わかった。では先に行かせてもらつよ。」

パトリックはフランソワの足を速めました。モニカがしっかりとその背中にしがみついています。

「ビアンカ、ここから市街地を通らずにロンドランド方面への街道に抜けられる道はあるか？」

「むー、ここからだとし街地を通らないとダメだね。引き返すにしても、もう一度あの衛兵たちと会うことになつちゃうし…。」

ビアンカが困つた顔をしました。すると、アリスとエミリーが言いました。

「ならば森の中を通ればよい。吾れらはあの辺りの森は把握できている。」

「最近よく狩りに行っていましたからね。」



「大丈夫…初めから覚悟してる…。それに私は先生を信用してる…。」

「いつもは冷やかすビアンカとマチルドも、今日に関しては何も言いません。」

「ローズ…。…そうだ、ローレンツ。あの衛兵隊長について知っていることはあるか？」

オリバーがローレンツにたずねました。

「ああ、キンフィールドじゃちょっとした有名人だ。あのマティアスという男は旧王国時代からキンフィールド城の衛兵隊長だった。ヌワール家という名門の軍人一家出身で、あまりにも腕が立つものだからギル大臣も殺さずに捕虜にして衛兵隊長の地位も保全したんだ。」

「それじゃあこれまで一般市民の虐殺なんかもしてきたんですか？」

ラルフが嫌悪感をあらわにして言いました。しかしローレンツは首を横に振りました。

「いや、今日見たとおり、略奪や虐殺をおこなっている兵士はマテイアスに見つかりと必ず肅清される。」

「国民の味方かと思えば、師匠を捕えるという命令には従う。むー、よくわかんない人だなあ…。」

ピアンカがしかめっ面をしました。

「命令には忠実な男だからな。略奪や虐殺は命令のうちに入っていない、っていうことだろう。…逆に言えば、命令であればどんな命令にも従う、という男だ。マテイアスの指揮力と戦いへの知識があれば、この国の地方の一つや二つ、簡単につぶせるぞ。」

ローレンツが肩をすくめながら言いました。

「何とかして戦うことは避けたいもんだな…。魔術師たちとは違って何も無理に戦わなければならぬ相手ではない。」

緊張したようなオリバーに、エミリーが頼もしく言いました。

「今まで何度も苦難を乗り越えてこられたのです。心配はないですよ。…さあ、街道に出ましたよ。」

オリバーたちは森を抜け、街道に出てきました。見慣れたロンドンへ向かう街道です。後ろにはオーベルクの街並みも見えます。

「ふう、まずは関門突破だ。あとはパトリックたちと合流してオットー様のところに行くだけだな。」

「そのパトリックも今到着したようだな。」

アリスが言いました。彼女が言うように、遠くから二頭の馬が走ってくるのが見えました。一頭はパトリックとモニカを乗せたフランソワです。そしてもう一頭には…、

「ヴォルフ！リリー！お前たちも来たのか！」

「衛兵たちの監視が厳しくなったからね、私たちもオットー様のところに行くことにしたよ。」

リリーが嬉しそうに言いました。

「オットー様に会うのも一年半ぶりだ…。懐かしいな。ところで、リバー王の秘宝が見つかってよかったな！」



ヴォルフも興奮しています。

「ああ。…だが詳しい話はオットー様のところに着いてからだ。さすがにこんなところで物騒なことを話すわけにもいかないからな。…さあ、いよいよ俺たちの戦いも大詰めだぞ。オットー様のところへ急ごう！」

~~~~~

人物紹介

〈マティアス・ヌワール〉

・「衛兵隊長」

・28歳。

・キンフィールド城の衛兵隊長。先祖代々続く名門軍人一族、ヌワール家の出身。真つ黒な鎧と剣を持っている。その武勇は国民の間にも広く知れ渡っている。とにかく命令に忠実な人物で、与えられた命令には必ず従う。正義感が強く、兵士による民間人への略奪行為を見つけると、彼ら衛兵による「粛清」が行われる。生き別れになった姉がいるというが…。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い「36・衛兵隊長」（後書き）

二人の闇の魔術師を葬り去ったオリバーたちの前に、衛兵隊長マテイアスがあらわれました。彼は今後のストーリーに大きく関わってくる重要人物です。

次話ではオリバーたちがオットー様と再会します。オットー様は反乱軍を指揮するため、かつて自らが治めていたロンドランド地方の古都パカロンに向けて出陣します。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーが予測した通り、この時オーベルクの街には見回りの衛兵たちがたくさんいました。もしオリバーがオーベルクの街に姿を現していたら間違いなく取り押さえられていました。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「37・オットー様の出陣」 (前書き)

オリバーたちはオーベルクの市街地を避け、森の中を抜けてロンド
ランド地方への街道に出ました。ヴォルフたちとも合流し、オット
ー様に会うために街道を東へと歩き始めました。

悪の大臣 三章・最後の戦い 「37・オットー様の出陣」

すっかり日が暮れた夜、オリバーたち一行はオットー様の古い隠れ家の前にきました。オリバーが声をかけます。

「失礼します、オリバー・ローゼンハインです。オットー様にお目通りをお願いします。」

すると、中からクララ様が扉を開けました。

「お待ちしていました、ローゼンハイン殿。オットー様もお待ちかねです。どうぞ、中へ……。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オットー様は部屋の奥で木槌で椅子の修理をしておられました。

「おお、ローゼンハイン殿、参られたか。」

「お元気そうでご不好意思、オットー様。」

「ちょうど椅子の修理も終わったところだ。まだまだ大工仕事は慣れんよ。…では話を聞かせていただこう。」

オリバーは洞窟を封印した後のレジオンとの戦い、そしてリバール王の秘宝のことを話しました。

「これがその宝剣でございます。お受け取りください。」

オットー様は差し出された宝剣を受け取ると、まじまじとご覧になられました。

「これが…リバール王の…。美しい剣だ。」

…だがリバール王にそのような秘密が隠されているとは余も知らなかった。愛する家族の存在が秘宝の一つか…。」

感慨深げなオットー様にオリバーが言いました。

「オットー様にはクララ様がいらっしゃいます。」

オットー様はそれをきいて笑っておっしゃいました。

「ヴォルフとリリーも家族のようなものだ。二人とも、ここまでよく来てくれた。」

オットー様はヴォルフたちの方を向き直りました。

「オットー様……。どこまでも、お供いたします。」

「再会できて嬉しゅうございますわ。」

ヴォルフとリリーはひざまずきました。オリバーたちはそれを見て笑顔を見せましたが、ローズだけは表情がすぐれずうつむいています。オットー様がそれにお気づきになりました。

「……ローゼンハイン殿、あの者の表情がすぐれぬようだが……。」

「ええ……。あれはローズと申します。一族をギル大臣によって滅ぼされてしまい、今ではたった一人の生き残りです。」

「と、いつことはまさかミニエー家の……。」

オットー様は驚いたように目を丸くされました。

「ええ、そうです。末娘で処刑は免れたそうですが…。」

「苦勞したのだな…。気の毒に…。」

すると、ローズが顔をあげました。そしてオットー様に話しかけました。

「オットー様…。レイという魔術師を知っておられますか…?」

その話し声はどこか気品の見え隠れする声でした。オリバーは感心しました。

(貴族の末娘だっただけあるな…)

「うむ、知っておる。…ギル大臣の右腕の女魔術師だ。残虐なことをよく好む。国民たちの苦しむ姿を見て楽しむ、悪の魔女という表現が正しいのだろうか。」

「だからプレグーやレジオンを召し抱えたのか…。」

オリバーがうなりました。

「ギル大臣の悪政も、実はレイがさせていることが多いという。無論、ギル大臣にもその傾向はあるのだがな。」

ローズは真剣な顔でオットー様を見えています。

「ではミニエー家のことは…、」

「ミニエー家の莫大な財産を狙うレイと、ミニエー家を出世のための障害と考えていたギル大臣の思惑が一致した、ということだな。その事実を知る者は余の他はすべて殺されてしまった。」

「感謝いたします…。」

ローズは頭を下げました。

「つまり、そのレイという魔術師を倒さなければ国を救ったことにはならない、というわけですね。」

オリバーが緊張したように言いました。



「そういうことになる。…あなた方には本当に面倒をおかけしてしまつ。」

オットー様は申し訳なさそうにおっしゃいました。

「とんでもございません。それよりオットー様もパカロンの兵を拳げるとか…。」

「恥ずかしながらも余はロンドランドの旧王家の直系の末裔、前パカロンの城主でもある。余を慕ってくれる民衆も多い。ましてこの宝剣で民の心も引き付けられる。怒れる民衆の力は恐ろしい。派遣されてくる兵も撃退できるであらう。」

パカロン出身のモニカはさっきから夢を見ているかのような表情をしています。オットー様が生きていらつしゃったことがまだ信じられないようです。

「マティアスが来なければいいけれど…。」

レオンが心配そうにつぶやきました。

「む？マティアスを知っておるのか？」

オットー様が驚いた顔をされました。

「ええ、実は…、」

オリバーは衛兵隊長、マティアスのことを話しました。オットー様は困った顔をされました。

「あの男は本当に命令に忠実な男だ。命令によって善にも悪にもなる。…高名な騎士であるティボー殿ならば気持ちもわかるのではないかね？」

「はっ…。お察しいただけましたか…。」

パトリックがひざまずきます。

「ともかく余は明日の明朝、クララとヴォルフとリリーを連れ、パカロンへ向かう。そして頃を見て拳兵する。キンフィールドの兵の注目がこちらに向いたところで塔の牢獄の中のヘルガ王女を救出し、余のもとへ連れ帰ってきてもらいたい。」

「心得ました、オットー様。必ずや王女様を連れ帰ります。ですが決行までには時間があります。我々もパカロンまでお伴をさせていただきます。」

「それは心強い…。ぜひともお願いしよう。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌朝、オリバーたちは小屋の外で支度を終え、オットー様たちを待っていました。

「まったく驚いたぜ。まさかローズがオットー様と普通に会話できるなんてな。」

マチルドが意外そうに言いました。

「緊張した…。」

「あの時のローズさん、何だか気品がありました。」

イザベルが言いましたが、ローズは首を横に振りました。

「今さら気品なんて必要ない……。」

「おい、静かにしろ。オットー様が来たみたいだ。」

レオンが二人に注意しました。扉が開き、ヴォルフとリリーが出てきました。そして後ろからオットー様とクララ様が続きます。四人とも立派な格好をしています。

「ヴォルフ！リリー！何だか宿での格好を見慣れすぎていて違和感があるなあ……。」

「一応これが正装さ。宿の奥にしまっていたんだ。オットー様、クララ様、どうぞこの馬にお乗りください。」

ヴォルフはここまで自分が乗って来た馬にオットー様たちを乗せました。

「感謝するぞ、ヴォルフ。…ローゼンハイン殿、出発するでしょう。」

「はっ！アリス、エミリー、オットー様たちを両脇で護衛してくれ。」

「

「うむ、光栄なことだ。」

「わかりました。」

アリスとエミリーはカトリーヌとアンヌを歩かせ、オットー様たちの横に行きました。

「ローゼンハイム殿、本当に心強い仲間たちを集めたのだな。」

「頼もしい仲間ばかりです。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーとオットー様たちはパカロンに向けてゆつくりと馬を進めました。街道沿いの村人や、畑で農作業をしていた農夫たちは馬に乗ったオットー様を見て驚きました。

「おい、見る！あの馬に乗っているのはオットー様じゃないのか！？」

「オットー様が生きていた!?!」

「そばにいるのはひよつとしたら禁じられた洞窟を封印したオリバーとかいう魔術師じゃないのか?」

「国を救うためにオットー様が帰っていらしたんだ!」

「きつとパカロンに向かっているんだろう。」

「俺たちも行くこう!オットー様と一緒に行くんだ!」

オリバーやオットー様の後を、大勢の民衆が農具やナイフを持ってついてきます。ハンスとペーターが興奮しています。

「見てくださいよ先輩!すごい数の人ツス!」

「みんなギル大臣たちに不満を持っているんだろうな…。」

~~~~~  
~~~~~

やがてオットー様を先頭とした行列はロンドランド地方の中心都市、古都パカロンに到着しました。慌てて街の入り口に出てきた数人の守備兵も、アリスとエミリーがあつという間に蹴散らしてしまいました。大歓声の中、オットー様は街の広場で馬の足を止めました。イザベルが魔術を唱えます。

「エクスペンション！」

これでオットー様の声が広く遠くまで聞こえるようになりました。オットー様は民衆に向かって宣言しました。

「皆の者！余はオットー・フランツだ！パカロン城主、ロンドランド旧王家の末裔、オットー・フランツだ！国難を憂い、悪政を憂い、冥界より甦つて参った！」

民衆の大歓声が起こりました。オットー様は続けます。

「余はリバーの民を苦しめるギル大臣を倒し、リバーの旧王家を復活させるため、偉大なる魔術師、オリバー・ローゼンハイン殿に協力を依頼した！」

ローゼンハイン殿は勇敢な仲間と共に略奪の的になっていたダナラ

スフォルスを解放し、禁じられた洞窟を封印して魔獣たちの力を弱め、更には二人の闇の魔術師を倒して古くから言い伝えられているリバー王国の開祖、リバー王の秘宝を探し当てたのだ！見るがよい、これがその秘宝、リバー王が使っていた宝剣だ！」

オットー様は銀色に輝く宝剣を高くかざしました。民衆たちは声の限りに叫んでいます。

「われらが同士、ローゼンハイム殿に祝福を！声援を！」

「うおおおおっ！」

「オットー様の人望の篤さには驚かされるばかりでございます。」

オリバーが感激したように言いました。オットー様は笑って言いました。

「どうやら民はまだ余を信じてくれているようだ。…さあ、これからパカロン城に案内しよう。一休みするとよい。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



オットー様はオリバーたち一行をパカロン城に案内されました。

「私たちも一休みした後、キンフィールドへ向かいます。警備の厳しいオーベルクは通らず、少々遠回りして向かうことといたします。」

「ヘルガ王女様は塔の牢獄の最上階に幽閉されておられます。警備も厳重かと…。」

「中もとても狭いと聞いた。槍は使いづらいかもしれない。」

クララ様とヴォルフも厳しい顔で言いました。

「吾れらも狭いところで矢は使えぬ。」

アリスが肩をすくめます。それを聞いてオリバーは少し考えた後で言いました。

「アリスとエミリーは牢獄の周りで馬を走らせて兵隊をかく乱させるんだ。ハンスとレオンは入り口の守備をすると同時にモニカを守るんだ。モニカはまだ魔力をコントロールしきれていないから、狭い牢獄内で暴発すると大変なことになる。必要とあらばイザベルに

も外に残ってもらおうが…。」

「大丈夫です。いつまでもイザベルさんに頼りっきりになっていては成長できません。外での魔術は私に任せてください。」

モニカが力強く言いました。

「モニカもすっかり頼れる存在になったようだね。」

パトリックに言われ、モニカは顔を赤らめました。

「ではオットー様、私たちもそろそろお暇し、キンフィールドへ向かいます。」

オリバーがオットー様に言いました。

「わかった。余も五日後に挙兵する。ヘルガ王女をくれぐれもよろしく頼んだ。」

オットー様も緊張しておられるようです。

「しっかり頼んだぞ、オリバー。」

「お前もな、ヴォルフ。オットー様をしっかりと支えて差し上げてくれ。」

オリバーとヴォルフはがっちりと握手を交わしました。

~~~~~

人物紹介

〽オットー・フランツ〽

・「依頼主」

・34歳。オリバーへの救国の依頼主。ロンドランドのパカロン城主。パカロン公と呼ばれることも。かつてリバー王国と一つになる前のロンドランド王国の旧王家の末裔で、実はリバー王国の王位継承権も持っている。ギル大臣のクーデターの時から身を潜め、反撃の機会をうかがっていた。領民たちをよく支配し、とても人気が高く、未だに彼を慕う民衆は数多く存在する。彼が指揮するパカロン騎馬兵団は最強とも謳われた。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「37・オットー様の出陣」 (後書き)

オットー様がパカロン城入りし、ギル大臣への反撃準備も着々と整ってきました。民衆の大歓声に、オットー様自身もとても安心したようです。

次話ではオリバーたちがオットー様の拳兵とタイミングを合わせてヘルガ王女様が閉じ込められているキンフィールドの塔の牢獄を奇襲します。はたして無事に王女様を救い出すことが出来るでしょうか？どうぞお楽しみに！

ちなみにローズとオットー様ですが、オットー様はミニエー家の末娘が生きているということは知っていましたが、お互いに面識はありませんでした。実際、ローズのミニエー家とオットー様のフランツ家はそこまで親密な関係であったわけではありません。もちろん、ギル大臣への反抗勢力としての交流はありましたが。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「38・塔の牢獄」 (前書き)

オリバーと仲間たちはキンフィールド近郊の森の中に潜んでいます。キンフィールドの街はオットー様の拳兵の話で持ちきりです。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「38・塔の牢獄」

キンフィールドの街がにわかに騒がしくなりました。兵士たちがオオオロしています。

「大変だ！ロンドランドで反乱だ！」

「死んだはずのオットー・フランツが生きていたらしいぞ！」

「ええい、静まれ！我らの小隊は只今からパカロンに出撃する！オットー・フランツの反乱を鎮圧するのだ！」

「はっ！」

兵隊たちは軍備を整え、街を出てゆきました。

「よし、戻ろうぜ、ハンス。」

「うん。」

その様子を、物陰からハンスとマチルドがうかがっていました。

ハンスとマチルドは森に隠れていたオリバーたちのところに帰って
きました。

「兵隊たちはほとんどパカロンに向かったみたいだぜ。」

「残っているのはせいぜい王宮と牢獄の守備兵だけです。」

「よし、裏手から一気に牢獄を攻める。暗闇でも目が利くマチルド
と、素早いローズが先頭だ。今回は速度を活かしたい。みんな、行
くぞ！王女様を救い出すんだ！」

オリバーの声に、仲間たちは立ち上がりました。

牢獄の入り口には門番が二人立っていました。

「今まで村で略奪をやっていたような連中とは違い、ここの守備兵はかなり屈強なはずだ。ちょっと気を抜いただけで命取りになると思え。…モニカ、やるんだ。」

「はい！ファイアーストーム！」

モニカが叫ぶと、ものすごい火柱が立ち上りました。火柱が消える
と、そこに門番の姿はありませんでした。

「いくぞっ！」

ローズとマチルドを先頭に、オリバーたちは牢獄の中に突入してゆ
きました。

「よしっ、入り口は死守するぞ！」

「はいっ！訓練の成果を見せてやりますよ！」

ハンスとレオンが槍を構えて牢獄の入り口に立ちました。

「む、兵たちが集まってきたようだ。エミリー！―暴れするぞっ！」

をひたすら上へと登ってゆきます。中で待機していた兵隊たちもオリバーたちを登らせまいと立ちはだかります。

「邪魔だよっ！」

「どいて…。」

ローズとマチルドは兵隊たちの間を縫ってどんどん先に進んでいきます。

「大人しく道を開けるんだ！」

「邪魔だ邪魔だ！」

「もう、元気なんだから…。あんたたち、こんなところで体力使っ
んじゃないよ！」

剣を持ったペーター、パトリック、ビアンカも進んでいきます。

「カーズアタック！」

「ポイズンラース！」

オリバーとイザベルもペーターたちを援護します。

「俺っちもできることなら手伝いたいところだが…。」

ローレンツが肩をすくめました。

「でも僕らには最後の大事な仕事が残っていますよ、親方！」

ラルフが興奮した様子で言いました。

「ああ、そうだな！」

すると、少し前で戦っていたペーターの声が聞こえました。

「先生！突破しました！この先でローズたちが別の兵隊と戦っているみたいです！」

「すぐに行くぞー！ローレンツ、頂上まであとのくらいあるっ！」

「まだ三分の一も登っちゃいないよ。」

「中にこれほど兵隊がいるとは思いませんでしたね。」

「ああ、とにかく行くこう。ローズ！マチルド！大丈夫か！」

「あたいらは平気だぜ！」

マチルドが元気よく答えました。

「傷だらけで言われたって説得力ないね！」

ピアンカが笑っています。

「ここを乗り切るまで我慢してください！一段落ついたら手当てしてあげますから！」

イザベルが言いました。

「さすがだぜ！」

で組み立てられた簡単な投石機が作動しました。城外の兵士に向かって大きな石が投げ飛ばされます。

「す、すごい…！」

「神の兵器だ！」

民衆たちは驚嘆の声をあげます。ヴォルフはさらに声を張り上げます。

「違う！これは俺たちの仲間がつくったものだ！俺たちの同士がつくったものだ！俺たちの力で、俺たちが戦って、俺たちが勝つんだ！」

「うおおおおっ！」

そこへ、城内からオットー様が出ていらっしやいました。

「ヴォルフ、皆頑張っておるか。」

「はっ！皆勢いづいています！」

「よし、余も加勢しよう。」

オットー様はそう言って腕まくりをされました。

「みんな聞いたか！オットー様が直々にみんなと一緒に戦ってくださいさるそうだ！」

「うおおおおっ！」

オットー様は投石機に乗せる大きな石のところへ行かれました。

「これを皆で運ぶのか？」

「はいっ！」

「よし、皆で力を合わそう！行くぞ！」

「おおっ！」

オットー様は民衆たちとともに最前線で戦いました。パカロン城の

戦いは戦力的にも精神的にも籠城軍の圧倒的優勢な戦況で進んでいました。

~~~~~

オリバーたちは少しずつ階段を登って行きました。ローレンツが叫びます。

「オリバー！もう少しで頂上だ！」

「もう一踏ん張りだぞみんな！」

敵兵の数もだんだんと少なくなってきました。マチルドが短剣を振りかざします。

「邪魔だ！…よし、オリバー！突破したぜ！上からはもう足音は聞こえないぜ！」

マチルドの嬉しそうな声が聞こえました。

「よし！一気に頂上まで行くぞ！」



~~~~~  
~~~~~

牢獄の外でも激しい戦いが繰り広げられていました。

「毒矢だ！受け取れ！」

アリスとエミリーは敵兵のど真ん中で暴れまわっています。モニカもこれまでにない冷静な判断で二人を援護します。

「ハンス！お前も相当槍が上達したな！今度手合わせ願いたいもんだ！」

レオンが笑いながらハンスに言いました。

「この戦いが終わったらぜひやりましょう！…モニカ！危ない！」

モニカに向かって槍が投げられました。

「きゃあっ！ファイアーストーム！」

飛んできた槍は真っ黒に焦げ、地面に落ちました。

「パトリックに見せてやりたいぜ！」

「後でモニカの活躍を覚えておいてあげるよ！」

ハンスとレオンが冷やかしました。

「そ、そんな！あつ！アイスストライク！大丈夫ですかエミリーさん！」

エミリーに襲いかかろうとしていた兵士に氷の塊がぶつかりました。

「ありがとうございます！大丈夫！」

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは最上階にたどり着きました。 嚴重な鉄の扉が目の前に立ちふさがっています。

「鍵穴はこれだな？ラルフ、頼んだぞ！」

「わかりました、親方！」

ローレンツに言われ、ラルフは針金を鍵穴に突っ込み、中を探るよ  
うにしました。やがて、カチャツという音がしました。

「開いた！」

ローレンツとパトリックが二人がかりで重い扉を開けました。

~~~~~  
~~~~~

中には綺麗なお姫様が座っていました。

「あなたがたは…どなたです！？」

オリバーはお姫様の前にひざまずきました。

「魔術師、オリバー・ローゼンハインです。オットー・フランツ様からの依頼でヘルガ王女様の救出に参りました。」

お姫様は困惑したような表情を浮かべられました。

「そんな…信じられませんわ。フランツ殿は亡くなったと…。」

その時、ローズがスツとオリバーの前に出ました。

「王女様…。私もここに…。」

「あつ…あなたはローズ！どうしてあなたがここに！」

お姫様はローズを見てびっくりしたようです。

「先ほどの言葉通りです…。王女様の救出に…。」

「…古いお友達のあなたの言うことを信じないわけにはいきません。助けに来てくださってありがとうございます。」

「ご無事で何よりです。しかし、ゆっくりもしていただけません。早くここから脱出しましょう！」

「待つてください！この牢獄に閉じ込められている十人の中には悪いことをした人は一人もいません。みんな無実の罪を着せられて捕らえられたのです。きっとここに残された人々はギル大臣に処刑されてしまいます。」

「素晴らしいお方だ……。わかりました。急ぎましょう。ラルフ、また頼んだぞ。」

「わかりました！」

階段を降りながら、ラルフは今までと同じように鍵を開け、中の囚人たちを救出しました。

「よし、全員救出した！外のみんなを助けに行くぞ！」

オリバーは仲間たちに呼びかけました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

しかしオリバーたちが外に出ると、もうそこに敵兵はいませんでした。オリバーはレオンのところに駆け寄りました。

「レオン！敵兵は！？」

「喜べ！ついさっき撤退して行ったぞ！」

レオンが嬉しそうに言いました。

「そうか！よくやった！…王女様、今から我々はあなたをパカロンのオットー様のもとへお送りします。」

「それならばこの牢獄の裏手に警備兵たちの馬をつないである納屋があったはずです。その馬を使いましょう。案内いたします。」

~~~~~

ヘルガ王女様が言った通りの場所に納屋がありました。たくさん  
馬がつながれています。

「私も昔から乗馬はたしなんでおりました。馬の扱いには慣れていません。」

そう言つて王女様は一頭の馬にお乗りになられました。

「われわれもパカロンへ向かいます。ギル大臣を倒すため、少しでもお力になりたい！」

囚人として捕らえられていた元貴族たちも馬にまたがりました。

「よし、アリスはビアンカを、エミリーはイザベルを、パトリックはモニカを乗せてやれ！あと馬に乗れるのは俺とレオンとマチルドだな？他の乗れないやつはどこかの馬に乗せてもらえ！」

オリバーも一頭の馬にまたがりました。その後ろにローズが乗りました。

「王女様と一緒に乗らなくていいのか？古いお友達なんだろう？」

オリバーが言つと、ローズは肩をすくめました。

「いくら何でも恐れ多い……。」

「そ、そうか。まあ、そうだよな…。」

オリバーが先頭となって馬の隊列はパカロンに向けて走り出しました。

~~~~~  
~~~~~

夜通し馬を走らせたオリバーたちはやがてパカロンの街に近づいてきました。

「王女様、お体の具合は大丈夫でございますか？」

オリバーからの問いかけに、王女様はにっこりと笑顔をお見せになりました。

「三年ぶりに外の景色を見られてとてもすがすがしい気分です。私のことは心配なさらなくともけっこうですよ。」

…ローズが来て本当にびっくりしましたわ。幼少のころ、よくお城で一緒に遊んだものです。あの頃から内気な子でしたわ…。なかなか



か心を開いてくれませんか。ローゼンハイム殿のことは本当に信用しているようですけれど。」

ローズはオリバーの後ろで恥ずかしそうに顔を赤らめました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

城を囲んでいた兵士たちは疲労のため、一旦街を見渡せる丘の上に撤退していました。

「隊長！ 囲いを破って城に向かって走って行く馬の隊列が見えます！」

「な、何だと!？」

隊長格の兵士が報告を聞いて驚きました。すると、別の兵士が飛び込んできました。

「た、隊長！ 大変です！ 昨夜塔の牢獄が襲撃され、囚人たちが解放されたそうです！」

「何っ！？それではあの馬はまさかヘルガ元王女…。」

~~~~~

敵兵の隙をついたオリバーたちはほとんど何の苦勞もなく城内に入ることができました。

「オリバー！帰って来たんだね！」

「一番初めに彼らに気づいたのはリリーです。すぐにヴォルフやオットー様もかけつけました。」

「フランツ殿！」

王女様はオットー様を見て大変嬉しそうになりました。

「ヘルガ王女！ご無事でしたか…。」

オットー様は本当に安心したようです。そしてオリバーの手をしっかりと握っておっしゃいました。

「ローゼンハイム殿！心から、心から感謝する！」

「お役に立てて光栄です。ですが、最後の大事な仕事が残っていますよ。」

オリバーが笑って言いました。

「うむ。そうであったな。」

…皆の者！ローゼンハイム殿がキンフィールドの塔の牢獄からヘルガ王女様を救いだしてきてくれた！われらは旧王家復興のため、最後の大事な仕事をしなければならぬ！キンフィールドへ進撃し、リバー王国を再建するのだ！」

「うおおおおおっ！」

オットー様が叫ばれると、民衆たちは一気に沸き立ちました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

人物紹介

くヘルガ・デイトリヒく

・「王女様」

・21歳。

・リバー王国の王女様。ギル大臣のクーデターの際、父であるセザール王を殺され、王女様自身は塔の牢獄に死ぬまで閉じ込められることとなった。ローズとは小さな頃によく遊んだ仲。民衆のことを第一に考えて政治をしていた父、セザール王を心の底から尊敬している。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「38・塔の牢獄」(後書き)

オリバーたちは無事に塔の牢獄に閉じ込められていたヘルガ王女様を助け出し、パカロンに送り届けることができました。外の世界に出られて王女様も大変嬉しそうです。

次話ではオットー様のもとにノーザリン地方のレバリー城主、アルベール様が援軍としてやってくるようになります。しかし、マチルドやアリスたちによると、アルベール様はいろいろと曰くつきの人のようなのですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに王女様をはじめ、塔の牢獄に捕らえられていた人たちは死ぬまで出してもらえないことになっていたとはいえ、食事などは三食きちんと与えられていました。とは言っても、それぞれの部屋には窓もなく、あるのは薄暗いかがり火だけなのですから、とても健康的な環境とは言えません。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「39・聡明なレバリー公」 (前書き)

オリバーと仲間たちは塔の牢獄から無事に王女様を救出しました。オットー様はその功績をたたえ、オリバーたちに十分すぎるほどのもてなしをしています。

オリバーたちはヘルガ王女様を救出した後、パカロン城に滞在していました。彼らはその功績により、超一級の賓客としてもてなされています。

しかし、オリバーはそれらの処遇をあまり楽しんでいませんでした。彼は一人でお城のバルコニーに出てパカロンの街並みを見ていました。もうすぐ日が暮れようとしています。オリバーはフウツとため息をつきました。と、誰かがオリバーに声をかけました。

「元気がありませんね、ローゼンハイン殿。」

「これは…クララ様。」

オリバーは跪きました。

「どうぞ、お気になさらずに。…何か考えごとですか？」

クララ様が優しい口調でたずねられました。

「いえ、そういうわけではないのですが…。…どうも、このように」

もてなされることには慣れていないもので…。」

「意外ですね。数々の依頼をこなしてきたローゼンハイン殿のこと、あちこちからもてなされているものと思っておりますが…。」

「今までの依頼は確かに困難なものもあったとはいえ、基本的には個人的な利益を追求するための依頼が多かったです。しかし、今回は違う。オットー様の国を憂う気持ちに、私は本当に感動いたしました。」

「オットー様は民衆たちのことをよく考えていらっしやいますからね。」

「ですが私がこれまでしてきた仕事は汚れ仕事が大変多かったので、権力者に頼まれ、無実の者を失脚させたり、邪魔な者を暗殺したり…。」

やはり私が元々闇の魔術師だったことを知り、裏の仕事を頼む権力者も多いのです。そのような依頼を受けた時には弟子たちを連れていくことはできませんでした。ですからあの者たちはまだまだ経験不足で…。」

オリバーは哀しそうな笑みを浮かべました。しかしクララ様は穏やかな表情のままです。

「…オットー様がローゼンハイン殿に依頼したのは、三年前にグラン王国を荒らしまわり、民を苦しめていた巨大魔獣を倒したという話をきいたためなのですよ。」

「はは、あいつは確かに苦労しました。あまりに危険な相手で、まだハンスとペーターを連れて行くわけにはいかなかったので、一人で行ったのですが…。人々の喜ぶ顔が見られてよかったですと思いました。」

とはいえ、やはり今までの依頼を考えると…。」

肩を落とすオリバーに、クララ様は一転して真剣な表情で問いかけられました。

「…ローゼンハイン殿、あなたは良い依頼と悪い依頼、どちらをこなすのが好きなのですか？」

オリバーは驚いたような表情をしましたが、はっきりと答えました。

「当然、良い依頼です。」

「ではこの度のオットー様からの依頼、ローゼンハイン殿から見て良い依頼なのですか？それとも悪い依頼なのですか？」

「もちろん、良い依頼です。」

すると、クララ様は笑顔に戻っておっしゃいました。

「では気に病むことはありませんよ、ローゼンハイン殿。あなたは好きな依頼を受けることができ、私たちもそれによって救われるのです。」

オリバーはハツとしたような表情を浮かべました。

「…そうでしたね。ありがとうございます、クララ様。少し気分が楽になりました。」

「私たちも心からローゼンハイン殿を頼りにしています。どうか最後までよろしくお願いしますね。」

「もちろんです、クララ様。」

オリバーはすっかりと自信を取り戻したようです。

「さあ、城内に戻りましょう。夕食の準備が出来ていますよ。」

「わかりました。」

オリバーとクララ様は一緒にお城の中に入って行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その翌日、大広間のオットー様のところに、伝令がやってきました。

「ご報告いたします。レバリー公、アルベール・アズナヴァール様が兵を率いてパカロンに迫っているとのことです。ぜひ我々に加勢したい、と…。」

伝令兵はなぜか複雑な表情を浮かべていましたが、オットー様は顔をほころばせました。

「そうか、アズナヴァール殿が！わかった、ぜひ協力してもらおう。ヴォルフ、ローゼンハイン殿たちにも伝えてくれ。」

「はっ。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ヴォルフの話聞いて、マチルド、アリス、エミリーが絶望したような顔をしました。

「よりによってあんなバカ領主が…。」

マチルドがこぼします。

「アルベール・アズナヴール様は確かノーザリンの中心都市、レバリーの城主だったよな。いったいどんなお方なんだ？」

オリバーが聞くと、アリスとエミリーが苦い顔をして言いました。

「うむ…。以前は領民のことをよく思慮してただけ、とても素晴らしいお方だったのだが…、ギル大臣の悪政が始まってからはまるで気が触れたような振る舞いをするようになったのだ…。」

「突然お城の屋根に上ったかと思うと角笛を吹きならしたり、家臣に何も言わずにお城を抜け出して街で豪遊したり、おかしな話が絶えません。」

「そんなお方が加勢なんて…、気が進まないなあ…。」

ペーターはつぶやいた後、ローズがみんなを睨みつけていることに気がつきました。

「ローズ…？どうしたんだ？」

「アルベール様は素晴らしい人…。悪口は許さない…。」

ローズは頬を膨らませています。マチルドが信じられないといった顔をして言いました。

「何言ってるんだよ？あんなバカ領主を素晴らしいなんて、ローズ、おかしいんじゃないのか？」

「もう…いい…。」

ローズはブイツと不機嫌そうにそっぽを向くと、部屋を出て行って

しまいました。

「でもよ、バカ領主、とか言われてたとして、たくさんの兵隊を率いてくるなんて変じゃねえか？普通なら兵士もついてこねえだろ？」

レオンが怪訝そうな顔をして言いました。

「それは確かにそうだね。兵士というものは指揮をする者の能力が高くなければついてくるものではないしね。」

パトリックも同調しました。

「どのみちもつすぐご到着されるんだ。お前らも会つことになるだろうし、その時に判断しろよ。」

ヴォルフが言いました。

「ああ、そうだな。」

「あたし、心配だからローズのところに行くてくるよ。」

「まったく、信じられねえぜ。だいたいお前、あのバカ領主と何か関係でもあるのか？別に前、ノーザリン生まれじゃねえだろ？」

「シーツ、アルベール様がお見えになりましたよ。」

イザベルがたしなめました。大広間の扉が開き、立派な服を着た男性が家来を連れて中に入ってきました。と、オットー様が立ち上がられました。

「アズナヴール殿！久しぶりな！」

「フランツ殿！ようやく時が来たのだな！」

二人は大広間の真ん中で肩を抱き合って喜びました。アルベール様が連れてきた家来はにこやかに二人を見ていますが、オットー様の家来はポカンと口を開けてその様子を見ています。クララ様やヘルガ王女様も不思議そうに二人をご覧になっています。やがてアルベール様は王女様の前でひざまずきました。

「…クララ王女、遅ればせいたしましたして申し訳ございません。レバリー城主、アルベール・アズナヴール、只今参上しました。」

「アズナヴァール殿…。失礼なことを言うようですが、あなたはお気がふれてしまったと…、」

ヘルガ王女様は戸惑いを隠せないようです。オットー様が笑っておっしゃいました。

「私が説明いたしましょう。わが友人アズナヴァール殿は気が触れたふりをして戦力を集めていたのです。」

王女様は大変驚かれました。

「何ですって？」

「そうすればギル大臣から目をつけられずに済みます。…とは言え、本当は徹底抗戦をするつもりだったのですが…。」

アルベール様は申し訳なさそうにおっしゃいました。

「と、言いますと？」

「本当はフランス殿をかくまい、すぐにでも兵を挙げようと思ったのですが、あまりにギル大臣の兵の動きが早かったもので…。やむ

を得ず、早急な挙兵を諦めたのでございます。」

「そうでしたか…。ともかく、駆けつけてきていただいて感謝いたしますわ。レバリー公の直属軍はつわものぞろいと聞いております。大変心強いですわ。」

王女様は心からアルベール様にお礼を言いました。

「必ずやお役に立ってご覧にいれましょう。」

そう言ってアルベール様はオリバーの方をご覧になりました。

「…あなたがこの国の救世主、オリバー・ローゼンハイン殿か。かねがね噂には聞いておる。」

「もったいなきお言葉…。」

オリバーはひざまずきました。

「よくぞフランス殿の挙兵を助け、ヘルガ王女を救ってきてくださった。これからは共に頑張ろうではないか。」

「はっ。」

アルベール様はそう言ってオリバーと仲間たちを見渡されました。そしてローズと目があつた時、アルベール様は大変驚かれました。

「おや、もしかやミニエー家のローズ嬢かな？」

ローズは慌てて頭を下げました。

「大きくなられたな…。ローゼンハイン殿の手助けを？」

ローズは頷きました。

「そうか…。しっかりとローゼンハイン殿を助けるのだぞ。」

「はい…。」

アルベール様は満足そうに頷くと、大広間を出て行かれました。

「まさか気が触れた振りをなさっていたとは…。」

「驚きましたね…。」

アリスとエミリーは驚きを隠せないようです。

「あの方の家来を見ると、中央の役人だったやつもちらほら見えたぜ？うまく手なずけて自分の元に引き込んだんだな…。」

ローレンツが感心したように言いました。

「聡明なお方だ…。」

オリバーは心から感服したようです。

「そ、それじゃあローズとバカ…じゃなくってアルベール様はどんな関係なんだ!？」

マチルドの言葉に、ローズはまたプイツとそっぽを向いてしまいました。代わってハンスとビアンカが説明しました。

「あー、何でもさ、ローズの命乞いをしてくれたのは、あのアルベ

ール様だったらしいんだ。」

「確かに、アルベール様のアズナヴァール家とローズのミニエー家は仲が良かったはずだからね…。」

「そうだったのかよ…。ごめんよ、ローズ。」

マチルドが申し訳なさそうにローズに謝りました。

「もう、いい…。とにかくアルベール様は素晴らしい人…。」

ローズは自分のことのように誇らしげに胸を張りました。

~~~~~  
~~~~~

キンフィールド城で、ギル大臣が地団太を踏んでいました。レイがこわごわその様子を見ています。

「おのれ…！アルベール・アズナヴァールめ！私に反旗を翻すとはい度胸だ！オットー・フランツ共々蹴散らしてくれるわ！」

「それもそうですが…、確かアルベール・アズナヴァールはミニエー家の末娘の命乞いをしていましたが…。」

レイが言いました。

「そうだ…！今までは気が触れているとはいえ大きな力を持っていることには変わりないアルベール・アズナヴァールのことがあって手出しは出来なかったが…、やつが反旗を翻した以上、ミニエー家狩りに終止符を打つことも可能になったわけだな！」

「そのことで、面白いことがわかりましたわ、ギル大臣。以前ダナラスフォルスから逃げ帰ってきて処刑した兵士の記憶を見てみたのですが…、ミニエー家の末娘、ローズ・ミニエーによく似た女が兵士と戦っている様子が見えましたわ。」

「なるほど…、ミニエー家の末娘が私に恨みを抱いてオリバー・ロゼンハインに与したか。ハハ、面白い。」

「ようし、明日、その旨を発表することとしよう。捕まえた暁には大衆の前で処刑し、オットー・フランツたちへの見せしめにするのだ。」

「では明日にでも国中におふれを出しましょう。」

くアルベール・アズナブールく

・「賢い領主」

・38歳。

・ノーザリンのレバリー城主。レバリー公と呼ばれることも。オットー様とともに早くからギル大臣の対抗勢力として君臨していた。クーデターの際にはわざと気が触れた振りをして時が来るまで力をためていた。また、過去に行われたミニエー家狩りの際にはまだ幼かったローズの命乞いをした。そのためローズにはとても慕われている。彼が指揮するレバリー歩兵団は最強とも謳われた。

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「39・聡明なレバリー公」 (後書き)

レバリー城主、アルベール様がオットー様のもとに援軍として駆けつけました。賢いアルベール様と強力な歩兵団は心強い味方です。

次話ではギル大臣が国中に「ミニエー家狩り」 、「ローズの抹殺」を指示するおふれを出します。それが原因でひと騒動起こるようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアルベール様は「レバリー公」という肩書で、レバリー城に住んでいます。ノーザリンには大きい街は実際のところレバリーくらいしかなく、アルベール様は実質的にノーザリン地方全体を治めている状況です。だからアリスたちもアルベール様について知っていたのです。ちなみにオットー様が治めていたのはパカロンとその周辺の小さな街や村だけです。

では次話をおたのしみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「40・ミニエー家狩り」 (前書き)

アルベール様がオットー様に加勢したことで、すっかりとアルベール様にだまされていたギル大臣は激怒しました。そしてかつてアルベール様が命乞いをしたローズを捕える旨のおふれを国中に出しました。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「40・ミニエー家狩り」

キンフィールドの街に、一枚の立て札が立ちました。

ミニエー家の末娘、ローズ・ミニエーを捕縛してきたものには賞金として十万カドニーを与えるものとする。ギル大臣

「じゅ、十万カドニーだってよ…。」

「すごい大金だ…。」

「金…金…。」

~~~~~  
~~~~~

このことはパカロン城にも伝えられました。オットー様は苦い顔をされています。

「そうか…。ギル大臣がそのようなことを…。ともかく、偵察御苦労であった。ゆっくり休むがよい。」

「はっ。」

伝令兵はオットー様に一礼すると、その場を去って行きました。

「ローズを捕えろだなんて…、もしギル大臣に捕えられたら命はありませんわ。」

ヘルガ王女様も心配そうなお顔をされています。

「フランツ殿、ローゼンハイン殿たちにも伝えた方がよいのではないか？」

アルベール様も心配そうです。

「うむ…。ヴォルフ、ローゼンハイン殿たちに伝えてきてくれ。」

「はっ。」

ヴォルフは一礼すると大広間を後にし、オリバーたちのいる部屋に行きました。

~~~~~  
~~~~~

オリバーは出かけていていませんでしたが、他の仲間たちはヴォルフからギル大臣が出したおふれの話の話を聞きました。ローズは顔を真っ赤にしています。

「許せない…。」

「まったく、嫌なことをするもんだねー。」

ビアンカも膨れっ面をしています。

「恐らくはお前たちの結束を乱す目的もあるんだろうな。十万カド二ーなんて、人の心を揺るがすのに充分な額だ。」

「何を言っているのだ。吾れらがそのような金で仲間を売るような真似をすると思っているのか。特に妹のように思っているローズをな。」

アリスが怒ったように言いました。ヴォルフは肩をすくめました。

「よう、オリバー。どこへ行っていたんだ？」

レオンが声をかけました。

「ああ、ここの兵士に護衛してもらって市に行ってみたんだ。みんな安心して商売をしているようだな。さすがはオットー様だ。」

「一時的とはいえ、王女様もいらっしゃるからな。」

「そう言えば、そろそろ王女様たちとの会食の時間ですね。」

エミリーが言いました。ペーターが喜びました。

「やった！今日もたくさん食べるぞ！」

「お前はもう少し節度というものをわきまえないか。…あれ、ロースがないな。イザベルもビアンカもない。」

オリバーが辺りを見渡しました。すると、モニカが言いました。

「さっき出て行きましたけど…、もうそろそろ帰ってくるんじゃないな

いですか？多分リリーさんのところにも行ったんだと思いますけど…。」

「しょうがないな…。じゃあ先に広間に行くとするか。」

~~~~~

オリバーたちは広間につきました。

「おお、来られたか、ローゼンハイン殿。さっそく食事を始めるとしよう。」

「はっ。」

（ローズたちは…まあ、仮にリリーたちのところにいるのなら、自分たちで調達できるだろう…）

~~~~~

食事中の話題は自然とギル大臣が出したおふれのことになりました。

オリバーはアルベール様とお話をしています。

「ローゼンハイン殿はミニエー家のローズ嬢と共に行動されているようだが…、彼女からミニエー家狩りの話は聞いているかね？」

「いえ…、ローズは内気で少し他人としゃべることを苦手としているようなので…。詳しい話は存じません。アルベール様はよくご存じかと思いません。願わくは、お聞かせいただけないでしょうか？」

「わかった。ではお聞かせしよう。」

…この発端は十三年前、ギル大臣によるミニエー家の焼打ち事件に始まる。余はまだ二十五であったのだが、当主である父が死んだため、アズナヴール家を継いでいた…。

その日、ミニエー家はギル大臣からの呼び出しを受け、一族を連れてキンフィールドへ向かった。だがキンフィールドに着いて、翌日の王様への謁見を前に彼らが宿泊していた宿に火が放たれたのだ。一族の大半はそこで焼け死んだ。

生き残ったのはローズ嬢、ローズ嬢の母上、ローズ嬢の伯父上とその三人のご子息のみだ。ローズ嬢は母上に連れられてミニエー家と親交の深かった余のアズナヴール家に助けを求めてきた。余は二人をかくまったのだが…、やがてそのことがギル大臣に知られてしま

った。ギル大臣は余を城に呼び出し、二人を差し出さなければ武力でアズナヴァール家を滅ぼすと言ってきた。余は国賊になることを覚悟でギル大臣と戦うことを決めた。

だがその夜、密かにローズ嬢の母上が余の屋敷を抜け出し、ローズ嬢の命乞いをするためにギル大臣の元へ向かったのだ。だがギル大臣は全く取り合わず、次の日の昼間のうちに母上を処刑してしまっただのだ。

そこで余は方針を変えることにした。余はミニエー家の残された財産をすべてギル大臣に差出し、これでローズ嬢の命だけは救うように懇願したのだ。目の前に積み上げられた財宝に目を奪われたギル大臣はそれを了承した。だがそれでも用心したギル大臣は、着の身着のままローズ嬢を屋敷から放り出すことも条件とした。まだ幼かったローズ嬢だが、その話を聞くと何も言わずに余の屋敷を出て行ったのだ…。

他に生き残ったローズ嬢の伯父上と三人の息子のうち二人はしばらく国外に亡命していたのだが、三年前の事件の際、ヨーゼフ王の力になろうと出陣してきたのだが、魔術師に捕らえられ、しばらく監禁されたのちありもしない嫌疑も追加された上にオーベルクで公開処刑された。そして三人の息子のうち最後の一人は身分を隠してパカロンに住んでいたのだが…、ついこの前素性が知られてしまい、処刑されてしまったのだ。」

「それがマウント家、ということですか…。」

ラルフがため息をついて言いました。

「でも、どうしてその頃ヨーゼフ王はギル大臣の暴走を止められなかったんだろう？」

レオンが首をかしげました。すると、今度はオットー様がおっしゃいました。

「それはまだヨーゼフ王が王位についていなかったためだ。その頃も今ほどではないが、国が荒れていた。理由は病気で衰弱なさっていたヨーゼフ王のお父上がなかなか王位を譲らず、ギル大臣に国務のすべてを任せきりにしていたためだ。しかしお父上が亡くなるとヨーゼフ王が王位に就き、ギル大臣の動きを上手くけん制し、国内に善政をしいたのだ。」

余もアズナヴール殿も、ヨーゼフ王の後に一人娘でいらっしやるヘルガ王女をしつかりと補佐するようにと言われていたのだが…、ここまで時間がかかってしまい、非常に申し訳ない気持ちでいっぱいなのだ。」

その時、外から騒ぎ声が聞こえてきました。

「何だ？何かあったのか？」

マチルドがスープ皿から顔を上げて首をかしげました。その時、伝令兵が広間に駆け込んできました。

「ご報告いたします！パカロン市街で人が襲われたとのことでございます！」

「物騒だな…。もうすぐキンフィールドへの兵を挙げるというところで、面倒ごとにならないければよいが…。」

オットー様が迷惑そうな顔をしました。その時、伝令兵がもう一人走ってきました。真っ青な顔をしています。

「ご報告いたします！パカロン市街で襲われたのは、ミニミニエー家のローズ様です！」

「な、何だって！？あいつ、街に出ていたのか！？」

オリバーは驚きました。

「そして襲ったのは…兵士です。パカロンの…。」

今度はオットー様が血相を変えて立ち上がられました。

「何だと！？余の兵士がローゼンハイン殿の仲間であるローズ嬢を襲撃したというのか！その兵はどうなっているのだ！」

「捕らえられているようでございます！」

「余が直々に向かう！案内せよ！」

オットー様は部屋の奥にあった剣をとり、真っ赤な顔でおっしゃいました。

「私たちもお供いたします！」

オリバーたちも立ち上がりました。

~~~~~  
~~~~~

オットー様とオリバーたちは伝令兵の案内でパカロン市街へ出まし

た。しばらく歩くと、黒山の人だかりができているところがあります。

「どけ！どくのだ！オットー・フランツ様のご到着だ！」

伝令兵が声を張り上げ、人だかりの中に道ができました。

「んっ、お嬢ちゃんたちがいるぜ。」

ローレンツが指を差しました。輪の中心で、ローズがへたり込んで座っているのが見えます。そのそばには市民に抑えつけられている一人の兵士の姿が見えます。オリバーはローズの横にいるイザベルとビアンカに厳しい声で言いました。

「…状況を説明しろ。」

「説明も何も、街を歩いていたらいきなりこの兵士が襲って来たんだよ。きつと、十万カドニーに釣られたんだろっね。」

ビアンカが口をとがらせて言いました。

「ローズさんも怪我をしたんですけど、とりあえずは何ともないで

すね…。」

イザベルは困惑しながら言いました。

「ぎゃあああっ！」

突然後ろで大きな悲鳴が聞こえました。オリバーが振り返ると、オットー様が血の滴り落ちる剣を握りしめられています。

「余の兵に…、裏切り者などいらぬ…！」

ローズはそれまで怯えた表情で兵士を見ていましたが、少し安堵したような表情を浮かべました。その瞬間、ローズにオリバーの雷が落ちました。

「ローズ！どうして勝手にこんなところをうろついていた！」

オリバーの剣幕に、ローズはキュッと体を縮めました。

「お前もギル大臣の立て札の話は聞いただろう！？自分のおかれて
いる立場というものがわかってはいるはずだ！もちろんお前を野放し
にした俺たちにも問題はあるがな。…だがお前が勝手な行動を取ら

なければ、少なくともこんなことにはならなかったはずだ！オット様にも「迷惑をおかけしてしまったぞ！違うか！」

ローズはもう泣きだしそうな顔をしています。それを見たオットー様がたまらずにオリバーに声をおかけになられました。

「ローゼンハイム殿！…もうよい。兵士を統括するものとして、今回のことは余にも責任がある。余に免じて、ローズ嬢を赦してやってはもらえぬか？」

「オットー様…。わかりました。

…ただしローズ！お前がしなければならぬことはわかっているな？」

ローズはまだ泣きそうな顔をしていましたが、おずおずと立ち上がると、オットー様に言いました。

「申し訳ございません、オットー様…。」

オットー様は笑顔を見せてローズにおっしゃいました。

「アルベール様は笑って一言だけ、『せっかく残っている命、無駄にしてはいけない』って言われた…。王女様は私の顔を見てお泣きになられていた…。」

「そうですか。…ごめんなさいね、私たちももう少ししっかりしていれば…。」

イザベルが申し訳なさそうに謝りましたが、それを聞いたマチルドが言いました。

「何言ってるんだよ。イザベルもピアノカも悪くないぜ。悪いのはローズだけさ。」

「…実際、その通り…。」

ローズは肩をすくめました。

「だが、気に病むことはないぞ。オットー様もアルベール様もお許しくださったわけだ。オリバーとて、お前を大切に思っているからこそあのようない言葉を吐いたのだ。今後はお前自身が気をつければ良いだけの話だ。まずは元気を出すことだな。」

「でも、今後は私たちもローズさんの周りには十分注意しなければなりませんね。またいつどこでこのようなことがあるかわかりません。」

アリスとエミリーが励ますように言いました。

「ギル大臣のおふれはローズさんを捕まえることを目的としています。だからいきなり遠くから矢が飛んできたりすることはないと思います。近くに注意しておけば大丈夫だと思いますよ。」

モニカも続けます。

「みんな、ありがとう。」

ローズは嬉しそうに微笑みました。

「よっしゃあ、それでこそローズだぜ！」

マチルドが満足そうに言いました。他の仲間も嬉しそうです。しかし、ピアンカはしかめっ面をしています。エミリーがそれに気づき、たずねます。

「どづしたのですか、ビアンカさん。」

「何か…、いる…。邪悪な何かが…。」

ビアンカはサッと扉の方へ走りました。

~~~~~  
~~~~~

扉の陰では…、

「ヤバい！ビアンカに気づかれたみたいだ！」

レオンが真っ青な顔でハンスとペーターに言いました。

「ええっ！？早く逃げましょう！」

「何してるんスか先輩！先輩が音を立てるから！」

「何だよ！ペーターだって、」

三人は逃げようとしたが、一步遅かったようです。

「ふふふー、はい、三人とも。もう手遅れだね。」

ピアンカが薄笑いを浮かべています。

「うっ。。。」

「ふむ、貴様ら。覗き見をするとはなかなかいい度胸を持っているではないか。」

ピアンカの後を追ってきたアリスが、まるでゴミを見るような目で三人を見えています。

「い、いや待て、これには深いいわけが…。」

「わけてってどんなわけ？悪いけどね、あんたたちが前からずっと覗いてたことくらい知ってたんだから。」

ピアンカが言うと、レオンたちは真っ青な顔になりました。

「えへへ、本当はカマかけたただけなんだけどね。さあ、これだけで逃れできないよ！問答無用！引き込めーっ！」

ピアンカが号令をかけました。

「うむ。エミリー！手を貸すのだ！」

「はいっ！お姉さま！」

「違う！そこは違うぞエミリー！いくらお前が慕う姉でも、逆らうていい命令もあるんだぞ！」

レオンが焦って言いましたが、エミリーは目をキラキラさせています。

「これが逆らっても良い命令だと思いですか？いえ、むしろ自らやるべきでしたね。」

ハンスとペーターも顔面蒼白です。

「いやだあーっ！先生、助けてーっ！」

「今さら遅い！さあ、男なら観念しろ！」

「ぎゃああああっ！」

それからしばらく、彼女たちの部屋から三人の男たちの悲鳴が聞こえ続けたということです。

何とかこの日の騒動はおさまったようですが…、結局このメンバーではいい話ではまともまらないようです。しかし、ギル大臣の目がオリバーたちにしっかりと向けられていることは間違いないようです。

次話ではナンジューマ地方にあるユーラン砦からオットー様のもとに救援を要請する使者がやってきます。オットー様はそれを受けて騎馬軍団を率いて出撃します。どうぞお楽しみに！

ちなみにローズを襲った兵士ですが、オットー様の拳兵には従っていたのですがだんだん恐ろしくなって脱走の機会をうかがっていました。そんな時ギル大臣のおふれが目に入ったので、ローズを捕えてギル大臣に献上し、ギル大臣の配下に入れてもらおうと考えていました。オットー様はこれ以降いっそう兵士の統率には気を使つこととなります。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「41・三姉妹の砦」(前書き)

ローズの襲撃事件の二日後の真夜中、寝室で寝ていたオットー様のもとに伝令兵が駆け込んできました。どうやら緊急事態のようです。

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「41・三姉妹の誓」

真夜中、オットー様の元へ、伝令兵が駆け込んできました。

「オットー様！ご報告いたします！ナンジューマ地方、ユーラン砦のアルフォンソ三姉妹の元より使者が参りました！しかし、傷ついで絶命寸前です！」

オットー様はベッドから飛び起きました。

「何だと？すぐに大広間に通すのだ！余もすぐに向かう！」

~~~~~  
~~~~~

伝令兵に連れられてきた使者は全身血まみれでした。

「オットー・フランツ様…。」

「いったい何があったのだ？見たところ、深刻な事態であるようだが…。」

オットー様は使者に歩み寄りました。

「救援の要請に参上しました…。我々のユーラン砦は突如ギル大臣の兵士による強襲を受け、大変苦戦しております。」

オットー様は驚かれました。

「難攻不落のユーラン砦を守るアルフォンソ三姉妹の兵は強く勇敢だと聞く…。それでも苦戦しているのか。相当切羽詰まった状況であるようだ。わかった。すぐに援軍を出そう。」

「ありがたき…。幸せ…。」

そう言っただけで使者は倒れこみました。伝令兵が駆け寄りましたが、首を横に振りました。

「自身の使命を全うしたか…。手厚く葬ってやれ…。」

…皆の者、余の軍が誇る騎馬軍団の出陣用意だ！向かうはナンジューマ地方のユーラン砦！」

オットー様が指令を出しました。

~~~~~

お城の中が急に騒がしくなりました。騒ぎで目を覚ましたオリバーがヴォルフにたずねます。

「ヴォルフ！何があつたんだ！」

「オットー様が出陣されるんだ。目的地はナンジューマ地方のユーラン砦。ギル大臣の兵と戦っている籠城兵の救援に向かうんだ。」

「ユーラン砦だつて!?!」

ローレンツが驚いたように言いました。

「何か知っているのか？」

「ユーラン砦は難攻不落と言われている、リバー王国で最も有名な軍事拠点の一つだ。そこを任されていたのがリバー王国でも屈指の軍人、ホセ・アルフォンソという人だつたんだが、ギル大臣の謀略

で殺された。その三人の娘が砦にこもってずっと抵抗を続けていたんだ。

三人とも父親の血を忠実に受け継いでいて、兵士の動かし方がとてもうまいんだ。それを救援するとなると…、本当に危険な状況なんだろう。」

「そうなのか…。よし、俺たちもオットー様の手助けをして差し上げよう。ヴォルフ、俺たちも何人が選抜して行く。オットー様にその旨を伝えてきてくれ。」

「わかった。お前らがいると心強いな。」

ヴォルフはオットー様の元へ走って行きました。

~~~~~

程なくして出陣の準備が整いました。オリバーの仲間と一緒にユーラン砦に向かうのはオリバー、ハンス、パトリック、アリス、エミリー、レオンです。オリバーには馬が一頭貸し与えられました。

「余の選りすぐった騎馬軍団を連れてゆく。万が一のことも考え、

アズナヴール殿、城の守備とヘルガ王女のことをよろしく頼んだ。」

「任せるのだ、フランツ殿。」

オットー様とアルベル様は固い握手を交わしました。

「では参るうか。皆の者！出陣だ！」

「おおーっ！」

エミリーがオットー様に言いました。

「オットー様、私たちは先頭集団に入ります！」

「うむ、任せた！」

アリスとエミリーがカトリーヌとアンヌを操り、隊列の先頭集団に混ざりました。

「パトリック、お前たちは最後尾を頼む！」

オリバーがパトリックに言いました。

「任せてくれ！」

パトリックとレオンを乗せたフランソワは隊列の一番後ろにつきま
した。騎馬軍団は一路ナンジューマへと南下して行きました。

~~~~~

一方、ナンジューマ地方のユーラン砦では、傷だらけの女性三人が  
話しあっていました。

「生き残りの兵士は…いったいどれだけ？」

他の二人に聞いたのはユーラン砦を守る三姉妹の長女、アブリル・  
アルフォンソです。

「百人前後ですね…。」

答えたのは三女のフロレンシア・アルフォンソ。



「敵の数は…千人以上です…。ギル大臣は手持ちの主力部隊をぶつけてきたようです…」

苦しそうに答えたのは次女のディアナ・アルフォンソです。彼女の怪我が三人の中で一番重いようです。

「無理はしないでください。」

フロレンシアが心配そうに言いました。

「矢を五本受けても死なないなんて…さすがは父上の娘ね。」

アブリルが笑って言います。

「姉上だって、矢を受けたではありませんか。」

「大丈夫、大丈夫。それよりも、そろそろ使者がパカロンに着いたと思うけど…」

アブリルが心配そうに言いました。

「オットー・フランツという人間は義理固い人物だと聞いています。きつと救援に駆けつけてくれるでしょう。」

「そして彼が駆けつけてきてくれた時が…、私たち姉妹の最期の時…。」

アブリルは今度は緊張した表情になりました。

「覚悟は…出来ています。」

「アルフォンソ家は十分に武勇伝を残しました。これを最期の締めくくりとすることにしましょう。」

ディアナとフロレンシアも何かの決意を固めているようです。

「ええ。…フロレンシア。兵をここに集めなさい。私たちの最期の作戦を伝えることにしよう。」

「はい、姉上。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーやオットー様たちは夜通し馬を走らせていました。

「ヴォルフ、ユーラン砦にはあとどのくらいで着くんだ？」

「ユーラン砦はロンドランドとナンジューマの境付近にある。この調子で行くと、明日の昼には着けるだろう。」

「それまで持ちこたえてくれればいいのだが…。」

オットー様が厳しい表情をなさっています。

「アルフォンソ三姉妹は非常に武勇に優れた人物だと聞きましたが…。」

「うむ、余も直接の面識はないのだが、余の父と彼女らの父上は親交が深かったようだ。彼女らの母上も軍人の娘だったらしく、幼いころより軍事教育をされていたとのことだ。」

話によると、彼女らはもう命を捨てているという。」

「えっ！？それはどういいうことなんですか？」

オリバーの馬の後ろに乗っていたハンスが驚いた顔をして言いました。

「つまり、どんな場面でも死ぬ覚悟は出来ている、ということだ。逆にそういう覚悟を決めて戦うからとても強い。彼女らは今までに一度も負けたことがないそうだ。」

「ではオットー様に加勢してくれるとしたら、心強い戦力となりますね。」

「そうだ。だからこそ、今は持ちこたえてほしい…。」

オットー様は祈るように空を見上げました。空は次第に明るくなってきました。

~~~~~  
~~~~~

オットー様の軍は休まずに馬を走らせ、ついに遠くにユーラン砦が



アブリルは驚いたと同時に、満足そうな表情を見せました。

「うん、私たちの意思を受け継いでもらうに値する人物だね。たったこれだけの時間でそれだけの数の兵をそろえて駆けつけてきてくれるんだから。」

「姉上、それではそろそろ行きましようか…。」

「そうだね。…よし、そこに積んである武器を城の外に投げ捨てる！そして門をすべて開け！」

アブリルは兵士たちに指示を出しました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

敵兵は驚きました。これまで頑なに抵抗を続けていた砦の中から武器が投げ捨てられ、更に入り口の門が開かれたのです。

それは今しも敵兵の中に突撃しようとしていたオットー様たちも同じでした。

「止まれ！止まるのだ！」

オットー様が兵士たちに命令し、騎馬軍団の動きがピタリと止まりました。

「…様子を見る。」

その様子を三姉妹が見ていました。

「ものすごい統制力です…。」

「父上が見込んでいただけある…。よし、ディアナ、フロレンシア、行こう。」

「はい。」

~~~~~  
~~~~~

三姉妹が門から出てきました。武器を何も持っていません。門の前

に詰め掛けていた兵士たちが、姉妹を取り囲みました。

「お前たちはアルフォンソ三姉妹だな？」

敵軍の隊長が問いかけました。しかし三姉妹は何も言いません。

「降伏しに出てきたのか？」

三姉妹はやはり何も言いません。その間に兵士たちが完全に三姉妹を取り囲みました。

「おい！何か言ったらどうなんだ！」

敵軍の隊長は声を荒げました。すると、長女、アブリルがニヤリと笑って言いました。

「攻撃開始！」

途端に砦の中から兵士たちが敵兵に向かって突っ込んできました。敵兵は大混乱です。取り囲まれていた三姉妹の姿はあっという間に血に染まり、見えなくなってしまうました。

す。しかし、砦の兵士も半分ほどになってしまっていました。オットー様たちは砦の中に入りました。

オットー様はその時砦の兵たちをまとめ、攻撃を指揮していた兵士、ガスパール・カルデイロに聞きました。

「…三姉妹はどうしてあのような作戦をとったのだ？」

「勝ちを求めるなら、より確実な方法をとるべきだ。それがあの方々の方針でした。それにあの方々は、あなた方なら我々の意思を間違ひなく受け継いでくれる、そう思ったようですね。」

「つまりは、余ならギル大臣に間違ひなく勝てる、と？」

「恐らくはそう思われたのでしよう。そうするためにはあなた方には必ず勝っていただかなくてはならなかった。だからあなた方が戦いやすいよう、敵兵の混乱を誘うため、自ら命を…。」

そこまで言ってガスパールは言葉を詰まらせました。周りの生き残った兵士たちも涙を流しています。

「下々の兵士にでさえ、あの方々は良く気をつかってくださった…。本当に、本当に素晴らしい方々だった…。」

オットー様はガスパールの肩に手を置き、言いました。

「…このような時にこのようなことを言うのもおかしい話ではある
うが…、これからはパカロンに来て余のもとで戦ってはくれぬか？
アルフォンソ三姉妹の遺志は、必ず余が実現させて見せる。」

すると、ガスパールは立ち上がって言いました。

「あの方々からも、生き残った者はあなたのもとで戦うように言わ
れています。ぜひパカロンに連れて行ってください。」

他の皆の兵士たちも一斉に立ち上がりました。

「心強い戦力が増えましたね、オットー様。」

オリバーがオットー様に言いました。

「うむ、そうだな。…アルフォンソ三姉妹、あなた方と一度会って
話がしてみたかった…。あなた方の最期の戦いも、あなた方の勝ち
だ。あなた方は生涯で一度も負けなかったのだ…。」



人物紹介

〈アルフォンソ三姉妹〉

・「無敵の三姉妹」

・強さと賢さを併せ持つ。ギル大臣の謀略によって殺された父、ホセ・アルフォンソを慕い、ナンジューマのユーラン砦にこもってギル大臣に抵抗を続けていた。常に命を捨てる覚悟で戦っているため非常に強い。オットー様にすべてを託し、壮絶な最期を遂げる。長女がアブリル、次女がディアナ、三女がフロレンシア。

〈ガスパール・カルデイロ〉

・「信奉者」

・31歳。

・アルフォンソ三姉妹の元でユーラン砦の兵士をまとめ上げている。もともとは下級の兵士だったが、その能力を三姉妹の父、ホセ・アルフォンソに見出され、兵士の統率者にまでなった。基本的に温厚な性格だが、いざ戦いとなると鬼のように強くなる。三姉妹を心から信奉しており、中でも三女のフロレンシアとは主従を超えた関係にあったらしい。

〈悪の大臣〉 三章・最後の戦い 「41・三姉妹の砦」(後書き)

オットー様は素早い行動で、アルフォンソ三姉妹は命を落としたとはいえ、砦の救出には成功しました。ユーラン砦の兵士たちは今後貴重な戦力としてオットー様たちを助けていくことになります。

次話では先にパカロンに戻っていたパトリックが、オットー様のもとに帰ってきてパカロン近くのシュバルツ平原でアルベール様の軍と衛兵隊長マティアスが率いる軍が戦っているという報告をします。この戦いは今までで一番大規模な戦いとなるようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアルフォンソ三姉妹がとった「最期の作戦」ですが…、正直、作者自身もこのような戦法が有効なのか、また、卑怯であると判断されないだろうか、と、考えてしまうことがありました。ただ、三姉妹が降伏の意を明確に示していたわけではないので、捨て身の作戦の一つ、と考えてはいますが…。間違いなく言えることは、ギル大臣の戦力は大幅に減少した、ということですね。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「42・シュバルツ平原の戦い」 (前書き)

ユーラン砦の兵士を救出したオットー様率いる騎馬軍団はパカロンへ帰る途中です。アルベール様や王女様に報告するためパトリックが先にパカロンへ帰っています。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「42・シュバルツ平原の戦い」

オットー様の騎馬軍団とユーラン砦の残存兵はパカロンに向けてゆつくりと歩みを進めていました。

「よし、このあたりで休憩を入れましょう。夕方にはパカロンに帰れるだろう。」

オットー様がヴォルフに言いました。

「はっ。休憩だーっ！」

ヴォルフの声に、隊列は足を止めました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

オットー様がアリスとエミリーに話をされています。

「アリス嬢とエミリー嬢の騎馬戦の強さは余の兵にまったく劣らぬ。それどころかちよつとした兵なら軽く凌駕しているようだ。どうだろう、ギル大臣を倒した暁には、余の騎馬軍団に入らぬか？あなた

方なら小隊を任せてもかまわぬくらいなのだが…。」

しかし、アリスとエミリーは申し訳なさそうに言いました。

「有難きお言葉ではございますが…、私たちはやはり街での暮らしに慣れることが出来ませぬ。すべてが終わった暁には、またノーザリンの樹海に帰ろうと考えております。」

「あの樹海あたりにはギル大臣の迫害によって親を失くした子どもたちがたくさんおります。その子どもたちの世話をしあげようと考えております。」

オットー様は心から残念そうにしました。

「そうか…。残念だが、あなた方の意思に逆らうわけにもゆくまい。だが立派な志をお持ちのようで、余も感服した。余も出来る範囲で協力させてもらおう。」

「もったいなきお言葉…。」

その時、遠くから馬のいななきが聞こえてきました。エミリーが不思議そうな顔をしました。



「あら…？これは、フランソワの声…。」

「えっ？エミリー、声だけでわかるの？」

ハンスがびっくりしたように聞き返しました。レオンは怪訝そうな顔をしています。

「だがパトリックは報告のために一人で先にパカロンに帰ったはずだ。どうして戻ってくるんだ？聞き間違いじゃねえのか？」

「聞き間違えだなんて。馬の鳴き声は一頭一頭違うのです。それにいつもフランソワたちに餌を与えていたのはわたくしですよ？」

エミリーが少しムツとしたように言いました。

「じゃあアリスのカトリーヌにも？」

「もちろん。」

ハンスの問いにエミリーは胸を張りました。

「うぬ…、いつもいつもすまぬ…。」

アリスは申し訳なさそうに肩をすくめました。

やがてエミリーの言葉通り、パトリックがフランソワを走らせてきました。厳しい表情をしています。後ろにはイザベルとモニカが乗っています。オリバーはびっくりしました。

「イザベル！モニカ！」

オットー様も驚かれたようです。

「テイボー殿！いったい何事だ？」

「大変です。ギル大臣の兵がパカロン方面へ攻めてまいりました。」

「何だと！？」

パトリックの報告に、オットー様は思わず叫びました。

「アルベール様がノーザリンとパカロンの歩兵部隊を率いてシュバルツ平原で迎え撃っている、とのことですよ。」

「シュ、シュバルツ平原！？そんなところまで敵兵が攻めてきているのか！？」

今度はヴォルフが大声を上げました。ハンスがたずねます。

「シュバルツ平原って、どこにあるんですか？」

「パカロンの目と鼻の先だ。そこを突破したらあとは城にこもって戦うしかない。」

「それに、兵を率いているのはキンフィールドの衛兵隊長、マティアスだという噂も……。」

オットー様はパトリックの言葉を聞いて、さらに厳しい顔をされました。

「マティアスだと！？……これはすぐに向かわねばならないな。ヘルガ王女はどうしておられるのだ？」

「パカロン城に残っておられます。守備兵も、百人ほど…。」

「俺の仲間は何？」

オリバーがパトリックにたずねます。

「ローズ、マチルド、ローレンツ、ラルフが残っているよ。出ているのはペーターとビアンカだね。」

「ローズ嬢がいれば、ヘルガ王女の気持ちは幾分か楽であろう。…よし、ヴォルフ。お前はユーラン砦の兵たちを率いて後から追いかけて来い。」

「はっ！」

オットー様の言葉に、ヴォルフは力強く答えました。

「レオン、あなたは俺が乗っていた馬に乗ってくれ。俺とイザベルはカトリーヌとアンヌの後ろに乗せてもらう。」

オリバーはレオンに言いました。

「わかったぜ。じゃあハンスは俺の後ろに乗れ。」

「よし、準備ができ次第、直ちにシュバルツ平原へと向かう。騎馬軍団、出撃準備をせよ！」

オットー様が指令を出しました。

~~~~~

シュバルツ平原ではアルベール様に率いられたロンドランド・ノーザリン連合軍とギル大臣の兵が一進一退の攻防を続けていました。

「うむ、さすがは国中に名をとどろかせている衛兵隊長マティアス・ヌワール。強い……」

アルベール様が思わずつぶやかれました。

「アルベール様！第三隊が崩されました！」

しかしアルベール様は冷静です。

「慌てるな！備えは何重にもしてある。速やかに他の隊に合流させよ！」

「はっ！」

~~~~~  
~~~~~

一方、ギル大臣の兵を統制しているマティアスもアルベル様の戦術に舌を巻いていました。

「気が触れた振りをして大臣の目をごまかしていたあたり、ただものではないとは思っていたが…、さすがに最強と謳われたノーザン軍の統率者、アルベル・アズナヴールという男は優れた統率者だ…。」

「マティアス隊長！敵の隊列の一部を崩しました！」

冷静なのはマティアスも一緒です。

「深入りはするな！敵の陣形は何重にもなっている。うかつに飛び

「ありがとう、ピアンカ！」

「気合を込めた攻撃は確かにものすごい威力になるけど、あんたの場合その後に隙ができるからね。」

「う、ごめん。。。」

ガツクリと肩を落とすペーターを見て、ピアンカは苦笑いしました。

「…しょうがないなあ。ほら、背中あたしに任せなさいよ。どうあがいたって、力はある人には勝てないからね。」

「あ、ああ！よし、どんどん行くぞ！」

「すぐ調子に乗るんだから。。。」

（師匠たち、早く着いてくれないかな…）

ピアンカはいつも一緒に戦う仲間がいなくて少し心細く思いました。


~~~~~  
~~~~~

ヘルガ王女様はお城の窓から街の様子を見ておられました。

「街はこんなに平和なのに…、少し離れたところでは血に染まった戦いが行われているのね…。」

王女様は悲しそうな顔をされました。

「クララ、お城の様子はどうなっているの？」

「万が一ここに兵が攻めてきた時のため、守備兵はみな武装しているつでも戦えるようにしています。」

「そう…。私たちがこんなところでじっとしては頑張っている兵たちに失礼ね。兵たちに声をかけに行きましょう。」

王女様は部屋をお出になられました。クララ様も慌てて王女様の後をついて行かれました。

~~~~~  
~~~~~

お城の庭園では、ローレンツとラルフが兵士たちの武器の手入れを
していました。

「俺っちたちに出来る限りのことをしないとな。」

「そうですね、親方。」

そこへ、マチルドが走ってきました。

「おい、やってるかぁー？」

「…マチルドか。お前はずいぶん能天気だな。」

ローレンツが苦笑いして言うと、マチルドは口をとがらせました。

「何だよう、ひどい言い方だなあ。これでもローズと一緒に城の中
の連絡係をやってるんだぜ？」

「ハハ、そうだったな。すまんすまん。で、何をしに来たんだ？」

「オットー様たちの騎馬部隊がパカロンの街を抜けて、まっすぐシユバルツ平原に向かったようだぜ。」

「じゃあ、すぐにここに敵兵が押し寄せてくることはなさそうですね、親方。」

ラルフが少し安心したように言いました。しかし、ローレンツは口元を引き締めました。

「いや、こういう時こそ俺たちたちが頑張らなきゃならない時だ。さあ、武器の手入れを続けるぞ。」

「わかりました、親方！」

「へへっ、ここは心配しなくても大丈夫そうだな。」

マチルドが満足そうに言いました。



一方、ローズはリリーのところにいました。侍女長であるリリーはお城の召使たちに指示を出しています。

「その道具は向こう！それはあっち！」

てきぱきと指示を終えたリリーはローズを見ました。

「…何だい、ローズ。青白い顔してるじゃないの。休んできたらどうだい？」

ローズはうつむいたまま首を横に振りました。

「心配だねえ…。大丈夫だよ。さっきマチルドから報告があつてね、オットー様たちが今街中を通り抜けたんだってさ。シュバルツ平原にもうすぐ着くらしいよ。」

「でも…嫌な予感が、する…。」

ローズはそうつぶやき、天井を見上げました。

マチルドの言葉通り、オットー様の率いる騎馬軍団はパカロンの街を抜け、街の外に広がる森を突っ切り、ついにシュバルツ平原へとたどり着きました。

「アズナヴール殿の軍が劣勢のようだ！皆の者！余に続け！」

オットー様の号令で騎馬軍団はマティアス率いる兵団に突撃しました。

~~~~~

不意に側面からの攻撃を受けることになったマティアスですが、彼もまた落ち着いていました。

「慌てるな！射撃隊に合図を送れ！」

マティアスの指示で、角笛が吹かれました。すると、小高い丘の上から弓が次々と飛んできました。馬の上の兵隊たちも矢を受けています。

「うぬ！兵力を分散させていたか！」

オットー様は唇をかみしめました。すると、オリバーが言いました。

「オットー様！私たちはあの射撃隊の背後に回り込み、攻撃をかけます！」

「おお、ローゼンハイン殿！どうかよろしく頼む！」

オリバーは仲間たちに向き直りました。

「パトリック！アリス！エミリー！頼んだ！」

「よし！わかったよ！」

「うむ、行くぞ！」

「しっかりとかまっています！」

三人の魔術師を後ろに乗せ、三頭の馬は戦線から離れて行きました。

~~~~~

ハンスとレオンがペーターとビアンカのところに駆けつけました。

「先輩！レオンさん！」

「二人とも、大丈夫か！」

ハンスとレオンが心配そうに声をかけました。

「大丈夫だよ。何とか食い止められている感じ。」

ビアンカが笑顔を見せました。

「ようし、俺たちもひと暴れしてやろう！ハンス、行くぞ！」

「はいっ…！」

「うおおおおっ!」

ハンスとレオンは槍を構えると敵兵の中に突撃して行きました。

「あははっ、元気だね。ようし、あたしたちももう一頑張りしようか!」

「おおっ!」

ペーターとビアンカももう一度敵の中に突っ込んで行きました。

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは丘の背後に回りました。

「アリスとエミリーも弓矢を頼む。俺たちも魔術で崩すからな。」

「うむ、わかった。」

「頑張りましょう。」

「パトリックは敵兵の中を駆け回って混乱させると同時にモニカをしっかりとアシストしてやってくれよ。」

「ハハッ、なかなか難しい注文をつけてくれるね。」

パトリックは苦笑いしました。オリバーはニヤリと笑いました。

「フフッ、信用しているからこそさ。」

「任せてくれよ。」

二人のやり取りを見ながらアリスとエミリーが笑っています。

「何だか悔しいですね……。わたくしたちが信用されていないようで。」

「うむ。ここで一手柄立てれば信用度も好感度も上がるかもしれぬ。行くぞ、エミリー！」

「はいっ！お姉さま！…え？好感度？」

「うおっ！？」

「ひゃあっ！？」

アリスとエミリーがものすごい勢いで馬を走らせたため、オリバーとイザベルは振り落とされそうになりました。パトリックはそれを見て笑いました。

「ハハッ、張り切ってるな、二人とも。よし、モニカ。私たちも行くっ！」

「はいっ！準備はできています！」

「よしっ！」

パトリックとモニカもフランソワに乗って丘を駆け上がりました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

射撃兵の一人がオリバーたちに気づきました。

「見る！ たった三騎で突っ込んでくるぞ！」

「受け取れっ！」

アリスが毒矢を放ちました。

「ぎゃあっ！」

更にオリバーが叫びました。

「グレイブ！」

途端に、弓を構えていた兵士が数人、バタバタと倒れました。

「ま、魔術師がいるぞ！」

「慌てるな！ 射殺せ！」

「そつはさせない！」

一番後ろから丘を登ってきたパトリックが、勢いをそのままに兵士の中に突っ込んで行きました。敵兵は大混乱です。逃げ出そうとする兵士もいます。

「戦いを前に逃げ出すなんて。兵士失格ね。」

エミリーが地面に向かって炎の矢を放ちました。草が燃え上がり、兵士たちの逃げ道をふさぎました。エミリーは見下したような目で言い放ちました。

「…逃げられないヨ？」

(エミリーさんが…時々恐ろしい…)

「イザベルさん、早く、魔術を！」

エミリーがイザベルに言いました。

「は、はい！ポイズンブレス！」

逃げ場を失って右往左往していた兵士が次々と血を吐いて倒れます。毒に侵されているのです。イザベルが薄笑いを浮かべて言いました。

「地獄に堕ちてしまいなさい。」

(イザベルさんが…時々恐ろしい…)

「さあ、あちらにも敵兵がたくさんいるようです。エミリーさん、行きましよう。」

イザベルがエミリーに言いました。

「は、はい！ハアーツ！」

エミリーはアンヌのお腹を蹴りました。アンヌはものすごい勢いで駈けて行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一方、歩兵団のところに更に心強い援軍が到着しました。

「ヴォルフ・ザックスと、誇り高きユーラン砦の兵士が到着したぞ！ さあ、マティアスの兵を蹴散らそう！」

「皆の者、かかれ！」

ガスパールが声を張り上げました。

「うおおおおっ！」

アルフォンソ三姉妹の忠実な部下、ガスパールに率いられたユーラン砦の兵は死を恐れない勇敢な兵ばかりです。彼らは雄たけびをあげ、敵兵に突撃して行きました。

~~~~~

百人余りいた射撃兵も、オリバーたちの奇襲であつという間に総崩れになりました。しかし最後まで戦い続ける兵士はやはり勇敢です。

「ファイアーストーム！」

「ぐあああつ！…くそつ！マティマス隊長ーっ！」

モニカの魔術を受けた一人の兵士が絶命間際に放った矢は、オリバーの右腕をかすめました。

「くっ…。」

オリバーの腕から出る血を見た瞬間、アリスは真っ青な顔をしました。

「オリバー！大丈夫か！」

「大丈夫、かすっただけだ…。」

「傷は大丈夫ですが、出血量が尋常ではありません。矢じりが特殊な形をしていたようですね…。」

イザベルがオリバーの傷を見て言いました。

「…さすがは衛兵隊長マティマス直属の兵士、勇猛な兵士ばかりだ

…。…んっ？あれを見る！」

仲間たちはオリバーが指差した方向を見ました。一人の兵士が馬に乗り、猛然と丘を駆け下って行きます。その一直線上には…、

「あれはアルベール様の本陣です！」

「単騎で突っ込もうというのか！」

アリスとエミリーが叫びました。パトリックが言いました。

「あれは私たちが止める！君たちはここの残存兵を頼む！」

「任せた！」

パトリックは敵兵の後を追い、猛然と丘を下りました。

「モニカ！魔術を頼むよ！」

「はいっ！アイスドゥーム！」



モニカが叫ぶと、兵士は足元から徐々に氷漬けになって行きました。

「くそっ！でもこの距離なら！」

敵兵は馬上から最後の力を振り絞って大きな弓を引いて最後の矢を飛ばしました。その矢は一直線にアルベール様に向かって飛びました。

「アルベール様！」

「ぐっ！」

矢はアルベール様の体を貫きました。

「余もここまでか…。あとのことはフランス殿に任せることとしよう…。」

アルベール様は無念そうに目を閉じました。

「アルベール様！アルベール様！」

~~~~~  
~~~~~

マティアスの元に伝令兵が駆けつけました。

「申し上げます！アルベル・アズナヴァールが死んだようです！」

「おおっ！」

「今こそ総攻撃を！」

兵士たちは沸き立ちました。しかし、マティアスは違いました。

「待て。ここは退却だ。」

「ええっ!？」

周りの兵士たちは驚きましたが、マティアスは冷静でした。

「アルベル・アズナヴァールが死んだとはいえ、まだオットー・フ

ランツは生きているし、敵兵の数もまだまだ多い。その上我らは射撃隊を失った。ここでこれ以上戦うのも危険だ。

それに、アルベール・アズナヴールを失ったということは敵にとっても大きな損失だ。これ以上こちらが無駄に戦力を減らすことはない。撤退するぞ。」

「は、はっ！そうでした！…ようし、撤退だ！」

マティアスの兵はクルツと向きを変えると、撤退して行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

最前線で戦っていたオットー様は、敵兵が退却して行くのを見てたいそう喜ばれました。

「さすがはローゼンハイン殿、しっかりと射撃隊を片づけてきてくれたようだ。…騎馬軍団の損失は？」

「はっ、三割を失いました。歩兵団も大きな損失を受けたようです。」

」

ヴォルフが報告しました。

「そうか…。やはり一筋縄では行かぬ相手であったな。」

オットー様が唇を噛んだその時、伝令兵が駆けつけてきました。

「も、申し上げます！只今の戦闘で、アルベール・アズナヴァール様がお亡くなりになりました。」

「な、何だと！？アズナヴァール殿が…。」

「重大な、損失です…。」

オットー様も、ヴォルフも、周りの兵士たちもしばらく茫然としていました。やがてオットー様がおっしゃいました。

「…ともかく、戦いには勝ったのだ。パカロンへ引き揚げるとしよう。」

「はっ…。パカロンに帰るぞーっ！」

ヴォルフの声に、オットー様たちの軍も少しずつパカロンへと引き揚げて行きました。

これまでで最大規模の戦闘に勝利したオリバーたちやオットー様たちですが、敵兵の最期の一矢によってアルベル様様が命を落としてしまいました。これはマティアスが言った通り、かなりの痛手となつてしまいました。

次話ではオットー様の軍勢がパカロンへと凱旋します。アルベル様のことを心から尊敬していたローズはアルベル様の訃報に茫然としてしまいます。そしてある決意をするようですが……どうぞお楽しみに！

ちなみにオットー様たちの軍勢の損失状況ですが、騎馬部隊はヴォルフからの報告があった通り三割失われ、歩兵団も四割も失われてしまいました。一方マティアスの軍勢は射撃部隊を壊滅させられて先に撤退したとはいえ、全体の二割ほどを失うにとどまりました。一応はオットー様の勝利ということにはなりますが、その代償はとても大きなものでした。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「43・ローズの相談」(前書き)

シュバルツ平原での戦いで、アルベール様が交戦中に命を落としてしまいました。痛手を負いながらも、オットー様たちはパカロンへ凱旋してきました。

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「43・ローズの相談」

ローズとマチルド、ローレンツとラルフがパカロン城のバルコニーから夕暮れの街を見下ろしていました。

「戦いは…どうなっているんでしょうか…。」

ラルフが心配そうに言いました。

「少なくともオットー様たちの軍が負けた時にはここにはマティアスの兵が押し寄せてきているはずなんだ。負けてはいないさ。」

ローレンツが自分に言い聞かせるように言いました。

「そうそう。きっと大丈夫さっ。なっ、ローズ。」

励ますようにマチルドが言いましたが、ローズはずっと青白い顔で不安げな表情を浮かべています。ローレンツもローズを気遣っています。

「…心配なのはわかるが、あんまり気にしすぎると精神的に参っちゃうぜ？寝室で休んできたらどうだ？」

ローズは青白い顔のまま首を横に振りました。

その時、遠くから軍楽隊の奏でる音色が聞こえてきました。明るい曲調です。

「おおっ！こりゃあ戦勝祝いの音楽じゃないか！心配することはなかったぜ、ローズ。オットー様の軍の大勝利だ！」

ローレンツの言葉に、ローズはようやく顔をほころばせました。しかし、その瞬間、遠くに聞こえる音色が暗く悲しいものになりました。

「うおう？急に音楽が変わっちゃったぜ？」

マチルドがびっくりしたように言いました。

「親方、これは何の音楽なんですか？」

ラルフの問いかけにローレンツは黙ったままです。険しい表情をしています。

「親方？」

「私は、知ってる…。これは哀悼の音楽…。」

ローズがこれまでにないほど不安そうな顔をして言いました。

「つまり、今回の戦いで命を落とした兵士を弔っている、っていうこと？」

ラルフも不安げにたずねました。

「…中でもこの音色は、位の高い人物が戦死した時に奏でる音色だ。」

「な、何だって!？」

ローレンツの言葉にマチルドは思わず声を上げました。突然ローズが立ち上がりました。そして、部屋から駆け出そうとしました。それをローレンツが呼びとめました。

「待てよローズ!…オリバーに言われただろ?今は兵士を迎えよう

と街に人があふれている。そんなところに行くのは危険じゃないのか？

あの時はイザベルとビアンカがいたって危なかったんだ。俺っちたちじゃ、お前を守ってやれることは出来ないぜ？まずはオットー様たちが城の中に入ってこられるまで待てよ。」

ローズはハツとしたように立ち止まりました。そしてローレンツたちのところへ戻ってきました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

やがて、お城の中にオットー様たちが入ってきました。ローズたちは中庭でオリバーたちを待ちました。

「レオンさん、大丈夫ですか！」

ラルフが叫びました。

「ああ、ハハッ、何とかな…。」

まず傷だらけのレオンを先頭に、ハンス、ペーター、ビアンカが入ってきました。

「ハンスもペーターも、盛大にやられたもんだな。」

マチルドが冷やかに言いました。

「まったくだよ。今まで戦ったこともないような強い相手だった…。」

「生きてるって、素晴らしい…。」

「何を言ってるんだか。でも実際に手ごわい相手だったよ…。」

ビアンカが少し青白い顔で苦笑いしながら言いました。ローレンツはびっくりしたようです。

「ビアンカ、お前も怪我を…。」

「アハハッ、あたしはまだ大したことないよ。…問題はあれかな。」

その時、ローズがサツと走り出しました。

「あ、おい、ローズ！」

「大丈夫、大丈夫。…まあ、ローズがすっ飛んで行ったのも無理はないよ。」

カトリーヌの上で、傷ついたオリバーが蒼い顔をしていました。アリスが走ってくるローズに気づきました。

「む、ローズか。…よし、少々悔しいが、後はお前に任せるとしよう。吾れもかなり疲れてしまったからな。オリバー、降りられるか？」

「ああ、ありがとう。」

「先生…。」

ローズは心配そうにオリバーを見ました。

「ハハツ、確かに血はたくさん出ているが、心配するほどではないよ。傷は浅いし、イザベルもすぐに治療してくれるらしいしな。」

「お前たちはまだ被害が少ないようだな。」

ローレンツが馬上の仲間たちを見上げて言いました。

「うむ。事実、怪我をしたのはオリバーだけだ。」

「もちろん、手ごわい相手であることには変わりありませんでしたけどね…。」

アリスとエミリーがため息をつきながら言いました。

「無事だっただけ良かったじゃないか。…それはそうと、さっき哀悼の軍楽隊の音を聞いたんだが…、どなたがお亡くなりになられたのか？」

ローレンツが言うと、エミリーが暗い顔をしました。

「ええ、実は…。」

すると、エミリーが話す前に誰かの大声が聞こえました。

「ああああああああああっ…！」

ローレンツたちは驚いて声のした方を見ました。ローズが体を震わせてうずくまっています。オリバーはその横で悲しそうな顔をしてローズを見ています。エミリーが声を落とし、ローレンツに言いましました。

「…亡くなられたのは、アルベール様なのです。」

「何だっ…。」

オリバーと仲間たちは、心配そうにローズを囲みました。ローズは起き上がる気配も見せません。その横を、真っ黒い棺が通り過ぎていきます。

「とにかく、傷ついた方々には治療が必要ですから、私についてきてください。そうですね…マチルドさん、ローズさんを静かな場所に連れて行ってあげてください。」

イザベルが言いました。





しっかりと遺志を継いでみせる。必ずだ。」

オットー様はアルベル様の棺の前で口元をキリリと引き締めて誓いました。

~~~~~  
~~~~~

夜、ローズはバルコニーから屋根に上り、いつものように星を見上げていました。

「ローズさん、風邪をひきますよ？」

モニカが下から声をかけました。

「…ローズさん？」

すると、上からローズの音が聞こえました。

「イザベルを、呼んで…。」

「あ、はい！イザベルさん、ローズさんが…。」

「はい？どうしたんですか？」

すぐにイザベルがやってきました。ローズが言います。

「イザベルに相談したいことがある…。誰にも聞かれたくない…。上がってきて…。」

イザベルは困った笑顔を見せました。

「何を言っているんですか。私はローズさんのように身軽ではありません。そんな高いところには行けませんよ。」

すると、ピアンカが言いました。

「じゃああたしたち、師匠たちのところに行くよ。そうすれば二人つきりになれるでしょ？」

「そうですね…。そうしましょうか。」

モニカも賛成しました。

「ありがとう…。」

ローズがお礼を言いました。

「よし、じゃあ師匠たちの部屋に行こっか！」

ビアンカが他の女性メンバーを連れて、部屋を出て行きました。ローズがスタッとバルコニーに飛びおりました。

「それで、相談というのはなんですか？」

ローズがイザベルの耳元で何かを話しました。イザベルは目をまん丸にしました。

「…不可能ではありません。でも大変ですよ？」

ローズはしっかりとイザベルを見据え、頷きました。

「かまわない…。出来るのなら…」

「…わかりました。では早速明日の夜から始めましょうか。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌日、ローズとイザベルはオットー様のところへ行きました。

「使っていない部屋などいくらでもあるが…、もしや、大部屋では不満か？大変失礼なことをしたな。ならば一人一人に個室をお貸ししよう。」

申し訳なさそうなオットー様に、イザベルは慌てて言葉を返しました。

「いえ、そういうわけではございません。実は…。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一方、キンフィールド城にマティアスが帰ってきました。

「マティアス！何という失態を犯したのだ！」

ギル大臣は顔を真っ赤にしてマティアスを罵倒しました。

「…お言葉ですが、大臣。我らの軍はレバリー城主のアルベール・アズナヴールを葬り去りました。」

「お黙りなさい、マティアス！あなたはパカロンを攻め滅ぼすことも出来ず、オリバー・ローゼンハインを捕縛することも出来ず、戦鬪を放棄して逃げ帰って来たのです！」

レイもギル大臣の傍らで喚んでいます。

「もうよい、お前に難しい命令を出すのはやめだ。お前はただ、オリバー・ローゼンハインを捕らえればよい。ただそれだけでよい！さあ、もう下がれ！」

「はっ…。」

マティアスは終始無表情で広間を去りました。

~~~~~  
~~~~~

マテイアスがキンフィールド城の廊下を歩いていると、衛兵の一人が駆け寄ってきました。そして彼の耳元で言いました。

「隊長、情報が入って来たのですが…。ギル大臣はナンジューマのユーラン砦を攻めたそうです。」

マテイアスの眉がピクリと動きました。

「…それで？」

「ギル大臣の兵は敗れたそうですが、砦の兵を指揮していたアルフオンソ三姉妹は全員戦死したそうです。」

「…そうか。」

マテイアスは一瞬だけ表情を曇らせました。

「隊長！隊長はギル大臣様にユーラン砦のことは引き受けると進言していたではありませんか。ギル大臣様はそれを無視したのです！」

兵士はマティアスにまくし立てますが、マティアス本人は目を閉じたままです。

「…今後の行動には何ら影響はない。」

「た、隊長！しかし三姉妹の長女、アブリル・アルフォンソ様はあなたの、」

すると、マティアスは眼光を鋭くしました。

「…そのことはここで言うな。」

「も、申し訳ございません。しかし、それでもあなたは…、」

「…私が今するべきことはオリバー・ローゼンハインの捕縛、  
『ただそれだけ』だ。」

マティアスは確固とした表情で言いました。

アルベール様の死で深い悲しみにくれたローズは、何かを決意したようですが…？そしてマティアスの心にも何らかの変化が見られた可能性があります。今後どうなっていくのでしょうか？

次話では減ってしまった兵士を補うため、ハンス、マチルド、アリス、エミリーの四人が代役としてパカロン城の見張り台に立つことになります。ハンスとマチルドにはなかなか厳しい役目のようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにパカロン城ではオリバーたちは男女一部屋ずつ大きな部屋を与えられています。オットー様は専属の召使もつけようと提案しましたが、さすがにオリバーも辞退しました。

では次話をお楽しみに！



く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「44・見張り役のお手柄」(前書き)

シュバルツ平原での戦いでオットー様たちの軍勢は一時的に大幅に数を減らしてしまふことになりました。城内の警備にも一苦勞しているようです。そこでオットー様はオリバーに何やら頼みごとをしたようです。

ハンスとペーターが部屋で話をしていました。

「最近、ローズとイザベルさんが夜な夜な別室にこもって何かしてるらしいツスね。」

「へえー。ビアンカなら知ってるんじゃない？」

「それが、ビアンカも知らなかったツスよ。」

「へえー。いったい何をしてるんだろうな。」

ハンスはあまり興味がないうのですが、ペーターは何やらニヤニヤしています。

「フ、フツツ、もしかしたら、夜に二人っきりで部屋にこもってることなんて……」

「はいはい、マセガキさん、ストップ。妄想はそこまでだよ。」

「ぎゃああああっ！」

ビアンカが思いっきりペーターの首を絞めています。

「苦しい！ビアンカ！苦しいって！」

「…ビアンカ、ここに何しに来たの？」

ハンスが冷めた目でペーターを見ながらビアンカにたずねました。

「いやあー、バカなガキんちょを成敗してやるうかと、」

「真面目に答えてよ…。」

ハンスがため息をつくとき、ビアンカはつまらなさそうに頬を膨らませました。

「むー…つまらないなあ。いやさ、師匠が呼んでたんだよ。師匠のところに行って。大広間にいるはずだよ。」

「俺だけ？」

「うーん、あんただけじゃないと思うよ。マチルドとアリスとエミリーも呼んでた。」

「ふーん…。まあいいや、行ってくるよ。」

ハンスは部屋を出て行きました。

「よろしくねー。あたしはもう少しペーターとスキンシップを図るよ！」

「す、スキンシップって…ぎゃあああっ！」

~~~~~  
~~~~~

ハンスが大広間に向かおうと廊下を歩いていると、途中でアリスとエミリーに会いました。

「あれ、アリスとエミリーだ。どうしたの？」

アリスとエミリーは助け船を得た、というような表情を見せました。

「うむ、ハンスか。ちょうどよかった。大広間へ行こうとしていたのだが、迷ってしまったのだ。」

「俺も大広間へ行くから、一緒に行く？」

「ありがとう、助かるよ。」

感謝する二人を見て、ハンスは苦笑いしました。

「街中だけじゃなく、建物の中も苦手なんだね。」

「うむ……。どの曲がり角も同じに見えてしまうのだ……。」

「間違えてクララ様のお部屋に行ってしまった時は本当に焦りましたね……。」

（この二人を歩かせるのは本当に危険だ……）

ハンスは引きつった表情を見せました。

~~~~~  
~~~~~

大広間に着くと、そこにはオリバーとマチルドがいました。奥の椅子にはオットー様も座っておられます。

「遅くなりました。」

ハンスがオリバーに頭を下げました。

「何をしてたんだ？」

「すまぬ、大広間の場所がわからなくなってしまったのだ。」

アリスが申し訳なさそうに言いました。

「そろそろ覚えてくれよ……。もうかなりここに滞在させていただいでいるんだ。オットー様だっけとお待ちになっておられたんだぞ？」

オリバーに小言を言われ、アリスは心の底から落ち込んでしまったようです。オットー様が笑っておっしゃいました。

「いや、余のことは気にせずともよい。頼みがあるのは余の方なのだ。」

：今回のシュバルツ平原での戦いで、余の兵は大きな損害を被った。城を警備する兵も大きく数を減らしてしまったのだ。そこでローゼンハイム殿に協力を頼んだのだ。」

「お前たち四人、少しの間見張り台での夜の見張り役をしてくれなにか？俺の仲間の中じゃ、お前たちは見張りに特化していると思うんだが……。」

「うむ、もちろんだ。当然引き受ける。汚名返上の良い機会だ。」

アリスが真つ先に答えました。他の三人も異存はありませんでした。オットー様はたいそう喜ばれました。

「おお、ありがたい。ではさっそく、今夜からよろしく頼みたい。見張り台は西と東、二つの塔にある。二人ずつ入っていただければ十分なはずだ。」

「わたくしとお姉さまが西側の塔に入ります。」

アリスが言いました。

「じゃあ、あたいとハンスは東の塔に行くぜ。」

マチルドも言いました。

「よろしく頼んだぞ。四人とも。」

「本当に助かる。」

オリバーは四人を励まし、オットー様は心から感謝されました。

~~~~~

その日の夜、ハンスとマチルドは東側の塔に行きました。

「あーあ、あの時は流れで東側の塔って言ったけど、西側にしとけばよかったなあ。」

突然マチルドが言いました。ハンスは怪訝そうにマチルドを見ました。

「何で？」

「だってよう、キンフィールドは西側にあるんだぜ？つまり敵がくるのは西側ってわけだ。東側なんて、トリポートに通じる街道しかないんだぜ？つまりねえよ。」

「そう言っとなって。何も起こらないなら起こらないでいいだろ？」

「そうだけだよ…。」

それでもマチルドは不満そうです。

結局、何事もなく夜が更けて行きました。



次の日もハンスとマチルドは東側の塔に立ちました。

「マチルドはさあ、女の子なのに本当に口が悪いよなあ。」

ハンスの言葉にマチルドはムツとしたように答えました。

「しょうがねえだろー？あたいは物心ついた頃から山賊団にいたんだからよ。」

「ふうん。両親はいないの？」

「直接は知らねえんだけど、あたいの生まれた村はギル大臣の私兵の略奪のせいで焼き払われたらしいんだ。それで山賊団に拾われたんだ。」

「あ、う。」

思わぬマチルドの過去に、ハンスは目を白黒させました。しかし、マチルドは大して気にしていないといった風に言いました。

「だからよ、お前とおんなじってわけだよな。」

「あ、そ、そういふことか。」

ハンスはそれを聞いて少し安心したようです。

「…でもよう、お前だって年上に対する口のきき方がなあってねえよな。」

「え？」

「あたいはお前より年上だぜー？ローズもビアンカもモニカもお前より年上。と言うか、お前が一番年下なんだぜ？」

マチルドが威張ったように胸を張りました。

「いやあー、何かさあ、少なくともマチルドは年上って言うてもそんなに年上って言う感じが…。」

ハンスの言葉に、マチルドは思わず立ち上がりました。

「な、何だってーっ！？ビアンカとかはともかく、あたいのことは敬えよっ！」

「…ぐう。」

ハンスはいびきをかいています。

「…すう…。」

マチルドは寝息を立てています。

と、そこへ、彼らと同じようにオットー様に頼まれて夜の城内の見回りをしていたガスパールが見張り台に顔をのぞかせました。

「む…？こらーっ！お前たち、何をサボってるんだ！」

~~~~~  
~~~~~

翌日、見張り台に行く前にハンスとマチルドはオリバーに呼びとめられました。

「おい、ハンスにマチルド。ガスパールさんに聞いたんだが、お前たち、昨日見張り中に居眠りをしていたそうだな。」

「あ、す、すみません。」

ハンスは素直に謝りましたが、マチルドは口をとがらせました。

「うう、だってよう、何もすることがなくて退屈なんだよう…。」

「甘ったれるな。アリスとエミリーはキツチリと見張りの役目をこなしているぞ?…そんなに眠いなら、ずっと寝たままでいられるようにしてやるうか?」

オリバーが薄笑いを浮かべながら言いました。ハンスとマチルドの頬を、冷や汗が一筋流れました。

「え、そ、それって…、」

「さあ、どつとるかはお前ら说了算な。フフフ…。」

オリバーは不敵に笑うと、二人の方へ指先を向けました。

「ま、マチルド!早く行くぞ!」

「あ、あいよっ！」

ハンスとマチルドは大慌てで部屋を飛び出して行きました。オリバーはとてもおかしそうです。

「おいおい、脅かしすぎじゃねえか？」

レオンが苦笑いしています。

「ハハツ。…まあ、確かにまだ大人になっていないあの二人に夜通しの見張り役はつらいかもしれないがな。とは言え、自分自身でやることを承諾したんだ。責任は持ってもらわないとな。」

~~~~~  
~~~~~

塔の上に着くと、マチルドがブーブー文句を言いました。

「まったくよう、オリバーは卑怯だぜ！ほとんど丸腰のあたいらに魔術を使おうとするなんて！」

「いや、先生も本気で使うつもりはないと思うけど…。だいたいマチルドもいまだに先生の寝込みを襲撃したりしてるんだろ？」

「だって、オリバーが丸腰同然になる時なんて、寝てる時くらいだろ？それでようやく勢力伯仲ってやつだぜ？」

「…まあ、何を言ったって結局ローズに防がれてるわけだけだよ。」

ハンスが言うと、マチルドは困ったように首をかしげました。

「…あいつ、いったいどうやってあたいの気配を感じ取ってるんだろっ…。あたい、気配を殺すことだけは自信あるんだけどなあ…。」

「気配を殺すのなら私も得意…。」

「うわあああっ…！」

突然背後に現れたローズを見て、マチルドは飛びあがりました。

「ロ、ローズ！何でここに！」

ハンスもびつくりしたようです。ローズは少し勝ち誇ったような顔をした後で言いました。

「先生に二人を見張るように言われた…。」

「あれ？イザベルさんと何かしなくていいの？」

「今日はお休み…。イザベルが…。」

「ふーん。…見張り役を見張るのって、絶対おかしいよな…。」

ハンスが納得いかないような顔をしましたが、

「黙って見張る…。」

「う、うん…。」

ローズに一蹴されました。

結局その日も何事も起こりませんでした。ハンスとマチルドは居眠りをしようとするたびに目を爛々と輝かせたローズに蹴飛ばされ

ていました。

~~~~~

次の日、ついにハンスとマチルドにオットー様の救いの言葉がかけられました。

「ようやく兵士増幅の見通しが立った。明日以降は余の兵士に見張りを任せる。今晚だけ辛抱してもらいたい。」

「はいっ、心して！」

ハンスは元気いっばいに答えました。

「五日間、つらかったであろうっ?」

オットー様が笑って問いかけられました。

「そりゃあもっ、毎晩、うぐっ!？」

ハンスは慌ててマチルドの口をふさぐと、大広間から退散しました。オットー様はそれを見てたいそうおかしそうにされました。

~~~~~

見張り台でハンスがマチルドに注意しました。

「だめだよ、マチルド。あんなこと言っちゃ。」

「だってよう、つらかったかって聞かれたんだから、正直に答えようとしただけだろー？」

マチルドは不満そうです。

「少しは遠慮しようよ…。また先生に怒られるよ…。」

~~~~~

その夜はとても静かでした。



マチルドがハンスを蹴飛ばしました。

「痛ッ！…ん？ねえ、でもやっぱりおかしいよ。ほら、あの丘の上を見てみなよ。風の音が全く聞こえないのに丘の上の木があんなに揺れてる。」

それを聞いてマチルドがバカにしたように言いました。

「丘だつて？何言ってるんだよ。あの丘は草ばかりで木なんか生えていないだろ？…え、ちょっと待て！」

暗闇でもある程度目の効くマチルドは見張り台から体を乗り出すと、じつと丘の方に目を凝らしました。

「や、ヤバいぜ！あれは木なんかじゃない！兵隊だ！」

マチルドが顔を真っ青にしています。

「何だつて！？じゃあ、トリポート方面から攻めてきたつて言うのか！」

「ハンス、お前は報告に行つて来いよ！あたいは鐘を鳴らす！」

「わかった！」

ハンスが見張り台を飛び出すと、マチルドが見張り台に備え付けてあった鐘をけたたましく鳴らしました。眠っていた兵隊たちは慌てて起き上がり、出撃の準備を始めました。

~~~~~  
~~~~~

報告を受けたオットー様はすぐに兵隊を率いて出撃されました。

マチルドの言った通り、丘の上には敵の奇襲部隊がいました。オットー様は敵兵をあっという間に蹴散らし、そのままトリポートへと向かいました。

~~~~~  
~~~~~

オットー様が帰って来られたのは二日後でした。オットー様はオリバーと見張り役の四人を大広間に呼び出されました。オットー様はにっこり笑っておっしゃいました。

「敵がトリポートに攻め込む直前に何とか到着することができた。このパカロンだけではなく、トリポートも同時に救うことができたのだ。礼を言おう。」

ハンスとマチルドは慌てて跪きました。

「褒美を取らせなければならぬな。…クララ。」

「はい…。」

クララ様が奥から重そうな小箱を持って来られました。

「受け取るがよい。遠慮はいらぬぞ。」

ハンスが小箱を開けてみると、中にはびっしりと金貨が詰まっていました。ハンスとマチルドはびっくりして尻もちをついてしまいました。

「お手柄だぞ、二人とも。」

オリバーも鼻高々です。



「吾れらも手柄を立てたかったが…、残念だな。」

「仕方ありません、お姉さま。」

アリスとエミリーが苦笑いしましたが、オットー様は二人にもおっしゃいました。

「いや、アリス嬢とエミリー嬢も本当にご苦労だった。すぐには無理だが、追って褒美を取らせよう。」

「ありがたき幸せ…。」

アリスとエミリーも顔をほころばせました。

「四人とも、本当に助かった。…兵の数もそろいつつある。余の兵団が復活した暁には、いよいよキンフィールドへ進撃しようと思う。その時はまたよろしく頼むぞ。」

「はっ！」

~~~~~  
~~~~~

その夜、ハンスとマチルドの騒ぎ声がお城の一室に響き渡りました。

「これは俺のもんだよ!」

「いや!あたいのもの!」

「絶対に譲らないからな!」

「あたいも!」

「むー、うるさいなあ…。何を騒いでるのさ。」

ピアンカが眠い目をこすりながらたずねました。イザベルが困ったような笑顔を見せています。

「二人で同じ数になるように金貨を分けていたらしいのですが、一枚余ってしまったみたいで…。」



ハンスとマチルドが暗闇にまぎれていた敵兵を発見したことによってパカロンとトリポートの街が救われました。オットー様は二人に本当に感謝しています。

次話ではレオンが、ローズとイザベルが誰にも詳細を話さずに部屋にこもりきつて何かをしていることに対して不満をもらします。そのことをパトリックとビアンカがオリバーに相談するようです。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーや他の仲間たちもガスパールのように交代で城内の夜間警備をしていました。もちろん見張り役よりも負担は少ないですが…。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「45・シーガルンへの使者」(前書き)

ハンスとマチルドが見張りの仕事で大手柄を立てている間も、ローズとイザベルは朝からあるお部屋にこもって何かをしているようです。オリバーは気にしていませんが、中にはそのことがとても気になる仲間もいるようです。

悪の大臣 三章・最後の戦い 「45・シーガルンへの使者」

レオンが少し不機嫌そうにしています。

「なあ、パトリック。俺たち、仲間である以上必要以上に秘密を持つのは良くねえよな？」

「…何かあったのかい？」

突然話しかけられたパトリックが怪訝そうにレオンを見ました。

「いや…、ほら、最近ローズとイザベルが夜部屋にこもって何かしてるだろ？聞けばオリバーにもその内容を言ってねえらしいじゃないか。」

「さあ、何か秘密の訓練でもしているんじゃないのかい？」

「だとしても、仲間である俺たちには言ってくれたっていいわけだろ？そんなに隠す必要があるのか？」

「さあ、何か特別な事情でもあるんじゃないのかな？」

パトリックは終始当たり障りのない対応をしました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

レオンはピアノカたちにも不満をこぼしました。するとピアノカは怒りだしました。

「あのねえ、いちいちそんなこと気にするんじゃないの。いやさ、気になる気持ちはもちろんわかるって言えばわかるけどさ、そのことについてぐちぐち言うこともないあたしは思っよ?」

「だいたい、オリバーも内容を知らぬとは言え了承しているのだ。それに吾れらがわざわざ口出しをするなど、野暮と言っものではないのか?」

アリスもムツとしたように言いました。

「まったくよう、バカはこれだから困るぜ。」

「しるせえよ、お前に言われたくねえよ。」

結局レオンはいつものようにマチルドと口論を始め、その場は収まりました。

~~~~~

パトリックとビアンカはレオンのことが気になり、オリバーに意見を聞きに行きました。

「ん？パトリックにビアンカか。珍しい組み合わせだな。」

「オーベルクでヴォルフの宿に泊まっていなかったメンバーだから、そこまで珍しい組み合わせじゃないんじゃない？」

「はは、そうかもな。で、何か用事でもあるのか？」

「ああ、実はね……」

パトリックとビアンカはレオンのことをオリバーに話しました。

「まあ、俺もレオンの気持ちはよくわかるよ。確かに気になるしな。」



「ただ、お前たちの言うとおり秘密にしていることをむやみに明かそうとすることもないとも思っているからな。」

「そうか、それなら安心したよ。」

パトリックはほっと息をつきました。

「レオンがそのことで俺のところに来て、同じことを言うつもりだ。」

「まあ、おバカなレオンを弁護するわけじゃないけどさ、レオンも別にイザベルたちを疑ったりしているわけじゃないと思うんだけどね。ただ、秘密、って言った以上、イザベルもことんやっちゃったでしょ？」

ビアンカが頭をかきながら言いました。オリバーも苦笑いします。

「ああ、そうだな。」

イザベルはローズと部屋にこもる時、魔術で部屋を封印し、部屋の内と外と完全に遮断しているのです。

「まあ、あれは確かに不安にはなるよ。」

「一応イザベルたちとも話しておく必要があるかもしれないな。そこは俺から話をしておこうか。」

「うん、その方が安心だね。じゃあそこは師匠に任せていいかな？」

「ああ、大丈夫だ。明日の昼にでも話をしてみるよ。もうあの二人は部屋にこもってしまっているはずだし……。」

パトリックとビアンカは安心したように戻って行きました、

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

さて、翌日になりました。オリバーはイザベルに声をかけました。

「イザベル、この後時間は空いているか？」

「はい？…ええ、空いていますが、どうしたんですか？」

「そうか。いや、ちょっと話したいことがあるから後で俺のところへ来てくれないか？」

「わかりました。では後ほどかがいますね。」

「ああ。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーが部屋で待っていると、すぐにイザベルがやってきました。

「ああ、来たか。」

「お話って、何ですか？…どうしたんですか？私の顔をじっと見て…。」

オリバーはイザベルを見ていましたが、ハッと我に帰りました。

「いや…、何だかずいぶん痩せたような気がして…。」

「何をおっしやっているんですか。お世辞を言うために呼んだわけではないですよね?」

イザベルは困ったような笑顔を浮かべています。

「はは、もちろんだよ。…いや、最近ローズと部屋にこもって何かしているだろ?別に俺はその内容を追求しようとは思わないだが、仲間の中にもやっぱり気にするやつもいてさ。ちよっとそれだけ伝えようと思って。」

イザベルは相変わらず困ったような笑顔のまま言いました。

「そうですね…。誤解をさせてしまって申し訳ありません。でも、今私たちがやっていることは皆さんのお役に立つためのこと、それだけはわかってもらえますか?」

「ああ、わかってるさ。イザベルもローズも、いつも一生懸命みんなのために頑張っていることは誰もがわかってのことだ。心配しないでくれ。」

オリバーは笑ってイザベルの肩をポンとたたきました。

「ありがとうございます。…もし私たちがやっていることが成功し

オリバーは冷やかすように言いました。

「ハハツ、うるせえな。今日こそは勝つてやるよ!」

レオンは軽やかな足取りで歩いて行きました。

「ふむ…。相も変わらず単純な男だ…。」

アリスが笑いながら歩いてきました。オリバーを見つけた瞬間、心なしか嬉しそうにしているようです。

「ハハツ、アリスか。まあ、レオンの気持ちも晴れたみたいで安心したよ。」

「そうだな。…オリバー、すまぬのだが、厩へ案内してはくれぬか？ヘルガ女様にカトリーヌとアンヌを会わせるお約束をしていたのだが、行き方がわからぬ…。」

オリバーはガクツと肩を落としました。

「まだ建物の中を覚えてないのかよ……。」

「すまぬっ！頼むー！」

「まあ、もちろん案内はするけどさ……。道順をしっかりと目に焼き付けてくれよ？」

「うむ、努力する……。」

~~~~~

オリバーとアリスは建物の外にある厩のところに来ました。そこにはエミリーとラルフもいました。

「ああ、エミリーもいるのか。」

「行き方がわからなくなって、ラルフさんに案内してもらいました。」

「お前もかよ……。」

「しょうがないですよ。実際とても広い建物ですし。それよりも、そろそろヘルガ王女様が到着される頃じゃないですか？」

ラルフが弁護するようには言いました。

「うむ、そうだ…。カトリーヌとアンヌの様子を見るとするか…。」

「そうですね、お姉さま。」

アリスとエミリーは既の中に入って行きました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

やがて、ヘルガ王女様がお越しになられました。クララ様も一緒にされています。

「あら？ローゼンハイン殿も一緒にでしたの？」

「王女様の馬上での端麗なお姿を拝見したいと存じまして。」

「ふふっ、お上手ですね。…アリスさん、エミリーさん、あなた方の愛馬を見せていただけますか？」

「はい。」

アリスとエミリーは馬小屋からカトリーヌとアンヌを曳いてきました。

「まあ、美しい毛並み、整った顔立ち、すらりとした体つき…。何と美しいでしょう。名前を聞いてもよろしいですか？」

「こちらがアンヌ、あちらがカトリーヌでございます。」

エミリーが答えました。

「素晴らしい名前…。良き飼い主に恵まれて、幸せですね。」

ヘルガ王女様はカトリーヌとアンヌの体に触れながらおっしゃいました。

「乗せていただいてもよろしいですか？」

「は……。しかし、王女様の御身にもしものことがあれば……。」

アリスが心配しました。

「心配はいりません。前も申しましたように、私は幼少のころより乗馬をたしなんでおりました。馬の扱いには慣れております。それにこんなに素晴らしい飼い主に恵まれているのですもの、心配事などおきるはずがありませんわ。」

王女様はそう仰ってカトリーヌにお乗りになりました。

「まあ、良い眺め……。」

王女様は満足そうにおっしゃると、ゆっくりとカトリーヌを歩かせになりました。アリスとエミリーはおどおどしながらその後ろを歩いて歩いています。

「あんなに落ち着かない二人を見るのも珍しいですよね。」

ラルフが笑って言いました。

「まあ、状況が状況だからな。無理もないさ。」

オリバーも笑顔で言いました。

「今はこのような身分ですが…、晴れて王国が平和になったら、また野原で馬を思い切り走らせたいものですわ…。その時はアリスさん、エミリーさん、お供していただけますか？」

「も、もちろんでございます！」

「ぜひともお供させてくださいませ！」

「ふふっ、心強いですわ。」

王女様はそれからしばらくカトリーヌとアンヌと戯れておられました。

~~~~~  
~~~~~

その夜、食事の席でオットー様がオリバーにおっしやいました。

「ノーザリンやナンジューマ、ロンドランドの中でもトリポートなどから間もなく追加の援軍が到着する…。そこで、一週間後にはいよいよキンフィールドに攻め込もうと思うのだ。」

「いよいよ、でございますね…。」

オリバーは緊張したように言いました。

「うむ、そうなのだ。余の動きに呼応して、ギル大臣によって占領されたシーガルの民衆の蜂起などが起こると更に戦いやすくなるのだがな…。」

「シー…ガルン…。」

レオンが思わずつぶやきました。オットー様が不思議そうな顔をされました。

「む…？いかがされたかな、ブーランジエ殿。」

レオンは立ち上がって言いました。

「オットー様、私はシーガルの出身です。もしよろしければ、私がロンドランドへ出向いて民衆の蜂起を助長いたしましょうか？」

「あなたが？」

「確かに…彼はシーガルでもよく名の知れた存在です。きっとうまくやってくれるかと…。」

オリバーも言います。オットー様は大変喜ばれました。

「それはありがたい！国外に亡命されているシーガルの国王陛下もかけつけてきてくれるかもしれぬな。…大変な役目ではあるが、引き受けてもらえるだろうか？」

レオンは自信たっぷりに胸を叩きました。

「はい、お任せください。一週間後にはシーガルの民衆を集めてキンフィールドに参上してごらんにいれましょう。」

「おお、心強い…。」

「その代わり、と言っては何ですが、王女様にお願いがございます。厚かましいお願いではございますが、ギル大臣を倒した暁には、再びシーガルンを独立国としていただきたいのです。」

レオンは遠慮がちに王女様に言いました。しかし、王女様はにっこり笑っておっしゃいました。

「わかりました、お約束しましょう。私も今後、シーガルンとは友好的な関係を続けて行きたいですからね。」

「ありがたき幸せ…。」

レオンは顔をほころばせると、深々と頭を下げました。

~~~~~  
~~~~~

レオンは夕食後、シーガルンへ旅立つために旅支度をしていました。そこへ、誰かが部屋に入ってきました。

「あ？ローズか。」

ローズはピクツと体を震わせましたが、レオンに近づきました。

「何かあったのか？」

「変に気を回させてしまった…。」

「え？いや、俺も悪かったよ。」

レオンはバツが悪そうに頭をかきました。

「悪いから、私たちが何をしていたのか教える…。」

「え？いいのか？」

レオンはびっくりしました。ローズは落ち着かない様子で念を押しました。

「誰にも言わない…。」

「ハハツ、俺は今からシーガルンに行くんだ。誰に言おうにも言えねえじゃねえか。」

ローズは神妙な表情のままレオンの耳元で何かを言いました。レオンは驚いた表情を見せました。

「そうなのか……。頑張ってるんだな。しっかりと完成させるよ？そ
うすりゃオリバーも喜びそうだしな。」

レオンの言葉に、ローズは深く頷きました。

「じゃあ、俺は行くぜ。お前らも気をつけろよ。」

レオンはオットー様が用意してくださった馬に乗ってシーガルンへ
向けて旅立ちました。

謎も解けたようで、レオンは晴れやかな気持ちと大きな責任感を連れてシーガルンへと旅立って行きました。誰もがレオンが無事にシーガルンにたどり着いて民衆を放棄させることを切に願っています。

次話では最後の戦いに向けて戦闘訓練をするオリバーたちのもとにヘルガ王女様がやってきます。王女様はオリバーたちの訓練を初めて間近で見ることになります。どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスとエミリーはよくパカロン城の中で迷子になっていますが、実際のところこの二人でなくてもパカロン城はとても広いので少し油断するとすぐに迷ってしまいます。もともとが独立国のお城なので、規模としては首都のキンフィールド城と大差はありません。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「46・最後の戦い」 (前書き)

オットー様のもとにはギル大臣を倒す手助けをしようとおちこちから援軍が駆けつけ始めました。オリバーたちも来るべき最後の戦いのために戦闘訓練を続けているようです。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「46・最後の戦い」

レオンがシーガルンに旅立って五日後、パカロン城にはオットー様に加勢しようとあちこちから援軍が駆けつけました。

「申し上げます！トリポートの商人が雇った傭兵隊が到着いたしました！武装したトリポート市民も多数やってきています！」

「ナンジューマ地方のウエロ城の守備兵がギル大臣を見限ってオットー様に味方したいと言って参りました！いかがいたしますか？」

「味方したいと言うものはすべて受け入れよ。同士は一人でも多い方が良いのだ。」

オットー様が嬉しそうに言いました。

「申し上げます！ウエロ城の守備兵に続いてナンジューマのテロメンス村の農兵たちも加勢したいと！」

「オットー様！ノーザリンより大軍団が到着しました！アルベール・アズナヴール様の遺志を受け継いで駆けつけてきた模様です！」

「いいぞ、二人とも！瞬発力がついたな。敵が攻撃を仕掛けてくる前にこちらから攻める、それが大事だからな。」

その時、オリバーの後ろの扉が開きました。

「おい、オリバーはいるか？」

中に入って来たのはヴォルフですが、突然のことだったのでモニカはパニックを起こしました。

「きゃあああつ！ファイアー、」

「待って、モニカさん！ひゃあつ！」

突然イザベルの服が燃えだしました。

「お、おい！大丈夫か！」

ヴォルフもいきなりすることにびっくりしています。

「ええ、何とか…。」

オリバーはため息をつきました。

「…モニカ、瞬発力も大事だが、相手を敵か味方かわきまえられるくらいの心の余裕もほしいな。だいたいここに敵が入ってくるなんてまず考えられないだろう?」

「ごめんなさい、イザベルさん、オリバーさん…。」

「いえ、気にしないでください。」

「あう…、イザベルさん、笑顔なのに目が笑っていません…。」

オリバーは苦笑いしてヴォルフの方に向き直りました。

「それよりヴォルフ、どうしたんだ?」

「お前たちの訓練の様子を、ヘルガ女王様がぜひ見たいとおっしゃってな…。大丈夫か?」

オリバーはびっくりしましたが、頷きました。

「ああ、大丈夫だ。一応危ないから気をつけるようにお伝えしてくれ。」

「わかった。」

~~~~~

程なくしてヴォルフがヘルガ王女様を連れてきました。王女様を護衛するため、クララ様とリリーも一緒です。

「ローゼンハイム殿、わがままを言って申し訳ありません。それでもあなたたちのことをもっとよく知りたくなってしまいました…。」

「いえ、王女様に見ただけとは、誠に光栄でございます。ただ、皆真剣ですから、どうか訓練に巻き込まれぬようご注意ください。」

オリバーの言葉に王女様は笑顔でうなずかれました。

「気をつけますわ。」

~~~~~

ヴォルフはまず、ペーターとビアンカのところ案内しました。ペーターはびっくりしました。

「あ、お、王女様！」

「どうか、訓練をお続けになってください。」

「は、はい…。」

「この二人は剣の使い手です。特にビアンカはあちこち放浪の旅をして自らの腕を磨いていたようです。」

ヴォルフが説明しました。

「まあ、それは素晴らしい…。羨ましいですわ、自らを鍛錬する機会があつて…。」

「ありがたきお言葉…。」

「うおおおっ！…ぐふっ！」

ビアンカが跪いた瞬間、ペーターが斬りかかりましたが、ビアンカはニヤツと笑うとペーターの脇腹を突きました。ヴォルフは苦笑いしました。

「…こちらのペーターはオリバーの弟子なのですが、まだまだ未熟なようで…。闘志だけは誰にも負けないものを持っているのですが…。」

「どんな強敵にも向かってゆく勇氣、それを持っているだけでも素晴らしいことだと思いますわ。」

「よかったね、ペーター。あんた、卑怯な手を使ったのに皇女様からお誉めの言葉をいただいたんだよ。」

リリーが笑いながら言いました。

「あ、ありがたき幸せ…。」

ペーターは苦しそうな表情を見せながらも跪きました。

~~~~~

次にヴォルフたちはハンスとパトリックのところに行きました。

「シーガルンへ使者として旅立ったレオンも槍使いなのですが…。  
まず彼は『鉄血の騎士』として名高いパトリックです。」

ヴォルフの説明を聞いて、王女様は驚かれました。

「『鉄血の騎士』の噂は私も耳にしたことがありました。まさかこんなにお若い方だとは…。」

「ローゼンハイム殿と同じ年齢だったと記憶しております。」

クララ様もおっしゃいます。

「そうですね…。武勇通りのご活躍を期待しています。」

「ありがたいお言葉をいただき、光栄でございます。」

パトリックはうやうやしくお辞儀をしました。

「こちらがハンス、オリバーの弟子です。最年少の一四歳でまだまだ未熟ではありますが、オリバーの期待にしっかりと応えているようです。」

「十四歳で戦いの世界に我が身をおける……。とっても勇気がおありですね。」

王女様はにっこり笑っておっしゃいました。

「あ、ありがたきお言葉ふおいただき、光栄でございます！」

慌てて舌を噛みながらパトリックの言ったことを真似したハンスに、ヴォルフたちは思わず笑ってしまいました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

次はアリスとエミリーのところです。二人は的に向かって矢を射ていました。二人が放った矢は的のど真ん中に命中しました。

「アリスとエミリーはノーザリンの樹海に住んでいた狩人です。弓矢の扱いと馬の扱いがとても上手です。」

「ええ、私も先日お二人とはお話をする機会がありました。私も乗馬や弓矢は経験がありますが、こちらのお二人ほど上手くは出来ませんでした。私も出来ることならばご伝授願いたいものですわ。」

「もったいなきお言葉…。」

「わたくしどもごときにそのような。」

「まあ、ご謙遜を。」

慌てて言葉を返したアリスとエミリーに、王女様はクスクスとお笑いになりました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

次はローズとマチルドのところへ。王女様をご覧になられているということもあり、マチルドはいつも以上に張り切り、ものすごい勢いでローズに向かって行きます。

「マチルドは元山賊だったので、改心してオリバーの仲間になったそうです。素早さでは仲間の中で一番ということですが…、時々暴走するようですね。」

「彼女が見張り台で大手柄を立てたという話は私も存じております。改心して人の役に立つ、これほど素晴らしいことはありませんわ。」

「…全然改心なんかしてない…。」

ローズがボソリと言いました。

「だ、黙っててくれよ!」

マチルドは腕をぶんぶん振りまわしてローズに襲いかかります。ローズはそれをヒラリヒラリとかわします。王女様はその様子をご覧になってたいそうおかしそうになされました。

「王女様にとって、ローズのことは言うまでもないかもしれませんが…、今はオリバーのことを本当によく助けています。長年オリバ

ーと共に過ごしてきた弟子の二人顔負けの活躍をしているようです。」

「ええ、ローゼンハイム殿と一緒にいる時のローズは見ていて本当に生き活きとしていますもの…。心からローゼンハイム殿のことを慕っているんですね。」

王女様のお言葉を聞いて、ローズは顔が真っ赤になりました。そこへ、マチルドが突っ込んできました。

「隙あり!」

「っ…。ずるい…。卑怯…。改心…。」

ローズはジトツとした目でマチルドを見えています。

「だからお前は!」

マチルドはギャーギャー喚きながらローズにつかみかかりました。もうただの子どもの喧嘩です。

「こっとなつてはもう收拾がつきません…。他に、ローレンツとラル

フという男もいるのですが、彼らは戦闘には参加せず、戦いの前や後に武器の手入れをしています。」

「そうですね。やはり戦いには万全の態勢で臨まなければならない、ということなのです…。最後はローゼンハイン殿たちですか…。」

「はい。」

~~~~~  
~~~~~

オリバーたちは魔術の特訓を続けていました。

「まず彼女がモニカです。ここパカロン出身のようです。炎の魔術と氷の魔術を使います。未熟でよく魔術が暴発してしまうようですが、それでも一生懸命頑張っているようです。」

「炎の魔術、というものは想像が出来ますが、氷の魔術とはどのようなものなのですか？」

王女様が問いかけられたので、オリバーはモニカに言いました。

「モニカ、王女様に見ていただくんだ。」

「えっ！？で、でももし暴発したら…、」

モニカはしどろもどろになっています。

「ああ、どうなるかわかっているよな？いくぞ、  
a h i h e n x h  
e！」

オリバーがニヤリと笑って魔獣を召還しました。

「そ、そんなあ！あ、アイスストライク！」

モニカが叫ぶと、魔獣に氷の塊がぶつかりました。

「アイスドウム！」

もう一度モニカが叫ぶと、魔獣は氷漬けになりました。

「これが…、氷の…、魔術…。」



王女様はあつけにとられたように氷漬けになった魔獣をご覧になっていらつしゃいます。ヴォルフは魔術が暴発しなかったことにホッと息をつくと、今度はイザベルを紹介しました。

「そして彼女はイザベルです。曾祖母は『伝説の魔女』と呼ばれた同名のイザベル・ローランドそうです。彼女は炎の魔術と毒の魔術を使いこなすことができます。その他にも実用魔術を広く使いこなすことができるようですね。」

「『伝説の魔女』のお話は幼少のころより父上によく聞かせられたものです…。あなたの魔術も見せていただけますか？」

「かしこまりました。ファイアーストーム！」

イザベルが叫ぶと、モニカによって氷漬けにされた魔獣の氷が一瞬にして溶けました。魔獣は地の底から湧いてくるような恐ろしい雄たけびをあげました。王女様は思わず後ずさりをされました。

「ポイズンラース！」

イザベルが叫ぶと、魔獣は力なく倒れこみました。そして口からどす黒い血を吐いて苦しみもだえました。

「毒の…魔術、ですね。」

「最後はオリバーです。オリバーは呪いの魔術の専門家です。攻撃魔術に幅広い知識を持っています。」

「呪いの…魔術…。」

「…もしお気分を害されたのなら、私は魔術を披露はいたしません  
が…。」

オリバーは顔色を悪くなさっている王女様を見て心配そうに言いました。

「いえ、初めて魔術というものを目にしたので少々驚いただけです。  
ぜひお見せいただきたく思いますわ。」

「わかりました。…しかし、恐らくは目を覆いたくなるような光景  
をお見せすることになるでしょう。どうか、ご覚悟ください。」

王女様はゴクリと唾を飲み込まれました。オリバーはゆっくりと指  
先を毒に侵されている魔獣に向けました。そして冷酷な目で静かに  
言い放ちました。

「カーズアタック。」

するとオリバーの指先から真っ黒い光が魔獣に向けて放たれました。途端に魔獣は空を切り裂くような鋭い悲鳴をあげました。王女様は思わず耳を塞がれました。魔獣の音が途切れると、それっきり魔獣は動かなくなりました。

「…残酷な光景をお見せしてしまい、大変申し訳ございません。呪いの魔術は敵の全身に大きな苦痛を与えるものです。そのため、悪を司る魔術師には呪いの魔術を多用する者が多いのです。」

オリバーは申し訳なさそうに言いました。

「いえ…。しかし、確かに驚きました。魔術というものは、一つ使い方を間違えれば恐ろしいものになってしまうのですね…。」

しかし、今回の場合もつと恐ろしいのは相手も同じように魔術を使ってくる、ということですよ。どうか、どうかお気をつけてください。

「

「ありがとうございます、王女様。」

~~~~~  
~~~~~

二日後、ついに出陣の日が来ました。オットー様はお城のバルコニーに立たれると、声を張り上げて兵士たちに告げられました。

「皆の者！ついに機は熟した！余はこれより皆を率い、キンフィールドへと出陣する！余の願いはキンフィールド城の奪還、そして皆が安心して暮らせる世の中を取り戻すことだ！」

兵士たちは大歓声をあげました。

「これが最後の戦いなのだ！戦いが終わるまで、余に皆の命を預けてくれ！余は必ず皆の期待に応えて見せる！レバリー公のアルベル・アズナヴール殿、ユーラン砦のアルフォンソ三姉妹、その他、勇敢にも華々しく命を散らした同志たちに大勝利の報告をもたらそうぞー！」

「うおおおおおっ！」

「よし、出陣だー！」

オットー様の騎馬精鋭部隊を先頭に、兵士たちはパカロン城から進撃して行きました。王女様がオットー様を見送ります。

「フ란ツ殿、どうかお気をつけになって…。」

「必ずや戦勝のご報告を持って参上いたします。ローゼンハイン殿、行こうか。」

「はっ！みんなも準備はいいな？」

オリバーは仲間たちを見渡しました。

「任せておいてください、先生！」

「絶対に王女様を女王様にして差し上げましょう！」

ハンスとペーターが元気に答えました。他の仲間たちもうなずいています。

「…余は本当にあなた方を頼ってよかった…。本当に、本当に感謝している。」

オットー様はオリバーに感謝しましたが、オリバーは笑って言い  
ました。

「その言葉をいただくにはまだ早すぎます、オットー様。」

「そう、だな。勝利の後に、また同じことを言つとしよう。…それ  
ではヘルガ王女、行ってまいります。」

オットー様とオリバーたちは王女様に一礼すると、お城から出て行  
きました。王女様はその後ろ姿を見えなくなるまで見守りつつげら  
れました。

「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「46・最後の戦い」（後書き）

準備を整えたオリバーと仲間たち、そしてオットー様の大軍勢はギル大臣のいるパカロンへ向けて出陣しました。これが最後の戦い、いよいよクライマックスが近づいてきています。

次話では進撃を続けるオットー様の軍勢の前にあの男が立ちはだかります。しかし、彼にも何か思惑があるようですが……？どうぞお楽しみに！

ちなみにこの時オットー様につき従った人々の数はシュバルツ平原の戦いのときの二倍以上でした。その時は兵士ばかりでしたが、今回は一般の民衆や有志たちが集まっています。それだけ人々はオットー様に期待するとともにギル大臣を倒したいという気持ちでまっまっているのです。

では次話をお楽しみに！

く悪の大臣く 三章・最後の戦い 「47・マティアスの判断」 (前書き)

オットー様率いる大軍勢はギル大臣を倒すためにパカロンを出發し、  
一路キンフィールドを目指して進軍していました。道中、特に目立  
った戦闘は今のところありません。



「悪の大臣」 三章・最後の戦い 「47・マティアスの判断」

オットー様の大軍はキンフィールドへ向け、ゆっくりと歩みを進めていました。オットー様はオリバーに声をかけられました。

「余の歩みを妨げる敵兵も出てくるかと思ったが…、ずいぶんと大  
人しいな。」

「その分キンフィールド城の守りを固めている可能性もあります。」

オリバーの言葉にオットー様はひきしまった表情をされました。

「そうかもしれぬ…。」

「ですが、少なくとも損害を出さずにキンフィールド近くまで進軍  
させられるということはこちらとしても助かります。」

すぐそばにいたガスパールが言いました。

「うむ、そうだな。」

「でもよう…、何か忘れてるような気がしねえか？」

マチルドが首をかしげながらペーターに聞きました。

「何かって何ぞ。」

「いや、それがわかんねえんだよう…。」

「何だよ、変なことをいきなり言いだすなよ。」

「そんなこと言ったってよう…。何か気になるんだよなあ…。」

その時、前方から騎馬部隊にまじって先頭集団を歩いていたパトリックがこちらに向かってくるのが見えました。ローレンツが不思議そうに言いました。

「パトリックのやつ、どうしたんだ？」

パトリックはフランソワをオットー様の馬のすぐ横に止めました。

「申し上げます！この先の丘の上で王国軍と思われる兵団が道を塞



「ヌワール家…、マティアス・ヌワールのものだ。」

ペーターがハツとして言います。

「マチルドが言ってた何かって…、」

「そうだぜ！マティアスを忘れてたんだよ！」

「あの時は意外にあっさり引き揚げて行ったからね…。」

パトリックも思い出したように言いました。

「一番嫌な相手が残っていたのか…。」

他の兵士たちもざわざわと顔を見合わせ出しました。

「静まるのだ！どの道マティアスとの戦いは避けては通れぬ道！気を引き締めるのだ！」

オットー様の声に、兵士たちの動揺も静まりました。

「だが…マティアスの兵は一向にこちらへ攻撃する素振りを見せぬな…。」

「何か思惑があるのでしょうか…?」

愛馬の上でアリスとエミリーが首をかしげます。

「下手に動くのは危険だ…。少し様子を見よう。」

オットー様がありました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

両軍の睨みあいはいはそれからしばらく続きました。お互いに身じろぎもみません。

「…オットー様!このままでは埒が明きません!一気に攻め込みましょー!」

騎馬兵団の一部を任されている小隊長が痺れを切らしたように言いました。しかし、オットー様は首を縦には振りません。

「待つのだ！まだ動いてはならぬ！」

「し、しかし！」

「マテイアスにも何か考えがあるはずだ。」

その時、ヴォルフが叫びました。

「オットー様！あれを！」

「む？…あれは…？」

ヴォルフが指さした方をオットー様を見ると、たった一騎でこちらへ向かってくる真っ黒い鎧を身にまとった兵士がいます。

「オットー様！魔術であの兵の動きを止めましょうか？」

オリバーが指を兵士に向けましたが、オットー様がそれを制止され

ました。

「いや、待つのだローゼンハイン殿。余の記憶に狂いが必要なければあれは恐らく…、」

~~~~~

やがて、黒い鎧をまとった兵士がオットー様の目の前まで来ました。兵士は顔を覆っていた兜を脱ぎました。

「…やはりマティアス、お前だったか。」

「お久しゅうございます、オットー・フランツ様。」

たった一人でやってきたのは何と衛兵隊長マティアスその人でした。オットー様は馬上からしっかりとした目線でマティアスを見下ろしておられます。マティアスもしっかりとオットー様を見据えています。二人はしばらくの間身動き一つしませんでした。

~~~~~

やがて先に口を開いたのはオットー様でした。

「マティアス、お前はギル大臣の悪政を恐らく最も近くで見てきた男だ。お前も正義のもとで生きてきた人間、我慢ならんこともあるだろう。どうか道を空け、余を通してはくれぬか。」

マティアスは無表情のまま言葉を返しました。

「確かにあなたの言う通りかもしれませんが。しかし、私は命令には忠実に従うことを心に決めた人間、ギル大臣からの命令を果たすまではあの兵士たちを動かすことはできません。」

オットー様は苦笑いをされました。

「相も変わらず義理堅いことだ。まあ、お前らしいがな。それでは余はお前の軍と全力で戦うことにするとしよう。」

しかし、マティアスはオットー様を制止しました。

「オットー様、それには及びません。私がギル大臣から受けた命令は魔術師オリバー・ローゼンハインの捕縛、ただそれだけでございます。」

「何、ローゼンハイン殿の捕縛、とな？」

ローズがオリバーの後ろに隠れ、彼の服の袖をギュツと握りしめています。しかし、オリバーはマティアスの言葉を聞いてハツとしました。

「そうか、そういうことか！マティアス隊長、オリバー・ローゼンハインは俺だ！」

オリバーはそう言うと、マティアスの前に出ました。オットー様は大変驚かれました。

「ローゼンハイン殿！」

オリバーの仲間たちもびっくりしました。

「正気か、オリバー！マティアスはお前を捕縛するために来た、つて今日の前で言ったばかりじゃないか！」

「オリバーさんがいなくなったらどうするんですか！」

ローレンツとラルフが叫び、他の仲間たちもオリバーを押しとどめようとしています。特にローズはオリバーの腕にしがみつき、目に涙をいっぱいのためながらオリバーを行かせまいと足を踏ん張っています。

「いけない…。先生…。絶対…。いけない…。」

しかし、オリバーはローズを見ると、言いました。

「…安心しろ、ローズ。その代わりに、お前にもやってほしいことがある。まずはマティyas隊長に俺の身を預けさせる。」

ローズはまだ目を真っ赤に腫らしてオリバーを見つめています。そんなローズにオリバーは優しい笑顔を見せて言いました。

「…ローズ、俺を信じろ。」

ローズはやっぱりオリバーを行かせたくないようでしたが、オリバーからゆっくりと手を離しました。

マティyasがオリバーの腕を後ろに回し、手首を縛りました。

「…これで捕縛は完了だ。」

「わかった。…よし、ローズ！この縄を切ってくれ！」

ローズはビクツと体を震わせました。信じられないといった表情でオリバーとマティアスを見えています。マティアスはやはり表情を崩さないまま、言いました。

「言っただろう。私が受けた命令はオリバー・ローゼンハインの捕縛「ただそれだけ」だ、と。捕縛した後で誰がオリバー・ローゼンハインを逃がそうと私の知ったことではない。」

ローズはマティアスの言葉が終わらないうちにオリバーに飛びつきました。そして短剣でオリバーの手首を縛っていた縄を切り裂きました。オリバーの手が自由になった瞬間、ローズはオリバーにしがみついて泣きだしました。

「あれだけあしたたちの前でも涙を見せたがらなかったローズがこんなに泣いてるなんて…。」

ピアンカが感慨深げに言いました。

「心の底からオリバーさんのことが心配だったんですね…。何だか私ももらい泣きしてしまいそうです。」

イザベルが目元に手をやりながら言いました。オットー様もローズを微笑ましげに見ていましたが、やがてマティアスの方に向き直られました。

「…さて、これでお前の目的も果たされたわけだな。約束通り、余を通してくれるか？」

「いえ…、まだ終わりではありません。」

マティアスはそう言って剣を抜きました。オットー様は怪訝そうな表情をなさいました。

「まだ何かギル大臣からの命令でもあるのか。」

「いいえ、ギル大臣からはオリバー・ローゼンハインの捕縛、それ以外は何も仰せつかっておりません。つまり、この命令を実行した後は何をしようと私の勝手ということがあります。」

「…又ワール家に代々伝わる漆黒の剣です。これをオットー様に献上いたします。」

オットー様はびっくりしました。

「な、何と！つまりマティアス、お前は…。」

「…キンフィールド城衛兵隊一同、オットー・フランツ様にお伴いたします。」

その瞬間、丘の上の兵士たちが一斉にときの声をあげました。

「何と…。信じられぬ…。信じられぬが、本当にありがたい！」

オットー様は馬から飛び降りると、マティアスとガツチリと握手をしました。

「…なるほどな、今まで王国兵が襲ってこなかったのは、きっとマティアスがけん制していたからなんだろうな。」

ヴォルフが納得したように言いました。

「王宮内のことを知る人間がオットー様についたのも大きいけれど、

何より武勇に優れた衛兵隊長マティアスだ、王宮内に走る衝撃も大きいことだろう。」

パトリックも嬉しそうです。

「でもよう、いくら隊長が味方するって言っても、普通の衛兵たちの中にはまだギル大臣に忠誠を誓ってるやつもいるんじゃないのか？」

マチルドが心配そうに言いましたが、ローレンツが言いました。

「いや、衛兵たちはマティアスに全幅の信頼を置いている。マティアスの判断に逆らおうなんていう兵士はいないはずさ。」

「へえー、何だかわからないけど、すげえやつなんだな、マティアスって。」

マチルドは感心したようです。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

レイの前におかれた大きな水晶玉の中に、オットー様とマティアスのやりとりが映し出されていました。それを見ながら歯ぎしりをしていたギル大臣ですが、ついに怒りのあまり水晶玉を床にたたきつけました。水晶玉は粉々に砕け散りました。

「だ、大臣様！どうぞお気をお鎮めになつて！」

「マティアスめ、私を裏切りおつて…許せぬ！オットー・フランツ共々叩き潰してくれる！」

レイ！魔獣兵の準備は出来ているか！」

「もちろんでございます、大臣様。いつでも戦えますわ。」

「よし、邪魔者は徹底的に排除してやろう。私の前に立ちはだかるものはすべて消える運命にあるのだ！」

ややひねくれた方法ではありませんが、武勇名高い衛兵隊長マティアスとその配下の兵士たちもオットー様に味方することになりました。お城の中のことに詳しい彼らは重要な役割を果たすことになります。

次話ではキンフィールド城に攻め込む前の最後の準備が行われます。オリバーも仲間たちを二つのグループに分けるようです。どうぞお楽しみに！

ちなみにオットー様とマティアスには昔から面識がありました。マティアスはギル大臣のクーデターの前もキンフィールド城の衛兵をまとめていたので、二人が会って話す機会もあったのです。

では次話をお楽しみに！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9426w/>

---

悪の大臣

2011年11月24日23時52分発行